

文部科学省 平成21年度採択「大学教育・学生支援推進事業」

【テーマB】学生支援推進プログラム

“こころをつなぐ学生支援”

－ 社会の要請に応える就職支援を中心に －



事業報告書（外部評価書）

平成 24 年 3 月



Notre Dame Seishin University
ノートルダム清心女子大学

文部科学省 平成21年度採択「大学教育・学生支援推進事業」

【テーマB】学生支援推進プログラム

“こころをつなぐ学生支援”

－ 社会の要請に応える就職支援を中心に －

事業報告書（外部評価書）

平成 24 年 3 月

Notre Dame Seishin University
ノートルダム清心女子大学

目 次

はじめに	1
第1章 取組概要	
1 取組の概要	5
2 取組の趣旨・目的、取組内容と達成目標	5
3 実施体制	6
4 PDCAサイクルと第1回目の外部評価	8
第2章 テーマ別取組内容及び実施報告	
テーマ1 就職支援事業	15
I 取組の目的	17
II 具体的事例の紹介	17
1 個別キャリアカウンセリングの充実	17
2 就職データベースシステムの管理運営	20
3 キャリアカウンセリングと 就職データベースシステムについての今後の課題	24
III 事業実施による効果	25
IV 総括及び今後の展望	25
附 各種就職対策講座の開催	27
テーマ2 教員就職支援事業	31
I 取組の目的	33
II 具体的事例の紹介	33
1 3年生向け教員採用対策講座	33
2 4年生向け教員採用対策講座	35
3 カトリック学校1日体験事業への参加	37
4 大都市圏教員採用現地説明会	39
III 事業実施による効果	43
IV 総括及び今後の展望	44
1 総括	44
2 今後の展望	44
テーマ3 学生相談室との連携事業	47
I 取組の目的	49
II 具体的事例の紹介	49
1 平成21～22年度の活動	49
2 平成23年度の活動事業概要	55
3 学生相談室の利用実績	59
III 事業実施による効果	62
IV 総括及び今後の展望	63
1 総括	63
2 今後の展望	64

テーマ4 その他の取組	65
Ⅰ ホームページ関連事業	67
1 取組の目的	67
2 事業内容の紹介	67
3 事業実施の効果	69
4 総括及び今後の展望	70
Ⅱ 学生アンケート関連事業	71
はじめに	71
1 学務部キャリアサポートセンターの活動について	71
2 学生相談室の活動について	73
3 教職課程の活動について	74
2009・2010 年度キャリア支援に対するアンケート	
キャリアサポートセンターについて(全学)	77
学生相談室について(全学)	83
教職課程について(全学)	86
2009・2010 年度キャリア支援に対するアンケート(学部)	
キャリアサポートセンターについて(学部)	92
教職課程について(学部)	98
2011 年度キャリア支援に対するアンケート(全学)	104
キャリアサポートセンターについて(全学)	104
学生相談室について(全学)	109
教職課程について(全学)	112
Ⅲ 先進事例調査関連事業	117
1 取組の目的	117
2 具体的事例の紹介	117
3 事業実施による効果	119
4 総括及び今後の展望	119
第3章 フォーラム・シンポジウム・外部評価委員会の開催	
1 学生支援GPフォーラムと第1回外部評価委員会の開催	123
2 学生支援GPシンポジウムと第2回外部評価委員会の開催	123
附 活動報告資料	125
1 就職支援	127
2 教職就職支援	133
3 学生相談室との連携	137
第4章 外部評価	
1 外部評価委員と評価項目	151
2 第1回目の外部評価報告書	153
3 第2回目の外部評価報告書	161
第5章 取組の成果と事業の継承	
1 取組の成果：自己点検と評価	175
2 外部評価	178
3 事業の継承	179
あとがき	

は じ め に

ノートルダム清心女子大学 学長 高木 孝子

本日ここに、本学の学生支援推進プログラム「ここをつなぐ学生支援社会の要請に応える就職支援」の報告書を刊行いたしますことを、ありがたく存じております。

本プログラムは、平成 21 年度に採択されました、文部科学省の大学教育・学生支援推進事業〔テーマ B〕でございます。今年で 3 年目を迎え、事業の一応の終了の時を迎えまして、本学の取組内容をあらためて紹介し、今後の方向性を見きわめるために本報告書を刊行いたしました。

本学は、カトリックの教育理念にもとづくリベラル・アーツ・カレッジとして 60 年余の伝統を重ね、奉仕の精神をもち、人を思いやる心ゆたかな感性と人格を持った学生の育成に努めてまいりました。本学の卒業生はすでに 2 万人を超えておりますが、その中には教職につく者も数多くおります。

本学の設立母体であるナミュール・ノートルダム修道会の創立者、マザー・ジュリー・ビリアートは、困難なフランス革命期にその修道会を創設し、子女教育をもってその使命の一つとしておりました。本学の卒業生に教職につく者が多いのは、本学がこのマザー・ジュリーの教えを大切にして、教育にあたっているからであると考えております。本学がこの G P の申請に当たって、一般企業への学生の就職支援に止まらず、教職への就職支援も企画いたしましたのは、このような理由からでございます。

その成果はどのようなものでしょうか。事業の採択から 3 年、全学で一体となって学生の就職支援に努めてまいりました。まだ十分な成果を見通せるまでに至っていないところも多いかと存じます。今回の報告書を通じて、私共が行ってきたこと、これからさらに努力すべきこと等について、忌憚ないご意見を賜れば幸いです。

大学とは、十分な力をもった卒業生を社会に送り出すことによって、その使命をよく果たすことができます。本学におきまして、人を思いやる心をもち、人々とともに行動して社会に貢献する、そのような力をもった学生が、社会で、また教育界で活躍することはきわめて重要なことです。困難な社会・経済情勢の中、学生の就職状況にはきびしいものがありますが、今度の G P はまことに時宜を得た企画だと考えています。本学では今後とも、学生支援の充実に努めてまいりたいと考えておりますので、皆様のご指導をいただければ幸いに存じます。

第 1 章

取 組 概 要

第1章 取組概要

1 取組の概要

ノートルダム清心女子大学は、カトリックの教育理念にもとづくリベラル・アーツ・カレッジとして、十分な学士力をもつと同時に、奉仕の精神にもとづき、人を思いやる心豊かな感性と人格をもった女子学生の育成に努めてきた。本学の卒業生は、昭和24年の創立以来、すでに2万2千余名に達している。また、本学は建学の理念にもとづいて教員養成にも力を尽くし、現状で、岡山県内の現職教員のうち1千5百名以上が本学の卒業生となっている。

本学はこの取組を通して学生の就職活動のより一層の支援に努め、本学のこのような特性をいかしながら、社会に、また教育界に一層の貢献を図ることを意図している。大学は社会への有為な人材の提供を通じて、その使命をよりよく実現することができる。現今の社会・経済情勢の急激な変化の中で、本取組のもつ重要性は言を俟たない。本学では、学長を中心とした全学体制をとり、本取組によって、学生の一般企業ならびに教職等への就職活動の、より積極的な支援体制を構築することを目指すものである。

本取組では、(1) 就職情報データベースの構築と丁寧なキャリア・カウンセリングの実施、(2) 大都市圏の高等学校・中学校への教職就職支援、(3) 学生相談室と連携した、職業や就職活動にかかわる悩み等の相談・カウンセリングの実施という3つの主要企画をもって、学生への就職支援をより一層強化しようとするものである。

2 取組の趣旨・目的、取組内容と達成目標

(1) 取組の趣旨・目的

近年の困難な経済情勢の中で、大学生の就職状況は厳しさを増しており、一部では内定取り消しなどの異常な事態も生じている。また、平成23年3月の東日本大震災は日本社会に大きな影響を与え、順調な社会・経済活動を回復するための社会的な模索が現在も続いている。このような中で、本学のリベラル・アーツ教育を通じて豊かな学士力をつちかい、「人を思いやる心」をもった本学学生の力を社会にいかすために、就職活動の支援体制を強化することは何よりも急がれることである。

とくに、本学はそのカトリックの子女教育の理念のなかで教員養成を使命の一つとしてきたから、この面での就職支援体制を強めることも必要である。さらに、このような支援体制には、早い段階からの職業意識の醸成や就職活動にともなうさまざまな悩みに対する心理面のケアも含めなければならない。

これらのことにより、学生に職業と就職活動に対する正しい認識と強い意欲をつちかい、就職の機会を増やすように支援することが本取組の目的である。

(2) 取組の具体的内容

本取組の具体的内容は次の7つの事業からなる。このうち、①～③の3つの事業が本取組の中心的内容である。

①就職支援関連事業

- ・ 卒業生データの作成による卒業生支援と求人情報等の就職情報のデータベース化、および求人情報の学生への24時間の提供

- ・丁寧なキャリア・カウンセリングを通した就職活動の支援

②教員就職支援関連事業

- ・大都市圏の教職に関する情報の収集と学生への提供、および当該地域への教職就職の支援
- ・教員採用試験対策講座の実施による教職就職情報の提供
- ・「カトリック学校1日体験」を通じた学校現場体験の提供

③学生相談室との連携事業

- ・職業とキャリア意識の醸成をうながすカウンセリングの実施
- ・職業観や就職活動上のさまざまな悩みに対する相談・カウンセリングの強化

④ホームページ関連事業

- ・取組内容の大学ホームページへの掲載

⑤学生アンケート関連事業

- ・学生アンケートの作成・実施・分析による本取組の有効性の検証及び必要な改善等の実施

⑥本学主催G P フォーラム関連事業

- ・フォーラムの開催による取組内容の公開と外部評価の実施

⑦先進事例調査関連事業

- ・データベース・システムを運用している大学での調査
- ・さまざまなG P フォーラムにおける先進事例の学習による本取組の質的向上

(3) 達成目標

本取組では、取組の中心的内容をなす3事業を通して就職支援体制を強化することにより、学生の就職活動がよりよく実践されること、教職への就職活動が実質的効果をあげること、さらに、就職が決まらないまま卒業した学生に対する支援を行うことを目標とする。また、ホームページや本学主催フォーラムを通じて本取組を社会に周知しその評価を得ること、さらに外部評価や先進事例調査等を通じて取組の点検・評価を行い、よりよい改善を図ることも目標である。

各事業の具体的な達成目標は次の通りである。

- ①就職支援関連事業：十分な情報提供と丁寧なカウンセリングによる就職活動の活発化
- ②教員就職支援関連事業：大都市圏への教職就職活動の活発化および教職に対する強い使命感の形成
- ③学生相談室との連携事業：丁寧なカウンセリングによる就職活動の実質化
- ④ホームページ関連事業：速やかな情報公開
- ⑤学生アンケート関連事業：学生ニーズの把握と事業内容の改善
- ⑥本学主催G P フォーラム関連事業：取組に対する点検と評価
- ⑦先進事例調査関連事業：本取組の質的向上

3 実施体制

(1) 学生支援G P 運営委員会

本取組の具体的内容を遂行するために、取組担当者に学務部キャリアサポートセンター長、事務担当者に学務部事務長を置き、本取組全体を統括する組織として学生支援G P 運営委員会を設置した。委員会の構成は次のようである（表1）。

表 1

委員長	学長
委員	人間生活学研究科長、学長補佐、学務部長、学務部長補佐、学務部事務長、同次長、学務部次長、学務部キャリアサポートセンター長、同次長、同主任、保健センター長兼学生相談室コーディネーター、教職課程主任、中等教育主事、初等教育主事、情報機器教育等支援センター長、同次長、事務部長、財務部長、入試広報部長
事務局	コーディネーター 1 名、事務補佐員 1 名

表 1 にみるように、各委員は学長を全体の統括責任者とし、他の委員は本取組の具体的内容にかかわるチームを形成している。

①の就職支援関連事業を担当するチームは、学務部キャリアサポートセンター長をチーム責任者とし、同次長、主任、情報機器教育等支援センター長、同次長、学務部事務長、同次長等からなる。②の教職支援関連事業の担当チームは、教職課程主任を責任者として、中等教育主事、初等教育主事、学務部事務長等からなる。③の学生相談室との連携事業は、学生相談室担当児童学科准教授を責任者としていたが、同准教授が平成 23 年 3 月に退任した後は、保健センター長兼学生相談室コーディネーターがその役割を担い、事業の新たな展開を図っている。

④ホームページ関連事業は入試広報部長を責任者とする。⑤学生アンケート関連事業は、学長補佐をチーム責任者とし、学務部キャリアサポートセンター長、教職課程主任、保健センター長兼学生相談室コーディネーター等がかかわる。⑥本学主催 G P フォーラム関連事業は、人間生活学研究科長をチーム責任者として、学長補佐、学務部事務長等が担当する。⑦先進事例調査関連事業は人間生活学研究科長をチーム責任者とし、関連委員がかかわる構成をとっている。

事務部長及び財務部長は各事業の運営・進行にかかわる諸手続を執行する。また、これらの活動を支える役割を担う事務局として、コーディネーター 1 名と事務補佐 1 名を配置し、活動全体の掌握・調整と関連する事務処理を担当している。

この運営委員会は毎月 1 回のペースで開催し、予算の執行状況の確認、各事業の具体的企画の検討、実施した企画の実施報告とその点検・評価と今後の改善等についてディスカッションを重ね、一丸となって事業の推進に努めてきた。

なお、運営委員会の開催状況は、平成 21 年度は採択決定後の 6 月から 9 回、平成 22 年度は 11 回、平成 23 年度は 11 月までに 5 回の開催である。

(2) 事業仕分けと本取組

本取組の実施体制は順調に機能していたが、平成 22 年度の事業仕分けによる G P 事業の廃止決定は、取組の財政的基盤を危機にさらすものであった。このことについては全国の大学関係者がこぞって声をあげたが、本学も間髪をいれずに高木学長から文部科学大臣宛に、各事業毎に緊急要望書を提出した。結果として事業継続が可能になったが、事業仕分けが私どもに投げかけた課題として、学生の就職状況が深刻化する事態のなかで、この G P が有効であり成果があがることについて社会の十分な理解を得ていなかった点があることは事実であり、より一層の情報開示と説明責任を果たす必要があることを認識した次第である。

〔緊急要望書〕

文部科学大臣
高木 義明 様

大学教育質向上推進事業
(大学教育・学生支援推進事業) に対する緊急要望

「大学教育・学生支援推進事業」は、行政刷新会議による事業仕分によって、「廃止」と判断されたところですが、当該事業は、緊迫する経済・雇用情勢の中、大学新卒者の就職状況改善のために緊急になすべき重要な事業です。

本学の本年度卒業予定4年生の就職決定状況は、11月末日現在で約36%であり、昨年度の同時期の41%という数値と比べて約5%低くなっております。来年度の雇用情勢についても大幅な改善が予測しにくい中、このような状況を少しでも改善するために、新卒者ならびに既卒者の就職支援に取り組むことは、現在の喫緊の課題であると考えております。本事業の廃止は、大学新卒者の就職状況をより一層悪化させ、大学教育に対する大きな圧迫要因となるとともに、将来の日本の人材育成に関してもマイナスの結果をおよぼすことになると思われます。

豊かな学士力を身につけた力ある人材を社会に活かすことは、大学教育の到達目標の一つであり、本事業の重要性はますます大きくなっています。是非とも本事業を存続されるようお願いいたします。

平成22年12月1日

ノートルダム清心女子大学
学長 高木 孝子

4 PDCAサイクルと第1回目の外部評価

(1) PDCAサイクル

本取組を推進し、さらによりよいものに改善していくために、PDCAサイクルを機能させることが重要である。本学ではこのことについて次のように組織的に取り組んだ。

まず、GP運営委員会の中で各事業の企画とその実施について検討し、実施後の報告と点検・評価を行って次回以降の改善策を立案するとともに、学生アンケートを行って学生の要望に応えるように配慮した。また、ホームページでの情報公開、本学主催GPフォーラムの開催、GP合同フォーラム（於秋葉原UDX）におけるポスターセッション発表などによる取組内容の公開とディスカッションを通じて、有益なアドバイスを数多く得ることができた。先進事例調査やGP関連フォーラムへの参加等を通じて学ぶことも多く、これらは本学の取組の点検と改善に機能したと思われる。もちろん、外部評価委員会の開催を通じて、取組内容の点検・評価・改善に努めてきたことも、PDCAサイクルの実質化を促すこととなったのである。

なお、本学が依頼した外部評価委員は次の4名の方々である。

坂入 信也 国立大学法人 岡山大学キャリア開発センター准教授（現同センター教授）
副田 隆重 南山大学法学部教授・キャリアサポート室室長（現南山大学法学部長）
青山 順子 岡山市総合教育センター所長（現岡山市立政田小学校校長）
秋山 弥生 株式会社天満屋販売促進チーム 広報担当課長

(2) 第1回目の外部評価による取組の改善

本GP事業では、採択第1年次の平成21年度末に外部評価委員会を開催し、4名の委員から本取組に対する評価と指摘を受けた。それは、その時点での本取組の評価と、必要な改善事項に関する的確な指摘であった。本取組では各委員からの指摘をいかし、取組をよりよいものにするよう、その後の2年間に努めてきた。ここでは、初年度の外部評価委員の指摘を本取組がどのようにいかし、PDCAサイクルに組み込んで取組の改善に努めてきたかについて検討する。

なお、第1回の外部評価内容については、第4章に各委員の報告書全文を掲載しているので参照されたい。

各委員の指摘事項と本取組における改善内容は次の通りである。

1) 学生相談室に関する評価意見と改善

この点に関して、坂入委員および副田委員より次のような評価を受けた。

- ・就職支援領域での学生相談として、キャリアアドバイザーでは対応できない「心のケア」を心理カウンセラーのプロとして行える、学生相談室によるカウンセリング体制の強化が急務である（坂入委員（5））。
- ・時期を問わず学生が利用できる対応も必要。学生からの申し出だけでなく、全学生に行き渡るような工夫が必要である（副田委員（6））。

坂入委員の指摘は、その時点で学生相談室による相談・カウンセリングと、キャリアサポートセンターによるキャリアカウンセリングの切り分けがなかなかむずかしいのではないかという疑問を含むものである。副田委員の指摘は、学生相談室との連携企画が「キャリアカウンセリングの3カ月」として、特定の時期に行われることに対するものであった。これらの指摘に対する改善点は次のようである。

平成21～22年度の「キャリアカウンセリングの3カ月」企画では、秋～冬編を1～2年生、春～夏編を就職活動開始直前の3年生を対象とすることにした。このことによって、3年次7月からはじまるキャリアサポートセンターのキャリアカウンセリングとの違いを明確化したのである。

さらに、平成23年度には、学生相談室の開室時間を週2回、毎週火曜日、木曜日の午後1時～5時の間とし、臨床心理士の資格をもつ相談員が通年で常駐する体制を整えた。この体制強化によって、学生相談室がこれまでのキャリアに関する質問等も含めた「心のケア」を重点的に行うことを明確化し、掲示やホームページを通じて、また学務部や相談室の窓口などにパンフレットを置いて全学に周知させた。こうして、キャリアサポートセンターと学生相談室の相談・カウンセリング内容の違いを明確にすることができたと思われる。

また、学生相談室は、通年の相談体制の中で、キャリアあるいは就職活動に関する必要な心理相談・カウンセリングを恒常的に行うとともに、学生相談の数が少なくなる夏休みに「就活の心の準備は大丈夫？」という企画を行うなどの活動を行っている。学生相談室の活動は、通年にわたってすべての学生が利用できる体制に近づいており、ご指摘をいかす改善を着実にやってきたといえることができる。

いずれにせよ、キャリアサポートセンターによるカウンセリングと学生相談室による相談・カウンセリングは相まって、学生支援体制の充実に結びついていると考えることができる。

2) 就職情報提供システムに関する評価意見と改善

就職情報提供システムに関しては、坂入、副田委員より次のような指摘を受けた。

- ・就職情報データベースを学生のニーズに即した情報にするためのリサーチ、検討が急務である（坂入委員（4））。
- ・就職情報提供システムの活用環境、システムのより一層の利便性の追求（コンテンツの充実、自宅からのアクセス等）が必要である（副田委員（3））。

このうち、就職情報データベースのリサーチと充実に関しては、求人情報の収集とその入力作業を急いだ結果、提供できる情報の量とスピードが格段に向上したということができる。

次に、データベースシステムの利用環境の改善については、本学の情報セキュリティポリシーに抵触する問題を含んでいるため、慎重な対応が続いている。しかし、昨年度より導入した新たなシステムを活用することによって、本学の情報セキュリティポリシーの基本方針に違背することなく、ネット上での24時間の情報提供が可能になる途が開ける可能性がある。現在、テストを行っているが、今後はすみやかに担当部署の整備とセキュリティの再確認を経て、実際の運用に持ち込むことを考えたい。

3) 学生への支援に対する視点の強化に関する評価意見と改善

この点に関しては、青山委員より次のような指摘を受けた。

- ・大学の内側から学生を見るだけでなく、外から見取る多面的な調査・分析も必要である。

本取組では、先進事例調査、大学教育改革合同フォーラム、GPや高等教育にかかわるさまざまなフォーラム・シンポジウムへの参加により、多くの情報を収集し本取組にいかしている。この努力を今後とも継続して、学生の置かれた状況やその改善手段などについて、多くの大学と知識を共有し、またそれを取り入れるなど改善に努めていきたい。

4) 部署間の情報共有による共通認識についての評価意見と改善

秋山委員より、各部署との情報共有が必要であるとの指摘をいただいた。この点に関して、本取組では、本取組にかかわる各部署から専任された構成員による学生支援GP運営委員会を組織して、概ね月1回のペースで委員会を開催している。委員会では、取組の進捗状況の確認、報告、点検・評価を行い、ご指摘の趣旨をいかすように、各委員およびその所属部署間での情報の共有、および各部署間の意思疎通に努めている。GP運営委員会の着実な開催は、ご指摘の趣旨を活かすことに結びついている。

5) 時代のスピード感覚の習得についての評価意見と改善

秋山委員から、「学ぶ」「可能性を高める」ということに加えて、時代の急速な変化に対応するスピード感覚も必要であるという重要な視点の指摘をいただいた。

たしかに、委員の述べられる通り、時代の変化は急速である。本取組の3年間をみても、学生の就職状況の困難さに関して、内定取り消しといった異常事態は平成22年度にはややおさまるかにみえたが、平成23年度には東日本大震災や多くの災害、あるいはEUの財政危機などによる経済活動の困難さが浮き彫りにされ、就職状況の困難さは別の側面でいや増している。

このような状況下で、「五里霧中でも方向性が出せる女性、大学で学んだことを活かすことができる女性」（秋山（6））の必要はかつてないほど増大している。それは、本学で学び必要な学士力を身につけ、奉仕の精神を通じて人々に寄り添う力をもった学生を社会によりよくいかすことで達成しなければならない。

本学では平成23年度からはじまった「キャリア教育」のなかで、「人材育成論」を開講し、建学の精神とリベラルアーツカレッジとしての本学の特性をいかしつつ、社会のニーズに応える知識の教育を始めたところである。今後とも、このキャリア教育の取組の充実を図ることが必要である。

本取組においては、外部のキャリアカウンセラーを招聘することで、企業の生の声や状況をカウンセリングに反映させるとともに、教職就職支援事業では、教員OGによる現場の声をともなった教職相談や、大都市圏の教育委員会に学生を直接派遣してその見解を聞く事業や、カトリック学校での1日現場体験などの機会を与えて、リアルタイムのスピード感を学生に植えつけることに努めている。このようにして、本取組では今後ともご指摘をいかす努力を続けたいと考えている。

6) 実践的であることについての評価意見と改善

このことについては、青山委員より学内のみでなく、学外のつながりを活用すること。社会体験活動の受け皿や就職の受け皿等で力を借りることという指摘を受け、また、秋山委員からは具体的に実践できるのか、具体的な行動が可能なのか等の指摘を受けた。

これらはまことに重要な指摘であり、本GPでも指針の一つとして取り組んでいる。就職支援では、3年生に対してインターンシップへの参加の呼びかけを全学的に行い、より早い時期からの実社会へのかかわりの機会をもてるように働きかけている。

教職就職支援事業の「教員採用試験対策講座」ではOGの現職教員を招聘して採用試験対策のみに留まらず、教育の現場での経験談など生の声を聞くことで、教員試験に対するリアルな感覚や知識を提供している。カトリック学校1日体験事業では、1日とはいえ教育の現場に直截にかかわることで、教員イメージを具体的に肌で感じる機会を提供している。学生相談室では、職業興味検査を活用して、心のケアと同時に就職活動に取り組む心構えのカウンセリングを行ったのである。

(なお、現在、岡山県のインターンシップに関しては、コーディネート役を努めていたNPO法人の活動が休止したため、大学コンソーシアム岡山の就職委員会(本学も参加)で代替対策を検討しているところである。)

7) カリキュラムに対する評価意見と改善

青山委員から、大学のカリキュラムに取り入れていくこと、社会体験活動や企業体験実習などの新たなカリキュラムの検討が必要であるとの意見をいただいた。

これに関しては、平成23年度からのキャリア教育の開始にともなって、本学でも「人材育成論」を開講して改善につとめている。また、キャリア教育科目群の整備も進捗しつつある。このようなカリキュラムの効果ができるだけ早くあらわれるように努めていきたい。

以上、各委員による指摘のうちいくつかの点についてその内容と本取組における改善内容について詳述した。委員からの他の多くの指摘についても、取組の中で地道に改善につとめている。このことについては、以下の事業報告の中で、さらに詳細に記すことにしたい。

第 2 章

テーマ別取組内容 及び実施報告



就 職 支 援

取組の目的

具体的事例の紹介

事業実施による効果

総括及び今後の展望

テーマ1 就職支援関連事業

I 取組の目的

学務部キャリアサポートセンターは、本学の教育理念を通じて「人を思いやる心」を身に付けた学生が希望に沿った進路を開き、その力を社会に十分に生かせるよう、就職活動をきめ細かく支援し、その結果として高い就職率を維持してきた。

厳しい経済環境下で、本学に届く求人件数は近年減少傾向にあり、都市圏からのUターン希望学生との競合もあり、内定を獲得することはより狭き門となっている。

このような状況下においても、本学学生の就職希望者割合はここ数年 90%以上であり、就業意識は高く、就職率も 95%以上と高い数字を維持している。

本GPでは、本学学生が自らの目標・可能性を失うことなく企業研究・職種研究を円滑に行えるよう、求人情報等の就職情報を学生にフルタイムで提供できるシステムを構築することを本事業の就職支援における第一の目的とする。その一歩として、企業情報・求人情報のデータベース化を図り、学生がデータを休憩時間等に自由に閲覧できる情報提供システムを既存の教学システムをベースとして構築してゆくこととした。

同時に、企業が求める人物像をより広く把握し、客観的な支援のできる外部の相談員を増員して、学生のために役立つことを目指した。本学の理念に通じる学生一人ひとりと向き合い、寄り添いながら「聴く」キャリアカウンセリングを実施し、学生が情報に流されることなく就職活動に主体的に取り組めるための支援を行うことを第二の目的とした。

また、従来から実施してきたキャリアガイダンス等に加え、学生のニーズに応えるため新たに自己分析対策講座等を実施し、キャリアカウンセリングとの有機的連携を図ることも意図している。

これらの取組みにより、学生の満足度向上を図り高い就職率を維持しながら無業者の減少を目指すことが目的である。

II 具体的事例の紹介

1 個別キャリアカウンセリングの充実

学務部キャリアサポートセンターでは、従来から直接面談によるカウンセリングを重視してきた。その基本は、単に内定の獲得を目的とするのではなく、「なぜ働くのか」「仕事とは何か」といった職業観や職業意識にかかわる基本的な問題を、学生に理解してもらうことにある。また、学生との会話を通じて、これまで頑張ってきたこと、興味のあること、将来の設計などを自分の言葉で話してもらうことにより、自己分析を行い、自己PR力をつちかうように支援している。企業選びについても、一部の知名度の高い企業のみでなく、地元の中小企業に視野を広げることなどもカウンセリングの目的としている。また、入社して後何がやりたいのか、どんなことをしている時が充実していると感じるのかなどの点について、カウンセラーとの会話を通じて自己分析の中に取り込み、就業意識の向上につとめるように導いている。もちろん、履歴書・エントリーシートの作成や模擬面接（個別面接以外にグループディスカッションセミナーなどの指導も含む）等の支援も行っている。

本学は、平成21年度学生支援GPに採択されたことを機に、かねてから学生の要望が強かつ

た相談員の増員を実現し、相談体制の強化を図っている。さらに、文部科学省の追加措置にもできる限り対応し、平成 23 年度から、専任職員 3 名、相談員兼コーディネーター 1 名、非常勤相談員 1 名の計 5 名体制で相談にあたっている【表 1-1】。

相談の内容は、インターンシップ、自己分析から履歴書等の書き方、面接について等多岐にわたるが、どのような相談にも対応し、きめ細かな支援を実施している。タイミング良く若手の男性相談員を雇用できたことは、面接支援において大きな効果が発揮されている。相談にあたっては、学生満足度の向上に努めるため、学生からの面接希望日時を最優先し、さらに相談時間は原則 1 人 1 時間とし、学生の話にじっくり耳を傾けることのできる体制を整えている。

主な相談内容

- ・ インターンシップについて
- ・ 卒業後の進路について
- ・ 自己分析
- ・ 自己 PR
- ・ 履歴書・エントリーシート作成
- ・ 面接練習（個人・集団）
- ・ グループディスカッション練習
- ・ 筆記試験対策
- ・ 電話のかけ方、お礼状の書き方等
- ・ 内定後の相談

相談は 3 年生・4 年生のみではなく、1・2 年生から進路・就職に関する相談も受け付けており、低年次からのキャリア意識の醸成を図っている。本学の個別キャリアカウンセリングは非常に丁寧であり、寄り添いながら「聴く」ことを重視し、本学の理念でもある「一人ひとりの学生と向き合う」支援を実施している。相談はカウンターで随時受け付けているが、原則、急を要さないが時間を要する相談や、面接練習といった場合は、予約制としている。内容によっては 1 回 1 時間以上になることもあるため、予約がとりにくい時期もある。このきめ細やかな相談体制は学生から非常に高い評価を得ていることから、今後も継続すべきシステムであると考え

る。

学生の相談件数の推移をみると、平成 22 年度から相談件数が飛躍的に増加している【表 1-2 及び図 1-1】。特に相談員を採用した平成 22 年 11 月以降が顕著であり、平成 22 年度の延べ相談人数は 2,082 人と前年度対比 236% と大幅に増加した。GP 予算による相談員増員の効果が即時的にあらわれたと判断される。その内訳をみると、平成 22 年度後期から就職活動をはじめた 3 年生の相談が大きく増加している【図 1-3】。

したがって平成 22 年度の相談件数の増加は 3 年生の相談件数の増加である。これは、この GP の効果が就職活動をはじめた当該年度の 3 年生にストレートにあらわれたものとみることができる。

3 年生のこの動きは彼女らが、4 年生に進級してからも続いている【図 1-2】。これは、彼女たちが実際に就職活動をはじめたことにより、さまざまな困難に出会い、相談の必要性を感じたことを示している。その時に、本 GP によりキャリアカウンセラーの増員が行われたことが、

このような学生の需要をよく吸収したものと評価することができる。

一方、本G Pがスタートした平成21年度後期の4年生の相談数【図1-2】と3年生の相談数【図1-3】は、多少の増加がみえるようにも思えるが、顕著ではない。平成22年度の4年生の相談件数は平成20年度や平成19年度の件数よりも多いが、まだ十分なものではないように思われる。G Pの効果は初年度の3・4年生には十分ではなかったようである。これはG Pの準備や試行に時間がかかったこと、学生への周知が十分でなかったことなどが影響しているものと思われる。この点は反省しなければならない。

なお、このような相談件数の推移をみるならば、本年度の3年生の相談件数は、就職活動が解禁される12月以降に増加することが予想される。そのため準備が必要となろう。

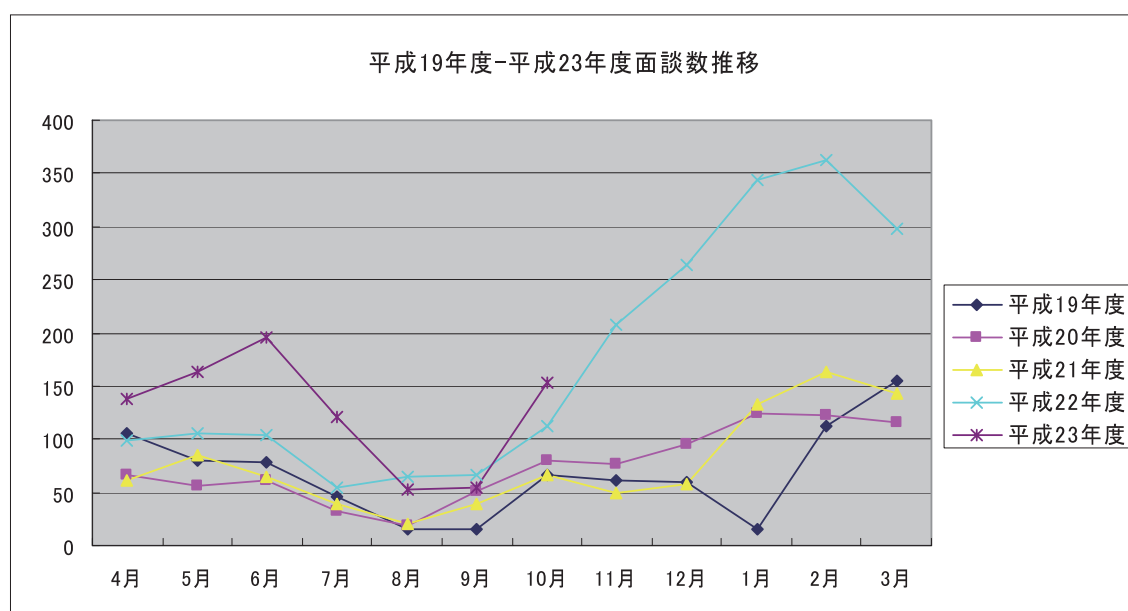
【表1-1】 相談員数の推移（人）

*ハローワークからの出張相談員

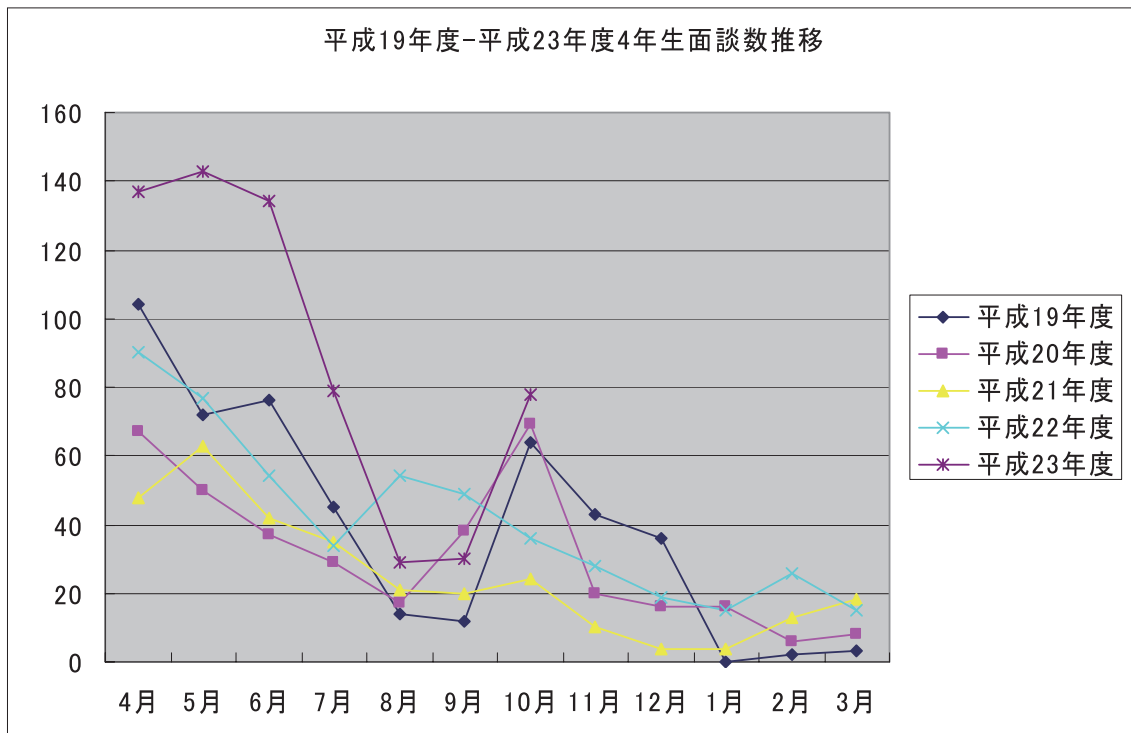
	専任職員	相談員（兼コーディネーター）	非常勤相談員
平成20年度	2	0	0
平成21年度	2	1（12月から採用）	0
平成22年度	3	1	1（11月のみ）*
平成23年度	3	1	1

【表1-2】 相談数の推移（延べ数） 大学院・卒業生を含む

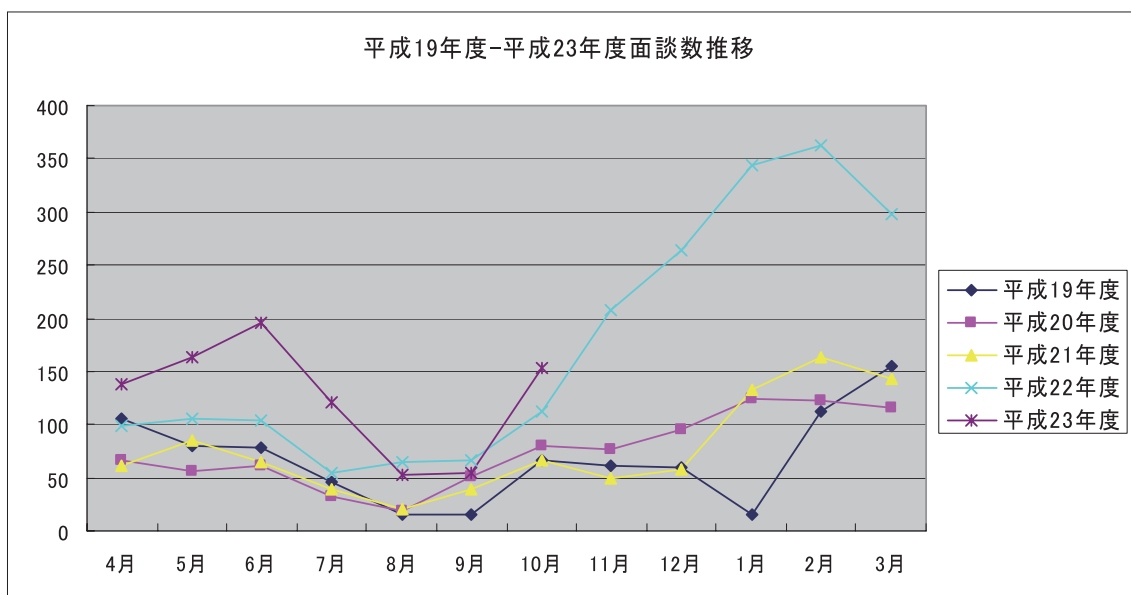
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成19年度	106	80	78	46	16	15	66	61	59	15	113	155	810
平成20年度	67	57	61	33	18	51	80	77	96	124	123	116	903
平成21年度	61	85	65	40	21	39	66	49	58	133	164	143	924
平成22年度	99	106	104	55	64	66	113	208	263	343	363	298	2,082
平成23年度	138	164	196	121	52	55	154						880



【図1-1】 平成19-23年度相談数推移（延べ数） 大学院・卒業生を含む



【図1-2】平成19-23年度4年生相談数推移



【図1-3】平成19-23年度3年生相談数推移

2 就職データシステムの管理運営

従来、学生が本学で受け付けした求人票を閲覧する方法は、キャリアサポートセンターの室内で、求人票ファイルをセンターの開室時間内に閲覧する方法に限られていた。ファイルの冊数が少ないこと、開室時間外には閲覧できないなど、学生にとっては大変不便な状況にあった。

本取組により、学生支援システムユニバーサルパスポート（以下「ユニパ」という。）を導入することになり、学内のパソコンから求人票が閲覧・印刷できるようになり、キャリア意識に関する学生の意識の向上が図られた。また、キャリアサポートセンターの室内が満席時などの場合にも学内で求人票が閲覧できる体制としたことから、学生がじっくり企業研究などに取り組めるようになった。

【表2-1】 学生支援システム導入までの行程

年 度	実施時期	内 容	件 数
平成 21	12 月～	学生支援システム GAKUEN からユニパへの移行データの整備及び平成 20 年度求人票の読み取りとデータへの張り付け	約 440 件
平成 22	4 月	・3・4 年生にユニパの ID・パスワード配付 ・学生の学内パソコンによる求人票閲覧、メールによる Q & A 利用開始 ・大学から学生への連絡事項配信開始	P 7 表 2-3
	通年	平成 22 年度卒業生対象受付求人票 PDF 読み取りとデータへの貼り付け	792 件
平成 23	4 月～9 月	平成 22 年度卒業生対象受付求人票 PDF 読み取りとデータへの貼り付け	646 件

平成 23 年 7 月からこの学生支援システムの愛称募集を行ったところ、システムを通じて 31 件の応募があり、11 月にシステムの愛称が「Nサポ」(NDSU 学生支援システム)と決定された。応募数の多さは、システムへの学生の関心を示している。

学生支援システムの利用内容・利用状況を以下に述べる。

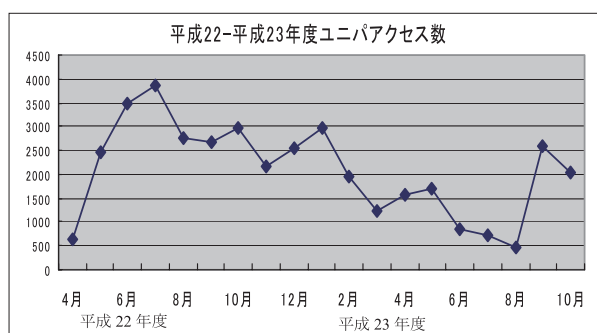
①求人検索

学生の学生支援システムの主たる利用目的は、ユニパによる求人検索である。その利用件数であるが平成 22 年 7 月をピークに減少傾向にある。これは平成 22 年 4 月に専任職員が 2 名から 3 名に増員され 5 名体制となり、相談体制が強化されたことが一因と思われる。このことが、学生の面談による直接相談のニーズを引き出したのである。本 GP は、きびしい就職状況に直面する学生の困難の解消に機能したということができる。

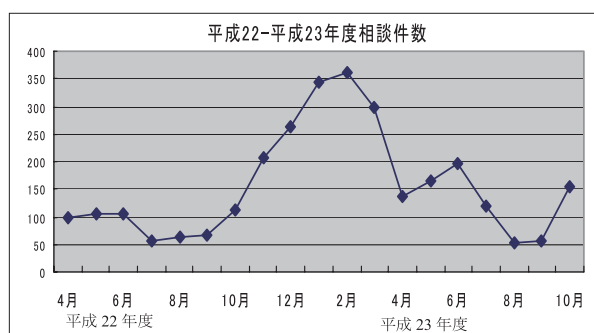
なお、昨年度実施したアンケートでは、学外からの求人票の閲覧希望は 84.8% となっており、理由としては、「学内のパソコンが混み合っている」「パソコンの利用時間が限られている」「自宅でゆっくり閲覧したい」等があげられている。通信情報技術の進展に伴い、学生の声は当然の意見として大学側も真摯に受け止めてはいる。しかしながら、この点は情報保護に関する本学の基本方針に抵触するセキュリティ上の問題を含んでいる。現在、別のシステムを用いた解決法がないか、具体的に検討しているところである。

【表2-2】 学生による学生支援システム求人検索件数（延べ数）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
平成 22 年度	626	2,481	3,494	3,857	2,741	2,660	2,988	2,186	2,537	2,963	1,936	1,239
平成 23 年度	1,559	1,697	859	724	466	2,608	2,035	1,423				



【図2-1】 平成22-平成23年度学生支援システム求人



【図2-2】 平成22-平成23年度学生相談件数（のべ数）

② Q & A

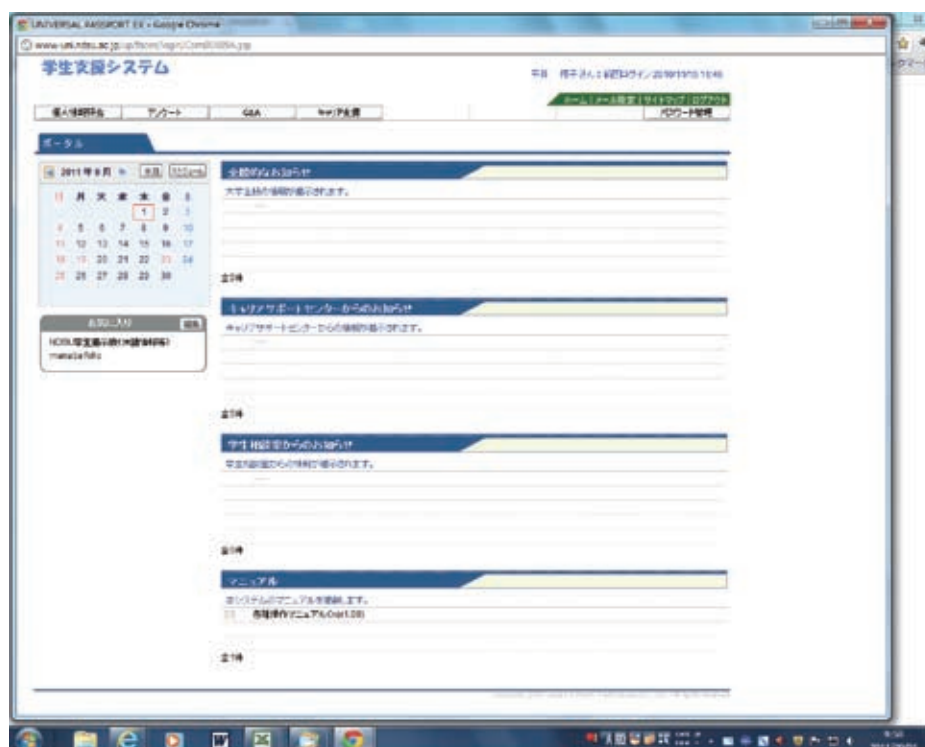
これは、学生がシステムを通してキャリアサポートセンターに質問をし、相談員がシステムを通して回答するというシステムである。就職活動のピーク時には相談の予約がなかなか取れない学生がいるという現状から、当初この Q&A の活発な利用が見込まれたが、実際は現時点で7件の相談に留まっている。これは、学生に対する周知不足が主たる要因と考えられるが、Q & A で可能な相談は単純なものに限られ、複雑な質問に対応できないという限界があることも要因である。今後は Q & A に限らず、他の機能を含めて本システムの活用を進めていきたい。

③学務部キャリアサポートセンターからの情報発信

主として求人情報の発信のほか、下表の内容の発信を行っている。求人情報は主として本学夏季休暇中に4年生を対象として配信している。携帯電話への配信が主となるため、配信内容は、企業名・職種・勤務地等の概要のみとしている。その他、休暇中以外にも締切日の近い求人が来た場合は随時学生に配信している。この連絡直後に、求人票を直接キャリアサポートセンターに見に来る学生も少なくない。このメール機能は、急を要する連絡時には、その効果を発揮している。

【表 2-3】 学務部キャリアサポートセンターからの発信状況

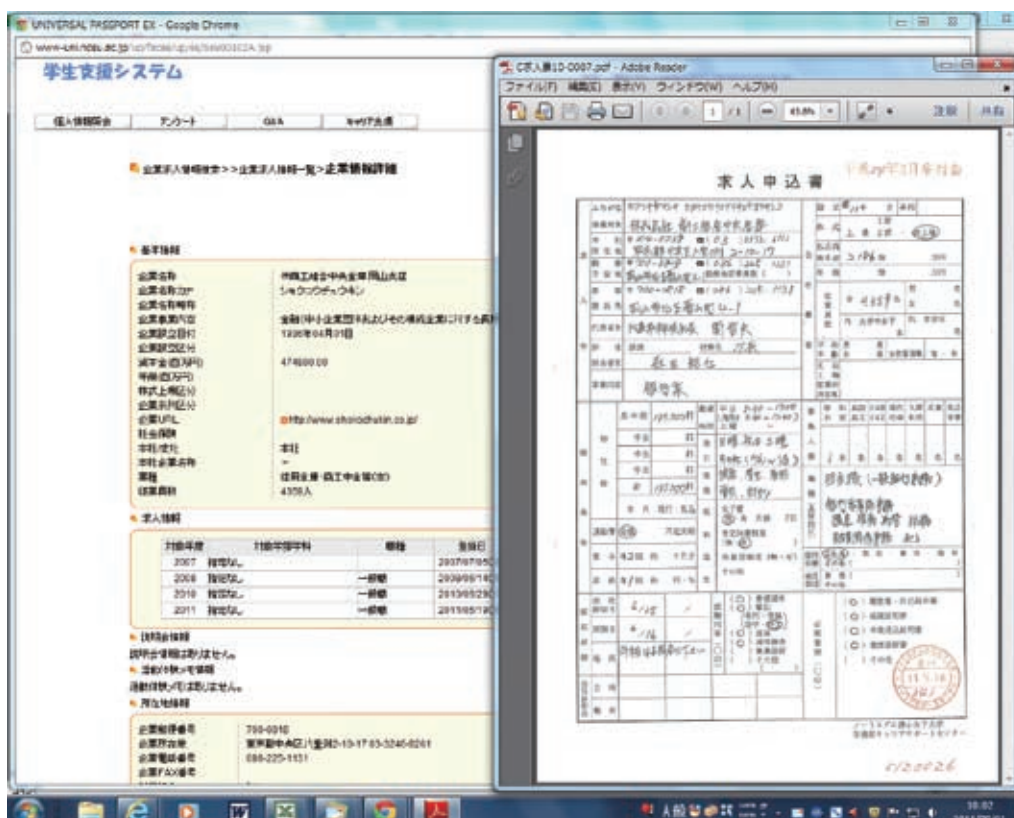
平成 22 年度										平成 23 年度							
月 内容	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月
求人情報					9	8	6	4	2	4	7	4					4
ガイダンスのお知らせ						3				2	1						
全般的なお知らせ								2				1				1	
緊急連絡					1			1			4	2				1	
Q&A 回答			2				2						1	2			
学生呼び出し							1										



【図 2-3】 学生支援システムの学生ログイン画面



【図2-4】 学生支援システムの学生求人検索画面



【図2-5】 学生支援システム学生求人票閲覧画面



【写真 2-1】学内パソコンによる学生利用場面

3 キャリアカウンセリングと就職データシステムについての今後の課題

GP の目的の一つである「就職情報のデータベース化」が実現され、求人票の公開に関しては、紙媒体のアナログからデジタル化に飛躍し、学生に多岐にわたる利点をもたらした。また、付加機能であるスキャナによる求人票の PDF 化、特に、過去 3 年間にわたる求人票のデータベース化は、学生への求人情報の拡大のみならず、事務担当者の業務の軽減と、情報保存の画一化を可能にした。

以上の点を踏まえ、当面の課題は、主に以下の二点に絞られる。

第一の課題は、全学生を対象としたキャリア支援の実現化に向けて、本システムをいかに有効利用していくかである。到達目標を今一度明確にし、先ずは、その取り組み姿勢を学年別に明文化することが重要だと思われる。学科によってはキャリアサポートセンターに来室する時間の捻出にも苦労している現状であり、忙しい学生にとっては自宅が唯一就活について考える場であることは事実である。長期休業中や遠方からの通学者のことを考慮すれば、自宅からの求人票の閲覧、Q&A による相談の実施は今後避けて通れない課題である。キャリアサポートセンターでは、本システムと他システムとの併用も念頭に置き、他部署の協力を得る中で検討中である。ただし、忘れてはならない点は、やはり「face to face」による直接相談を堅持することである。

第二の課題は、卒業生向け支援である。本学は、在学生のみならず、卒業生に対するアフターケアも重視しており、就職後の悩み相談に応じるだけでなく、企業等から既卒求人があれば、再就職の斡旋もできる限り支援している。卒業生は広告塔であると言われるように、本学の卒業生が実社会で活躍することは、企業等から本学に対する継続的な求人につながる。卒業後も支援することは本学と卒業生の絆を強めることに結びつくと考ええる。

当センターでは、従来から実施しているハガキや電話による進路追跡調査を更に充実させ、卒業生の進路状況をほぼ 100% 把握してきた。この結果をもとに、求職中の卒業生（就職が決まらないまま卒業した学生、および、早期に離職した学生）をリアルタイムで支援する方法はないかと検討を重ねてきた。その結果、平成 17 年度以降、「求人票に関するメール配信サービス」を構築し、卒業生へのキャリア支援は大きく飛躍を遂げた。本 GP でも、このシステムの充実に努めてきた。

今後は、在学生はもとより、卒業生にも利用可能なシステム機能をよりよく活用してもらえよう、さらに働きかけたい。

Ⅲ 事業実施による効果

本事業により平成 22 年度はコーディネーター兼キャリアカウンセラー 1 名、非常勤キャリアカウンセラー 1 名、職員 3 名の計 5 名の相談体制となり当初の目標であった就職支援体制の強化は達成され、厳しい経済状況下においても非常に高い就職率を保ち続けることができた。特に平成 22 年度卒業生の就職率は県内のみならず、経済誌にも取り上げられるなど全国的にも注目された。本取組の直接の成果があらわれるのは、強力な支援を受けた平成 22 年度の 3 年生、すなわち現 4 年生の就職の時点と思われるが、本事業による 3 つの取組、就職データシステムの構築、個別キャリアカウンセリングの強化、各種就職対策講座の実施が有機的に連携し、その効果が高い就職率の維持となって現れるように今後とも努力をしたい。

【表 2-4】 5 月 1 日現在の就職率（就職決定者数÷就職希望者数）

学部・学科		就 職 率			
		平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
文学部	英語英文学科	100.0%	100.0%	95.9%	100.0%
	日本語日本文学科	100.0%	94.4%	96.8%	95.8%
	現代社会学科	100.0%	98.1%	96.4%	98.6%
人間生活学部	人間生活学科	100.0%	98.7%	98.8%	100.0%
	児童学科	100.0%	99.3%	98.5%	98.7%
	食品栄養学科	100.0%	98.4%	98.8%	96.9%
合 計		100.0%	98.3%	97.7%	98.5%

Ⅳ 総括及び今後の展望

本事業の具体的事例で述べた、個別キャリアカウンセリング、就職データシステム（Nサポ）の管理運営、各種就職対策講座のいずれも取組みも大きな成果をあげ、それが高い就職率の維持、学生の満足度の向上につながった。

特に、相談体制の強化によるきめ細かいキャリアカウンセリングは相談者数の大幅な増加につながり、本学学生からも高い評価を得ている。それは単に数字のみの増加ではなく、相談内容の多様化に応えつつ一人ひとりと向き合い、じっくりと話を聴くという本学独自の姿勢を堅持したことにより、学生は納得する就職活動を行い、それが高い就職率という結果を残したのである。また、就職データシステムも学生への周知という課題を残しつつも、キャリアカウンセリングを補完するものとしての機能を発揮し、外部の就職サイトと並んで学生の欠くことのできない情報源となっている。

今後も学生の雇用環境は厳しい状態が続くと推測される。その環境下で学生のニーズに沿った就職活動をサポートするために、3 年間実施してきた各取組みを発展的に継続することが目標である。そのことにより、新卒無業者の低減、高い就職率を維持しつつ早期離職、ミスマッチ就職の防止に繋がると確信している。

平成 22 年 3 月 6 日に開催した、本取組に係る外部評価委員会において、坂入委員が「自己分析や職業興味調査は本来キャリア支援の範疇である。」と発言されたが、当センターにおいても自己分析対策講座や個別の自己分析を行っている。これは、自己 PR へとつながり、自分は何が得意なのか、どんなことに価値を見出しているのか等の自己認識を促す第一歩となっている。

また、当センター主催の業者による職業適性テストを 3 年生対象に年 1 回実施している。こ

のテストを実施することにより、副田委員からご指摘があったように、「職業理解に学生が大量の情報に埋没することなく、かつ、受け身マインドを払拭するような指導」の一助となっているといえる。学生は職種への視野を広げ、GPで導入した学生支援システムは業種・職種・勤務地で企業検索が可能であり、学生は延べ何千件の情報からピンポイントにデータを絞ることができる。

また、青山委員の「改善すべき事項」の中に、「他大学との比較、送り出した学生の追跡調査、就職先への聞き取り調査等多面的に調査・分析することにより新たな視点が明確になる。」とあるが、1-2「就職データシステムの管理運営〈展望〉」に記載したとおり、卒業生への追跡調査、アンケートは継続して実施しているものの、これまで当センターでは、他大学の情報収集に関しては就職支援業者からの情報を主としており、他大学への実地調査等を施行したことはほとんどなかった。秋山委員の評価、改善点にもあったが、「学生主体の時代の速度に合わせたデジタル化の構築」や「スピードに即する柔軟性の高い人材育成」には、支援する者が先ず外部に目を向けることだと痛感している。この度のGPにより、複数の先進大学に出向いたことは、確かに大きな刺激と参考になった。今後も、大学間の単なる意見交換にとどまらず、他大学に積極的に出向き、正に「plan do check action」の姿勢を保持したい。

本学は、本取組の中で、終始「カトリックの大学である」ことを念頭に、「人を思いやる心」をもった女性の力を社会に生かすための就職活動支援強化を促してきた。今年度からは、本学においてキャリア教育も開講されている。「キャリア教育」は、「キャリア教育」が「就職支援」と同意語ではないことを学生に理解してもらうことから始まる。いかに時代に沿った「就職支援」を保持していくかは、教育改革、カリキュラム改革と同様、学長をリーダーとした教職員全員の関与を必要とすることである。

このことについて、本学の取組の一つとして、教員を対象としたキャリアガイダンスの実施をあげたい。これは、年1回、キャリアサポートセンター専任職員が各学科に出向き、就職環境、昨年度の就職決定状況やインターンシップ等について教員に報告、説明するもので、教員との質疑応答時間も確保している。この取組については、本学の「大学評価（認証評価）結果」に、「専任職員による相談業務に積極的に取り組むなど、学生の就職支援活動を行うと同時に、教員に対するキャリアガイダンスを行っており、就職率の高さからも支援活動の有効性を評価できる。」と記載されている。

また、当センターが年2回4年生を対象に実施している進路状況調査も、全学を挙げての支援の一つである。個々のゼミ、即ち卒業論文の指導教員にその調査を一部委託しているが、その主たる目的は、学業以外の会話の場を設けることによって、学生の現況を事務サイドだけでなく、教員も把握することにある。さらに、教員が学生との会話の中で、職員とは異なる視点から個々の特性を導いたり、専門分野についてどのように他者に伝えるかなどのコミュニケーション能力の指導も行えるのではないかと期待している。

この度のGPを通して、ハード面、ソフト面両面において、就職支援の強化、内容の充実をはかることが可能となった。来年度以降、学生との絆をより一層深められるよう、職員のキャリア指導に対する不断の努力、研鑽を積んでいきたい。

附 各種就職対策講座の実施

学務部キャリアサポートセンターが主催する各種対策講座には大きく分けて、キャリアガイダンス、面接等の各種対策講座、4年生による報告会・企業を招いての説明会の3つに大別できる。どの催しにしても授業や他の行事と重なり、全員が参加できる日程をやりくりしながら実施している。

2010年度はかねてから学生からの要望の強かった自己分析・グループディスカッションの対策講座をGP予算で開講し、参加した学生からは高い満足度を得ている。また、就職活動を始めたばかりで業種・職種についての理解が低い学生のためにセミナーを開いた。春休み中のため参加者は多くなかったが、参加した学生からは就活を始める上で非常に役立ったとの評価を得ている。

キャリアサポートスケジュール

学年		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
3年生	ガイダンス等	■オリエンテーション			■第1回キャリアガイダンス			■第2回キャリアガイダンス		■第3回キャリアガイダンス			
	インターンシップ	■インターンシップ説明会	■ID登録説明会	インターンシップエントリー				■就職適性診断テスト		■面接対策講座		■グループディスカッション講座	
	説明企業等							■就職適性診断テスト診断結果解説会	■日本経済新聞の読み方				
4年生	ガイダンス等	■第4回キャリアガイダンス						■第5回キャリアガイダンス					
	インターンシップ					●求人情報メール配							

キャリアガイダンス開催日程

年 度	平成20ー平成21年度			平成21ー平成22年度			平成22ー平成23年度			平成23年度		
項 目	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率
第1回	7/9	401	70.4%	7/8	380	63.2%	7/7	360	68.1%	7/13	467	76.1%
第2回	10/8	344	60.4%	10/7	356	59.2%	10/6	306	57.8%	10/12	396	64.7%
第3回	12/3	462	81.1%	12/2	451	75.0%	12/15	371	70.1%	12/14		
第4回	4/22	178	31.2%	4/28	191	31.8%	4/20	133	25.1%			
第5回	10/21	44	7.7%	10/20	37	6.2%	10/12	17	3.2%			

就職対策講座（対象3年生）

年 度	平成20年度			平成21年度			平成22年度			平成23年度		
項 目	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率
適性診断テスト	11/1	226	39.6%	10/24	150	25.0%	10/30	196	37.1%	10/15	166	27.1%
面接対策講座	1/14	388	68.1%	12/9	332	55.2%	12/22	285	53.9%	12/21		
グループディスカッション講座	2/12	95	16.7%	1/13	171	28.5%	1/12	125	23.6%			
	2/26	19	3.3%									

学内説明会（対象 3 年生）

年 度	平成 20 年度			平成 21 年度			平成 22 年度			平成 23 年度		
項 目	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率
卒業生による業界・企業説明会	11/26	130	22.8%	11/25	270	44.9%	11/17	235	44.4%	12/3		
4 年生による就職活動報告会	12/17	270	47.4%	12/16	250	41.6%	12/1	139	26.3%	11/19		
人事採用担当者による学内企業説明会	2/12	140	24.6%	2/24	110	18.3%	2/22	92	17.4%	2/14		
	2/13	130	22.8%	2/25	130	21.6%	2/23	72	13.6%	2/15		

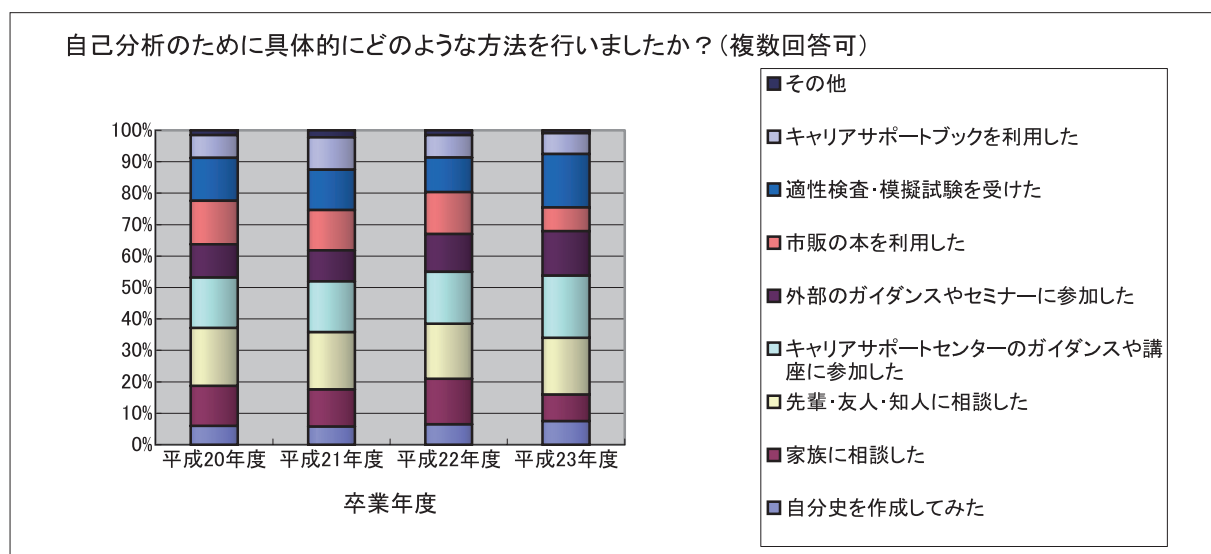
GP 予算による就職対策講座

年 度	平成 22 年度			平成 23 年度		
項 目	実施日	参加数	参加率	実施日	参加数	参加率
自己分析対策講座	6/30	47	8.9%	6/29	22	3.6%
	7/14	50	9.5%	7/20	58	9.4%
	7/21	54	10.2%	7/27	22	3.6%
	10/20	94	17.8%	10/19	61	10.0%
	計	245	46.3%	計	163	26.6%
グループディスカッション講座	3/2	13	2.5%			
	3/16	20	3.8%			
	3/18	14	2.6%			
	3/23	13	2.5%			
	計	60	11.3%			
業種・職種についての解説セミナー	3/15	14	2.6%			

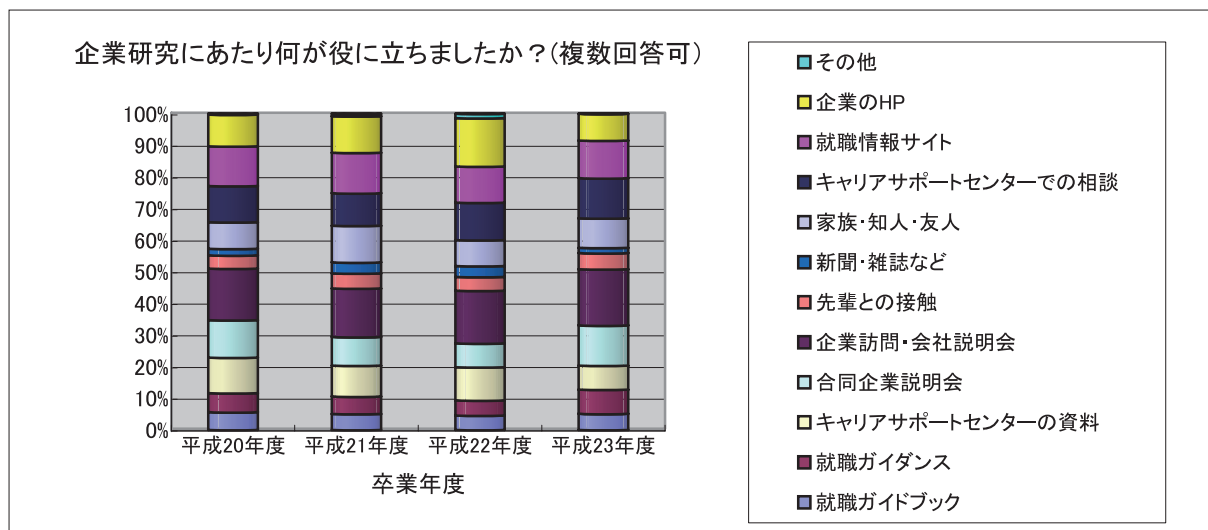
<展望>

今後の課題としては、めまぐるしく変化する就職環境に弾力的に対応した対策・支援の実施と従来から実施しているガイダンス等が有機的に連携し、相乗的な効果を発揮するようなプログラムの開発があげられる。また、学生は学外のセミナー等にも積極的に参加しており、それら学外組織との連携も一案として考えられるが、それは本学の教育理念の通定を念頭に置いたものでなくてはならない。

<参考>



【図 3-1】 自己分析の際に利用したもの（『キャリアサポートブック』を基に作成）



【図 3-2】 企業研究にあたり役立ったもの（『キャリアサポートブック』を基に作成）



教員就職支援

取組の目的

具体的事例の紹介

事業実施による効果

総括及び今後の展望

テーマ2 教員就職支援関連事業

I 取組の目的

本取組の目的は、本学の使命の一つである教員養成の一層の充実のため、教職への就職支援を強めることである。具体的には、教員採用試験対策講座を全学の教職課程を挙げて実施して教職希望する学生のニーズに応えることや、大都市圏やカトリック系学校園の教職への就職を可能にする体制をつくることなどである。

II 具体的事例の紹介

1 3年生向け教員採用対策講座

(1) 事業の目的

教員採用試験に対する具体的な準備を始める3年生の11～12月に実施する。全体講演では、学校教育の現状や今日的な課題、求められる教師像などについての講演を聴くことを中心とする。分科会では、本学卒業生を中心とする先輩教諭に学校現場の実情、現場が新人に求める姿、採用試験対策の進め方などの具体的なアドバイスをもらうことを中心とする。学校現場の教師を目指すということがどういうことなのかという自覚を高め、採用試験に向けての具体的な対策を始めるきっかけにすることを目的として計画した。

(2) 3年間の総括表

実施日	平成21年度	平成22年度	平成23年度
	12月26日(土)	11月13日(土)	11月19日(土)
参加者	221名 (内訳初等・幼稚園 86名 初等・小学校 70名 中等・英語 25名 中等・国語 18名 中等・社会 11名 中等・家庭 11名)	226名 (内訳初等・幼稚園 91名 初等・小学校 59名 中等・英語 37名 中等・国語 16名 中等・社会 12名 中等・家庭 11名)	290名 (内訳初等・幼稚園 112名 初等・小学校 85名 中等・英語 36名 中等・国語 21名 中等・社会 30名 中等・家庭 6名)
担当者 (学外)	●全体会講師・佐藤 学氏 (大阪教育大学附属池田小学校主幹教諭) ●幼稚園分科会・吉野裕子・小野田綾子・西山節子 ●小学校分科会・河上慶子・梶原幹子・堀田真紀子 ●中等英語分科会・久松満里子・川上信子・岡野智子 ●中等国語分科会・木村咲恵子・板谷香奈・瓜生紗知子 ●中等社会分科会・石本歩美・守屋秀一 ●中等家庭分科会・草地奈緒・平野沙希	●全体会講師・青山順子氏(岡山市総合教育センター所長) ●幼稚園分科会・見持由美江・佐能浩美・堀部隆世 ●小学校分科会・黒住直香・難波香織・塚本恭子 ●中等英語分科会・光延明日香・戸野村仁美・杉岡和子 ●中等国語分科会・塚本仁美・板谷香奈・瓜生紗知子 ●中等社会分科会・結縁真有美・守屋秀一 ●中等家庭分科会・土井典子・平野沙希	●全体会講師・無藤隆氏(白梅学園大学教授・文部科学省中央教育審議会委員) ●幼稚園分科会・藤原志帆・岩崎恵・成田早織 ●小学校分科会・道面淳代・飯田早紀・中野加奈子 ●中等英語分科会・高橋貴恵・川上明日香・近藤千穂美 ●中等国語分科会・小野由香利・横山友貴・塚本仁美 ●中等社会分科会・野本彩乃(19日)・結縁真有美(26日) ●中等家庭分科会・平野沙希・森麻理子
(学内)	●全体会 伊藤豊美・河合保生・赤木雅宣 ●幼稚園分科会 梶谷恵子・湯澤美紀・小田久美子 ●小学校分科会 赤木雅宣・吉永早苗	●全体会 伊藤豊美・河合保生・赤木雅宣 ●幼稚園分科会 梶谷恵子・湯澤美紀・小田久美子 ●小学校分科会 赤木雅宣・福原史子	●全体会 伊藤豊美・河合保生・赤木雅宣・吉永早苗・家光大蔵 ●幼稚園分科会 梶谷恵子・湯澤美紀・吉永早苗・池田尚子 ●小学校分科会 赤木雅宣・杉能道明・福原史子

(学内)	●中等英語分科会 伊藤豊美 足立萬壽子 ●中等国語分科会 大滝一登 ●中等社会分科会 河合保生 ●中等家庭分科会 山本幾子	●中等英語分科会 伊藤豊美 ●中等国語分科会 大滝一登 ●中等社会分科会 河合保生 ●中等家庭分科会 山本幾子	●中等英語分科会 伊藤豊美 ●中等国語分科会 大滝一登 ●中等社会分科会 河合保生 ●中等家庭分科会 山本幾子
日程	全体会 13時00分～14時30分 分科会 14時45分～16時45分	全体会 13時00分～14時30分 分科会 14時45分～16時45分	全体会 13時30分～15時00分 分科会 15時30分～17時30分 ※「中等社会分科会」は、行事の関係や講師の都合等から、分科会を19日と26日にわたって実施した。3名は両日出席。

(3) 事業の内容

全体会では、教職を目指す学生の見識と自覚を高めるために講演会を企画した。平成21年度は、大阪教育大学附属池田小学校主幹教諭・佐藤学氏による「答えは子どもが教えてくれる」。大教大附属池田小が悲慘な事件を乗り越えていくまでの過程での教師集団と子どもの心との触れあいのお話は、学生に学校教育の魅力と可能性を感じさせてくれた。平成22年度は、本学卒業生で岡山市総合教育センター所長・青山順子氏による「学校現場を目指すみなさんへ」。今、学生の時に「どんな子どもを育てたいのか」「何のために子どもを学ばせるのか」などマスターキーになる部分をしっかり身に付けておくべきと熱く語られた。学校現場の厳しさとそれを超えるやりがい（楽しさ）を十分に感じ取ることができた。平成23年度は、白梅学園大学教授で文部科学省中央教育審議会委員の無藤隆氏による「学校教育の今日的課題」。「分かった!」と感じる楽しい学び手を育てる保育所・幼稚園の教育、「分からない?」と感じる自覚的な学び手を育てる小学校教育、「分かるが分からない、分からないが分かる!」と感じる意志的な学び手を育てる中学校以降の教育という発達段階の軸を示したうえで、どう関わり指導していくべきかを具体的に方向付けるお話だった。一般に、真面目に目の前の勉強に励むが、時事問題等に苦手観をもつ本学学生にとって、今、学校教育がどういう方向に進もうとしているのかを考える貴重な時間になった。

分科会では、本学卒業生を中心とした先輩教諭が、学校現場の今日的な課題や求められる教師の姿、採用試験対策への具体的なアドバイス等を行った。身近な存在である先輩教諭と懇談会形態で話し合う時間をもつことで、質問や意見などが活発に出し合えた。参加したそれぞれが、教職を目指すということについて、自分のこととしてしっかり考えることができた時間だった。



全体会の講演



分科会の様子

(4) 実施の成果と課題

3年生が採用試験対策の勉強を開始する頃である時期に、教職の魅力を伝えることを主眼とする講座がもてたことは、とても有意義だった。参加学生の感想を見ても、目の前の採用試験だけではなく、教職に就いた後のビジョンをもつきっかけにもなったようである。採用試験対策だけではなく、3年次後半～4年生での学びがより充実してくることが期待できる。

4年生の参加も目立った。4年生の場合、実際に来年4月から教壇に立ちながら（講師として勤務しながら）採用試験を受けることになることから、全体会、分科会の現場での実践に関わる話を自分の姿に置き換えて聞いていたようである。4月からの心構えをつくる助けになったことは間違いない。

この時期、土曜日とはいえ、さまざまな行事が錯綜しており、多くの学生が参加しやすい日程の設定に配慮が必要である。3年生を主たる対象とするが、2年生や4年生も参加しやすいようにしたい。

2 4年生向け教員採用対策講座

(1) 事業の目的

教員採用試験が目の前に迫った4年生の6月に実施する。実施の形態は、初等・幼稚園、初等・小学校、中等でそれぞれ異なる。（採用試験の内容が異なり、重点的に取り組みたいことが違っているため。）採用試験対策の中でも、一人で頑張れることなく、仲間とともに頑張りたいことを中心に企画し、本学卒業生の先輩教諭や大学関係者の協力を得て実施した。

この対策講座は、もともとそれぞれの担当の裁量で採用試験を受験する学生のための学習会として実施していたものを、学生支援G Pの支援を得て、全学教職課程の取り組みとして再編したものである。

(2) 3年間の総括表

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
実施日		6 月 26 日（土）	6 月 25 日（土）
参加者	※準備のため本事業外で実施	初等 … 186 名 （内訳 幼稚園 108 名 小学校 78 名） 中等 63 名 （内訳 英語 24 名 国語 21 名 社会 8 名 家庭 10 名）	初等 … 132 名 （内訳 幼稚園 49 名 小学校 83 名） 中等 … 73 名 （内訳 英語 41 名 国語 14 名 社会 5 名 家庭 13 名 栄養 2 名）
担当者（学外）		●幼稚園分科会・松本敦子・吉澤佳子・中丸元良 ●小学校分科会・小川孝司・下山俊子・大木進 ●中等英語分科会・高橋明子・森上真知子・保都沙也加 ●中等国語分科会・大崎宏美・板谷香奈・瓜生佐知子 ●中等社会分科会・光延洋美・古舞睦子 ●中等家庭分科会・土居典子・鈴木輝子	●初等共通・青山順子（岡山市立政田小学校長） ●幼稚園分科会・榎原朋代・岩崎恵・石原佳保里 ●小学校分科会・大木進 ●中等英語分科会・板野佐織・戸野村仁美・山本綾香 ●中等国語分科会・塚本仁美・西川真由・亀川香菜 ●中等社会分科会・野本綾乃・結縁真有美 ●中等家庭分科会・秋山美佳・奥田麻美子

(学内)	●幼稚園分科会・梶谷恵子・湯澤美紀・小田久美子 ●小学校分科会・赤木雅宣・吉永早苗・福原史子・家光大蔵 ●中等英語分科会伊藤豊美 ●中等国語分科会 大滝一登 ●中等社会分科会 河合保生 ●中等家庭分科会 山本幾子	●幼稚園分科会・梶谷恵子・吉永早苗・湯澤美紀・吉澤佳子（保幼小小学修支援センター） ●小学校分科会・赤木雅宣・杉能道明・福原史子・安江美保・家光大蔵（保幼小小学修支援センター） ●中等英語分科会 伊藤豊美 ●中等国語分科会 大滝一登 ●中等社会分科会 河合保生 ●中等家庭分科会 山本幾子
日 程	午前の部 9時30分 ～ 12時00分 午後の部 13時00分 ～ 15時30分	午前の部 9時30分 ～ 12時00分 午後の部 13時00分 ～ 15時30分

※ 平成21年度は、準備のため本事業外で実施した。



模擬授業の様子



集団面接練習の様子

(3) 事業の内容

本講座は、採用試験対策終盤の4年生を中心にした講座である。初等・幼稚園、初等・小学校、中等それぞれで採用試験の内容やタイプが異なるため、講座の内容も違ってくる。初等・幼稚園では、造形の講習会やグループでの創作劇づくりと発表会などが行われた。初等・小学校では、国語科・社会科・算数科・理科の模擬授業体験・批評会が中心に行われた。中等では、本学卒業生が講師となり集団討論や集団面接の練習が中心に行われた。いずれも、個人練習では限界があり、頑張りにくいところでもある。仲間と共に頑張ることで今一度「チーム清心」の連帯感を確かめ合うことができた。本講座をきっかけに、仲間が集っての学習会が増えたとの報告もある。

(4) 事業の成果と課題

採用試験の勉強を頑張らなくてはならないが、気持ちばかりが焦って思うようにはかどらない4年生も多い中、教育の原点である子どもの成長や日々の実践などに関わる話題について話を聞いたり話し合ったりできたことは、頭と心をリフレッシュさせるとともに、更に頑張る気持ちを高揚させることにつながった。また、幼稚園の試験で重視されるグループ制作や、小学校の試験で重視される模擬授業について、集中的に実践できるようにしたことは4年生のニーズに合っていたと思われる。また、中等で実施された本学卒業生の先輩教諭の力を借りての面接練習会では、さまざまな面接の形態に慣れるだけでなく、学校教育が直面している課題についてそれぞれが自分の考えをもつ機会にもなった。多くの4年生にとって、期待と覚悟をもって前進する意義のある時間になったのではないかと思われる。

この時期の土曜日は、東京アカデミー学内講座、保育士試験模擬試験、岡山県教委主催「教師への道」講座等、さまざまな行事、講座等が重なり合っている状態である。日程調整をうまく行い、多くの学生が参加しやすいように配慮する必要がある。

3 カトリック学校1日体験事業への参加

(1) 事業の目的

本事業は、県内指向の強い本学学生に、県外私立学校の実状等を情報提供して幅広い選択について考える機会を提供することにより、学生の新たな意欲を引き出すことを目的とする。

(2) 三年間の総括表

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
実 施 日		9 月 9 日 (木)	9 月 8 日 (水)
訪問学校	◇日本カトリック学校連合会との協議	ノートルダム学院小学校 ノートルダム女学院中・高校	大阪信愛女学院小学校 大阪信愛女学院中・高校
参加学生		初等 16 名 中等 24 名 (英 14・日 3・現 3・人 4) 計 40 名 (4 年 26・3 年 8・2 年 6)	初等 13 名 中等 13 名 (英 11・日 2) 計 26 名 (4 年 13・3 年 2・2 年 11)
引 率 者	◇受入校との連絡・調整	初等：赤木雅宣 (児童学科) 中等：伊藤豊美 (英語英文学科)	初等：杉能道明 (児童学科) 中等：伊藤豊美 (英語英文学科)
日 程	◇学生への広報・募集	6:50 岡山駅 発 10:00 京都 着 10:00～15:40 学校体験 16:00 京都 発 20:00 岡山駅 着	7:10 岡山駅 発 10:00 大阪 着 10:00～16:00 学校体験 16:20 大阪 発 19:00 岡山駅 着
他 大 学 参加学生		聖トマス大学 2 名 上智大学 2 名 南山大学 4 名	神戸海星女学院大学 1 名 上智大学 1 名 南山大学 1 名 大阪信愛女学院短期大学 6 名

(3) 事業の内容

① 小学校の場合

- 10:00～10:30 受 付
- 10:30～11:00 開 会・オリエンテーション・小学生による歓迎セレモニー
- 11:00～12:25 授業参観・施設見学
- 12:25～13:15 昼 食 (学級に入り、児童と一緒に給食)
- 13:15～13:30 掃 除
- 13:35～14:20 5 年生水泳授業体験・見学
- 14:40～15:10 校長講話
日本カトリック学校連合会からのカトリック小学校紹介
- 15:10～15:20 帰りの会 (HR) 見学
- 15:20～15:40 まとめ・閉会

② 中学・高等学校の場合

10:00～10:30 受付

10:30～10:45 開会・オリエンテーション

10:45～12:35 授業見学

12:35～13:20 昼食（食堂）

13:20～15:10 校舎見学

日本カトリック学校連合会からのカトリック中・高等学校紹介

15:20～16:10 LHR 体験・見学

16:15～16:30 SHR 見学・掃除体験

16:30 閉会

16:40～ クラブ体験（時間の許す人のみ）

※本学学生は、バス出発の都合上、LHR 見学後に退校させていただいた。

（4）学生の感想

《初等》

- 生徒に対する先生方の指導法が一番心に残りました。子どもたち一人一人と関わりあいながら授業をされている先生方が輝いて見えました。自分も教師になりたいとの思いを強くした一日体験でした。
- 公立にはないような施設・設備を見学して驚くとともに、私立の良さを感じました。
- 様々な授業や施設を見学させていただき、子どもたちにとって大変学びやすい環境を整える努力を目の当たりにして感激しました。
- この学校一日体験を通して、カトリック学校の魅力を感じました。
- 校舎がとても広く、設備が充実していた。特に、礼法室、サイエンスコーナー、電子黒板、可動式プールなどには感銘を受けました。
- 他大学の教職志望学生と交流することにより、教職への思いが新たになりました。

《中等》

- 私立の学校でどのような教育が行われているのを見学できたことが一番心に残りました。今まで自分たちが受けてきた授業とはやや異なる授業を見て、また説明を聞き、新たな経験ができました。
- これまで公立の学校のことしか考えたことがありませんでしたが、今回の体験を通して、今後は私立学校も視野に入れて就職を考えていきたいと思いました。
- この学校一日体験に参加して、教職に就きたいという思いが一層強くなりました。
- 生徒たちが生き生きとしていました。来年の教育実習への意欲が増しました。
- 私立の学校の素晴らしさを知ることができた一日でした。教育実習とはまた違う視点で学校現場を見ることができ、視野が広がったと思います。
- カトリック学校関係者のお話を聞き、カトリック学校の魅力を感じました。



クラブ活動への参加



授業参観

(5) まとめ

私立学校の良さを周知して、同じカトリック系列の大学で教員免許取得を目指している学生の卒業後の進路の選択肢を広げるという目的で、日本カトリック学校連合会が、平成 22 年度初めて、カトリック学校における学校一日体験事業を実施することになった。

本学では、当該連合会からの依頼を受け、学生支援 G P の事業として位置づけて協力することとなった。

本事業の趣旨を伝えて学生に周知したところ、2 年間で 66 名の学生の参加を得た。他大学からの参加者が少数にとどまったこともあり、本学学生が教職への強い意識を持っていることが窺えたが、受入学校においても学生の熱意と礼儀正しさについて高い評価をいただいた。学生の感想にもあるように、受入学校では教職履修学生のために様々な工夫をいただいた。本事業の趣旨は、準備期間であった平成 21 年度を含めた 3 年間に及ぶ関係者の熱意と努力により十分に達成されたと思われる。

4 大都市圏教員採用現地説明会

(1) 事業の目的

本学の学生は、県内出身者が多いこともあり、教職課程を履修している者の大半が岡山県・岡山市の教員採用試験を受験する状況があった。本県の教員採用数は生徒減もあり多いとはいえず、高い競争率が続いていた。一方、大都市圏の教育委員会では、学校数が多く団塊の世代の退職数の増加期に当たり、校種によっては教員採用予定数も多く、競争率も比較的低い状況になりつつあった。

この状況下にあって、県外教員採用試験受験の可能性のある学生を増やす可能性を検討することが必要となった。そのため、本事業を通じて講義等のあらゆる機会をとらえて積極的に県外受験もするよう学生に働きかけるとともに、訪問先の教育委員会及び都市に関する情報を収集し効果的に学生に提示することとした。岡山県外の教育委員会でも県内での説明会開催もあるものの、実際に現地に行き、都市の状況をみるとともに、実際に勤務する採用者の話をじかに聞き質問をすることで、当地の魅力を知り、県外就職への不安が少しでも緩和できることを目的として本事業を計画した。

(2) 3 年間の総括表

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
実施日	2009 年 11 月 28 日 (土)	2010 年 12 月 8 日 (水)	2011 年 12 月 8 日 (木)
行 先	神戸市教育委員会 堺市教育委員会	兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会	神戸市教育委員会 堺市教育委員会
参加者	学生 22 名 内訳：3 年 16 名 (英文 6 名、 児童 10 名)、2 年 6 名 (英文 2 名、日文 4 名)	学生 44 名 内訳：3 年 40 名 (英文 7 名、 日文 7 名、現社 3 名、児童 23 名)、2 年 4 名 (人間 4 名)	学生 31 名 内訳：3 年 30 名 (英文 4 名、 日文 6 名、現社 2 名、人間 1 名、児童 17 名)、2 年 1 名 (児童 1 名)
引率者	福原史子、河合保生	赤木雅宣、河合保生	赤木雅宣、河合保生

日 程	7時30分集合（全日空ホテル前）、40分出発－三木S A 9時10分－神戸市教育センター着10時00分 10時25分から神戸市教育委員会の説明と質疑（約1時間）、昼食、 神戸市14時発－堺市着15時、15時30分から堺市教育委員会からの説明と質疑、 17時出発－三木S A－岡山駅西口着21時、解散	7時50分集合（全日空ホテル前）、8時出発－三木S A 9時30分－神戸市兵庫県民会館着10時20分 10時30分より兵庫県教育委員会からの説明と質疑（約1時間）－神戸市教育センター着12時、昼食、 14時から神戸市教育委員会からの説明と質疑（約1時間）、 神戸市出発16時－岡山駅西口着19時、解散	7時50分集合（全日空ホテル前）、8時出発－三木S A 9時30分－神戸市教育センター着11時。 11時10分より神戸市教育委員会からの説明と質疑（約1時間）、昼食 神戸市出発14時－堺市着15時、 15時から堺市教育からの説明と質疑（約1時間）、16時30分出発－三木S A－岡山駅西口着20時、解散
-----	--	---	--

(3) 事業の内容

①平成21年度の実施内容

ア 神戸市教育委員会

はじめに採用担当者から神戸市の市政概要と学校教育の現状について、プレゼンテーションを受ける（写真1）。神戸市はさまざまな地域出身者を数多く受け入れるという寛容的な地域性があるとともに、教育にも力を入れており、教育センターはその要の役割を果たしている。教育センターには研修施設とともに、充実した研修資料を保有している。主宰する神戸教師塾では学習指導案の収集とそれらのイントラネットによる活用をはかっている。教員採用については、豊かな人間性、教育への意欲、実践的指導力、広い視野と問題への対応力を求めている。

学校・教員数は、小学校166校・4050人、中学校83校2分校・2286人、高校11校（全日制8校、定時制3校）・613校、幼稚園44園・278人、特別支援学校6校・477人、高専1校・95人で総教員数7799人（21年5月1日現在）に及ぶ。神戸市の特色として、他市と比べて初任給が高いこと、神戸市単独採用のため通勤区域が神戸市内に限られ通勤が容易であること、採用後の研修が充実していることなどの利点が多いことがある。特に教育センターは神戸駅近



写真1 神戸市教育委員会の説明
（於：神戸市教育センター）

くにあり、施設の充実度は高い。そのためもあり、競争倍率は高く（中・高10倍、小4倍、幼25倍）、難関となっている（幼稚園は某大学が受験により単位を付与するため、見かけの倍率が高い）。近年、新卒の採用者が増加傾向にあり、小学校では約50%となっている。幼稚園では保育士資格は求められない。特例として社会人経験者（3年以上）などを対象として採用試験もある。以上の説明の後、最後に質疑応答があり、閉会となった。

イ 堺市教育委員会

到着後、高層階の展望室に案内され、堺市の概要を市職員から説明を受ける。その後、説明会場へ移動した。土曜日午後にもかかわらず、教育長をはじめとする6人の教職員課人事グループに対応いただいた。教育長からは「教員が元気な堺市」を強調した挨拶があった。また、堺教師夢塾を立ち上げ、インターンシップの学生を受け入れており、採用前の不安を取り除くようにしていることや、合格者に対して合格者セミナーと称するウェルカムセミナーを開催し、

堺のマチの探訪や校長OBの専門指導員からの指導を受ける機会を設定しているそうである。「堺市では教師が伸びる」との言葉が印象的であった。

この後、採用担当者や教育委員会職員から説明があった。市単独の採用試験は、本年度が初の試みであったためか、教師経験者による体験談を交えて、採用に至る流れや採用後の研修、実際の教育現場についての話など充実した説明であった（写真2）。採用には、情熱・指導力・人間力が求められ、倍率は中10倍、小4倍である。幼稚園教諭採用には幼小2種類の免許が必要とされ、保育士資格は求められないものの、本年度は5名のみの採用であった。選考に当たっては1次、2次の区別はなく、筆答・面接・実技試験の総合評価による採用となっているとのことであった。

来年度の採用試験は平成21年度と大きくは変わらない見込みで、受験テクニックに走ることなく、先生になりたい、子どもが好きであることをはじめ、自己の良いところを売り込み、弱いところを直すように今から準備をすることが大切とのアドバイスがあった。なお、1次試験の問題はHP、専門試験は市役所3階の市政情報センターで公開している。



写真2 堺市教育委員会の説明
（於：堺市役所）

②平成22年度の実施内容

本年度は、実施日を学生の都合がつきやすく平日で教育委員会にも依頼しやすい創立記念日（12月8日）に変更するとともに、訪問先を一部見直した。すなわち、日程的にやや厳しい堺市教育委員会に代えて、従来から少ないながらも受験者のあった兵庫県教育委員会を訪問することにした。このため、出発時間もやや遅くなり、帰着も早い計画となった。

ア 兵庫県教育委員会

7時50分に岡山駅西口に集合完了後、直ちに出發する。計画どおり会場まで移動でき、10時30分から兵庫県民会館にて兵庫県教育委員会の採用試験の実施状況及び結果の説明を受けた。教職員課世良田重人副課長の挨拶の後、主として人事第2係平田高之係長から説明を受ける（写真3）。兵庫県教育の特徴だけでなく、神戸市の採用試験との違いも分かりやすく説明がなされ



写真3 兵庫県教育委員会の説明

た。参加学生からも多数の質問が出され、それに対しても丁寧な回答がなされた。兵庫県出身者は数名であったため、「岡山県が第一希望の人でも、第二希望でかまわないので兵庫県を志望して欲しい」と補足され、外交辞令とはいえ、好感もてる発言が印象的であった。幼稚園希望者にとっては兵庫県教育委員会が選考主体でないため、採用試験に関する具体的な説明がなかったのはやむを得ないことであった。

イ 神戸市教育委員会

昼食休憩後、神戸市総合教育センターに会場を移動し、神戸市教育委員会からの説明をうけた。教職員課主席人事主事の蔭山慎吾氏から神戸市のすばらしい教育環境と採用試験の説明がなされた(写真4)。昨年のようにDVDによる映像資料が提示され、具体的でビジュアルな説明があったため、学生も神戸市の地域環境や教育の実態がよく理解できたようであった。小学校はやや採用が減少したものの、中学校はかなり増加しており、志望の選択肢として考えようとする学生の存在も見受けられた。幼稚園は採用数が少なく高倍率であるが、県内の短大が受験を前提にした授業科目を開設していることが背景にあるとのことであった。しかしながら狭き門の状態である。神戸市立高校もあるが、高校での採用はしていない。兵庫県立の高校希望者は兵庫県の採用試験を受験するようにとの説明があり、学生も両教委の役割の違いが認識できたものと考えた。



写真4 神戸市教育委員会の説明

③平成23年度の実施内容

今年度の日程は、昨年同様学生の参加しやすい創立記念日とした。訪問先は神戸市教育委員会の変更はないものの、兵庫県教育委員会に代えて本学卒業生が就職した実績のある堺市教育委員会に戻して実施することになった。

ア 神戸市教育委員会

12月8日に実施

イ 堺市教育委員会

12月8日に実施

(4) 学生の感想

学生にとって岡山県外の教員採用試験の受験は、県外出身者及び、ごく一部の学生を除いて関心そのものが希薄な状態であった。これまでも神戸市教育委員会・堺市教育委員会は、本学内や岡山市内の施設で採用説明会を開催していたが、受験に至る学生は少数であった。この事業では現地で直接説明を受けることで、地域の様子を知り、教育委員会施設の一部も垣間見ることができるといふ現地ならではの情報が入手できたことで、県外に出ることへの不安がいくらかでも解消できたとか、大都市の魅力を感じることができたとの感想が寄せられた。結果として県外受験も一つの機会として捉えようとの気持ちが高まったようである。

(5) まとめ

これまで延べ3教育委員会の説明を通じ、各都市や県の採用試験の特色や違いが具体的に理解できたようである。いずれの説明会でも学生は集中した態度で説明を聞くとともに、多くの質問をするなど、終始意欲的な姿勢が見られた。また、実施日を学生が参加しやすいように、平日でしかも授業が行われない創立記念日とすることで、参加希望者が大幅に増加した。岡山

県以外の採用試験に関心をもった学生が出てきたようで、訪問の成果の現れと考えることができる。

従来は説明会さえなかった兵庫県での説明会は、広い兵庫県域での採用システムや神戸市教育委員会との関係が具体的に示されたことから、兵庫県出身者はもとより岡山県出身者にとっても選択肢として考える手掛かりとなったと思われる。また、神戸市教育センターの施設の充実度や堺市教育委員会の教員を育てようとするシステムは、教員になってからのキャリアアップにつながる点で安心材料が得られたようである。

Ⅲ 事業実施による効果

教員への就職支援の充実のために、本事業では教員採用試験対策講座（3年生向け、4年生向けの2講座）、カトリック学校1日体験事業への参加、大都市圏教員採用現地説明会の3事業を実施してきた。教員採用試験対策講座では、従来は困難であった県外からの講師招聘が可能となった。現在問題となっているさまざまな教育課題への取り組み状況を知り、解決のための方策を考える視点の認識ができたことは、学生にとって魅力的であり、採用試験に備えた広い視野と知見を得ることができたといえる。また最近採用試験に合格した複数の先輩を講師（一部学外を含む）に招くことで、実践的な採用試験対策を知ることができ、平成23年度採用試験試験では現代社会学科で初の合格者が誕生したことをはじめ、各学科とも合格数が大幅に増加するなど合格率の向上に寄与できたと考えられる。

カトリック学校1日体験事業では、学校現場の1日を体験することで、授業以外の教員の仕事の実際を知り、教職への魅力を高めることをねらいとした。さらにカトリック学校を中心とした私立学校も就職の選択肢と考えることで、教師になるチャンスを拡大することも考慮した。公立学校志向が強い実態ではあるが、将来的に少数でも志望先に加わる学生の出現が期待できる。

大都市圏教員採用現地説明会は、これまで県内志向が強かった本学学生に、県外大都市圏の教員採用に関する情報を提供することで、幅広い選択を自ら考える契機となるように新たに実施したものである。従来、県外で教職を目指す学生は、児童学科のように教育委員会から推薦依頼のあった都府県市を除くと、県外出身の学生に限られていたといえる。ところが、この事業の実施によって、明らかに県外の受験者数の増加が認められる。特にこの事業で訪問した神戸市や堺市に合格、採用される状況が出現するに至ったことは特筆できる効果といえる。

先に述べたように、この説明会への参加希望者に大幅な増加が見られたことは、学生が大都市圏の採用試験も選択肢の一つとして考えるようになった左証といえる。教育委員会によっては、一定程度勤務したら出身県に帰ることも考えてよいとの示唆があり、学生の気持ちを柔軟にする働きがあったといえる。女子学生であるだけに県外の採用試験の受験は、家庭の理解を得ることも考える必要があるが、何よりも複数の受験ができるメリットのあることが大きい。特にこの事業開始以後、従来就職実績がなかった都市で採用され、教壇に立っている現実、現役学生にとって頼もしいものであり、励みになるものと考えられる。諸般の事情で訪問できる都市は限られているものの、この成果は今後継続していかされるものと考えられる。

Ⅳ 総括及び今後の展望

平成 21 年度から 3 年間にわたり学生支援推進プログラム採択事業を実施してきたが、本事業の柱の一つである教職支援関連事業について、総括及び今後の展望を述べる。

1 総括

まず、これまで具体的に述べてきた教職支援として本学が実施した三つの事業（教員採用試験対策講座・カトリック学校一日体験事業・大都市圏における教員採用現地説明会への参加）は、学内外の関係者の努力と熱意並びに事業に参加した本学学生の積極的な取り組みにより、いずれの事業も大きな成果をあげたものと確信している。本プログラム採択事業がもたらした成果は、今後の本学の在り方にとってさまざまな影響を与えることとなったが、具体的には次の三点に総括できるものと考ええる。

(1) 教職支援が大学全体としての取り組みとなった。

これまでも教職履修学生に対する指導は行ってきたが、それぞれの担当部署あるいはそれぞれの担当者レベルでの取り組みであった。しかし、今回の本事業採択を契機として、学長を中心とした学内体制が整備され、具体的には学内に教職支援センターが設置されるなど、学生支援が大学の組織的取り組みとなったことの意義は計り知れない。

(2) 学生の教職への意識が飛躍的に高まった。

本事業で行った事業は、いずれも学生に具体的で直接的な刺激に満ちた体験を提供することになった。学内体制を整備し、組織的取り組みで魅力ある事業を展開した本事業は、意識調査や教員採用試験の結果からもはっきりと読み取れるように、学生たちの教職に対する意識を飛躍的に高めた。人や組織の意識改革は、お題目を唱えるだけでは到底為し得ないのであり、システムを良き方向に変革することでしか為し得ないということを、本事業への取り組みを通して確信した。

(3) 本学の教職課程の認知度が高まった。

結果的には、本事業を通じてさまざまな場面で、本学の教職を目指す学生たちの真摯でひたむきな姿を学外の多くの関係者に見ていただく機会を提供することになった。このことにより、教員採用試験の合格実績の大幅な向上ともあいまって、本学の教職課程の認知度が大きく上がったことは、事業当初には想定していなかった嬉しい成果であった。

2 今後の展望

基本的には、3 年間実施してきた本事業を発展的に継承していきたいと考えるが、以下にそれぞれの事業ごとに具体的に述べる。

(1) 教員採用試験対策講座

3 年生向け講座と 4 年生向け講座の二種類の講座を設定したことは、きめ細かく学生の意識向上を図る上で極めて効果的であった。今後とも、卒業生の力を借りながら、講座内容の質的向上を図りたい。

また、今後の新たな方向性として、在学生の支援だけではなく、学校現場で活躍している本学卒業生を支援していく体制を整えていきたい。

(2) カトリック学校一日体験事業

本行事が本学だけで実施されている行事ではないという性質上、今後とも日本カトリック学校連合会との連携を深めながら、事業内容の質的向上に努めたい。

(3) 大都市圏における教員採用現地説明会への参加

本学の学生が、以前にもまして岡山県以外の自治体の教員採用試験に合格するようになり、本学学生の質の高さが認識されてきたためか、本事業により訪問した教育委員会以外からも、教員採用試験説明会への参加を要望されたり、大学を訪問して貴学内で説明会を実施させて欲しいとの要望が多く寄せられるようになった。

今後とも、教職履修学生の就業保証という観点からも、学生への情報提供をさまざまな形で適切に実施していきたい。



学生相談室との連携

取組の目的

具体的事例の紹介

事業実施による効果

総括及び今後の展望

テーマ3 学生相談室との連携事業

I 取組の目的

本補助事業の中で、学生相談室と連携した相談・カウンセリングによる就職支援活動は、昨今の困難な経済情勢の中で就職活動に取り組む学生、就職が決まらぬまま卒業した卒業生、あるいはやがて就職活動に臨むことになる学生に対して、心理面からの支援活動を行うものである。学生相談室の本来の相談活動に加えて、就職活動に悩む学生、あるいは職業に対する志向が未熟な学生に対して、チャレンジ精神の再活性化、キャリア意識の醸成によって、就職活動への確固たる挑戦や明確な職業意識を身につけさせることを意図している。

本取組は、平成21～22年度の2年間は1・2年生を対象とした、職業や進路に関する意識の形成や疑問の解消に向けた個別カウンセリングと、3年生を中心とする、就職活動の準備に向けた心の形成に指向する個別カウンセリングの形で行われた。

平成23年度からは、実施責任者である学生相談室主任の定年退職等による学生相談室の再編成・充実と、本学におけるキャリア教育科目である「人材育成論」の開始によって、学生のキャリア意識の醸成に関する前年度までの活動はキャリア教育科目にその任を譲ることとした。そして本取組は、より充実した学生相談室の相談活動の中で、広く職業意識や就職活動の悩みや疑問に対応する心理相談企画として展開することとなった。

II 具体的事例の紹介

1 平成21～22年度の活動

本活動では平成21年度から22年度にかけて、秋～冬のシーズンに1・2年生を中心としたカウンセリング、春～夏のシーズンには就職活動を目前に控えた3年生を中心に据えたカウンセリング活動を行ってきた。実施責任者は本学の学生相談室主任（准教授臨床心理士）であり、実施担当者は非常勤講師（臨床心理士）である。

1・2年生に対する支援企画は「キャリアカウンセリングの3ヶ月秋～冬編」と題した。これは「そろそろ自分の進路を考えてみませんか」というコンセプトにもとづき、VPI（職業興味検査）や「自分振り返りシート」を用いて、進路や職業、あるいは自己の適性や職業選択に関するさまざまな疑問の解消、興味の醸成ならびに明確なキャリア意識の形成を導こうとするカウンセリング活動である。自分振り返りシートは、「私の振り返りシート」とし図1に示すようなものである。

私のふり返しシート

	記入日	年	月	日
ふりがな	生年月日	年	月	日生
氏名		(満	歳	月)

☆☆☆☆ 記入のしかた ☆☆☆☆

下にいろいろ書きかけの文章が並んでいます。それを見て、あなたの頭に浮かんできたこと、感じたことを、思うままにそれに続けて書き、その文章を完成してください。

[例] 外国 へ行って、いろいろ変わった風景を見たい。買い物も楽し

いと思う。

本を読むと 人生について考えさせられることが多いです。

- 1 子供の頃、私は_____
- 2 私はよく人から_____
- 3 家の人は私を_____
- 4 私が得意になるのは_____
- 5 私がきらいなのは_____
- 6 私のできないことは _____

- 7 将来 _____
- 8 仕事 _____
- 9 職場では _____
- 10 女 _____
- 11 私を不安にするのは _____
- 12 友だち _____
- 13 私が好きなのは _____
- 14 私の健康 _____
- 15 結婚 _____
- 16 どうしても私は _____
- 17 家の人 _____

【図1 自分振り返りシート】

*****そろそろ 自分の進路を考えてみませんか？*****

学生相談室では職業や進路の相談も常時受け付けていますが、今年 11 月、12 月と来年の 1 月を“キャリアカウンセリングの 3 ヶ月 秋～冬編”と名づけ、『職業興味検査』や『自分ふり返しシート』を使いながら、1～2 年生の皆さんの進路や職業選択に関するお手伝いをしたいと考えています。

自分の進路を考え始めた、迷っている、進路は心配だがどこから始めてよいかわからなくて不安、どんな仕事が自分に向いているか知りたい等キャリアに関する疑問や不安のある方、どうぞおいでください。キャリアについて考えるのに、“早すぎる”ということはありません。

学生相談室の行うキャリアカウンセリングは自己再発見のチャンスです。

お友達と一緒にでもかまいません。(できれば 2 人までをお願いします)

●対象 1 ～ 2 年生
●日時 11 月、12 月と 2011 年 1 月の下記の木曜日の午後 次の 3 つの時間帯から選べます。
 11 月 4 日 11 月 25 日
 12 月 2 日 12 月 9 日 12 月 16 日
 1 月 6 日 1 月 13 日 1 月 20 日
① 1 : 10 ~ 2 : 10 ② 2 : 35 ~ 3 : 35 ③ 4 : 15 ~ 5 : 15

●所用時間 1 回 1 時間程度で 2 回
●申し込み方法 図のように『キャリアカウンセリング申込書』（学生相談室前にあります）に記入して、申し込み箱に入れてください。
受付後、時間の調整を行い、直接連絡します。

**予約状況は学生相談室前に掲示していますので参照してください。空きがある時は、当日でも受け付けます。

担当者 非常勤カウンセラー 福森 カウンセラー 西崎
お問い合わせは学生相談室（内線 5365）へ
e-mail : nisizaki@post.ndsu.ac.jp

★ キャリアカウンセリングの間中にも火曜日は通常の相談を受け付けています。
どうぞご利用ください。

学生は1回目のセッションで相談とともにV P Iを行い、「自分ふり返しシート」の記載を次回までの宿題として課される。2回目のセッションでは、これらの資料にもとづき、丁寧な相談・カウンセリングを行う。実施に当たっては、2回の面接を通して、進路や職業についての意識を刺激して、自分自身の求めていることや性格傾向に気づき、将来のライフデザインを描けるように援助することに留意している。

3年生を中心とした支援企画は「キャリアカウンセリングの3ヶ月春～夏編」であり、「就職の心の準備はOKですか？」をキーコンセプトとして、1・2年生対象の秋～冬編よりも、これからはじまる就職活動に対する心の準備に目的を絞って行われた。

本活動では4月に図3のようなポスターを掲示して学生を募集し、5月6日から1日3セッション、1セッションあたり原則学生2名として、この学生に対し2週間にわたり2回のセッションを行う形式で、総計で8回実施された。

就活の心の準備はOKですか？

学生相談室では 職業や進路の相談も常時受け付けていますが、昨年度 2 期には主に1～2年生に“キャリアカウンセリングの3ヶ月キャンペーン”を実施して好評を得ました。

そこで今年度1期は“キャリアカウンセリングの3ヶ月—春～夏編”と題して、これから本格的に就職活動に入ろうとする3年生の皆さんのお手伝いをしたいと考えています。今 まだ進路に迷っている、心配だがどう始めてよいかわからない、自分がどんな仕事に就きたいのかよくわからない、この際自己分析を試みたいなど、就活にいろいろな不安や疑問を抱えている皆さん、どうぞおいでください。

『職業興味調査』や『自分ふり返しシート』を使って自分を見直し、再発見、再認識していただき、自信を持って実際の就職活動に望めるよう応援します。

お友達と一緒にでもかまいません。(できれば2人まででお願いします)

対象 3年生を中心にしますが、4年生の方でもかまいません。

日時 5月、6月、7月の下記の木曜日の午後 次の3つの時間帯から選べます。

5月	6日	20日	27日	
6月	3日	10日	17日	24日
7月	1日	8日	15日	

① 1:10～2:10 ② 2:35～3:35 ③ 4:15～5:15

所用時間 1回1時間程度で2回

申し込み方法 『キャリアカウンセリング申込書』(学生相談室前にあります)に記入して、申し込み箱に入れてください。
受付後、時間の調整を行い、直接連絡します。

*** 予約に空きがある時は、当日でも受け付けます。

担当者 非常勤カウンセラー 福森 カウンセラー 西崎

【図3 春夏編ポスター】

ここでも「職業興味検査」と「自分振り返りシート」を用いて2回のセッションを行うが、こちらの企画ではより戦術的な相談・カウンセリングを行い、2回のセッションを終えた時点で、自己PR文が書けるようになることを具体的目標に設定している。

秋～冬編および春～夏編の実施実績は次の表1のとおりである。

【表1】

回	期 間	キャリアカウンセリング	利用者数
第1回	2009年11月～2010年1月	36回	22人
第2回	2010年5月～7月	50回	29人
第3回	2010年11月～2011年1月	27回	19人

この企画が有効であることは、対応した1・2年生に対して、同じ学生に2度会うというこの方法が、学生との関係作りや学生自身の内省を促す上でも効果的であったことから実証されよう。

また、参加した1・2年生は、どちらかという求真面で、求めているものがある健康度の高い学生のように見えたが、皆、大事に育てられていて、素直で真面目であるが、経験の幅が狭く、自由に自分で発想する経験が少ないために、何をどうしたらよいか戸惑っている様子がみられた。さらに、決められた軌道の上を不自由なく歩いてきて、さらにキャリアに関する知識を求めようとする学生や、自分の道を一人で歩こうとしているが、そのような自分の姿が周囲から浮いていないかと不安に思う学生なども見受けられた。



【カウンセリングの様子】

いずれにしても、学生たちは具体的な職業選択よりも、不足している経験の幅を広げ、自由度の高い環境で自ら考えて行動することが先決であるように思われる。この点で、本学のリベラル・アーツ教育の成果に期待するところが大きいように思われた。

3年生に関しては、進路選択についての心の準備状況は2年生とあまり変わらないように思える学生、職業選択に関して迷いがないわけではないが、何事にも受け身で、相談にすれば何か得られるかもしれないと考える学生、あるいは自分の進路・方向性がきっちりと定まっていて、明確な意志をもってこの場を利用する学生がみられた。戦術的なこの相談・カウンセリングは、それぞれの学生に対して有効に機能したと思われる。

次に、相談に応募した学生の反応は次のようなものである。

- ・「自分のことをいろいろ話せてよかった。2回のカウンセリングを受けて、自分の興味や関心のあることについて知った。」
- ・「私の長所は責任感があるところだと思う。頑固な性格もよくいえばこだわりをもっているということなのだと分かった。」（以上1・2年生）
- ・「しっかり自分と向き合う時間でした。」
- ・「自分の長所を引っ張りだしてもらいました。」
- ・「思ったよりよく話せました。」（以上3年生）

いずれも、2回のセッションで何らかの方向性を見いだしたり、自分に気づくことになったり、

自己について話題を展開することができるようになるなど、個別の丁寧なこの相談・カウンセリングが有効に機能していることを示している。

ただ、実施実績にみるように、このような個別の相談の対象となる学生数がきわめて少なくなることはやむを得ない。この企画の成果として、学生一人ひとりを大切にすることの意義を汲むべきであると思われる。しかしながら、より多くの学生に対して有効な相談・カウンセリングを行うことも本GPには必要なことである。平成23年度からの学生相談室の充実とともに、この2年間の成果を活かしながらより発展的な企画をたてることが次年度への課題となった。

2 平成23年度の活動事業概要

平成21年度活動報告に対する外部評価、学生相談室主任の定年退職、キャリア教育科目の開講などにより、平成23年度を取組は、学生相談室のカウンセリング体制整備と、学生相談室の周知・利用促進を図り、学生支援の拡大を目指すものとした。また、心理相談の利用実績から、学生相談室との連携について検討した。

(1) 学生相談室のカウンセリング体制整備（再編成・充実）

平成21～22年度にかけての実施責任者である学生相談室主任（准教授・臨床心理士）が平成23年3月末に定年退職し、平成23年4月から新たに非常勤相談員（臨床心理士）2名がカウンセラーとして着任した。実施責任者は学務部保健センター長兼学生相談室コーディネーター（准教授・医師）となり、実施担当者は非常勤相談員2名と学務部保健センター職員（臨床心理士）である。

学生相談室の定期心理相談は毎週火曜日と木曜日の13:00～17:00とし、非常勤相談員各1名がカウンセリングなどの相談業務にあたる（写真1）。心理相談は基本的に対面相談（以下、面談）であり、予約制とするが、予約外も積極的に対応する。1人1回50分の面談を行い、必要に応じて継続する。平成22年度までは、学生相談室の定期心理相談は週1日（火曜日午後）4時間であり、その他は適宜臨時対応としていた。平成23年度からは、定期心理相談を週2日（火曜日・木曜日午後）計8時間と増設し、非常勤相談員が継続的に相談業務にあたる。その他の対応は学務部保健センター職員が担当し、カウンセリングの導入、緊急のカウンセリング（写真2）、学生相談室への引き継ぎ、非常勤相談員との連携にあたり、学生相談体制の継続的な強化を図る。



【写真1 学生相談室カウンセリング風景】

保健センタースタッフ、非常勤相談員、学務部長補佐（教授／臨床心理士）、学生係職員が定例会議「学生相談室スタッフ会議」を開き、情報を共有し、必要に応じて各部署・教職員との連携を図る。従来も適宜、情報共有は行っていたが、定例化・体制化されていなかった。

（2）学生相談室の周知・利用促進

全学生と保護者を対象に、学生相談室の周知と利用促進を図るために、定例行事や配布物を活用した広報、保健センターからの広報、および夏期休業中の支援企画を行った。

（1）学内行事や配付物を利用した広報

- ① 学内行事（入学式、懇談会）を利用した学生相談室、アドバイザー制度の広報
- ② 入学時資料として学生相談室案内を配付
- ③ 学生生活小冊子「NDSU ライフ」への情報掲載

（2）保健センターからの広報

- ① 保健センターホームページの開設（図4）
- ② 保健センターホームページに「こころの健康」のページ新設
- ③ 保健センターホームページに「学生相談室」、「カウンセラー紹介」のページ新設
- ④ 4年生健康診断返却時に、学生相談室案内4年生バージョン「学生相談室へどうぞ（図5）」配付
- ⑤ 学生相談室ポスター掲示、案内冊子配置
- ⑥ 学生相談室入り口、利用状況レイアウト変更（写真3、4）



【図4 保健センター案内】



【写真2 保健センター奥の相談スペース】



【写真3 学生相談室入り口（before）】



【写真4 学生相談室入り口（after）】

学生相談室へどうぞ

ふと誰かと話したくなったり、「うーん、どうしよう。」と困ったりした時、どうぞ気軽においで下さい。

大学生活で出会う様々なことについて、相談員と一緒に考え解決の糸口を探すお手伝いをします。

- ☆ 人間関係がうまくいかない
- ☆ 恋愛のことを考えてみたい
- ☆ 自分の性格について考えてみたい
- ☆ 将来の目標や進路について迷っている
- ☆ なんだか大学生活に満足できない
- ☆ 体調がすぐれない、眠れない、食欲がない、食べ過ぎてしまう
- ☆ 教室でどのように振舞ったらいいかわからない
- ☆ この頃、何もする気が起きない
- ☆ ちょっとしたことがどうも気になる、不安になる
- ☆ ちょっと相談員のひとと話しがしてみたい、学生相談室をのぞいてみたい

4年生の人へ 就活はすすんでいますか？

就職に関する相談にも応じます

- ☆ どんな仕事があるのか迷ってしまう・・・
- ☆ がんばっているけれども、どうも就職活動がうまくいかない・・・
- ☆ 内定はもらったけれども、うまくやっていけるか不安・・・
- ☆ 卒業後のことで話をしてみたい・・・

今年より、学生相談室が二日間、開いています。

火曜日 13:00 ～ 17:00 佐野カウンセラー

木曜日 13:00 ～ 17:00 斉藤カウンセラー

申し込みは、申し込み用紙に記入し、ボックスに入れておくか、開室日にのぞいてみてください。

予約が入っていなければ、すぐにでもできます。また、保健センターへの申し込みもできます。

秘密は堅く守られます。安心してご相談ください

【図5 学生相談室案内4年生バージョン】

就活の心の準備は OK ですか？（平成 23 年度版）

キャリアカウンセリング夏休み編

学生相談室では、平素の相談の中でも職業や進路の相談も行っていますが、今年度は 8 月 9 月の夏季休業中、自分のライフデザインの一つとして就職（活動）をとらえて、自分自身のことや将来のことに向き合い、考える時間をもつということで、夏休み編を計画しました。

これから本格的に就職活動に入ろうとする、3 年生の皆さんのお手伝いをしたいと考えています。今、自分のことがよくわからない、卒業後、どうしたいのか迷っている、自分がどんな仕事に就きたいのかよくわからない、仕事をやっていけるかどうか不安だなど就活に対していろいろ不安や疑問を抱えている皆さん、どうぞおいでください。

お話を聞かせていただきながら、必要であれば、職業興味検査などもして、自分を見直し、再発見、再認識していただき、自信を持って実際の就活に臨めるように応援します。

対象 3 年生を中心としますが、4 年生でもかまいません。

日時 8 月、9 月の下記の火曜日、木曜日の午後、3 つの時間帯から選べます。

8 月	2 日（火）	9 日（火）	11 日（木）	25 日（木）	30 日（火）
9 月	1 日（木）	6 日（火）	8 日（木）	13 日（火）	22 日（木）

① 13:00～14:00 ② 14:20～15:20 ③ 15:40～16:40

所要時間 1 回 60 分（場合によっては、別日に継続面接が可能です）

申込み方法 キャリアカウンセリング申込書（学生相談室前にあります）に記入し、申込み箱に入れてください。受付後、時間の調整を行い、直接連絡をします。

担当者 カウンセラー（臨床心理士） 佐野（火曜日）
 カウンセラー（臨床心理士） 斉藤（木曜日）

【図 6 キャリアカウンセリング夏休み編のポスター】

(3)夏期休業中の支援企画「就活の心の準備は大丈夫ですか？キャリアカウンセリング夏休み編」

夏期休業中に、学生相談室利用促進を兼ねた支援企画「就活の心の準備は大丈夫ですか？キャリアカウンセリング夏休み編」を実施した。これは、3年生を中心とした就職活動に対する心の準備への支援、学生相談室の広報、夏期休業中の心理相談の継続を目的とした。本支援企画は、図6に示すポスター掲示などにより学生を募集し、8月2日～9月22日の火曜日・木曜日(10日間)に行った。1人1回60分の面談とし、面談中に本人の希望があれば、個別にVPI職業興味検査(以下、VPI)を実施した。VPIは次回以降に本人とカウンセラーで検査結果について分析し、進路や就職も含めた総合的な心理相談を展開した。本支援企画は5人が利用し、4人は終結し、1人は継続中である。利用人数は少なかったが、一人ひとりに時間をかけた心理相談の中で、自分の興味、特性、性格傾向に気づき、適性を見直す機会を提供することができた。

3 学生相談室の利用実績

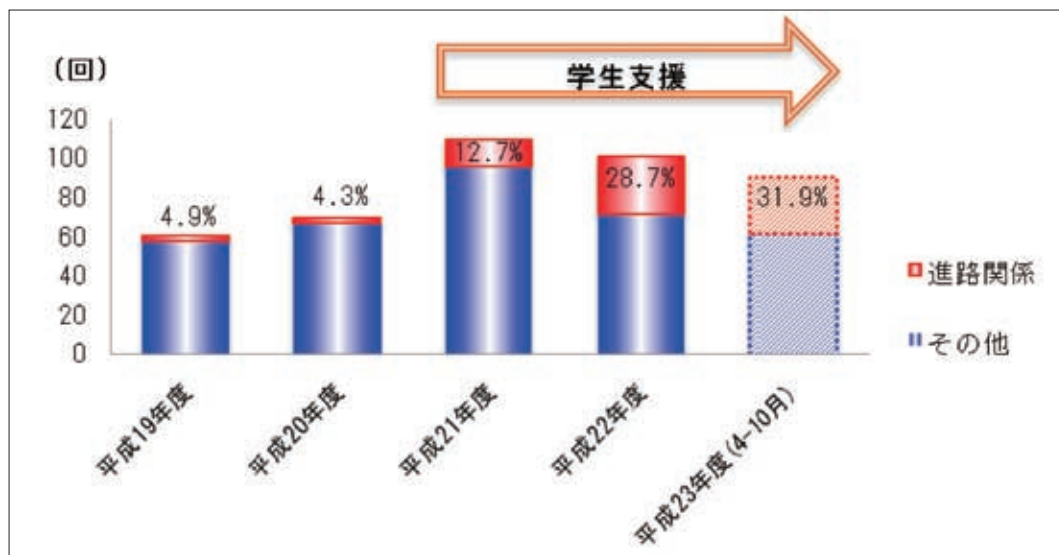
(1) 心理相談の利用者数

平成19～23年度の5年間の心理相談者数(回数)を表2および図7に示す。平成23年度については4～10月まで7ヶ月間の集計である。本補助事業開始後の平成21年度以降、心理相談者数(回数)の全体的な増加傾向と、進路関係の相談者数(回数)の増加傾向がみられる。進路関係の相談とは、進路選択、就職についての悩みを含む心理相談としており、ほとんどが就職に関連する相談である。

また、平成19～23年度の月別心理相談者数(回数)を表3に示す。例年、5～6月に相談者数(回数)が増加し、夏期休業中に減少する傾向がある。平成23年度の夏期休業中の相談者数(回数)は例年を上回り、支援企画を実施したことと、定期的にカウンセラーが在室していたことが、利用促進につながった。

【表2 心理相談者数(回数)】

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度 4～10月
修学	1 (1)	1 (1)	3 (3)	1 (1)	8 (42)
進路 (進学、就職を含む)	3 (3) 20.0% (4.9%)	3 (3) 9.7% (4.3%)	11 (14) 35.5% (12.7%)	19 (29) 48.7% (28.7%)	12 (29) 41.4% (31.9%)
心理・性格・対人関係	8 (54)	21 (57)	11 (82)	13 (61)	2 (2)
心身の健康	0	3 (6)	2 (7)	3 (7)	2 (4)
学生生活	1 (1)	1 (1)	0	2 (2)	3 (6)
大学への適応	0	0	4 (4)	1 (1)	0
その他	2 (2)	2 (2)	0	0	2 (8)
合計	15 (61)	31 (70)	31 (110)	39 (101)	29 (91)



【図7 心理相談回数（総数）と進路関係の相談回数の年次推移】

【表3 月別心理相談者数（回数）】

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度 4－10 月	月別平均
4 月	4 (4)	7 (6)	2 (4)	10 (18)	7 (13)	6.0 (9.0)
5 月	4 (8)	4 (8)	6 (10)	10 (16)	9 (14)	6.6 (11.2)
6 月	3 (6)	4 (7)	8 (20)	9 (15)	11 (20)	7.0 (13.6)
7 月	3 (8)	3 (6)	4 (9)	12 (21)	8 (13)	6.0 (11.4)
8 月	6 (7)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	6 (7)	2.6 (3.0)
9 月	3 (7)	3 (2)	5 (5)	3 (3)	7 (10)	4.2 (5.4)
10 月	3 (7)	7 (12)	6 (10)	5 (7)	8 (14)	5.8 (10.0)
11 月	1 (1)	6 (10)	9 (14)	6 (9)		5.5 (8.5)
12 月	4 (6)	4 (7)	7 (12)	4 (4)		4.8 (7.3)
1 月	2 (4)	6 (7)	11 (17)	5 (5)		6.0 (8.3)
2 月	1 (1)	3 (3)	5 (6)	1 (1)		2.5 (2.8)
3 月	2 (2)	2 (2)	2 (2)	2 (2)		2.0 (2.0)
合計	36 (61)	49 (70)	66 (110)	67 (101)	56 (91)	

(2) 症例

就職に関連する相談としては、就職を意識する時、実際の就職活動中、就職の内定・決定後など、それぞれの段階における悩み、困難、葛藤がある。

- ① 就職の適性への不安
- ② 就職することへの不安
- ③ 就職試験、面接への不安
- ④ 就職活動に集中できないことへの不安
- ⑤ 就職が決まった後の不安
- ⑥ 理想と現実のギャップ
- ⑦ その他

実際の学生の訴えとしては、次のようなものがある。

- ・ 実習で実体験をしてみて、自分に向いていないのではないかと思うようになった（4年）。
- ・ 先輩の話から、どんな仕事に就きたいか、どんな仕事が合うのかわからなくなった（3年）。
- ・ 自分が何をしたいか、何に向いているのかわからない（3年）。
- ・ になりたい職のイメージがわからない（3年）。
- ・ 自分の性格で就職することへの不安がある（4年）。
- ・ 就職条件の変更に伴い、切り替えがうまくいかない（4年）。
- ・ 就活に気持ちが乗らない。理由は、面接で自己表現ができないから（4年）。
- ・ 内定をもらったが、今の自分（失敗が多い）で大丈夫だろうか（4年）。
- ・ 内定をもらったが、健康上の問題を伝えていないことへの不安がある（4年）。
- ・ 将来の夢（就きたい仕事）と大学生活にギャップを感じる（1年）。
- ・ 自分の適性と親の希望にギャップがある（4年）。

就職に関連する相談の経過はさまざまであるが、概ね短期的なものと長期的なものがある。

- ① 就職に関わる一時的な不安定状態と考えられ、比較的短期間で終結する。
- ② 卒業を控え、もともと不安傾向、修学問題などを抱えている上に、就職という負荷が加わる。ほぼ毎回就職が話題に上がるケースと、現状維持に精一杯で時々就職問題が浮上するケースがある。

継続中の相談経過の一例を示す。

就活に集中できない、自分の適性は何か、就職試験への不安、面接試験への不安、合格後の不安などを主訴として来室しながら、自己理解や自立のテーマを絡ませて面接が進んでいる。

進路関係の相談に対する、カウンセラー側からみた学生の満足度は、29回（12人）中、「満足」が4回（13.8%）、「まあまあ」が25回（86.2%）、「全く納得しない」はなかった。心理相談の性質上、十分に満足といかないまでも、一人ひとりに時間をかけた丁寧なカウンセリングを行うことで、何らかの方向性を見いだしたり、自分への気づきにつながったりすることに資すればと考える。

（3）心理相談の傾向

平成19～23年度の学年別心理相談者数（回数）は表4の通りである。年度によって変動はあるが、1年生と4年生に多い傾向がみられる。相談内容としては、1年生は、大学生活への適応、修学問題が目立つが、大学生活に慣れることで解消されていくものが含まれる。4年生は、自分の性格、対人関係、生き方、メンタルヘルス（抑うつ、強迫など）など多種多様である。その中で、進路（特に就職）絡みの問題を入り口とした相談は比較的多く、そこから背景にある問題へと内容が広がることも多かった。

相談経路としては、本人の申し込み（新規申し込み、継続面談の予約）、保健センターからの引き継ぎ、キャリアサポートセンターなど他部署からの紹介、アドバイザーなど教職員からの紹介の他、予約や紹介なしの直接来室がある。平成23年度は、相談者29人中10人が予約や紹介なしの直接来室であった。「学生相談室が開いていたので寄ってみた」、「カウンセラーを見て入った」という、定期的なカウンセラーの在室が、相談に入る契機となったものである。

また、相談経緯として、「お母さんに行ってみたらと言われた」というケースが数人みられ、新しい傾向であった。保護者への広報が利用促進につながったと考えられる。

【表 4 学年別心理相談者数（回数）】

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度 4－10 月	月別平均
1 年生	6 (26)	9 (16)	6 (28)	5 (14)	9 (24)	35 (108)
2 年生	2 (2)	4 (34)	8 (14)	9 (17)	3 (9)	26 (76)
3 年生	2 (2)	3 (7)	6 (39)	13 (18)	4 (7)	28 (73)
4 年生	3 (29)	3 (4)	5 (11)	10 (49)	13 (51)	34 (144)
その他	2 (2)	12 (9)	6 (18)	2 (3)	0	22 (36)
合 計	15 (61)	31 (70)	31 (110)	39 (101)	29 (91)	145 (437)

(4) 学生相談室の定期心理相談時間外の対応

前出の集計には入れていないが、平成 23 年度（4－10 月）に、定期心理相談時間外に学務部保健センターで対応した心理相談者数は 17 人（45 回）であった。そのうち、学生相談室につながり、学生相談室と並行して継続対応している者は 6 人である。常勤の学務部保健センター職員による、定期心理相談時間外の対応は重要な役割を担っている。

(5) 各部署・教職員との連携

メンタルヘルスのサポートには各部署・教職員との相互連携が必須であり、その推進を図った。

- ・ 学内行事などを利用した学生相談室の広報への協力体制を強化した。
- ・ 学科毎にアドバイザー制度の利用促進を図り、学務部保健センターとの相互連携を推進した。
- ・ 平成 23 年 6 月 25 日に学務部主催で、教職員対象の講演「日常場面にひそむ青年期危機の問題とサポート」（岡山県精神科医療センター塚本千秋医師）を開催し、教職員の意識の向上を図った。

Ⅲ 事業実施による効果

平成 21 ～ 22 年度は、本来の学生相談室活動に加えて、キャリア意識の醸成に関わる活動を行い、個別の学生に応じたサポートやカウンセリングの機会を提供することができた。

平成 23 年度（4－10 月）は、学生相談室の体制整備、利用促進を図り、心理相談者数（回数）の全体的な増加傾向がみられた。それに付随して就職に関連する相談も増加し、就職支援につながった。

これには、心理相談を必要とする学生の増加、顕在化という社会的傾向に加え、本補助事業実施による効果が考えられる。

1 学生相談室の体制整備の効果

- ・ 定期心理相談時間の増設、カウンセラーの増員、常勤の保健センター職員（臨床心理士）によるフォローアップ体制により、支援機会の継続的な定着につながった。

- ・ カウンセラーが複数いることで、学生の選択肢が広がった。
- ・ 予約外のケースも比較的多く、カウンセラーが定期的に在室している効果と考えられた。

2 学生相談室の周知・利用促進の効果

本学をあげての広報活動により、学生と保護者への学生相談室の認知率および心理相談者数の増加、教職員の意識の向上につながったと考えられた。

平成 23 年度夏期休業中の支援企画利用者は少なく、企画の時期や方法については再考の余地がある。しかし、休業中の心理相談の継続につながり、学生相談室が進路や就職活動も含む学生の悩みに広く対応しているという宣伝効果が期待できた。学生相談室の企画を繰り返し行うことは、支援機会の拡大につながると考えられる。また、支援企画利用者には、時間をかけてカウンセラーと面談し、自分を見つめ直す機会を提供することができ、一人ひとりの学生を大切にする本学の理念に適うものである。

3 学生相談室（心理相談）との連携

心理相談は 1 年生と 4 年生が多く、1 年生には入学時の案内、学内行事を利用した案内、保護者への案内が効果的であり、4 年生には就職に関する悩みから相談に入ることも有用であると考えられた。青年期の問題に、入学や就職など環境の変化に伴う不安も大きく関与し、それぞれの時期への対応・支援が必要である。

社会的な就職環境の悪化に伴い、多様な要因に就職問題が絡み「心の問題」が複雑化するケースは稀ではなく、心理相談も就職支援に寄与することができる。また、心理相談の中で就職が話題になることは比較的多く、就職支援も「心のケア」の一助になると推察される。就職を考えることを通して自分自身を見つめ直し、自己再発見につながり、カウンセリングの糸口とできる可能性も考えられる。

学生相談室の広報活動、学生相談室の体制整備などに伴い、心理相談者数は全体的に増加傾向にあり、引き続き学生相談体制の充実・継続的な定着を図りたい。また、各部署・教職員と保健センターとの相互連携による学生支援機会も増加傾向にあるが、さらなる連携体制の充実が望まれる。

IV 総括及び今後の展望

1 総括

学生相談室は学生の「心のケア」を専門的に行うことを基本とする。相談内容は、修学、進路、対人関係、メンタルヘルスなど多岐にわたるが、就職に関連するものも少なくない。就職支援における学生相談室の役割は、就職や進路に関する意識の形成、現実の就職活動で直面する問題、就職内定・決定後に派生する葛藤など、多様な状況における悩みや不安に対応しながら、その根本にある自分自身に向き合い、人間としての成熟をめざすものである。また、就職に関する問題は、学生側からは比較的话题として取り上げやすく、カウンセラー側からはそこから面談を進めていくうちに、その背景にある問題がみえてくる場合もあり、「心のケア」の糸口となりうると考えられる。学生相談室活動の中で、広く職業意識や就職活動の悩みや疑問にも対応していくことで、心理相談による学生支援拡大につながったことは、本補助事業の大きな成果と

考えられる。

平成 21 ～ 22 年度の 2 年間は、本来の学生相談室活動に加えて、学生のキャリア意識の醸成に関わる活動を行った。平成 23 年度は、専門的な学生相談室の体制整備と利用拡大を図り、学生相談室との連携について検討した。今後も社会的ニーズの増加が予想される学生支援の一環として、「心のケア」の果たすべき役割は重要である。

2 今後の展望

(1) 学生相談室の体制整備、利用促進

学生や社会のニーズに応じた、専門的な学生相談活動を目指し、その中で進路や就職、ライフデザインも含めた幅広い心理相談を展開する。心理相談の性質上、個別に丁寧に時間をかけた継続的支援が必要である。学生相談室の心理相談時間やフォローアップ体制を検討し、利用しやすい学生相談室の環境整備、気軽に利用できるコミュニケーションスペースの拡充を図るなど、一層の学生支援の拡大と充実が求められる。

(2) 全学的な支援の展開

教職員のメンタルサポートへの意識の向上、関係各部署との連携、アドバイザー制度の活用など、さらなるサポート体制の整備が必要である。

(3) 早期発見・早期対応と一次予防

各部署・教職員からの紹介など、本人の申し出以外の相談者も増加傾向にあるが、不調を感じていても対処法のわからない学生、支援の必要性があるにもかかわらず自ら支援を求めてこない学生へのサポートが必要である。また、教育サイドから、学習能力の不足、就学意欲の不振、怠学と評価されている中に、「心の問題」が原因となっている場合がある。こうした学生への察知、発見について、教育サイドへの周知・協力依頼をしていくことも懸案である。

さらに、自己管理能力、コミュニケーション能力育成などによる、「心の問題」の一次予防に向けた支援が今後の課題である。



その他の取組

- I ホームページ関連事業
- II 学生アンケート関連事業
- III 先進事例調査関連事業

I ホームページ関連事業

1 取組の目的

本取組の意義と成果を、一般の方々に広く伝えるため、ホームページによる情報発信を行っている。

同時に、在学生を含めた学内外の関係者にも、共通理解を深めるための手段とする。

2 事業内容の紹介

3年間の事業により、基本的な情報提供をおこなうとともに、分かりやすい情報提供を進めた。

平成 21 年度

目的：学生支援 GP の基本的な内容を公表する。

内容：本学公式サイトに、学生支援 GP 専用ページを立ち上げ、取組の概要や、学生支援フォーラムなどイベントの告知や成果、活動報告書 PDFなどを掲載した。

効果：取組を出発させる上で基本となる情報を公表し、「GP フォーラム報告」により本年度の成果を発信することができた。

展望：情報がより広く伝えられるよう、ナビゲーションの改善が望まれるが、そのためには本学サイト全体の構造を整理することが必要と考えられる。



学生支援 GP 専用ページ

平成 22 年度

目的：学生支援 GP に関する情報へのナビゲーションを改善し、情報がより広く伝えられるようにする。

内容：平成 22 年 3 月以降を準備期間として、平成 22 年 7 月、本学サイトのリニューアルをおこなった。これにより、学生支援 GP 専用ページの改善が可能になった。

＊すべてのページから、「GP」ページがワンクリックで閲覧できるよう、サイト構造とメニューを整理した。新たに設けられた「GP」ページでは、本学の関連する GP を一覧でき、そこから学生支援 GP 専用ページを見ることができる。

＊新たに「清心 News」を立ち上げ、本学の最新情報を発信した。学生支援 GP に関するイベントや PDF 資料など、情報を分かりやすく発信・告知することができた。

効果：ナビゲーションの改善により、GP に関心を持つ一般の方だけでなく、支援の対象である在学生自身が情報にたどりつきやすくなった。

展望：情報発信がより効果的におこなえる整備が進んだが、さらに閲覧者に分かりやすい情報提供が望まれる。



学生支援 GP 専用ページ

平成 23 年度

目的：学生支援 GP に関する情報提供を進める。

内容：引き続き、学生支援に関するイベント等の発信をおこなった。平成 22 年末からを準備期間として、今年度「清心 News」をブログ形式に整備することにより、GP に関する情報がまとめて閲覧できるようになった。また、本取組と連携する教職相談室の HP を公開、関連するニュースを発信した。

今後は、取組の最終年度にあたり、総合的な情報提供をおこなう予定である。

効果：より分かりやすい情報提供が可能になった。また、今後は報告書等の公開により、取組のさらに詳しい内容や、全体像を十分に伝えられる見通しである。

展望：本取組を通じて整備されたホームページをもとに、今後も本学の学生支援に関するさらなる情報提供が望まれる。



清心 News blog によるイベント情報の発信

3 事業実施の効果

各年度のホームページ閲覧数を、Google Analytics を用いた統計によって示す（平成 23 年 11 月 30 日現在）。この統計は、学外広報の効果を検証するために導入されているため、純粋に学外からのアクセスのみを集計しており、学内からのアクセスを含んでいない。そのため、以下に挙げた数値以上に、実際には学内での広報効果も上がっていると考えられる。

本学サイト「清心 News」では、GP 以外のニュースもあわせて最新情報を一覧できる。また、本学サイトの各所にて、本取組に関する情報を紹介している。本取組に関する閲覧者を特定することができないため、これらのページの閲覧は、下記の集計には入れていない。つまり、GP 記事を単独で閲覧した件数は以下の通りだが、実際には「清心 News」閲覧者も GP 記事をあわせて見ることができるため、実際にはこれ以上に情報を周知できたと考えられる。

平成 21 年度

学生支援 GP 採択のニュースを 7 月に発信、学生支援 GP 専用ページを 11 月に公開した。

平成 21 年度の閲覧数は次の通り。

学生支援 GP 採択のニュース	199 件
学生支援 GP 専用ページ	690 件
計	889 件

平成 22 年度

学生支援 GP 専用ページを 7 月にリニューアル、11 月以降はニュース発信を増加させた。

平成 22 年度の閲覧数は次の通り。

*「GP」ページ・「GP ニュース」では本学の他の GP とあわせて本取組を紹介しており、これを「GP 関連ページ」として下記にまとめた。

学生支援 GP 専用ページ	1569 件（リニューアル前 465 件、リニューアル後 1309 件）
学生支援 GP 関連のニュース	159 件
GP 関連ページ	579 件
計	2307 件

平成 23 年度（11 月 30 日現在の 8 か月間）

学生支援 GP 専用ページ	887 件
学生支援 GP 関連のニュース	189 件
GP 関連ページ	829 件
計	1905 件

取組の進歩とともにコンテンツが増加するにつれ、閲覧数も増加していることが認められる。記事公開時期や集計期間が異なるため単純比較はできないが、平成 22 年度のリニューアル以降、3 割程度増加しているペースとなっている。

4 総括及び今後の展望

本来の学生支援に予算をあてる必要性もあり、ホームページ作成では予算を使用せず、すべて学内の手作りでおこなった。余裕のある制作状況とはいえないが、情報発信の増加・閲覧数の増加を達成することができ、質・量ともに一定の成果を得ることができたといえる。本取組の終了後も、引き続き学生支援に関する情報を公開していきたい。

ホームページは、情報を社会に公開する役割を持つとともに、学生・学内の活性化にも資するものである。学生のためにおこなう教育活動とその成果が、そのまま広報につながり、それがひいては教育の活性化に貢献するというプラスの循環を加速できるよう、広報に関する学内の体制をより強化していくことが望まれる。

Ⅱ 学生アンケート調査関連事業

はじめに

本活動の達成目標は、①本学への求人情報等の多様な就職情報を学生にフルタイムで提供する体制の構築、②学生の心理面のケアを含むよりよい就職支援体制の構築、③大都市圏の教職への就職を可能にする体制の構築である。

①については、学務部キャリアサポートセンターが中心となって、本活動の2年目に、OPIT教室のパソコンを用いた就職情報の閲覧システムを構築し、そしてキャリアカウンセラーをキャリアサポートセンターへ配置した。

②については、学生相談室が中心となって、臨床心理士による職業興味検査や自己分析シートを用いて進路、職業等に関する開発的カウンセリングを行った。また、就職活動に伴う心理的な相談に応じた。

③については、教職課程が中心となって、大都市圏教員採用説明会への学生の参加や教員採用対策講座を実施した。

これらの活動のPDCAサイクルの機能化とスパイダルアップを目指して、本活動が開始された2009年度から毎年11月下旬に2年生以上の学生を対象にしたアンケート調査を実施した。

このアンケート調査の結果とこれに基づく課題について、達成目標ごとに、以下に要約する。なお、アンケート結果の詳細については、各達成目標のアンケート項目ごとの分析欄への説明をご覧ください。アンケート結果の図は全回答者に占める質問項目回答者の百分率で示している。これに加えて、分析欄の説明では、必要に応じて実数を基にした回答者数の割合も示している。

1 学務部キャリアサポートセンターの活動について

本活動の達成目標①として、2009年12月に学生支援システム(ユニパ、通称Nサポ)を導入し、キャリアカウンセラー1人を配置した。これに加えて、学生の就職支援の充実を目指して、キャリアサポートセンターの日常の就職支援体制、内容についてもアンケート調査した。

(1) アンケート結果の要約(2009～2011年度に2年生以上で実施した。)

①アンケートの有効回答率：2009～2011年度の全学の回答率(%)は72、84、80であった。また、その間の学部とその割合(%)は、文学部で61、67、72、人間生活学部で85、87、86であった。

②就職内定率：2009～2011年度の全学の就職内定率(%)は54、50、41であった。また、その間の学部とその割合(%)は、文学部で62、53、51、人間生活学部で51、48、35であった。学部の就職内定率が人間生活学部で文学部より低くなっているが、これは児童学科の教職の講師希望者の影響によると推測される。

③学生向け支援の内容を「知っている」の2009～2011年度の全学の割合(%)は83、80、79であった。また、その間の学部とその割合(%)は、文学部で86、86、88、人間生活学部で83、77、73であった。学部のその割合が2010年度以降に人間生活学部で文学部より低くなっているが、これは同年度に開設された教職支援センターを児童学科の教職希望が利用するようになったためと推測される。

- ④キャリアサポートセンターを「利用した」(4年生)の2009～2011年度の全学の割合(%)は83、70、72であった。また、その間の学部のその割合(%)は、文学部で85、84、87、人間生活学部で82、62、63であった。学部のその割合が2010年度以降に人間生活学部で文学部より低くなっているが、これは同年度に開設された教職支援センターを児童学科の教職希望が利用するようになったためと推測される。
- ⑤キャリアサポートセンターを「利用した内容」(4年生)の2009～2011年度のいずれの年度も、全学、両学部ともに「企業ファイル・雑誌等閲覧」、「求人票閲覧」、「相談・添削」であった。
- ⑥キャリアサポートセンターを「利用しなかった理由」(4年生)の2009～2011年度の割合(%)が、17、30、28であったので、その理由を問うた。2009～2011年度のいずれの年度も、全学、両学部ともに「入りにくい」34～38%、「必要がない」31～36%、「支援内容を知らない」14～17%であった。
- ⑦キャリアサポートセンターへ入りにくい「理由」(2010年度のみ)は全学、両学部ともに「部屋の中が見えない」、「部屋が狭い」、「混雑している」であった。
- ⑧キャリアサポートセンターへ希望する「支援内容」は2009年度と2010年度に設けた質問項目である。両年度ともに回答率が高かったのは「相談に対する対応」、「職員数の増員」、「求人票の閲覧」であった。
- ⑨キャリアカウンセラーの相談を受けたかに「はい」は2010年度と2011年度に設けた質問項目である。その間の、4年生の「はい」の割合(%)は、全学で47、49、文学部で61、59、人間生活学部で37、44であった。
- ⑩キャリアカウンセラーの「相談内容」は2010年度と2011年度に設けた質問項目である。その間の、4年生の「内容」で回答率の高かったのは、全学、両学部ともに「履歴書・エントリーシートの添削」、「自己分析の仕方」、「就職一般の相談」であった。
- ⑪OPIT教室のPCで求人票の閲覧を利用したかに「利用した」は2010年度と2011年度に設けた質問項目である。2009年度にWebによるその閲覧を全学で77%、文学部で78%、人間生活学部で76%が希望した。2010年度と2011年度に「利用した」の割合(%)は、全学で24、22、文学部で25、22、人間生活学部で23、22であった。
- ⑫OPIT教室のPCでの求人票の閲覧を利用しなかった「理由」は2010年度と2011年度に設けた質問項目である。4年生の2010年度と2011年度に「知らなかった」の回答率(%)は、全学で34、14、文学部で32、11、人間生活学部で34、16であった。
- ⑬求人情報のインターネットによる「学外(自宅)での利用」の4年生の「非常によい」と「やや良い」の合計回答率(%)は、2009年度と2010年度では全学で93、84、文学部で93、87、人間生活学部で94、84であった。
- ⑭OPIT教室のPCでの求人票の閲覧を利用した「メリット」は2011年度に新設した質問項目である。4年生で「あった」と「ややあった」の合計回答率は文学部で56%、人間生活学部で57%であった。
- (2) アンケートによる学科の特徴
- ①内定率は、両年度ともに人間生活学科出た学科よりも10%程度高いが、他の学科では50%前後であった。

- ②学生向けの支援の内容は、児童学科（約 70％）を除いて、他の学科では 85％以上の学生に知られていた。児童学科の多くの学生は、教職への就業を望んでいるためと推測される。
 - ③キャリアサポートセンターの利用は、児童学科では低い（約 40％）が、他の学科では 85％前後が利用していた。
 - ④キャリアサポートセンター利用の感想で高評価の割合は、日本語日本文学科と人間生活学科で 50％台であったが、他の学科では 70％前後であった。
 - ⑤キャリアサポートセンターを利用しない理由としては、「入りにくい」が現代社会学科と食品栄養学科で 50～60％、他の学科では 20％前後であった。
 - ⑥キャリアサポートセンターへ「入りにくい理由」としては、「中が見えない」が英語英文学科と現代社会学科で 50％程度、他の学科で 40％前後であった。「部屋が狭い」も各学科で 20％前後であった。
 - ⑦キャリアサポートセンターへ希望する支援の内容は、「職員数の増加」と「相談に対する対応」がともに高く、各学科でいずれも 30％前後であった。
 - ⑧キャリアカウンセラーの相談を受けた割合は、児童学科で約 30％、人間生活学科と食品栄養学科で約 40％、日本語日本文学科で約 50％、英語英文学科と現代社会学科で約 65％と、文学部で人間生活学部よりも高かった。
 - ⑨ Web による求人情報の閲覧の閲覧希望の割合は、児童学科で約 70％であったが、他の学科では 80％前後であった。一方、Web による閲覧を利用した割合は、現代社会学科と児童学科で 10％台、他の学科は 30％前後であった。
 - ⑩インターネットによる求人閲覧の希望は、90％を超えていた。
- (3) アンケート結果に基づく課題
- ①学生がキャリアサポートセンターへ入りやすくなる工夫が求められる。
 - ②キャリアサポートセンターの部屋を広くして、混雑を解消することが望まれる。
 - ③キャリアサポートセンター職員の増員による、就職相談への対応の改善が求められる。
 - ④ OPIT 教室の PC で求人票の閲覧を利用している割合は約 25％である。キャリアサポートセンターを利用した内容では「企業ファイル・雑誌等閲覧」と「求人票閲覧」の割合が高い。キャリアサポートセンターの混雑解消のためにも、OPIT 教室の PC での求人票の閲覧の利用拡大に向けた啓蒙活動が望まれる。

2 学生相談室の活動について

本活動の達成目標①として、2009 年度に臨床心理士によるカウンセリング体制を設け、継続的な学生相談体制を整備した。そして、職業の適性、健全な職業観の形成、就職活動に伴う心理的な問題に対するケアを実施した。これらの支援体制と活動内容の充実を目指してアンケート調査を行った。

(1) アンケート結果の要約（アンケートは 4 年生のみに行った。）

- ① 2009～2011 年度の有効回答率（％）は、75、95、74 であった。また、就職希望の割合は、各年度ともに 95％であった。
- ② 2009～2011 年度の学生の就職活動の状況について、「終了」が 51、44、36 であった。2011 年度は、教職希望者を除いて、文学部で 50％、人間生活学部で 40％と、この 3 年

間で最も低くなっていた。一方、それぞれの年度の「中止した」の割合（％）は3、2、1と減少していた。2011年度のこの割合は両学部ともに1％であった。

- ③ 2009～2011年度の就職活動中に困ったことや悩んだことが「ある」の回答割合（％）は95、92、82と減少していた。2011年度のこの割合は、文学部で87％、人間生活学部で79％であった。学生相談の効果によるものと考えられる。
- ④ 就職活動中の悩みの内容で、2009年度と2010年度で高い回答割合を示した項目は「アピールできない」、「何に向いているのか分からない」、「エントリーシートや履歴書の書き方」であった。
- ⑤ 就職活動を「一時中止」もしくは「中止」した理由で、2009年度と2010年度で高い回答割合を示した項目は「不安になる」、「別の進路」、「意欲がなくなる」であった。
- ⑥ 2011年度で就職活動中に困ったことや悩んだことが「ある」と回答した人で、学生相談室で相談したことが「ある」の回答割合は、文学部で38％、人間生活学部で33％であった。
- ⑦ 2011年度で学生相談室出の相談について、「良かった」と「やや良かった」の合計回答率は、文学部で92％、人間生活学部で84％であった。
- ⑧ 2011年度で学生相談室を利用しなかった理由で高い回答割合を示した項目は、「学生相談室へ入りにくかった」、「相談する必要がなかった」、「相談できることを知らなかった」であった。

(2) アンケート結果に基づく課題

- ① 学生が学生相談室へ入りやすくなるような工夫が求められる。
- ② 学生相談室の業務内容（就職活動中の心理的ケア、職業の適性など）についての広報が望まれる。
- ③ 2010年度で就職活動を「一時中止」もしくは「中止」の理由で「その他」の回答率が18％と最も高かった。この内容の詳細な調査が求められる。

3 教職課程の活動について

本活動の達成目標③として、2009年度に神戸市教育委員会と堺市教育委員会へ学生16名、2010年度に兵庫県教育委員会と神戸市教育委員会へ学生44名、2011年度に神戸市教育委員会と堺市教育委員会へ学生45名（予定）を教員採用現地説明会へ引率した。また、カトリック学校1日体験学習として、2010年度に京都市のノートルダム学院小学校、ノートルダム女学院中・高校へ学生40名、2011年度に大阪信愛女学院小学校、大阪信愛女学院中・高校へ学生26名を引率した。これに加えて、教職課程の教育支援の充実を目指して、教職課程の日常の教育支援体制、内容についてもアンケート調査した。

(1) アンケート結果の要約

- ① 3年生の有効回答率は、2009年度85％、2010年度71％、2011年度75％であった。
- ② 教職課程履修の動機で「教員・保育士になりたい」の2009～2010年度での3年生の回答割合（％）は、56、72、67と、本活動が開始されて高くなった。また、2009年度では、その割合は学年が上がるほど低下していたが、2010年度以降では逆に増加した。本科活動の成果であると推測される。
- ③ 将来、教員や保育士に「ぜひになりたい」の回答割合は、2009年度は2年生と3年生に

差はなかったが、2010年度と2011年度はともに学年が上がるほどその割合が高くなり、2011年度の4年生では73%であった。

- ④希望する学校園は、各年度ともに、文学部は「中学校」、「高等学校」、人間生活学部は「幼稚園」、「小学校」「保育園」「高等学校」の順に高かった。
- ⑤教職履修に関する現在の思いで「充実している」と「どちらかと言えば充実している」の回答割合は、2009年度79%、2010年度89%、2011年度90%であった。この割合は、本活動が開始された2010年度に大幅に増加し、また年度が進むにつれて上昇した。本活動の成果であると推測される。
- ⑥教職履修に関する不安や悩みが「ある」と「どちらかと言えばある」の合計回答率は、3年生では2009年度50%から2010年度67%へと増加した。この傾向は2年生においても同じであった。2011年度はこの質問を設けていない。
- ⑦本学の教職支援について「満足」と「どちらかと言えば満足」の合計回答割合は、3年生で2009年度78%、2010年度80%、2011年度78%であった。2011年度の4年生は86%で、文学部85%、人間生活学部87%と、高い値を示した。
- ⑧県外の採用試験説明会へ参加したいと思うか（参加したか）に「思う（参加した）」と「多少思う」の合計回答割合は、3年生で2009年度59%、2010年度65%、2011年度59%であった。4年生では、2011年度の文学部で65%と3年生の58%よりも高かったが、人間生活学部で44%と3年生の59%よりも低くなった。
- ⑨採用試験をどこで受けようと考えていますかで、2009～2011年度の3年生で「出身県のみ」の回答割合（%）は、57、52、56であった。また、3年生の「出身県及び他の都道府県」の回答割合（%）は、42、46、41であった。この割合は学年が上がることに低下し、「出身県のみ」が増加した。
- ⑩県外の採用試験を受ける予定ですか（受けましたか）の「はい」の回答割合は、3年生で2010年度37%、2011年度40%であった。この割合は、2010年度の2年生44%から3年生え37%、2011年度の3年生40%から4年生25%と、学年が上がるごとに低下した。

(2) アンケートによる学科の特徴

- ①教職課程履修の動機は、「教員・保育士」が児童学科で80%前後、英語英文学科で65%前後であったが、他学科では「将来の選択肢」が50～75%であった。
- ②「教師や保育士」になりたい気持ちは、「ぜひ」が児童学科で約75%、英語英文学科で約70%であったが、「迷っている」が日本語日本文学科と人間生活学科、食品栄養学科で70%前後、現代社会学科で約50%であった。
- ③「迷っている」の理由は、各学科ともに「自信がない」が最も高く50～70%であった。
- ④履修が「充実している」の割合は、人間生活学科（67%）を除いて、他の学科は80～100%であった。
- ⑤履修についての「不安」の割合は、英語英文学科と児童学科が65%前後、他の学科は85%前後であった。
- ⑥教職への支援に「満足」と「どちらかと言えば満足」の割合は、各学科ともに80%前後であった。
- ⑦教職硬いに望む支援又は情報について割合の高かった回答項目は、日本語日本文学科で「一般教養試験対策」、人間生活学科で「教職教養試験対策」、他の学科で「面接試験対策」であった。

- ⑧教員採用試験の受験は、他の学科では「他の都道府県」と「出身県および他の都道府県」の割合が拮抗していたが、他の学科では「出身県および他の都道府県」の割合が最も高かった。
- ⑨県外の採用試験説明会へ「参加する」の割合は、英語英文学科と児童学科で70%前後、現代社会学科で65%前後、日本語日本文学科と食品栄養学科で50%前後、人間生活学科で20%前後であった。
- ⑩県外の教員採用試験を受ける割合は、英語英文学科で56%、食品栄養学科で50%、児童学科で40%、現代社会学科で27%、他の学科で0%であった。

(3) アンケート結果に基づく課題

- ①教職履修に関する不安や悩みが「ある」と「どちらかと言えばある」の合計回答率が2010年度で67%であった。この内容を詳細に調べて、この解消に向けた支援が求められる。
- ②県外の採用試験説明会へ参加したいと思うか(参加したか)に「思う(参加した)」と「多少思う」の合計回答割合は、この3年間に増加しなかった。この原因の調査が望まれる。
- ③本活動は大都市圏の教職への就職を可能にする体制の構築にある。しかし、県外の採用試験を受ける予定ですか(受けましたか)の「はい」の回答割合は、学年が上がるごとに低下した。この原因を調べ、本活動の目的を達成するために必要な取り組みを見出すことが求められる。

上述したように、アンケート結果を参考にして、本活動の達成目標についてのPDCAサイクルによるスパイダルアップ実現した。

キャリアサポートセンターによる就職支援については、2009年度に「学生への就職情報のフルタイム提供体制の構築」、「キャリアカウンセラーの導入」、また2010年度に「PCによる就職の閲覧情報の充実」、「キャリアカウンセラーの増員」、「キャリアサポートセンターへの入り易さの工夫」、そして2011年度に「キャリアカウンセラーのさらなる増員」、「キャリアカウンセリングの充実」を行った。

学生相談室による支援については、2009年度と2010年度に臨床心理士による就職活動に伴う「心理面のケア」に加えて、「職業の適性」、「健全な職業観の形成」等の支援体制を設け、継続的な学生相談体制を構築した。そして、2010年度に臨床心理士2人によるカウンセリング体制を設けて、就職活動に伴う「心理面のケア」、「職業の適性」、「健全な職業観の形成」等の支援体制を充実させた。

教職履修者への支援については、2006年度に神戸市教育委員会と堺市教育委員会、また2010年度に兵庫県教育委員会と神戸市教育委員会、そして2011年度に神戸市教育委員会と堺市教育委員会による教員採用現地説明会へ多くの学生を引率した。さらに、カトリック学校1日体験学習として、2010年度に京都市のノートルダム学院小学校、ノートルダム女学院中・高校へ多くの学生を引率した。加えて、毎年度に卒業生教師による教職体験談・相談会を開催した。

このように、本活動によって本学の就職支援活動は充実した。この支援体制によって学生の就職活動はしなやかで力強くなった。そして、学生からの就職支援の環境と体制、支援活内容への要望も厳しくなってきた。

2009・2010年度 キャリア支援に対するアンケート

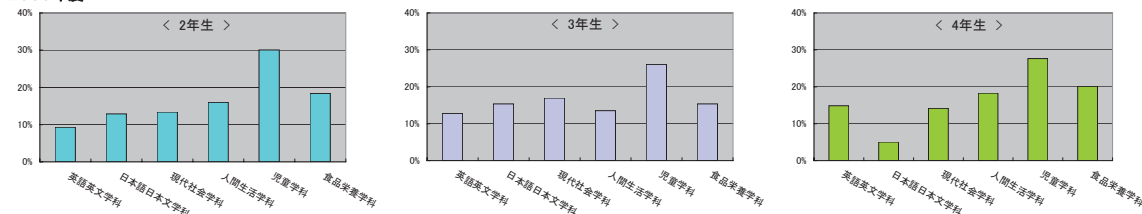
— キャリアサポートセンターについて —

全学

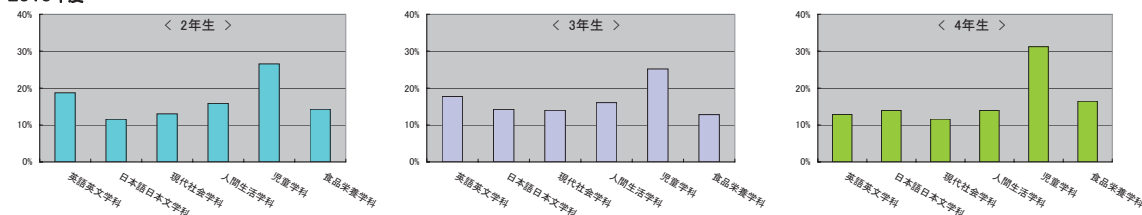
※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問1 所属学科を回答してください。

2009年度



2010年度



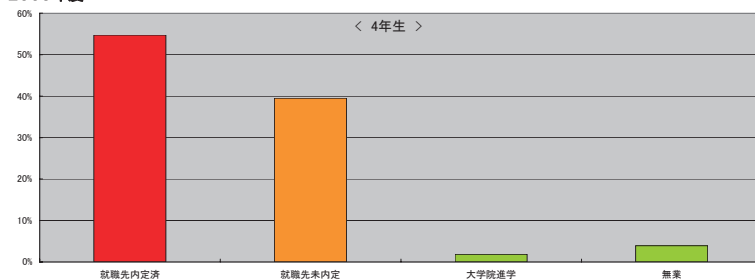
分析

キャリアサポートセンターに関するアンケートの全学部、そして各学部、各学年における有効回答率は、2009年度において、2年生は文学部63%、人間生活学部91%、全学部79%、3年生は文学部65%、人間生活学部64%、全学部64%、4年生は文学部62%、人間生活学部85%、全学部75%であった。両学部の各学年の有効回答率は、2年生と4年生において、人間生活学部が文学部より高くなっていた。また、2010年度においては、2年生は文学部88%、人間生活学部92%、全学部91%、3年生は文学部84%、人間生活学部78%、全学部81%、4年生は文学部67%、人間生活学部87%、全学部78%であった。2009年度と同様に、両学部の各学年の有効回答率は、2年生と4年生において、人間生活学部が文学部より高くなっていた。

アンケートの有効回答率は、全学部、そして各学部、各学年ともに2010年度が2009年度に比較して高くなっていた。

質問2 4年生の進路について

2009年度

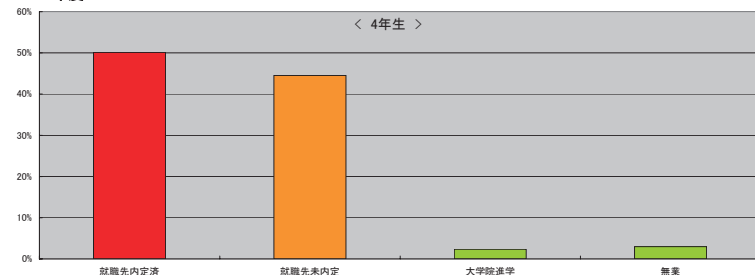


分析

10月下旬から11月初旬の時点における全学部の4年生の進路は、「就職先内定済」が2009年度で55%、2010年度で50%であった。2010年度は2009年度よりも約5%低くなっていた。

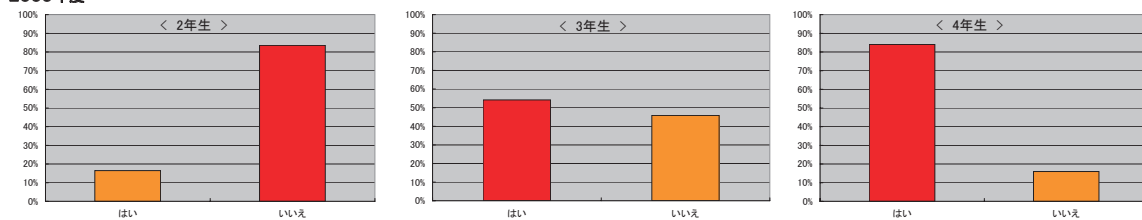
一方、無業者の割合が、2009年度の3.9%から2010年度で3%とわずかに低下した。

2010年度

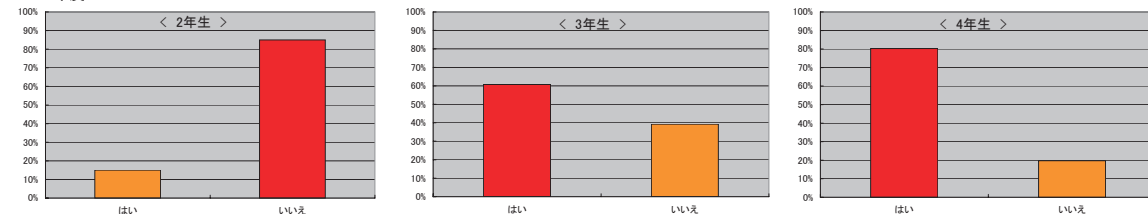


質問3 学務部キャリアサポートセンターが学生向けに支援している内容を知っていますか？

2009年度



2010年度



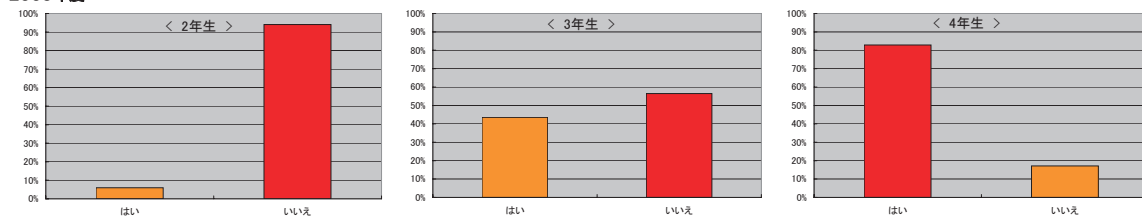
分析

「キャリアサポートセンターが学生向けに支援している内容を知っていますか？」について、全学部で「はい」と答えた人の割合は、2009年度において、2年生17%、3年生54%、4年生84%と、学年が高くなるほど増加した。また、2010年度においては、2年生15%、3年生61%、4年生80%と、2009年度と同様に学年が高くなるほど増加した。

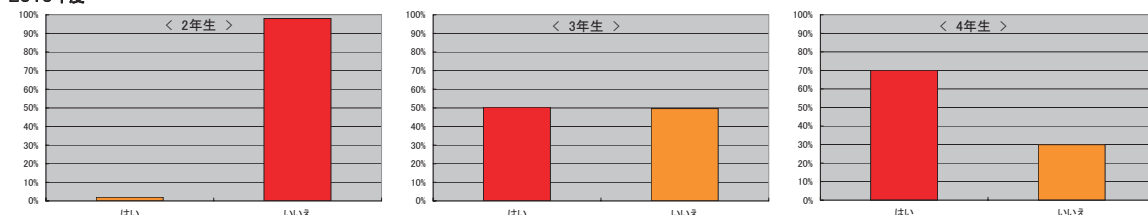
しかし、2010年度は、2年生と4年生ともに2009年度に比較して低くなっていた。特に、2010年度の4年生では約4%低下し、就職内定率の低下との関連性が示唆される。

質問4 学務部キャリアサポートセンターを利用したことがありますか？

2009年度



2010年度



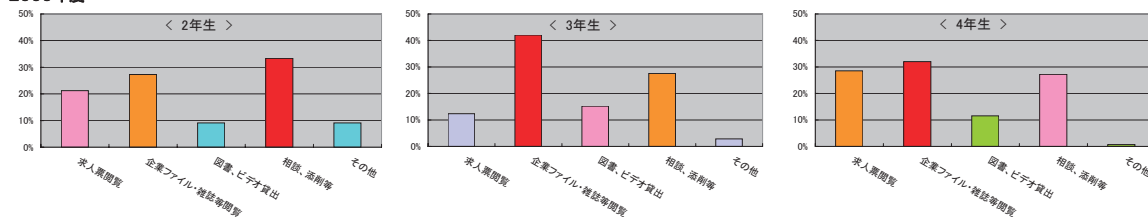
分析

「キャリアサポートセンターを利用したことがありますか？」について、全学部で「はい」と答えた人の割合は、2009年度において、2年生6%、3年生44%、4年生83%と、学年が高くなるほど増加した。また、2010年度においては、2年生2%、3年生50%、4年生70%と、2009年度と同様に学年が高くなるほど増加した。

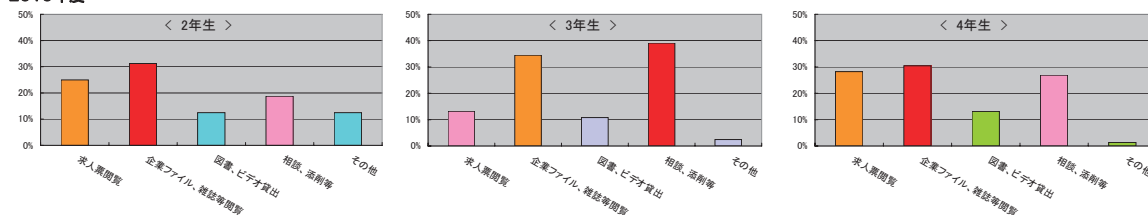
しかし、2010年度は、2年生と4年生ともに2009年度に比較して低くなっていた。特に、2010年度の4年生では13%低下し、就職内定率の低下との関連性が示唆される。

質問5 (学務部キャリアサポートセンターを)利用した内容はずぎのどれですか？(複数回答可)

2009年度



2010年度

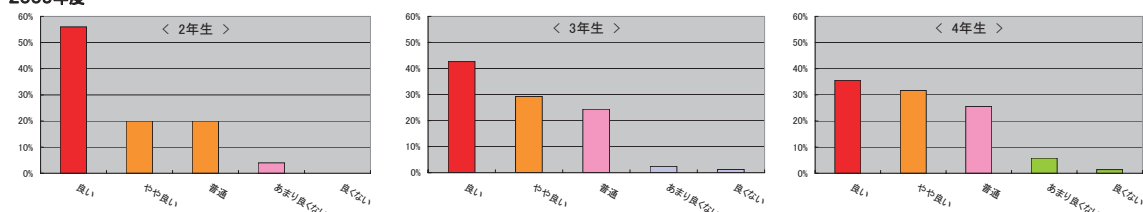


分析

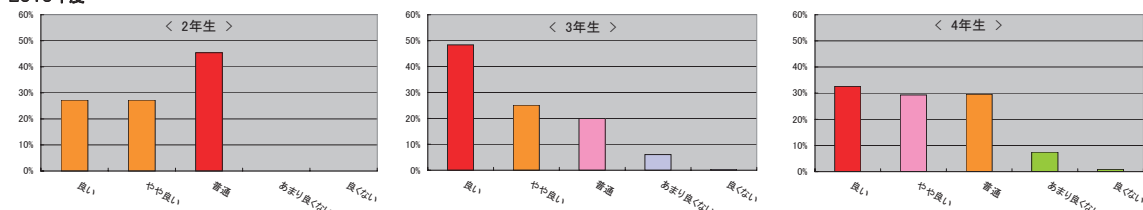
「利用した内容はずぎのどれですか？」(複数回答可)について、全学部において、最も利用割合が高かった項目は、2009年度において、2年生は「相談、添削等」、3年生と4年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」であった。また、2010年度においては、2年生と4年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」、3年生は「相談、添削等」であった。次に利用率の高かった項目は、2009年度において、2年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」、3年生は「相談、添削等」、4年生は「求人票閲覧」であった。また、2010年度においては、2年生と4年生は「求人票閲覧」であった。このように両年度ともに、4年生においては「企業ファイル・雑誌等閲覧」、「求人票閲覧」、「相談、添削等」の順に多く利用しており、就職活動に直結する情報を優先的に利用していることが推察される。

質問6（学務部キャリアサポートセンターを）利用した感想はつぎのどれですか？

2009年度



2010年度



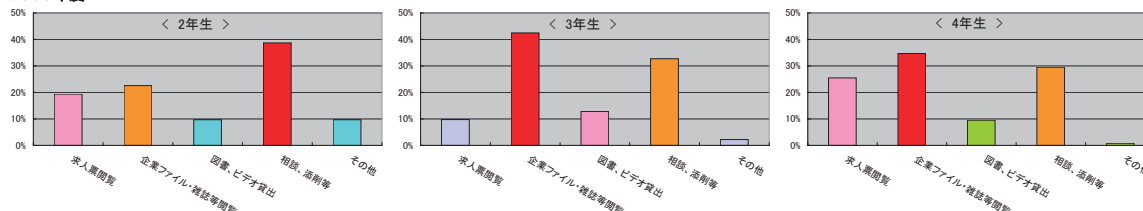
分析

「キャリアサポートセンターを利用した感想はつぎのどれですか？」について、全学部で「良い」と「やや良い」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生76%、3年生72%、4年生67%と、学年が高くなるほど低下した。また、2010年度においては、2年生55%、3年生73%、4年生62%と、2009年度と同様に3年生から4年生へと学年が高くなるほど低下した。

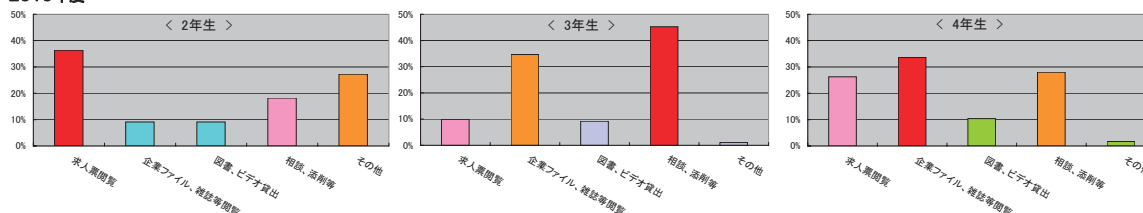
一方、全学部で「あまり良くない」と「良くない」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生1%、3年生6%、4年生26%と、学年が高くなるほど増加した。また、2010年度においては、2年生0%、3年生14%、4年生28%と、2009年度と同様に学年が高くなるほど増加した。

質問7（学務部キャリアサポートセンターを）利用して良かった内容はつぎのどれですか？（複数回答可）

2009年度



2010年度

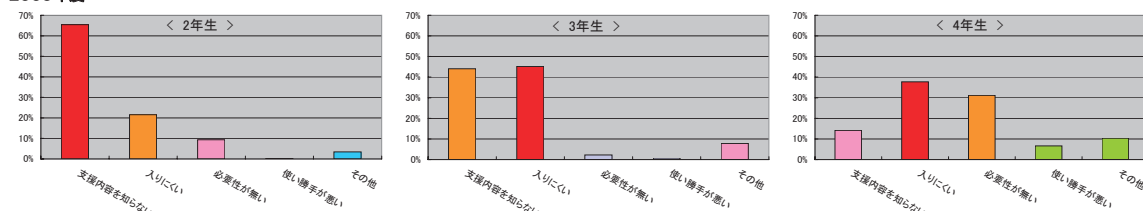


分析

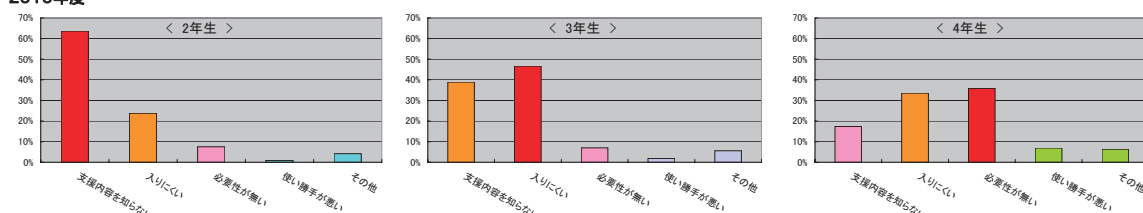
「キャリアサポートセンターを利用して良かった内容はつぎのどれですか？」（複数回答可）について、全学部において、最も利用割合が高かった項目は、2009年度において、2年生は「相談、添削等」、3年生と4年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」であった。また、2010年度においては、2年生は「求人票閲覧」、4年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」、3年生は「相談、添削等」であった。次に利用率の高かった項目は、2009年度において、2年生は「相談、添削等」、3年生と4年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」であった。また、2010年度においては、2年生は「求人票閲覧」、3年生は「相談、添削等」、4年生は「企業ファイル・雑誌等閲覧」であった。このように両年度ともに、4年生においては「企業ファイル・雑誌等閲覧」、「相談、添削等」、「求人票閲覧」の順に多く利用しており、就職活動に直結する情報を優先的に利用していることが推察される。

質問8（学務部キャリアサポートセンターを）利用しない理由について回答してください。（複数回答可）

2009年度



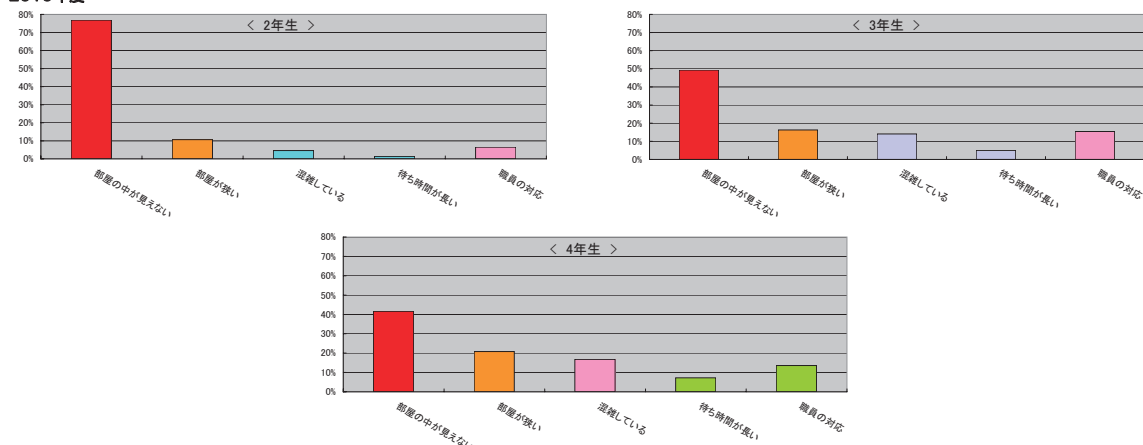
2010年度



分析

「（キャリアサポートセンターを）利用しない理由について回答してください。」（複数回答可）について、全学部において、両年度ともに、2年生と3年生は同じ順位を示したが、4年生においては2009年度が「キャリアサポートセンターへ入りにくい」、「必要性が無い」、「支援内容を知らない」、そして2010年度が「必要性が無い」、「キャリアサポートセンターへ入りにくい」、「支援内容を知らない」の順に高かった。2010年度では、アンケート交差時点の就職内定率が2009年度よりも低いにもかかわらず、2009年度と異なり、「必要性が無い」が最も高かった。

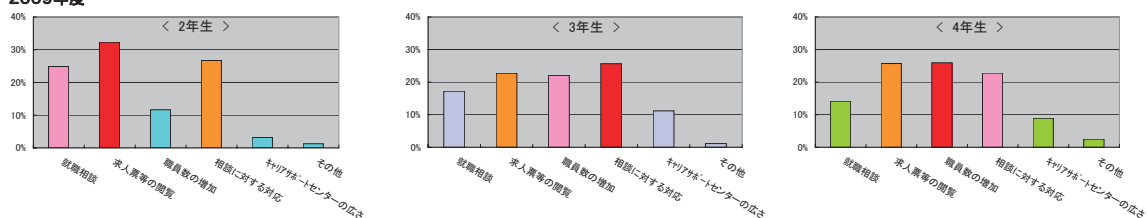
質問9 学務部キャリアサポートセンターに入りにくい理由について回答してください。(複数回答可)
2010年度



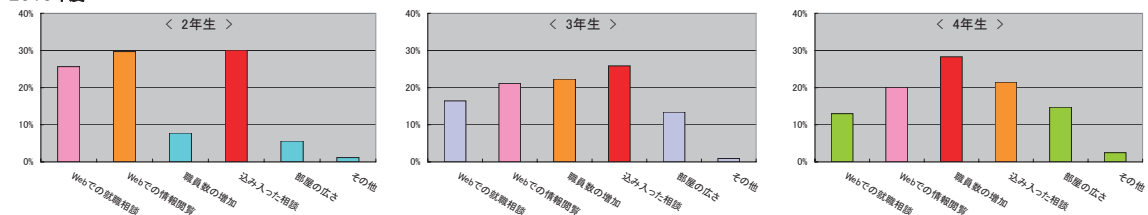
分析

キャリアサポートセンターを利用しない理由として「キャリアサポートセンターへ入りにくい」が高い割合を示した(質問8)。2010年度に「キャリアサポートセンターへ入りにくい」理由についての調査を行った。その結果、全学部における回答割合は、2年生、3年生、4年生ともに「部屋の中が見えない」、「部屋が狭い」、「部屋が混雑している」の順に高かった。特に、学年が高くなるほど、「部屋が狭い」、「部屋が混雑している」の割合が高くなっており、キャリアサポートセンターの面積の拡張が望まれる。

質問10 学務部キャリアサポートセンターに希望する支援内容は何でしょうか？(複数回答可)
2009年度



2010年度



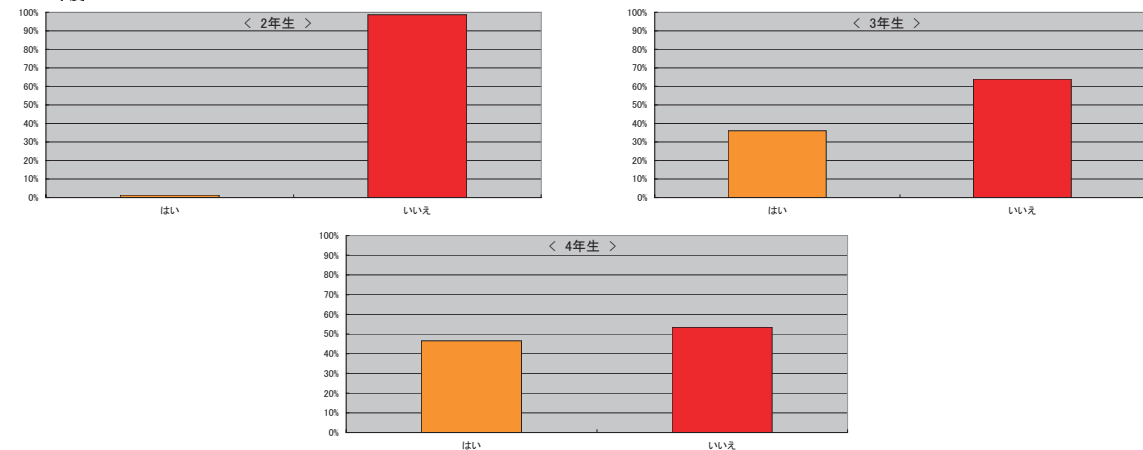
分析

「キャリアサポートセンターに希望する支援内容は何でしょうか？」(複数回答可)についての質問項目は、2010年度はWebでの求人情報閲覧を開始したために2009年度と異なるが、全学部において、最も割合が高かった項目は、2009年度において、2年生は「求人票等の閲覧」、3年生は「相談に対する対応」、4年生は「職員数の増加」であった。また、2010年度においては、2年生と3年生は「込み入った相談」、4年生は「職員数の増加」であった。次に希望の高かった項目は、2009年度において、2年生は「相談に対する対応」、3年生と4年生は「求人票等の閲覧」であった。また、2010年度においては、2年生は「Webでの情報閲覧」、3年生は「職員数の増加」、4年生は「込み入った相談」であった。両年度ともに、4年生は「職員数の増加」、「込み入った相談」、「求人情報の閲覧」を希望している。このことから、キャリアサポートセンターの職員の増加が望まれる。

2009年度の結果から、「職員の増加」や「相談に対する対応」への希望が多かったので、2010年度からキャリアカウンセラー2名(11月以降)を増員した。

質問11 キャリアカウンセラーの相談を受けましたか？

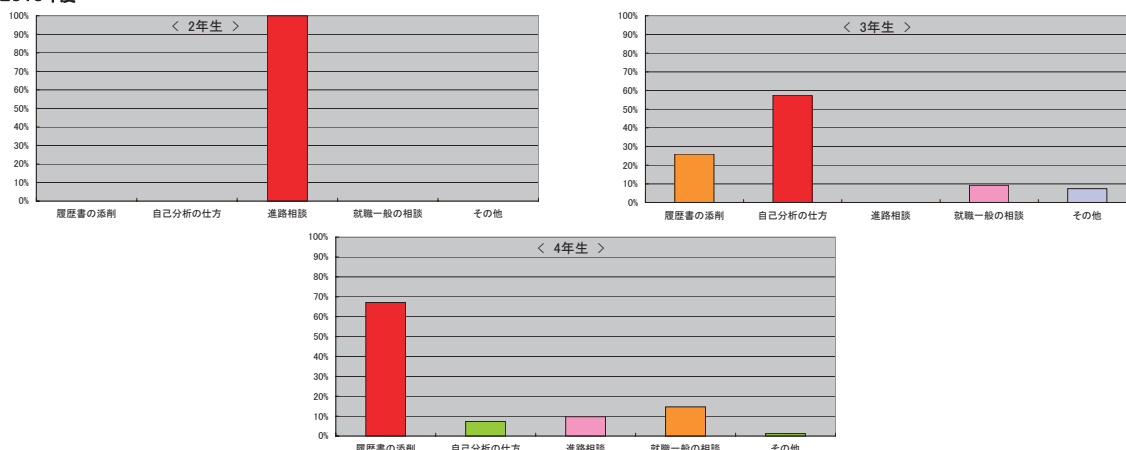
2010年度



分析

「キャリアカウンセラーの相談を受けましたか？」についての質問は、2010年度からキャリアカウンセラーによる相談を始めたので、新設した。この問に対する回答は、全学部において、「はい」は、2年生は1.3%、3年生は36%、4年生は47%であった。この質問に回答した4年生の半数以上の人々が、キャリアカウンセラーによる相談を受けていない。しかし、延べの相談件数は、2009年度754件、2010年度が2082件とその2.7倍(1328人増)となっている。キャリアカウンセラーのさらなる増員や、相談を4年生に限定する等の対策が望まれる。

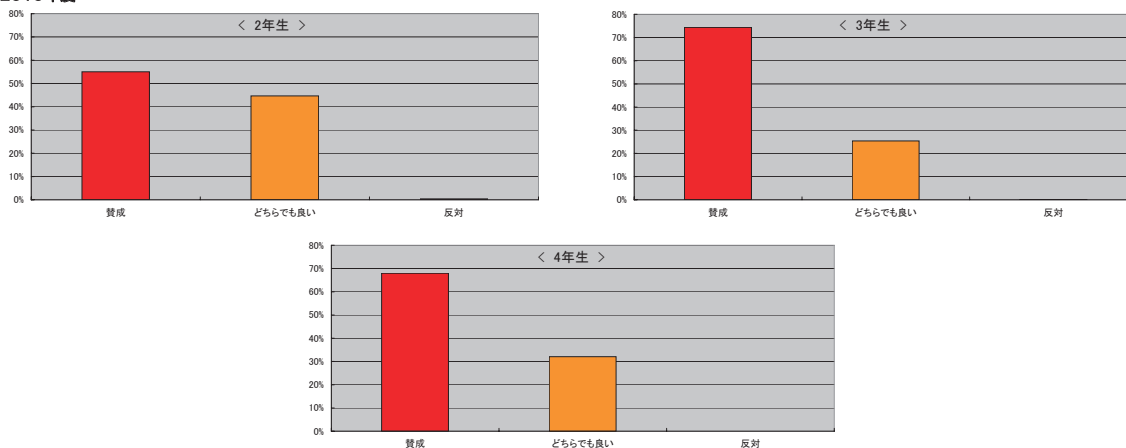
質問12 (キャリアカウンセラーの)相談内容はつぎのどれですか？
2010年度



分析

「キャリアカウンセラーとの相談内容」についての質問は、2010年度からキャリアカウンセラーによる相談を開始したので、新設した。相談内容で最も高い割合を示した項目は、3年生は「自己分析の仕方」、4年生は「履歴書の添削」であった。次に高かった項目は、3年生は「履歴書の添削」、4年生は「就職一般の相談」であった。

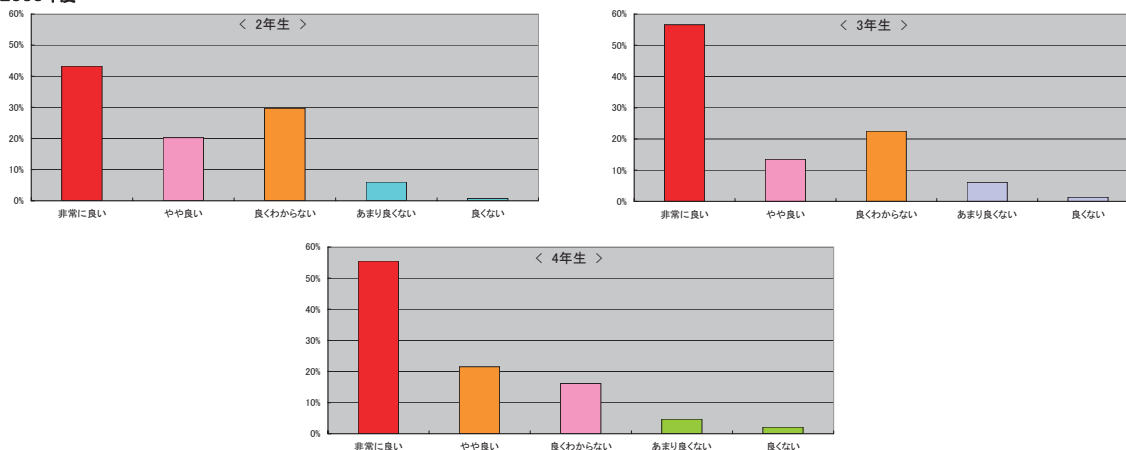
質問13 キャリアカウンセラーを増員することについてはどうですか？
2010年度



分析

「キャリアカウンセラーを増員すること」についても2010年度に新設した質問項目である。増員に「賛成」と回答した割合は、全学部において、2年生は55%、3年生は74%、4年生は68%であった。キャリアカウンセラーの増員が望まれる。

質問14 求人票(申込書)は、現在キャリアサポートセンターに来ないと閲覧することができません。新しいシステムを導入して、本学備付のパソコンで求人票(申込書)を見ることが出来るように準備中です。このことに対して、どう思うかを回答してください。
2009年度

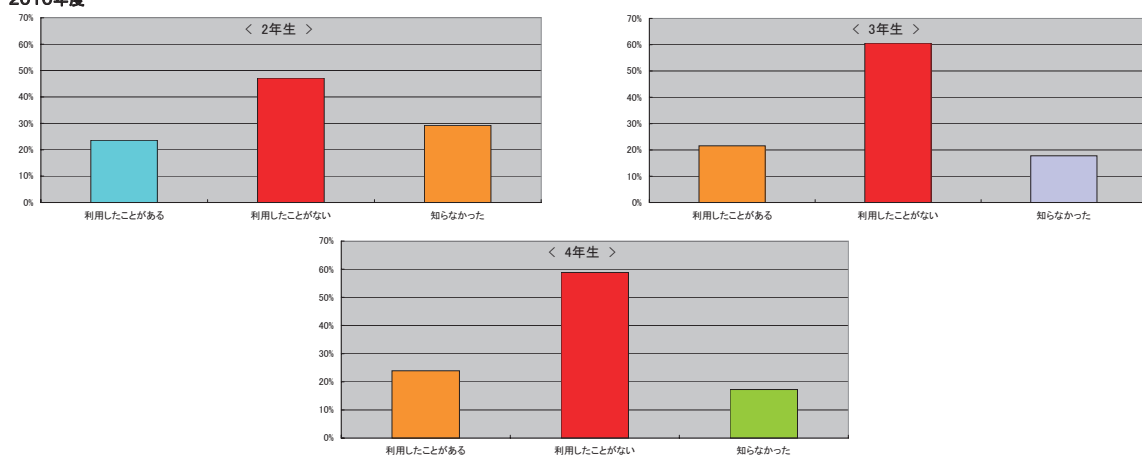


分析

2010年度からWebによる就職情報の閲覧を開始する予定であり、その希望の度合いを次の質問項目で調べた。「本学備付のパソコンで求人票(申込書)を見ることが出来るように準備中です。このことに対して、どう思うか」について、全学部で「非常に良い」と「やや良い」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生は64%、3年生は70%、4年生は77%と、学年が高くなるほど増加した。Webによる就職情報の閲覧の希望が高いことを示している。

質問15 求人票(申込書)は、学務部キャリアサポートセンター以外に、OPIT教室のパソコンを用いても閲覧することができます。OPIT教室のパソコンを利用したことがあるか回答してください。

2010年度

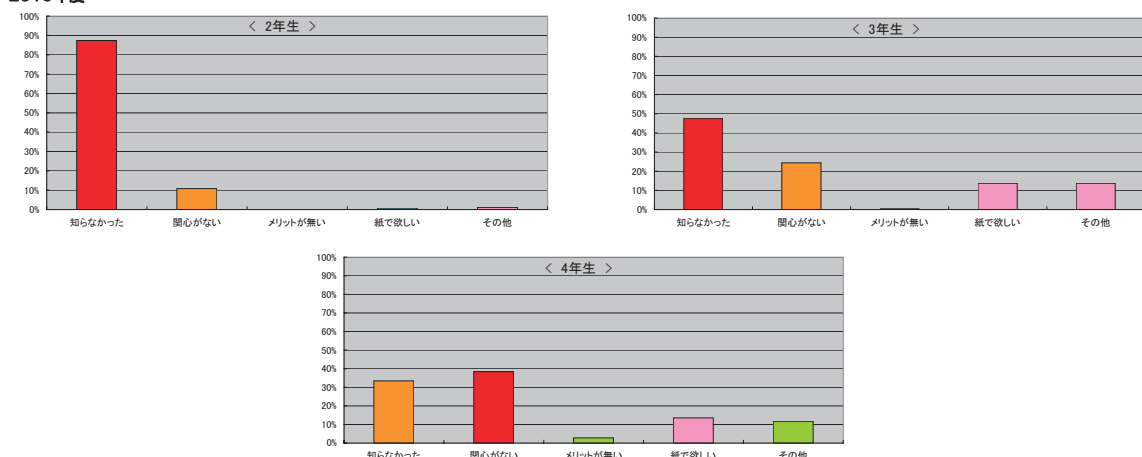


分析

2010年度に導入したWebによる就職情報の閲覧システムの使用頻度を次の質問で調べた。「求人票(申込書)は、学務部キャリアサポートセンター以外に、OPIT教室のパソコンを用いても閲覧することができます。OPIT教室のパソコンを利用したことがあるか」について、全学部において、「利用したことがある」と答えた割合は、2年生は24%、3年生は22%、4年生は24%であった。この結果は、OPIT教室のパソコンを利用したWebによる就職情報の閲覧は、十分に浸透していないことを示している。

質問16 (OPIT教室のパソコンを)利用しない理由について回答してください。

2010年度

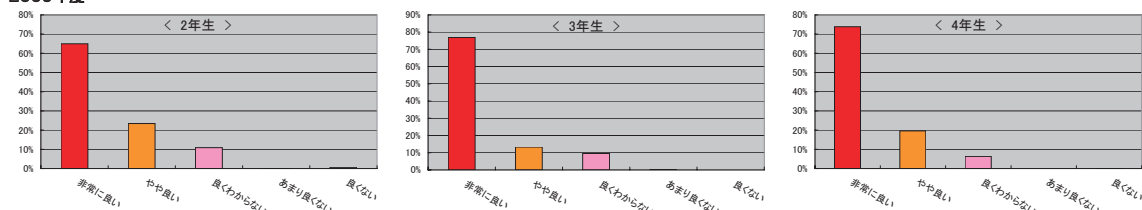


分析

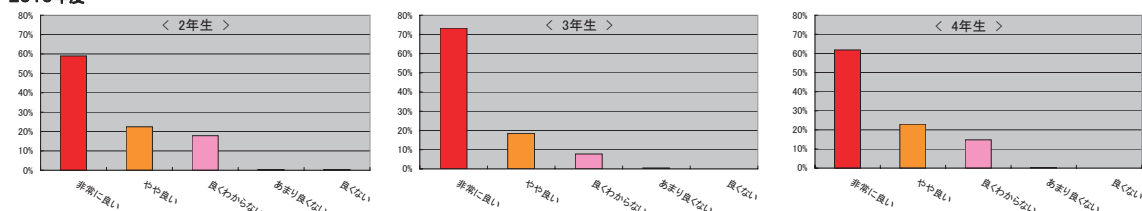
「(OPIT教室のパソコンを)利用しない理由」について、全学部において、最も割合が高かった項目は、2年生と3年生は「知らなかった」、4年生は「関心がない」であった。次に割合が高かった項目は、2年生と3年生は「関心がない」、4年生は「知らなかった」であった。この結果から、OPIT教室のパソコンを利用したWebによる就職情報の閲覧システムが学生へ十分に周知されていないことが推察され、積極的な広報が望まれる。

質問17 求人票(申込書)を、インターネットを利用して学外(自宅等)で閲覧できるとしたらどう考えますか？

2009年度



2010年度



分析

「求人票(申込書)を、インターネットを利用して学外(自宅等)で閲覧できるとしたらどう考えますか？」について、2009年度と2010年度に調べた。全学部で「非常に良い」と「やや良い」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生88%、3年生90%、4年生93%と、学年が高くなるほど増加した。また、2010年度においては、2年生70%、3年生92%、4年生84%と、2009年度と同様に2年生から3年生へと学年が高くなるほど増加した。インターネットを利用して学外(自宅等)での閲覧を希望する割合が非常に高かった。これへの対応が望まれる。

2009・2010年度 キャリア支援に対するアンケート

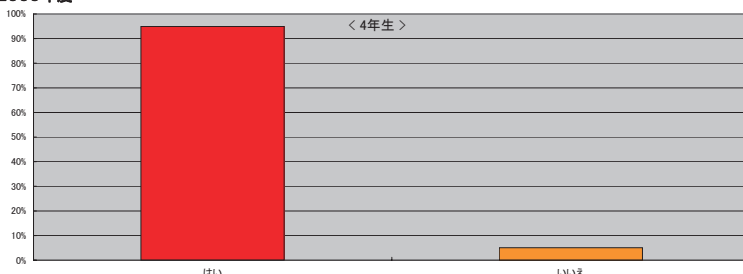
— 学生相談室について —

全学

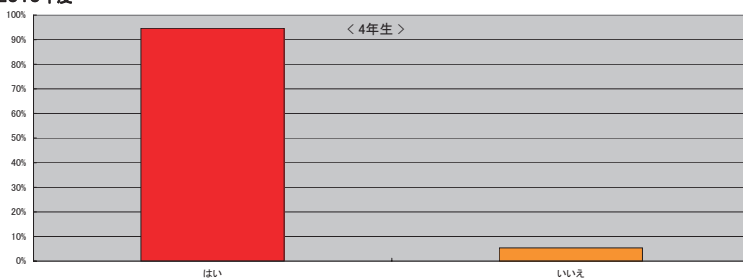
※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問1 あなたは就職を希望していますか。

2009年度



2010年度

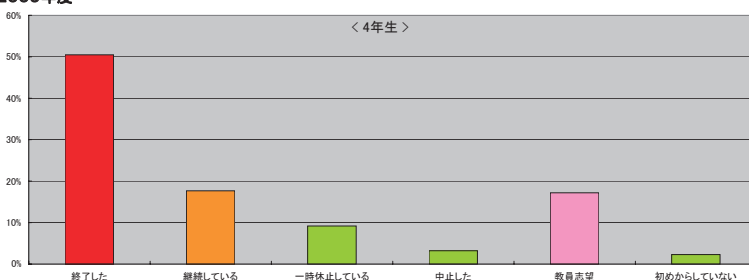


分析

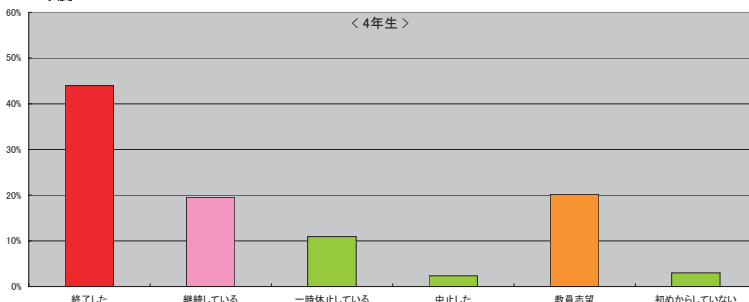
学生相談室に対するアンケートの全学部の4年生の在学生数に対する回答者数の割合(有効回答率)は、2009年度は75%、2010年度は77%と、2010年度で高くなっていた。回答者に占める「就職を希望している」割合は、2009年度、2010年度ともに95%であった。

質問2 今、あなたの就職活動はどのような状況ですか。

2009年度



2010年度

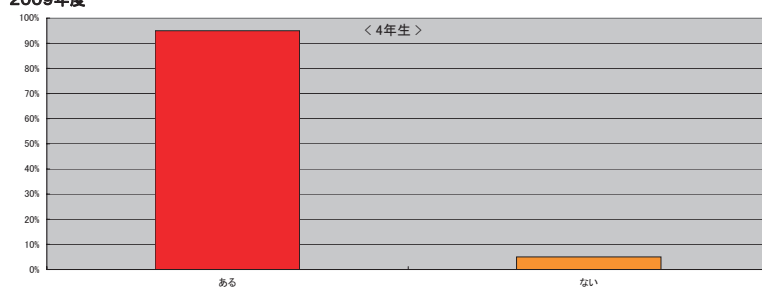


分析

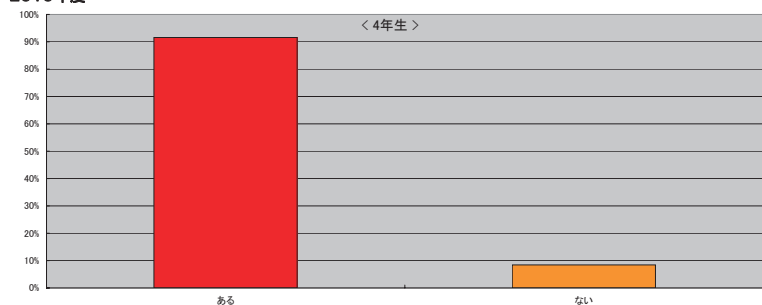
「あなたの就職活動はどのような状況ですか」について、全学部の4年生の回答項目の割合は、2009年度において、「終了した」51%、「継続している」18%、「教員志望」17%の順に高かった。また、2010年度において、「終了した」44%、「教員志望」と「継続している」20%であった。「終了した」の回答割合が、2010年度は2009年度よりも約6%低かった。

質問3 あなたはこれまでの就職活動中に困ったことや悩んだことはありますか。

2009年度



2010年度

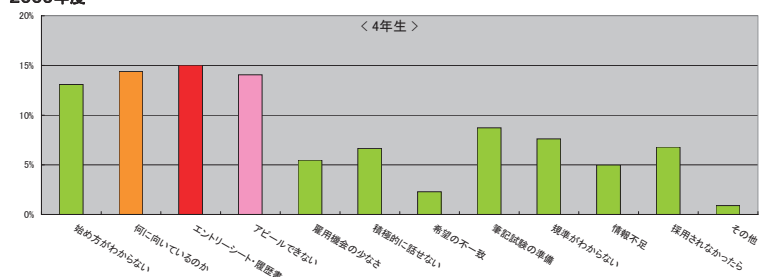


分析

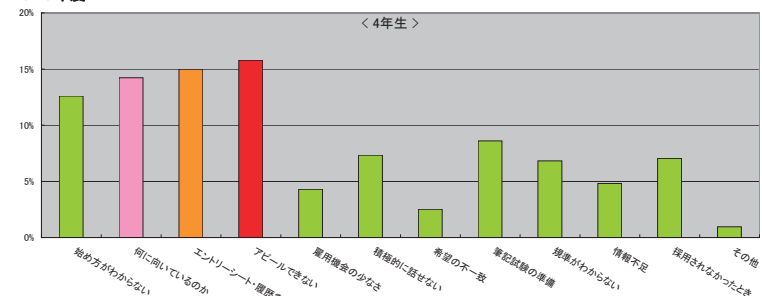
「あなたはこれまでの就職活動中に困ったことや悩んだことはありますか」について、全学部の4年生において「はい」と回答した割合は、2009年度は95%、2010年度は92%であった。両年度ともに、回答者のほぼ全員が「就職活動中に困ったことや悩んだこと」があると答えている。

質問4 あなたは(就職活動中に)どのようなことで悩みましたか。(複数回答可)

2009年度



2010年度

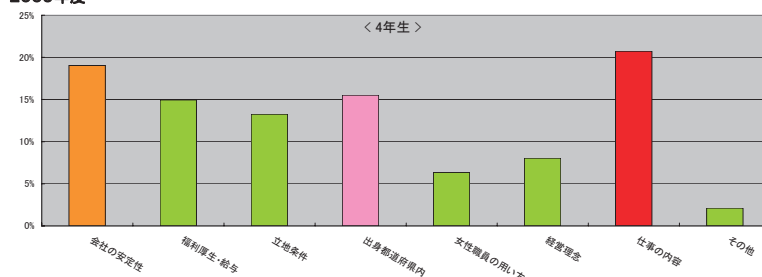


分析

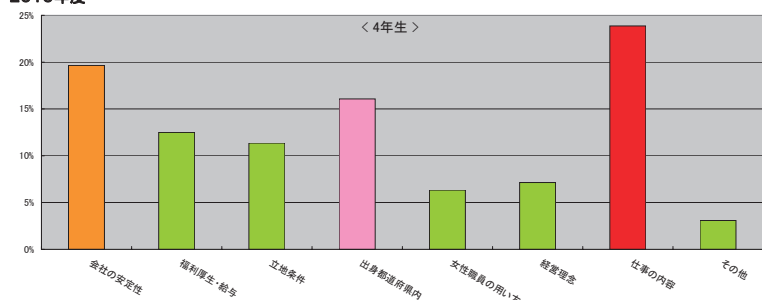
「あなたは(就職活動中に)どのようなことで悩みましたか」(複数回答可)について、全学部の4年生における回答率は、2009年度において「エントリーシート・履歴書」15%、「アピールできない」と「何に向いているのか」14%の順に高かった。また、2010年度においては「アピールできない」16%、「エントリーシート・履歴書」15%、「何に向いているのか」14%の順に高かった。両年度ともに、ついで「始め方がわからない」の割合が高く13%であった。回答者の多くが、就職活動を行うに際しての基本的な準備に戸惑っていることが推察される。就職活動の初歩からの指導が必要であると考えられる。

質問5 あなたは何を基準に就職先を決めましたか。(複数回答可)

2009年度



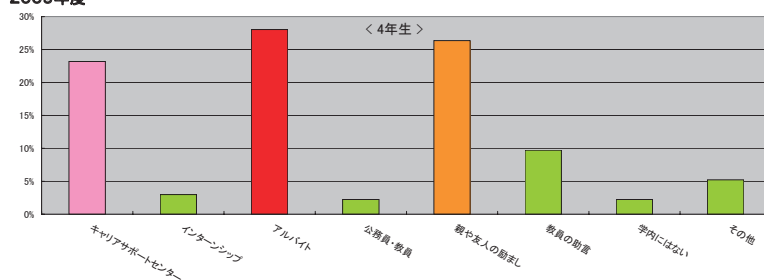
2010年度



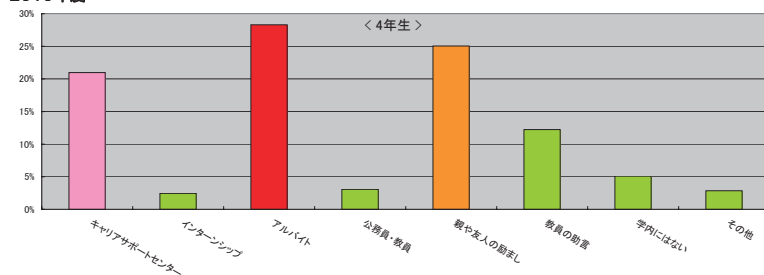
分析

「あなたは何を基準に就職先を決めましたか」(複数回答可)について、全学部の4年生における回答率は、2009年度と2010年度ともに「仕事の内容」、「会社の安定性」、「出身都道府県内」の順に高かった。ついで、両年度ともに「福利厚生・給与」の割合が高かった。この結果は、回答者の多くが就職先の決定において「仕事の内容」と「会社の安定性」、「出身都道府県内」を重視していることを示している。

質問6 あなたの就職活動に何が役に立ちましたか。(複数回答可)
2009年度



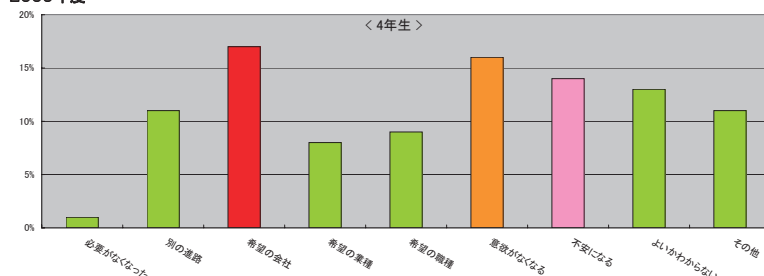
2010年度



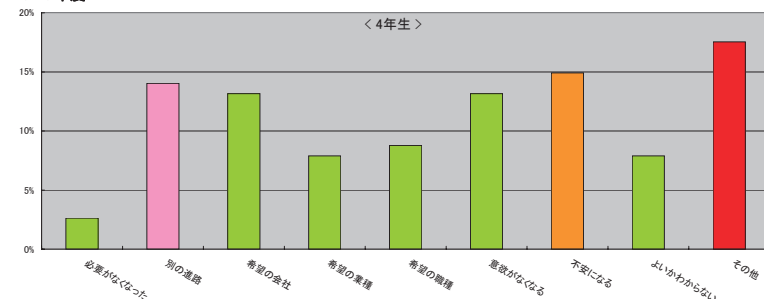
分析

「あなたの就職活動に何が役に立ちましたか」(複数回答可)について、全学部の4年生における回答率は、2009年度と2010年度ともに「アルバイト」、「親や友人の励まし」、「キャリアサポートセンター」の順に高かった。この結果は、回答者の多くが就職活動において“近親者による心理的な助言”と「キャリアサポートセンター」による実質的な支援を期待していることを示している。

質問7 あなたが就職活動を一時休止もしくは中止した理由を教えてください。(複数回答可)
2009年度



2010年度



分析

「あなたが就職活動を一時休止もしくは中止した理由を教えてください」(複数回答可)について、全学部の4年生における回答率は、2009年度において「希望の会社に決まらなかった」17%、「意欲がなくなる」16%、「別の進路」11%の順に高かった。また、2010年度においては「その他」18%、「意欲がなくなる」と「別の進路」13%の順に高かった。この結果から、回答者の就職活動を一時休止もしくは中止した理由の複雑さが推測され、個々のケースに応じた適切な支援が望まれる。特に、2010年度において、「その他」の回答率が最も高かった。この内容を詳細に調べる必要がある。

2009・2010年度 キャリア支援に対するアンケート

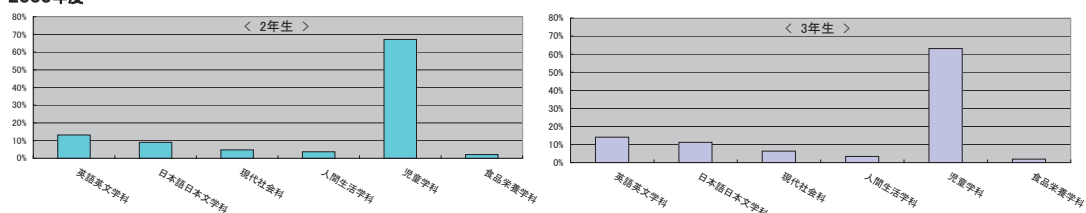
— 教職課程について —

全学

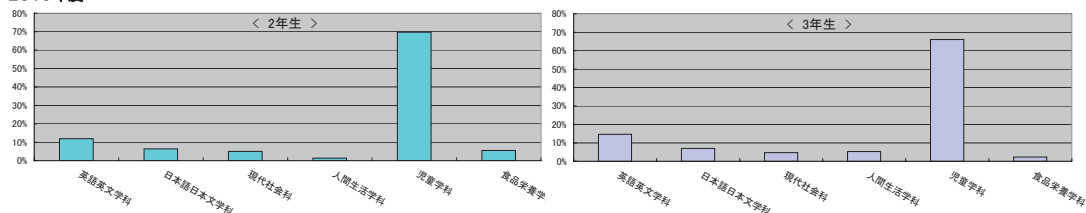
※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問1 あなたの学年・学科を教えてください。

2009年度



2010年度

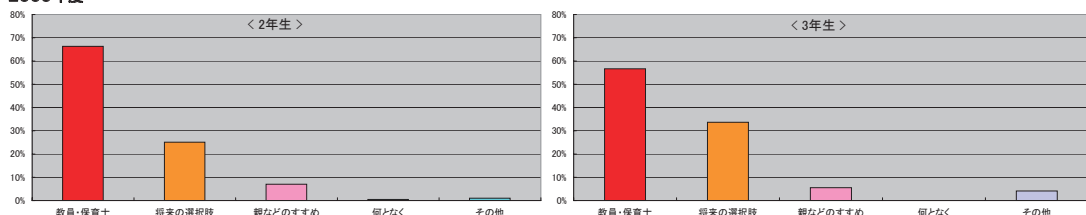


分析

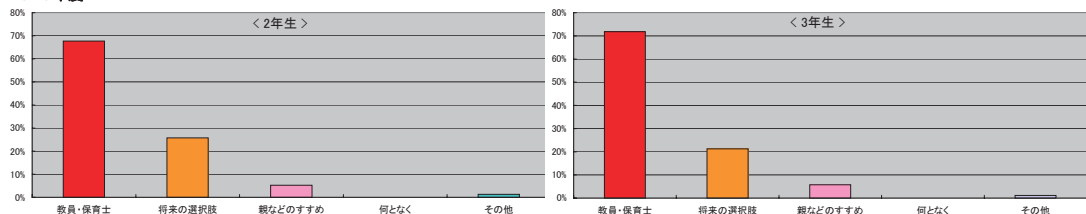
教職課程履修者のアンケートの有効回答率は、2009年度において、2年生は文学部89%、人間生活学部90%、全学部90%、3年生は文学部92%、人間生活学部82%、全学部85%であった。また、2010年度においては、2年生は文学部75%、人間生活学部92%、全学部87%、3年生は文学部92%、人間生活学部86%、全学部88%であった。回答率は、両年度に差はなく、両学部ともに履修者の85%を越えている。

質問2 教職課程を履修した動機を教えてください。

2009年度



2010年度



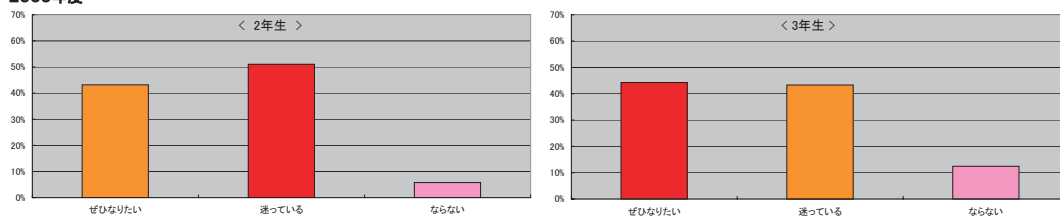
分析

「教職課程を履修した動機を教えてください」について、全学部の全履修者において、2009年度の回答率は、2年生で「教員・保育士」66%、「将来の選択肢」25%、「親などのすすめ」7%、3年生で「教員・保育士」56%、「将来の選択肢」34%、「親などのすすめ」6%と、3年生で「教員・保育士」が減少し、「将来の選択肢」が増加していた。一方、2010年度は、2年生で「教員・保育士」68%、「将来の選択肢」26%、「親などのすすめ」5%、3年生で「教員・保育士」72%、「将来の選択肢」21%、「親などのすすめ」6%と、3年生で「教員・保育士」が増加し、「将来の選択肢」が減少していた。

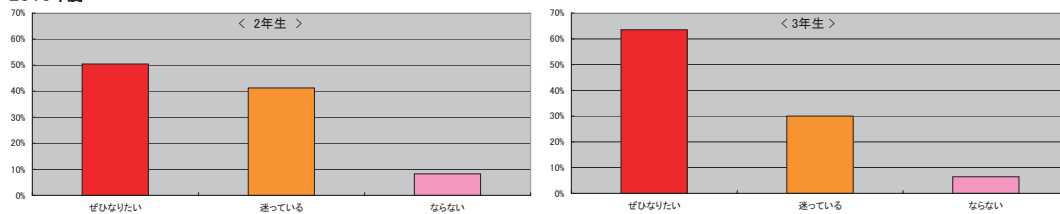
特に、2010年度の3年生における「教員・保育士」が、2009年度に比較して16%増加していた。

質問3 あなたは将来、教師や保育士になりたいという気持ちがありますか。

2009年度



2010年度

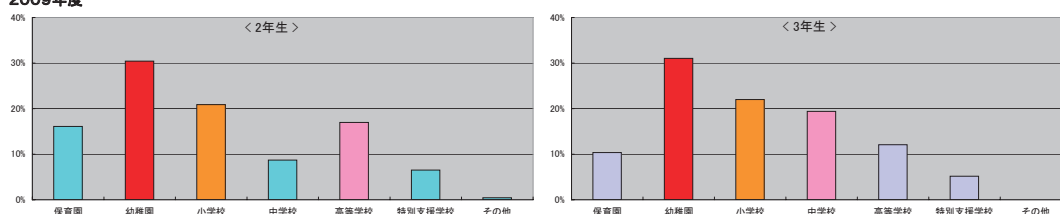


分析

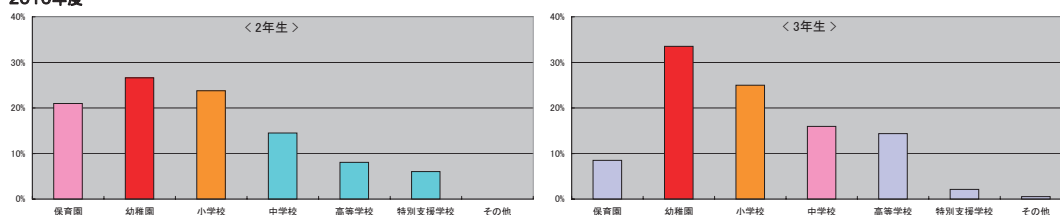
「あなたは将来、教師や保育士になりたいという気持ちがありますか」について、全学部的全履修者において「ぜひやりたい」の回答率は、2009年度で、2年生は43%、3年生は44%と、学年による変化はなかった。一方、その回答率は、2010年度で、2年生は51%、3年生は64%と、学年が高いほど増加した。特に、2010年度における「ぜひやりたい」の回答率が、2009年度に比較して、2年生で8%、3年生で20%高かった。

質問4 教職への就職希望がある場合、それはどのような学校園でしょうか。

2009年度



2010年度

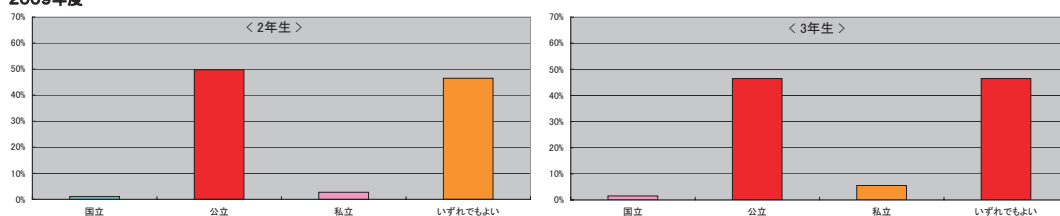


分析

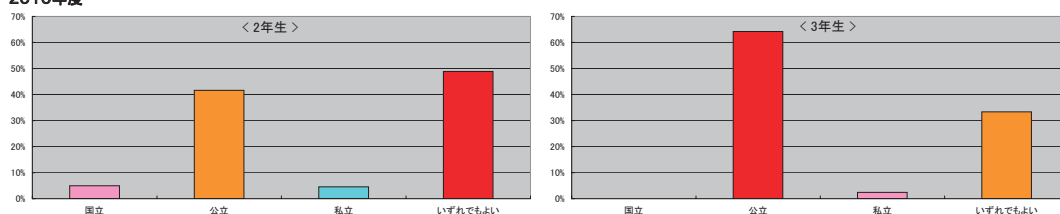
「教職への就職希望がある場合、それはどのような学校園でしょうか」について、全学部的全履修者において、2009年度の回答率は、2年生で「保育園」16%、「幼稚園」30%、「小学校」21%、「中学校」9%、「高等学校」17%、「特別支援学校」7%、3年生で「保育園」10%、「幼稚園」31%、「小学校」22%、「中学校」19%、「高等学校」12%、「特別支援学校」5%であった。一方、2010年度では、2年生で「保育園」21%、「幼稚園」27%、「小学校」24%、「中学校」15%、「高等学校」8%、「特別支援学校」6%、3年生で「保育園」9%、「幼稚園」34%、「小学校」25%、「中学校」16%、「高等学校」14%、「特別支援学校」2%であった。両年度ともに、学年が高くなると「保育園」が減少して、その分が「幼稚園」と「小学校」で増加していた。

質問5 学校園の設置種別での希望がありますか。

2009年度



2010年度

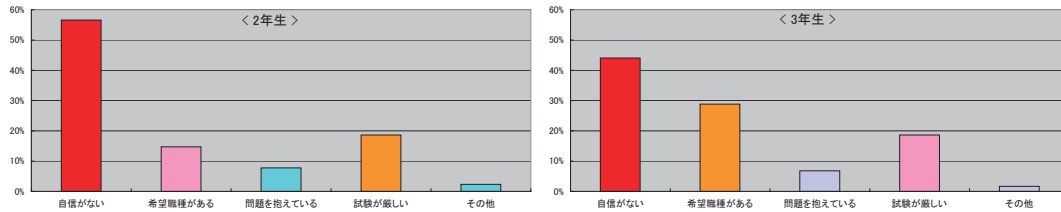


分析

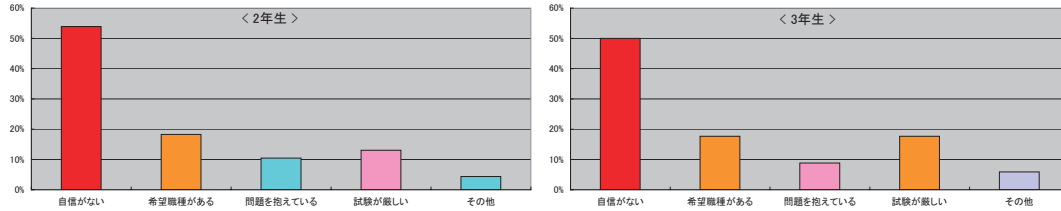
「学校園の設置種別での希望がありますか」について、全学部的全履修者において、2009年度の回答率は、2年生では「国立」1%、「公立」50%、「私立」3%、「いずれでもよい」47%、3年生では「国立」2%、「公立」47%、「私立」6%、「いずれでもよい」47%と、「公立」が減少して、「私立」が増加した。一方、2010年度においては、2年生では「国立」5%、「公立」42%、「私立」5%、「いずれでもよい」49%、3年生では「国立」0%、「公立」64%、「私立」2%、「いずれでもよい」33%と、「公立」が増加して、「私立」と「いずれでもよい」が減少した。

質問6 (質問3で迷っていると答えた人へ)あなたが迷っている理由を教えてください。

2009年度



2010年度



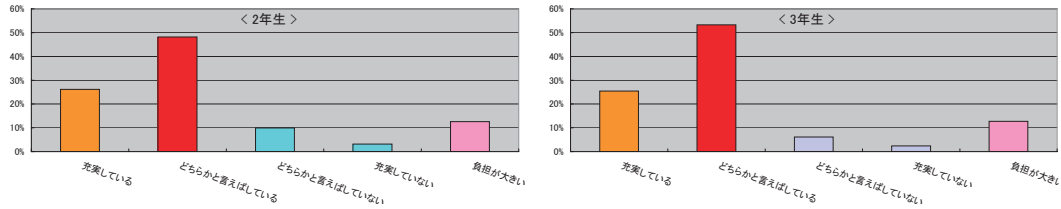
分析

調査年度によって異なるが、教職履修者の30～50%が将来教師や保育士になるかどうか迷っていると回答した。この理由を次の質問で調査した。「(質問3で迷っていると答えた人へ)あなたが迷っている理由を教えてください」について、最も回答率が高かった項目は、2009年度と2010年度において、2年生と3年生ともに「自信がない」であった。次に回答率の高かった項目は、2009年度において、2年生は「試験が難しい」、3年生は「希望職種がある」、2010年度の2年生は「希望職種がある」、3年生は「希望職種がある」と「試験が難しい」であった。

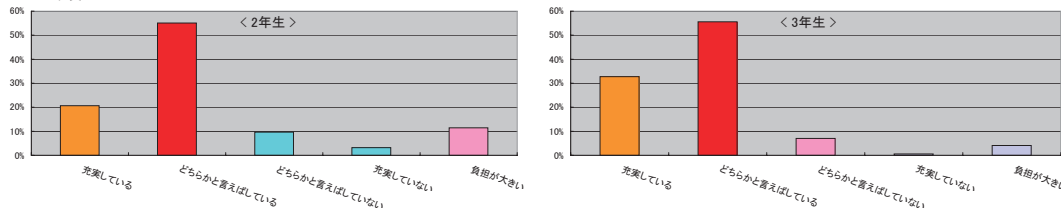
将来教師や保育士になるかどうか迷っていると回答した人の、半数が「自信がない」を理由としており、これへの対策が望まれる。

質問7 教職履修に関する現在の思いを教えてください。

2009年度



2010年度



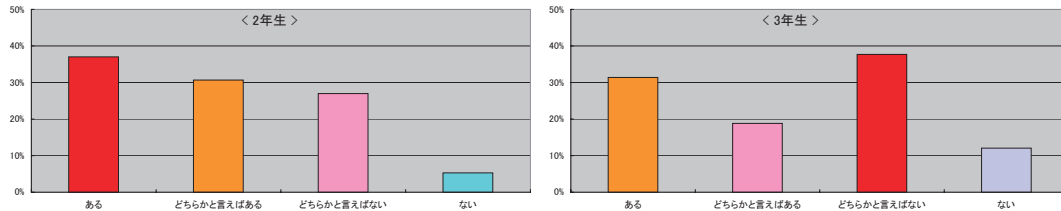
分析

「教職履修に関する現在の思いを教えてください」について、全履修者で「充実している」と「どちらかと言えば充実している」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生74%、3年生79%と、学年が高くなるほど増加した。また、2010年度においては、2年生76%、3年生89%と、2009年度と同様に学年が高くなるほど増加した。

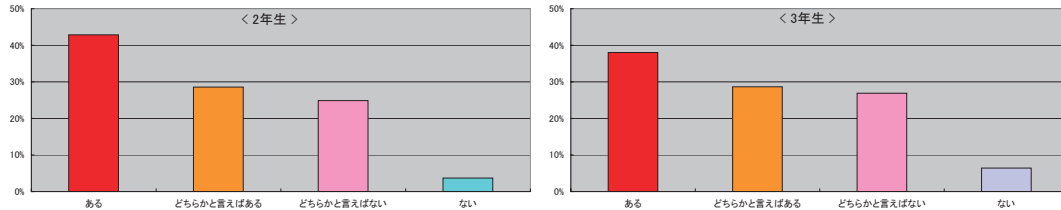
特に、2010年度においては、「充実している」と「どちらかと言えば充実している」と答えた人の合計割合が、2009年度に比べて、2年生と3年生ともに増加した。また、「負担が大きい」と回答した割合が、2009年度の2年生と3年生、そして2010年度の2年生で約13%であったが、これに比べて、2010年度の3年生では4%と、大きな減少を示した。

質問8 教職履修に関して不安や悩みがありますか。

2009年度



2010年度



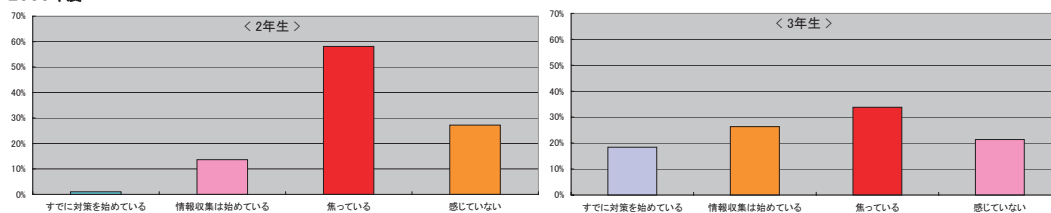
分析

「教職履修に関して不安や悩みがありますか」について、全履修者で「ある」と「どちらかと言えばある」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生68%、3年生50%と、学年が高くなるほど減少した。また、2010年度においては、2年生72%、3年生67%と、2009年度と同様に学年が高くなるほど減少した。

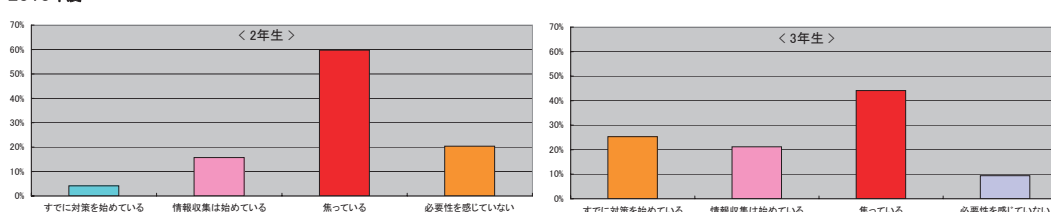
特に、2010年度においては、「ある」と「どちらかと言えばある」と答えた人の合計割合が、2009年度に比べて、2年生と3年生ともに増加した。この要因について調査し、対応策を講じる必要がある。

質問9 あなたは教員採用試験に関して、何か準備をしていますか。

2009年度



2010年度



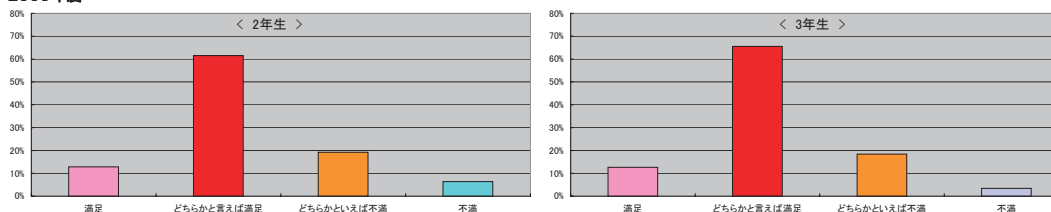
分析

「あなたは教員採用試験に関して、何か準備をしていますか」について、全学部的全履修者において、2009年度の回答率は、2年生で「すでに対策を始めている」1%、「情報収集は始めている」14%、「焦っている」58%、「感じていない」27%、3年生で「すでに対策を始めている」18%、「情報収集は始めている」26%、「焦っている」34%、「感じていない」21%であった。一方、2010年度では、2年生で「すでに対策を始めている」4%、「情報収集は始めている」16%、「焦っている」60%、「感じていない」20%、3年生で「すでに対策を始めている」25%、「情報収集は始めている」21%、「焦っている」44%、「感じていない」9%であった。

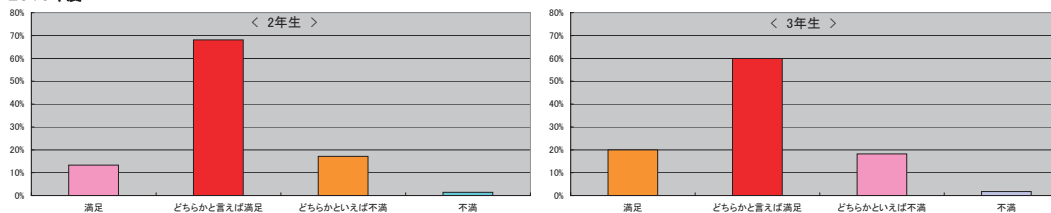
特に、2010年度においては、「すでに対策を始めている」の回答率が2年生と3年生ともに2009年度に比べて増加し、「感じていない」が減少していた。しかし、「焦っている」の回答率が2010年度で2年生と3年生ともに2009年度よりも高くなっており、これへの対策が望まれる。

質問10 あなたは本学の教職への支援についてどのように思っていますか。

2009年度



2010年度



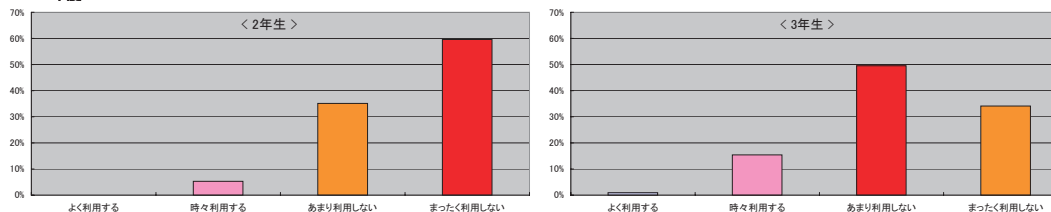
分析

「あなたは本学の教職への支援についてどのように思っていますか」について、全履修者で「満足」と「どちらかと言えば満足」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生74%、3年生78%と、学年が高くなるほど増加した。また、2010年度においては、2年生81%、3年生80%であった。

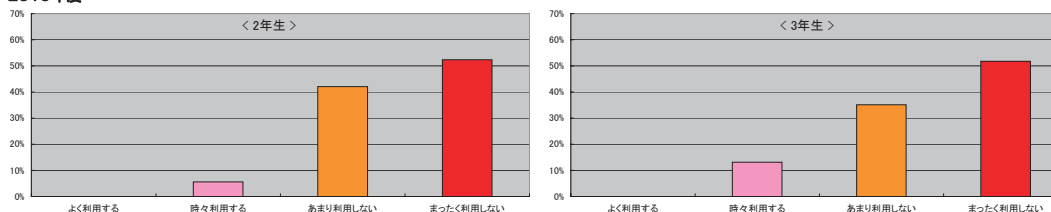
特に、2010年度においては、「満足」と「どちらかと言えば満足」と答えた人の合計割合が、2009年度に比べて、2年生と3年生ともに増加した。

質問11 あなたは諸課程の資料を利用したことがありますか。

2009年度



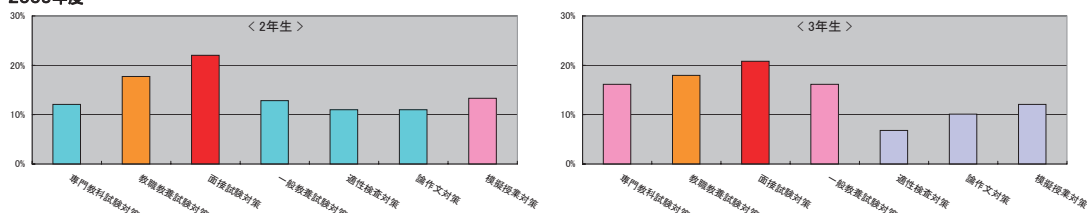
2010年度



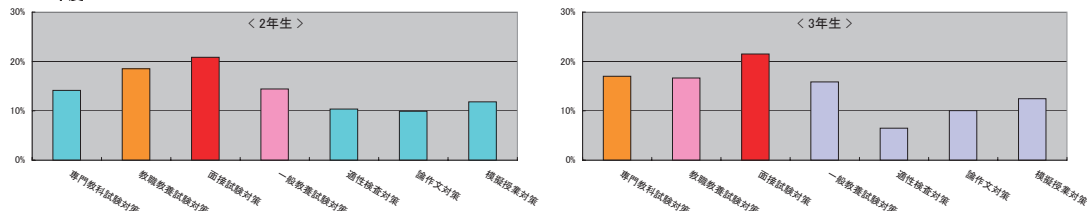
分析

「あなたは諸課程の資料を利用したことがありますか」について、全履修者で「あまり利用していない」と「全く利用していない」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生5%、3年生16%、また2010年度においては、2年生6%、3年生11%であった。諸課程の資料は、両年度ともにほとんど利用されていなかった。

質問12 あなたは教職課程で、どのような支援又は情報を望みますか。(複数回答可)
2009年度



2010年度

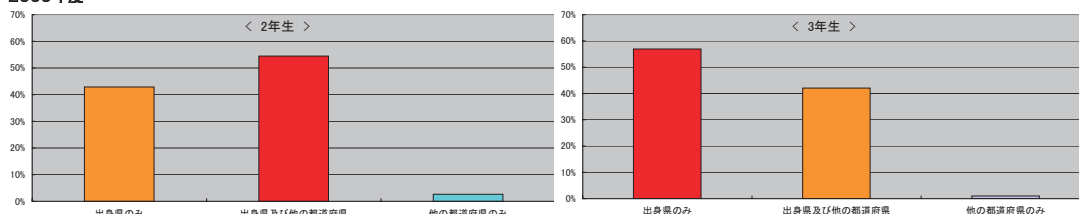


分析

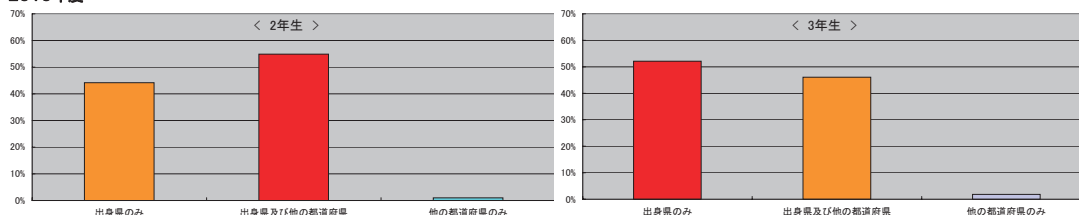
「あなたは教職課程で、どのような支援又は情報を望みますか」(複数回答可)について、全履修者において、最も回答割合が高かった項目は、2009年度、2010年度の両年度において、2年生と3年生ともに「面接試験対策」であった。また、次に高かった項目は、2009年度、2010年度ともに、2年生と3年生のいずれも「教職教養試験対策」であった。そして、これについて高かったのが「一般教養試験対策」と「専門教科試験対策」であった。この結果から、「面接試験対策」への支援の強化が望まれる。

質問13 あなたは教員採用試験をどこで受けようと考えていますか。

2009年度



2010年度

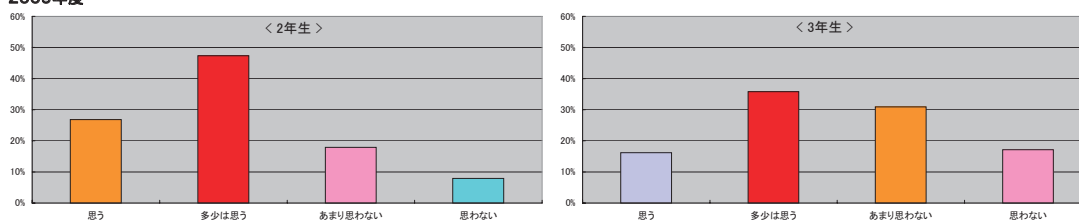


分析

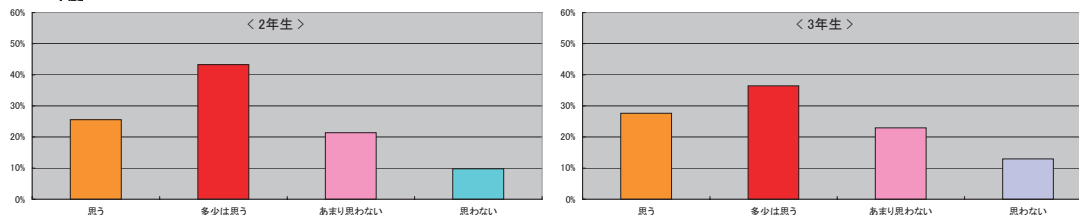
「あなたは教員採用試験をどこで受けようと考えていますか」について、全履修者において、最も回答率が高かった項目は、2009年度と2010年度ともに、2年生は「出身県及び他の都道府県」、3年生は「出身県のみ」であった。次に回答率の高かった項目は、2009年度、2010年度ともに、2年生は「出身県のみ」、3年生は「出身県及び他の都道府県」であった。両年度ともに、学年が上がると「出身県のみ」の回答割合が高くなった。

質問14 あなたは県外の採用試験の説明会に参加したいと思いますか。

2009年度



2010年度

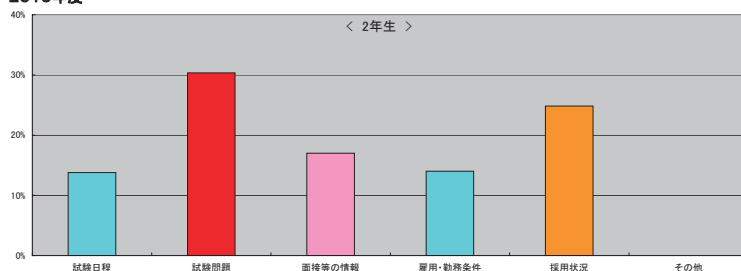


分析

「あなたは県外の採用試験の説明会に参加したいと思いますか」について、全履修者で「思う」「多少は思う」と答えた人の合計割合は、2009年度において、2年生74%、3年生52%、また、2010年度においては、2年生69%、3年生65%であった。両年度ともに「思う」「多少は思う」と答えた人の合計割合は、学年が上がると減少するが、2010年度の3年生は2009年度よりも13%高くなった。

質問15 県外の教員採用試験について、どのような情報が必要だと考えていますか。

2010年度

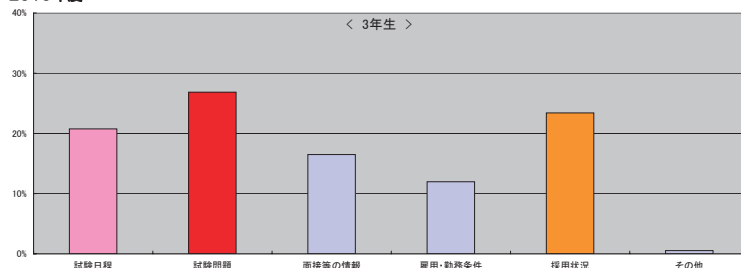


分析

2010年度に新設した質問項目である。「県外の教員採用試験について、どのような情報が必要だと考えていますか」について、全履修者における回答割合は、2年生は「試験問題」、「採用条件」、「雇用・勤務条件」、3年生は「試験問題」、「採用状況」、「試験日程」の順に高かった。

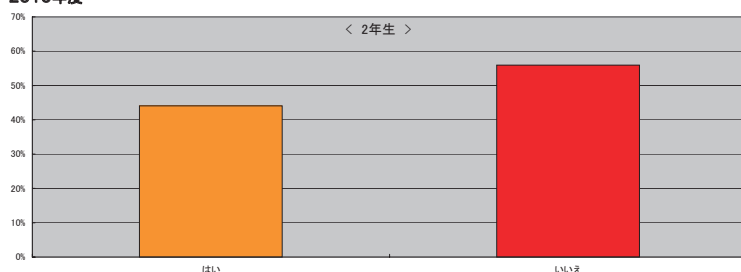
「試験問題」に関する情報を望んでいる。

2010年度



質問16 県外の教員採用試験を受ける予定ですか。

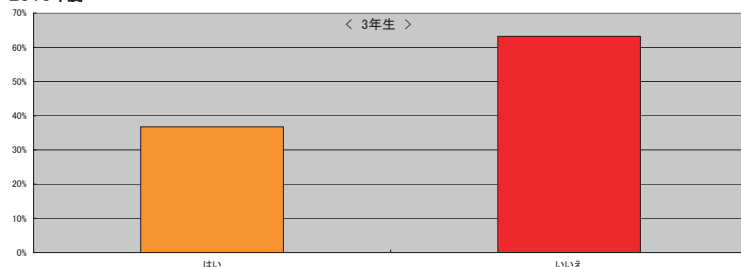
2010年度



分析

2010年度に新設した質問項目である。「県外の教員採用試験を受ける予定ですか」について、全履修者において「はい」と答えた割合は、2年生は44%、3年生は37%と、学年が上がるほど減少した。この結果は、質問13において、3年生が教員採用試験の受験地を「出身県のみ」とした回答率の高さと一致している。

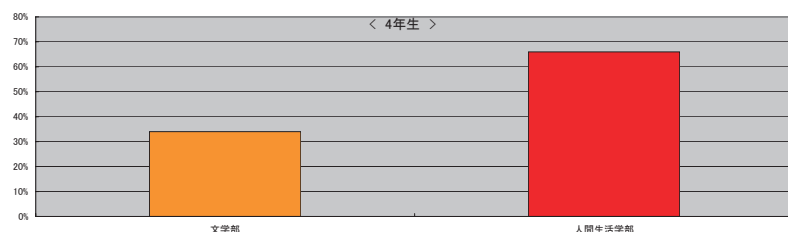
2010年度



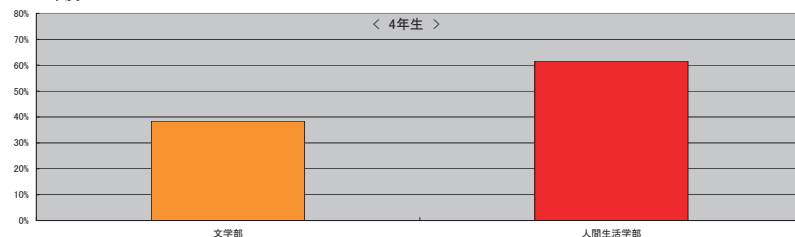
2009・2010年度 キャリア支援に対するアンケート — キャリアサポートセンターについて — 学部

※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問1 所属学部名を回答してください。 2009年度



2010年度



分析

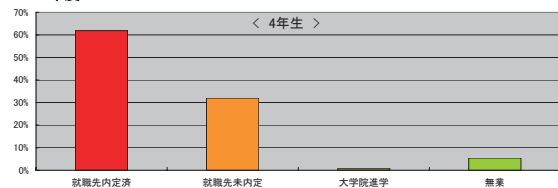
4年生の在籍者数に対する回答率は、2009年度において、文学部で61%、人間生活学部で85%であった。また、2010年度においては、文学部で67%、人間生活学部で87%であった。一方、回答者数に対する割合は、2009年度において、文学部で34%、人間生活学部で66%、2010年度において、文学部38%、人間生活学部で87%であった。

4年生の在籍者数に対する回答率は、両年度ともに、人間生活学部が文学部よりも高かった。

質問2 4年生の進路について

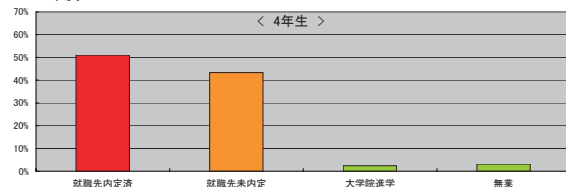
文学部

2009年度

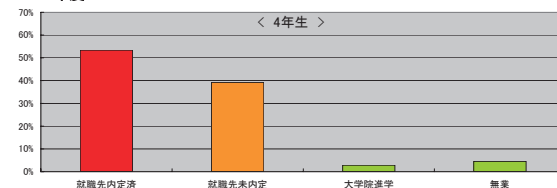


人間生活学部

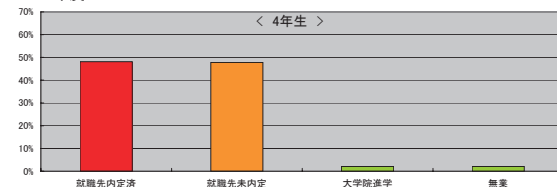
2009年度



2010年度



2010年度

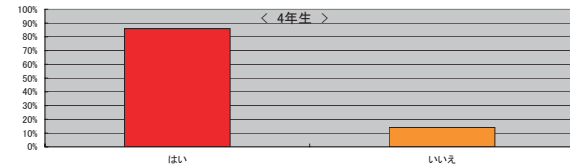


分析

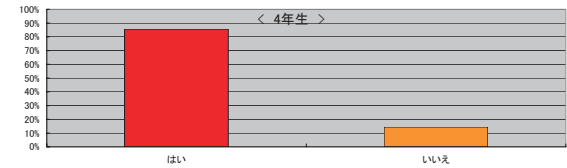
回答者の就職先内定率は、2009年度において、文学部は62%、人間生活学部は51%であった。また、2010年度において、文学部は53%、人間生活学部は48%であった。両学部ともに、2010年度の就職先内定率は2009年度よりも文学部で9%、人間生活学部で3%減少していた。無業者の割合も、両学部ともに2010年度は2009年度よりも僅かに減少していた。

質問3 学務部キャリアサポートセンターが学生向けに支援している内容を知っていますか？

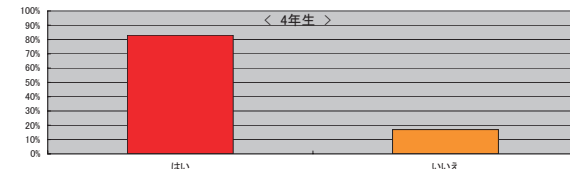
文学部
2009年度



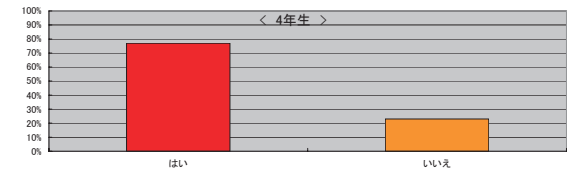
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度

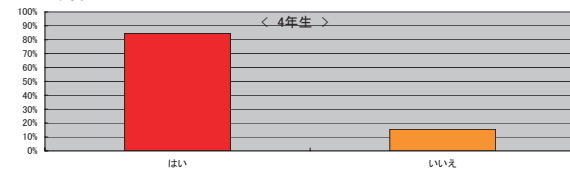


分析

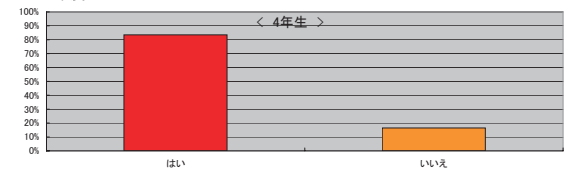
「キャリアサポートセンターが学生向けに支援している内容を知っていますか？」について、4年生の回答者で「はい」と答えた人の割合は、2009年度において、文学部は86%、人間生活学部は83%であった。また、2010年度において「はい」と答えた人の割合は、文学部は86%、人間生活学部は77%であった。その支援内容を知っている割合は、文学部では両年度に差はないが、人間生活学部では2010年度において2009年度よりも6%減少した。人間生活学部への広報が望まれる。

質問4 学務部キャリアサポートセンターを利用したことがありますか？

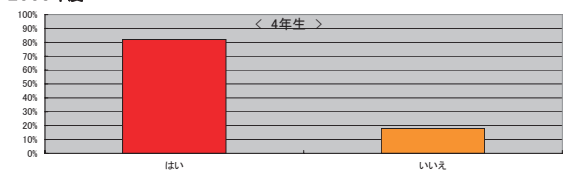
文学部
2009年度



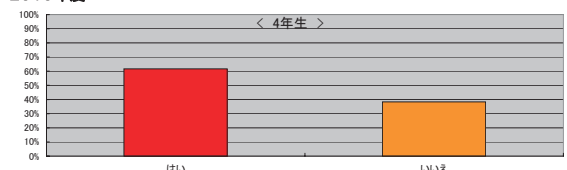
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度

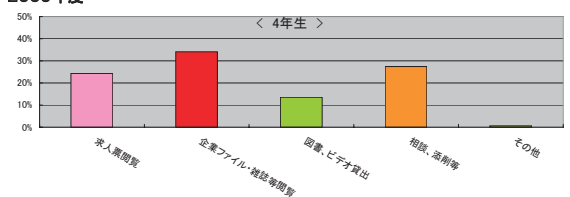


分析

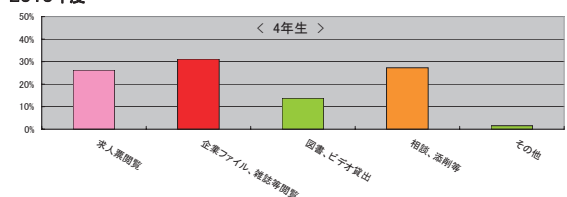
「キャリアサポートセンターを利用したことがありますか？」について、4年生の回答者で「はい」と答えた人の割合は、2009年度において、文学部は86%、人間生活学部は62%であった。また、2010年度において「はい」と答えた人の割合は、文学部は84%、人間生活学部は42%であった。利用したことがあると答えた割合は、文学部では両年度に差はないが、人間生活学部では2010年度において2009年度よりも20%減少した。人間生活学部の利用者割合の減少は、学生支援GPの事業によって2010年度から教職支援が充実したことにより、児童学科の利用が2009年度の68%から2010年度の42%に低下したこと起因している。

質問5 (学務部キャリアサポートセンターを)利用した内容はつぎのどれですか？(複数回答可)

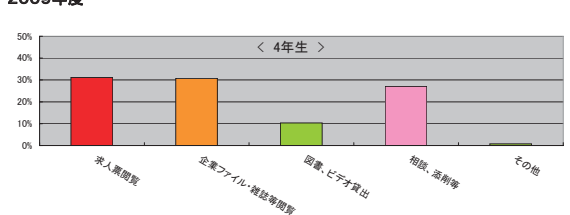
文学部
2009年度



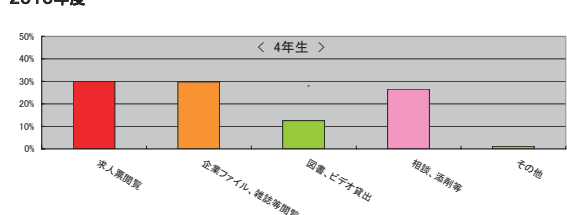
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度

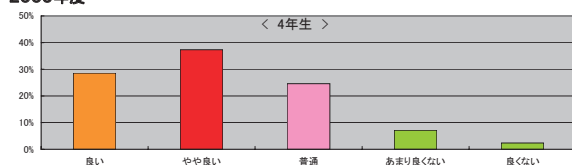


分析

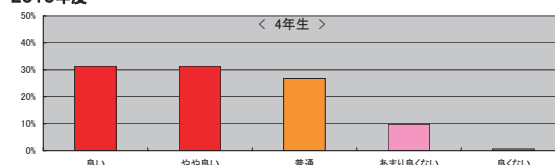
「(キャリアサポートセンターを)利用した内容はつぎのどれですか？」(複数回答可)について、回答した4年生の利用項目は、2009年度において、文学部は「企業ファイル・雑誌等閲覧」34%、「相談・添削等」27%、「求人票閲覧」24%、人間生活学部は「求人票閲覧」と「企業ファイル・雑誌等閲覧」とともに31%、「相談・添削等」27%の順であった。また、2010年度においては文学部は「企業ファイル・雑誌等閲覧」31%、「相談・添削等」27%、「求人票閲覧」26%、人間生活学部は「求人票閲覧」と「企業ファイル・雑誌等閲覧」とともに30%、「相談・添削等」27%であった。両年度、両学部ともに、利用項目の回答率の順位は同じであった。4年生は、求人票や企業情報など就職活動に直結するものを優先的に利用していることが分かる。

質問6 (学務部キャリアサポートセンターを)利用した感想はつぎのどれですか？

文学部
2009年度

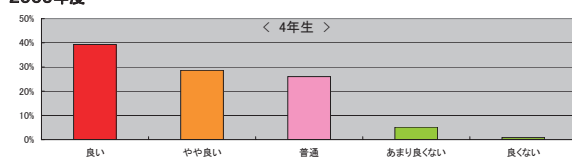


2010年度

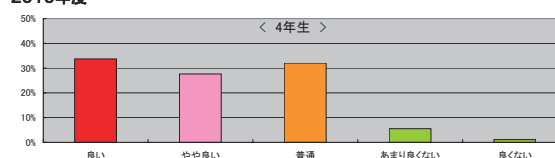


人間生活学部

2009年度



2010年度

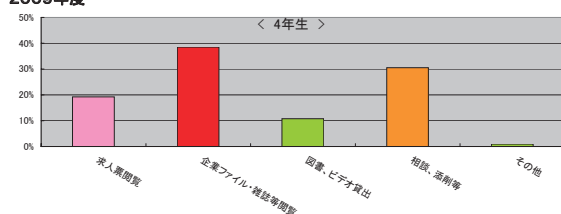


分析

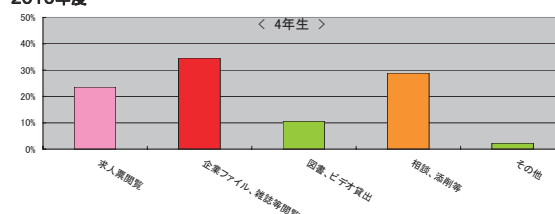
「キャリアサポートセンターを利用した感想はつぎのどれですか？」について、4年生の回答者で「良い」と「やや良い」と答えた人の合計割合は、2009年度において、文学部は66%、人間生活学部は68%であった。また、2010年度において「良い」と「やや良い」と答えた人の割合は、文学部は63%、人間生活学部は61%であった。一方、「あまり良くない」と「良くない」と答えた合計割合は、2009年度において、文学部は10%、人間生活学部は6%、2010年度において、文学部は11%、人間生活学部は7%であった。回答者の6～10%程度がマイナスの感想を示した。

質問7 (学務部キャリアサポートセンターを)利用して良かった内容はつぎのどれですか？(複数回答可)

文学部
2009年度

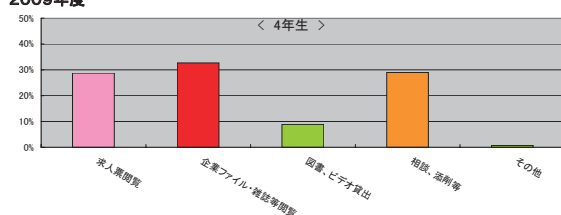


2010年度

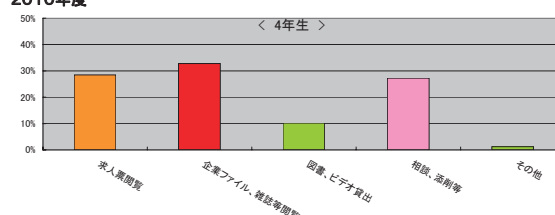


人間生活学部

2009年度



2010年度

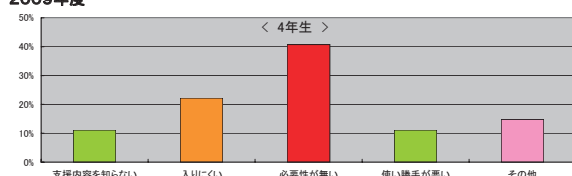


分析

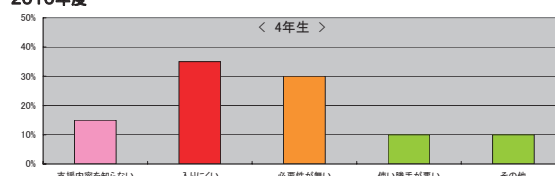
「キャリアサポートセンターを利用して良かった内容はつぎのどれですか？」(複数回答可)について、回答した4年生の利用項目は、2009年度において、文学部は「企業ファイル・雑誌等閲覧」39%、「相談・添削等」31%、「求人票閲覧」19%、人間生活学部は「企業ファイル・雑誌等閲覧」33%、「相談・添削等」29%、「求人票閲覧」29%と、項目の順位は文学部と同じであった。また、2010年度において、文学部は2009年度と項目の順位は同じであったが、人間生活学部は「企業ファイル・雑誌等閲覧」33%、「求人票閲覧」29%、「相談・添削等」27%と2009年度と異なる順位となった。利用して良かった内容は、質問5の利用した内容とほぼ同じであった。

質問8 (学務部キャリアサポートセンターを)利用しない理由について回答してください。(複数回答可)

文学部
2009年度

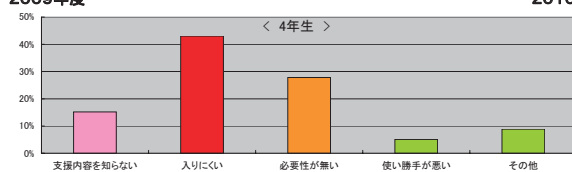


2010年度

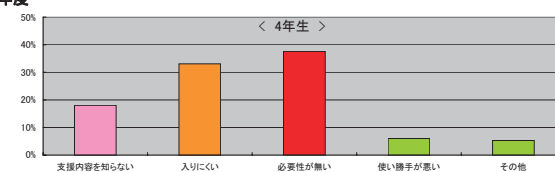


人間生活学部

2009年度



2010年度



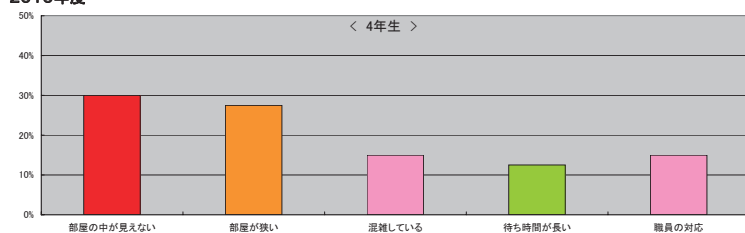
分析

「キャリアサポートセンターを利用しない理由について回答してください」(複数回答可)について、回答した4年生の項目は、2009年度において、文学部は「必要が無い」41%、「入りにくい」22%、「支援内容を知らない」11%、人間生活学部は「入りにくい」43%、「必要が無い」28%、「支援内容を知らない」15%の順に高かった。また、2010年度において、文学部は「入りにくい」35%、「必要が無い」30%、「支援内容を知らない」15%、人間生活学部は「必要が無い」38%、「入りにくい」33%、「支援内容を知らない」18%の順に高かった。キャリアサポートセンターを利用しない理由として、「入りにくい」をあげており、これへの対策が望まれる。また、「支援内容を知らない」の回答が11～18%あり、積極的な広報が必要である。

質問9 学務部キャリアサポートセンターに入りにくい理由について回答してください。(複数回答可)

文学部

2010年度

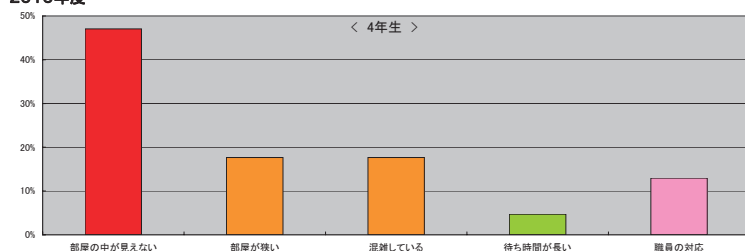


分析

キャリアサポートセンターを利用しない理由として「キャリアサポートセンターへ入りにくい」が高い割合を示した(質問8)。2010年度に「キャリアサポートセンターへ入りにくい」理由についての調査を行った。その結果、4年生の回答割合は、文学部と人間生活学部ともに「部屋の中が見えない」、「部屋が狭い」「部屋が混雑している」の順に高かった。特に、「部屋の中が見えない」の回答が3～5割を占めた。キャリアサポートセンターの中がよく見えるような工夫が望まれる。

人間生活学部

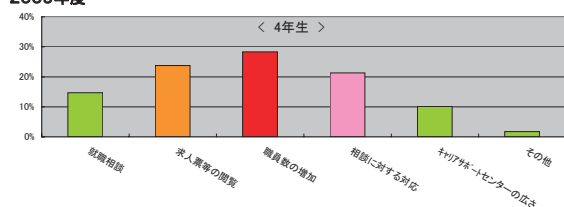
2010年度



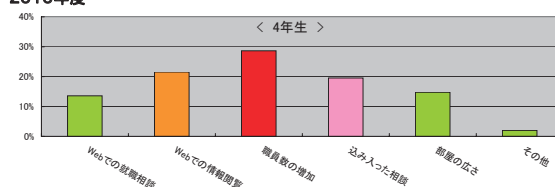
質問10 学務部キャリアサポートセンターに希望する支援内容は何でしょうか？(複数回答可)

文学部

2009年度

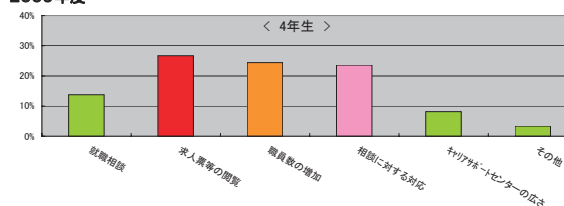


2010年度

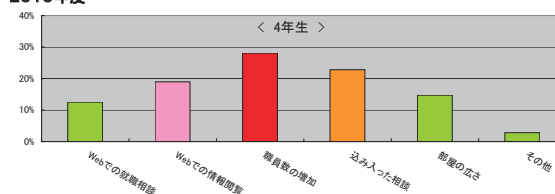


人間生活学部

2009年度



2010年度



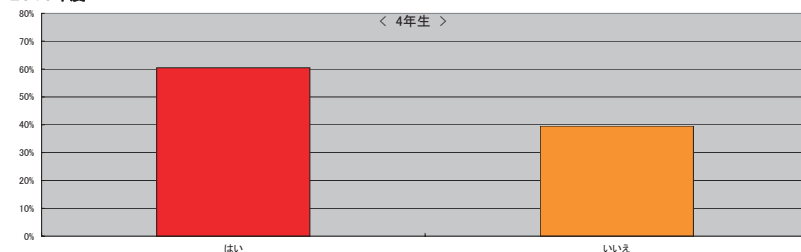
分析

「キャリアサポートセンターに希望する支援内容は何でしょうか？」(複数回答可)についての質問項目は、2010年度はWebでの求人情報閲覧を開始したために2009年度と異なるが、4年生の回答割合は、2009年度において、文学部は「職員数の増加」28%、「求人票等の閲覧」24%、「相談に対する対応」21%、人間生活学部は「求人票等の閲覧」27%、「職員数の増加」と「相談に対する対応」24%であった。また、2010年度において、文学部は2009年度と同様に、「職員数の増加」29%、「求人票等の閲覧」22%、「相談に対する対応」20%、人間生活学部は「職員数の増加」28%、「相談に対する対応」23%、「求人票等の閲覧」19%の順に高かった。キャリアサポートセンターの職員の増加への希望割合が高く、これへの対応が望まれる。

質問11 キャリアカウンセラーの相談を受けましたか？

文学部

2010年度

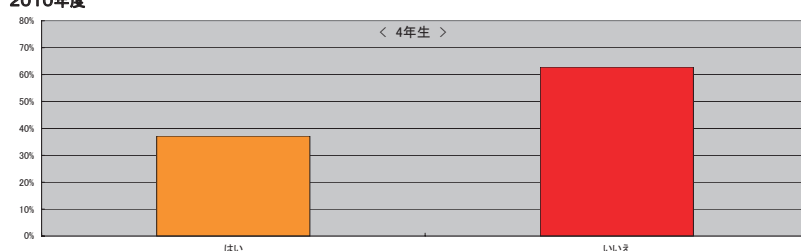


分析

「キャリアカウンセラーの相談を受けましたか？」についての質問は、2010年度からキャリアカウンセラーによる相談を始めたので、新設した。この問に対する4年生の「はい」の回答は、文学部は61%、人間生活学部は37%であった。人間生活学部において「はい」の回答割合が、文学部よりも24%も低くなっていた。人間生活学部へのキャリアカウンセラーに関する積極的な広報が望まれる。

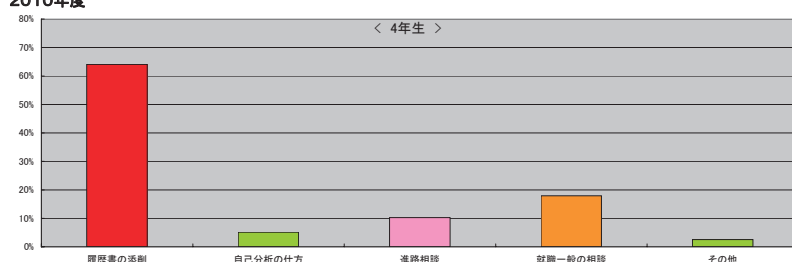
人間生活学部

2010年度

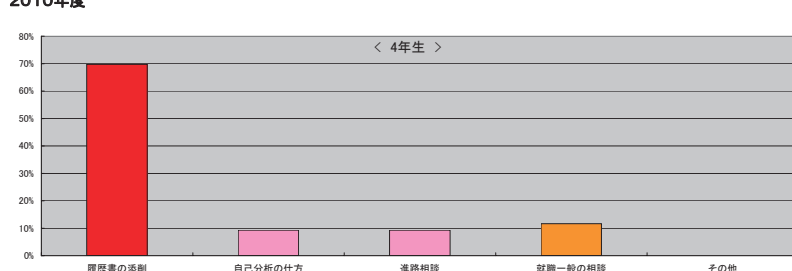


質問12 (キャリアカウンセラーの)相談内容はつぎのどれですか？

文学部
2010年度



人間生活学部
2010年度

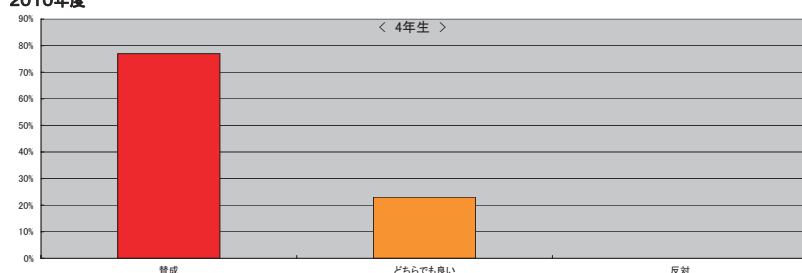


分析

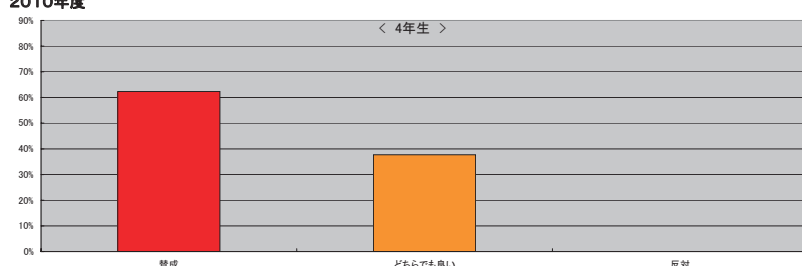
「(キャリアカウンセラーの)相談内容はつぎのどれですか？」についての質問は、2010年度からキャリアカウンセラーによる相談を開始したので、新設した。回答した4年生の相談内容で最も高い割合を示した項目は、文学部と人間生活学部ともに「履歴書の添削」であった。次に高かった項目は、両学部ともに「就職一般の相談」、つづいて「進路相談」、「自己分析の仕方」であった。特に、「履歴書の添削」に関する相談は回答者の約7割に上った。

質問13 キャリアカウンセラーを増員することについてはどうですか？

文学部
2010年度



人間生活学部
2010年度

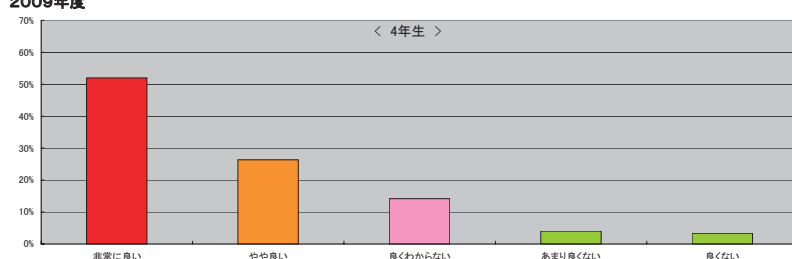


分析

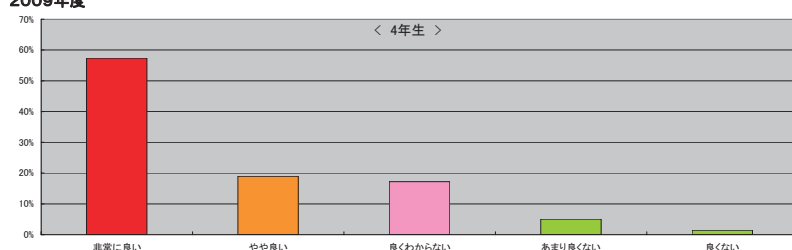
「キャリアカウンセラーを増員することについてはどうですか？」についての質問は、2010年度からキャリアカウンセラーによる相談を始めたので、新設した。この間に対する4年生の「賛成」の回答は、文学部は77%、人間生活学部は62%であった。人間生活学部において「賛成」の回答割合が、文学部よりも15%も低くなっていた。この原因として、人間生活学部の回答した4年生の63%がキャリアカウンセラーの相談を受けていない(質問11)こととの関連性が示唆される。

質問14 求人票(申込書)は、現在キャリアサポートセンターに来ないと閲覧することができません。新しいシステムを導入して、本学備付のパソコンで求人票(申込書)を見ることが出来るように準備中です。このことに対して、どう思うかを回答してください。

文学部
2009年度



人間生活学部
2009年度

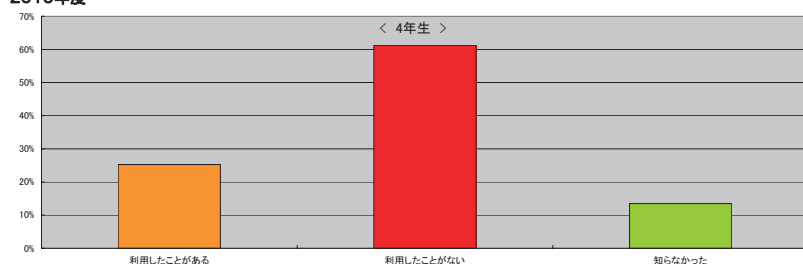


分析

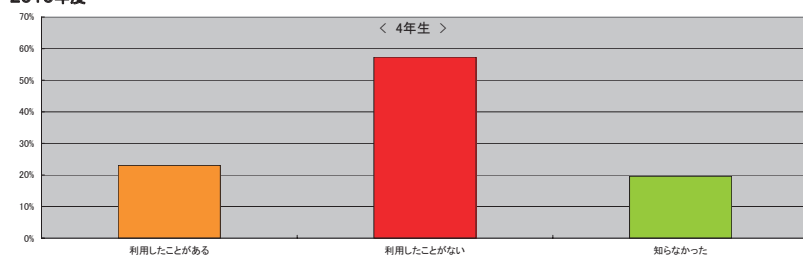
求人票(申込書)は、現在キャリアサポートセンターに来ないと閲覧することができません。新しいシステムを導入して、本学備付のパソコンで求人票(申込書)を見ることが出来るように準備中です。「このことに対して、どう思うか」について、4年生の回答者で「非常に良い」と「やや良い」と答えた合計割合は、文学部は78%、人間生活学部は76%であった。一方、「あまり良くない」と「良くない」と答えた合計割合は、文学部は8%、人間生活学部は6%であった。両学部の回答者の多くが、「新しいシステムを導入して、本学備付のパソコンで求人票(申込書)を見ることが出来る」ことを望んでいることが分かった。

質問15 求人票(申込書)は、学務部キャリアサポートセンター以外に、OPIT教室のパソコンを用いても閲覧することができます。OPIT教室のパソコンを利用したことがあるか回答してください。

文学部
2010年度



人間生活学部
2010年度

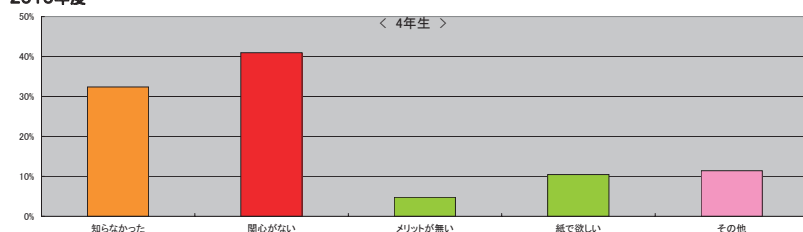


分析

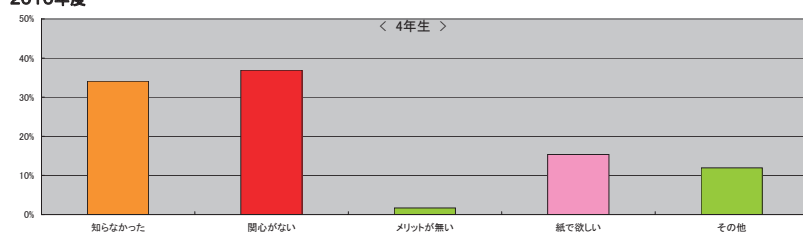
2010年度からWebによる求人票の閲覧を開始したので、これは2010年度に新設した質問項目である。求人票(申込書)は、キャリアサポートセンター以外に、OPIT教室のパソコンを用いても閲覧することができます。「OPIT教室のパソコンを利用したことがある」について、回答した4年生で「利用したことがある」と答えた割合は、文学部は25%、人間生活学部は23%であった。「利用したことがない」の回答割合が、文学部は61%、人間生活学部は57%であった。また、「知らなかった」の回答割合が、文学部は14%、人間生活学部は20%であった。両学部の回答者の半数を超える人が「利用していない」と答えている。この原因の調査と「知らなかった」への積極的な対応が望まれる。

質問16 (OPIT教室のパソコン)利用しない理由について回答してください。

文学部
2010年度



人間生活学部
2010年度

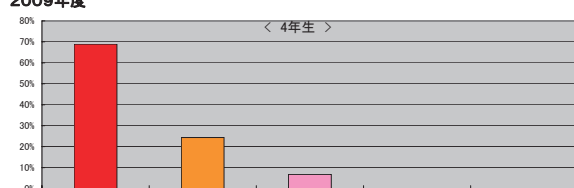


分析

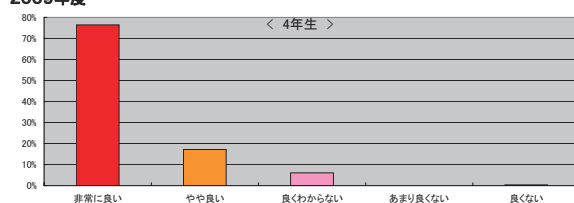
「(OPIT教室のパソコンを)利用しない理由」について、回答した4年生で最も高い割合を示した項目は、文学部と人間生活学部ともに「関心がない」約40%であった。次に高かった項目は、両学部ともに「知らなかった」約33%、つづいて文学部は「その他」、人間生活学部は「紙で欲しい」であった。Webによる就職情報の閲覧を両学部ともに回答者の8割弱が希望していた。しかし、「利用しない理由」として両学部ともに回答者の約4割が「関心がない」と答えている。この両者は整合性に欠けており、Webによる就職情報の閲覧のメリットについて広報する必要がある。このことは、回答者の約3割が答えた「知らなかった」にも対応することになる。

質問17 求人票(申込書)を、インターネットを利用して学外(自宅等)で閲覧できるとしたらどう考えますか？

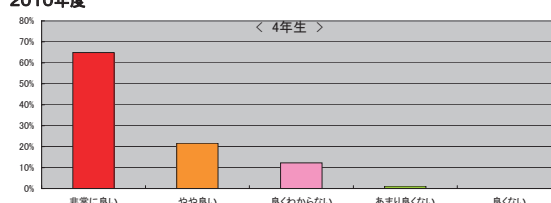
文学部
2009年度



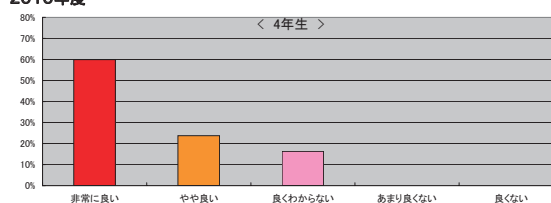
人間生活学部
2009年度



2010年度



2010年度



分析

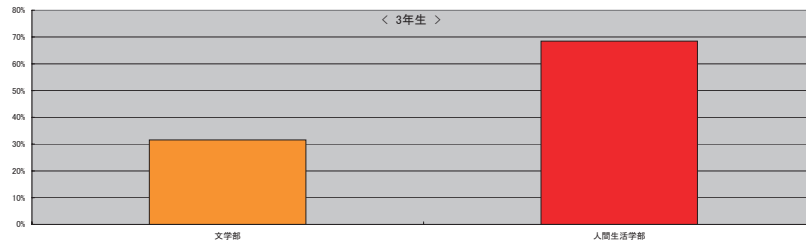
「求人票(申込書)を、インターネットを利用して学外(自宅等)で閲覧できるとしたらどう考えますか？」について、4年生の回答者で「非常に良い」と「やや良い」と答えた合計割合は、2009年度において、文学部は93%、人間生活学部は94%、2010年度は文学部で87%、人間生活学部で84%であった。両学部の回答者の多くが、「求人票(申込書)を、インターネットを利用して学外(自宅等)で閲覧できる」ことを望んでいる。

2009・2010年度 キャリア支援に対するアンケート

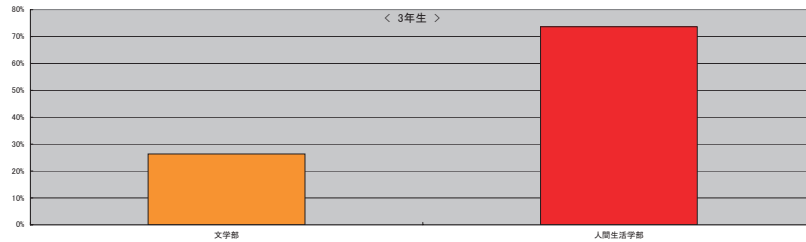
— 教職課程について — 学部

※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問1 あなたの学部を教えてください。 2009年度



2010年度

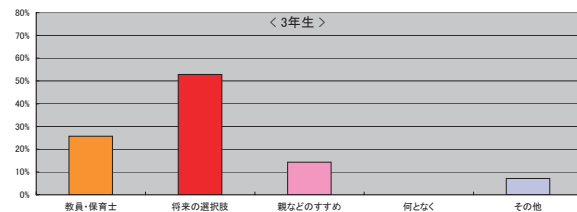


分析

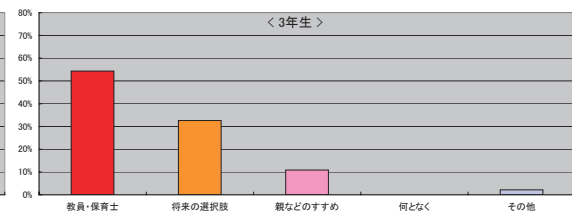
3年生の全履修者数における回答率は、2009年度において、文学部は92%、人間生活学部は82%であった。回答者数に占める学部回答者の割合は、文学部は32%、人間生活学部は68%であった。また、2010年度における全履修者における回答率は、文学部は92%、人間生活学部は86%であった。回答者数に占める学部回答者の割合は、文学部は26%、人間生活学部は74%であった。回答率は、両年度ともに文学部が人間生活学部よりも約10%高かった。人間生活学部では2010年度で2009年度よりもわずかに増加した。

質問2 教職課程を履修した動機を教えてください。

文学部 2009年度

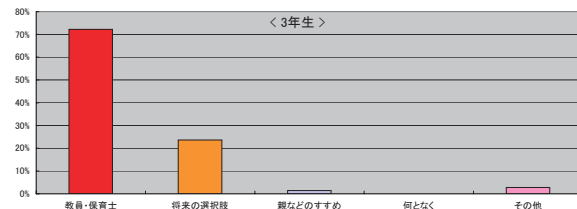


2010年度

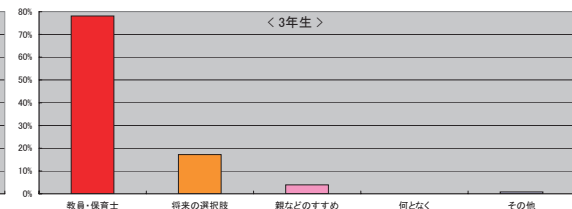


人間生活学部

2009年度



2010年度



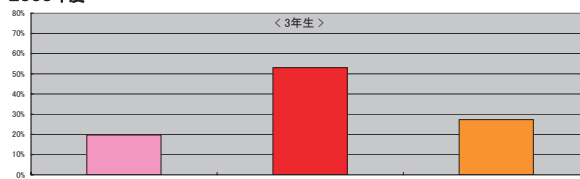
分析

「教職課程を履修した動機を教えてください」について、3年生の履修者におけるか回答率は、2009年度において、文学部で「将来の選択肢」53%、「教員・保育士」26%、「親などのすすめ」14%、人間生活学部で「教員・保育士」72%、「将来の選択肢」24%、「親などのすすめ」1.4%と、文学部では「親などのすすめ」が5割をこえていたが、人間生活学部では「教員・保育士」の回答が7割を超えていた。2010年度において、文学部で「教員・保育士」54%、「将来の選択肢」33%、「親などのすすめ」11%、人間生活学部で「教員・保育士」78%、「将来の選択肢」25%、「親などのすすめ」1.4%であった。文学部、人間生活学部ともに、2010年度は「将来の選択肢」が減少して「教員・保育士」の回答率が増加した。教職課程を履修した動機として、人間生活学部は「教員・保育士」の回答が文学部よりも約25%高かった。

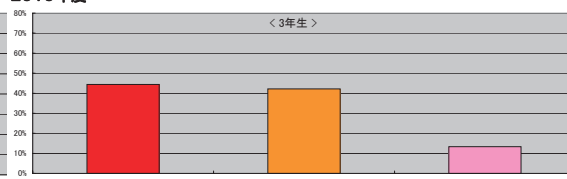
質問3 あなたは将来、教師や保育士になりたいという気持ちがありますか。

文学部

2009年度

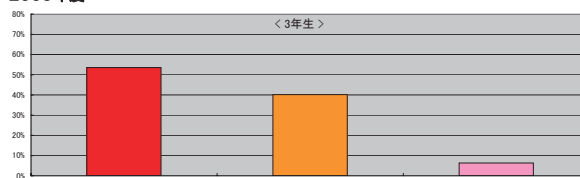


2010年度

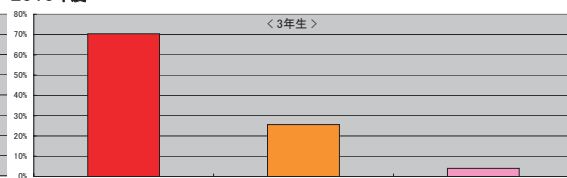


人間生活学部

2009年度



2010年度



分析

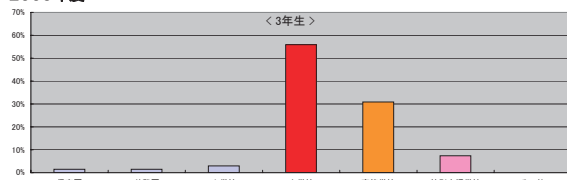
「あなたは将来、教師や保育士になりたいという気持ちがありますか」について、3年生の回答者において「ぜひなりたい」の回答率は、2009年度において、文学部は20%、人間生活学部は54%と、人間生活学部が文学部よりも34%高かった。また、その回答率は、2010年度において、文学部は44%、人間生活学部は70%であった。

特に、2010年度においては、「ぜひなりたい」の回答率が、文学部で24%、人間生活学部で16%高かった。

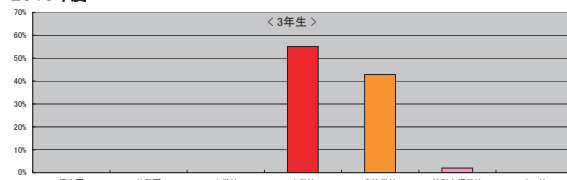
質問4 教職への就職希望がある場合、それはどのような学校園でしょうか。

文学部

2009年度

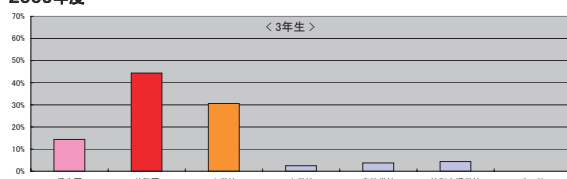


2010年度

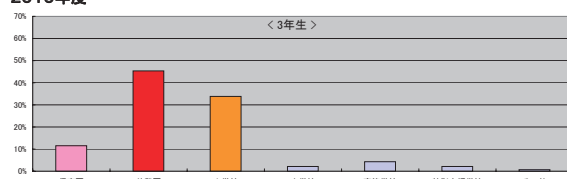


人間生活学部

2009年度



2010年度



分析

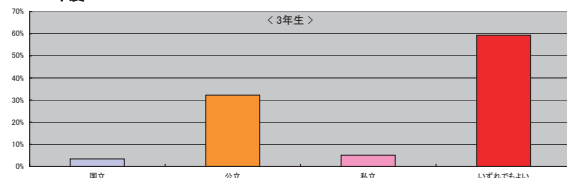
「教職への就職希望がある場合、それはどのような学校園でしょうか」について、3年生の全回答者において、2009年度の回答率は、文学部は「中学校」56%、「高等学校」31%、「特別支援学校」7%、人間生活学部は「幼稚園」44%、「小学校」31%、「保育園」15%であった。また、2010年度では、文学部は「中学校」55%、「高等学校」43%、「特別支援学校」4%、人間生活学部は「幼稚園」45%、「小学校」34%、「保育園」16%であった。

両年度の両学部の就職希望学校園の回答割合は、ほぼ同じであった。

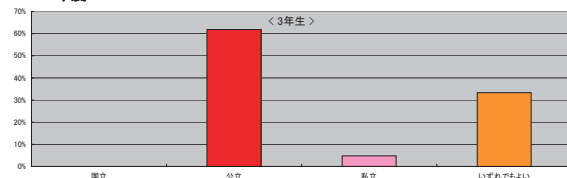
質問5 学校園の設置種別での希望がありますか。

文学部

2009年度

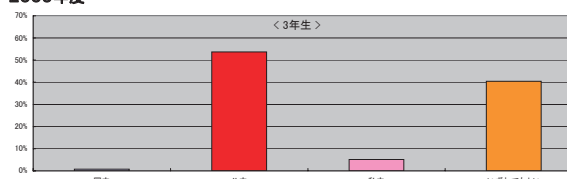


2010年度

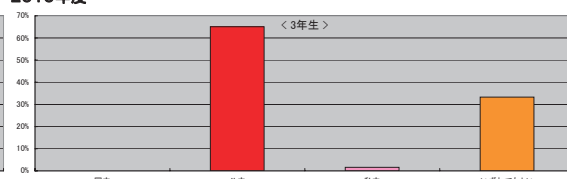


人間生活学部

2009年度



2010年度



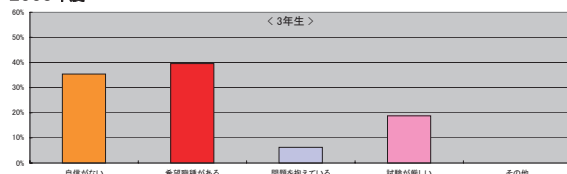
分析

「学校園の設置種別での希望がありますか」について、3年生の全回答者において、2009年度の回答率は、文学部は「いずれでもよい」59%、「公立」32%、「私立」5%、人間生活学部は「公立」54%、「いずれでもよい」40%、「私立」2%であった。また、2010年度においては、文学部は「公立」62%、「いずれでもよい」33%、「私立」5%、人間生活学部は「公立」65%、「いずれでもよい」33%と、「私立」2%であった。

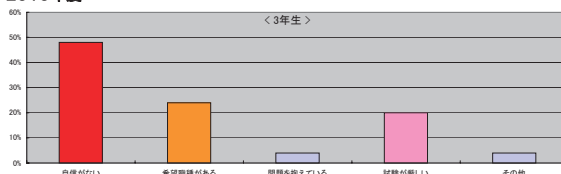
2010年度においては、両学部ともに「公立」の希望が増加した。つまり、文学部では「いずれでもよい」が26%減少し、「国立」の回答が無くなり、逆に「公立」30%増加し、人間生活学部では「いずれでもよい」が7%減少し、逆に「公立」が11%増加した。

質問6 (質問3で迷っていると答えた人へ)あなたが迷っている理由を教えてください。

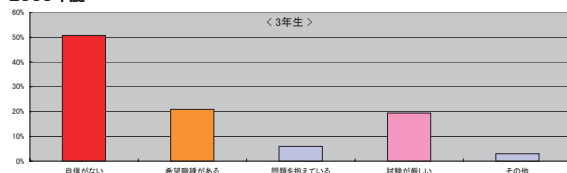
文学部
2009年度



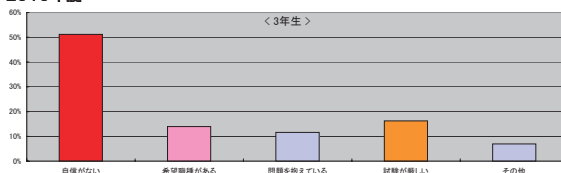
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度

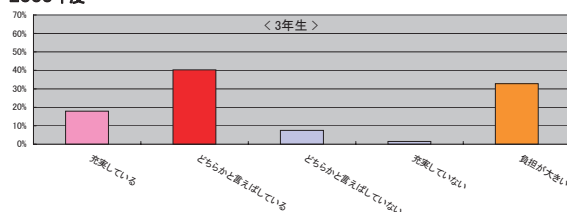


分析

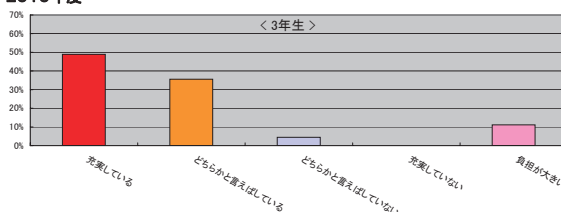
「(質問3で迷っていると答えた人へ)あなたが迷っている理由を教えてください」について、3年生の全回答者において、2009年度の回答率は文学部で「希望職種がある」40%、「自信がない」35%、「試験が厳しい」19%、人間生活学部で「自信がない」51%、「希望職種がある」21%、「試験が厳しい」19%であった。2010年度では、文学部で「自信がない」48%、「希望職種がある」24%、「試験が厳しい」20%、人間生活学部では、「自信がない」51%、「試験が厳しい」16%、「希望職種がある」14%であった。
2010年度では2009年度に比べて、文学部で「自信がない」が13%増加した。

質問7 教職履修に関する現在の思いを教えてください。

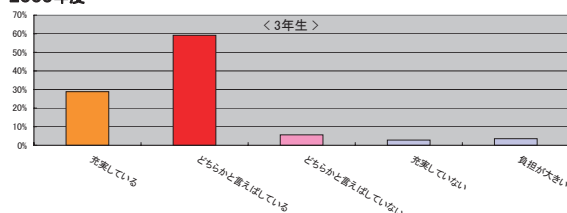
文学部
2009年度



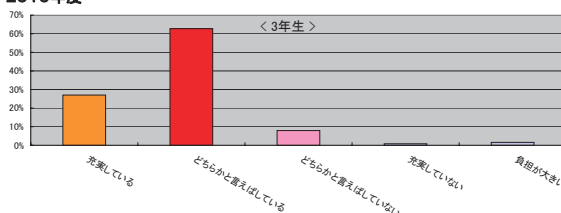
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度

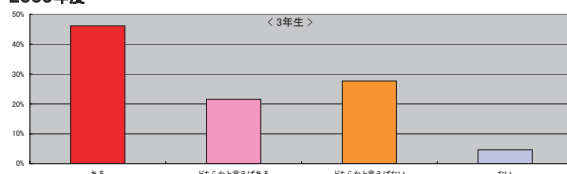


分析

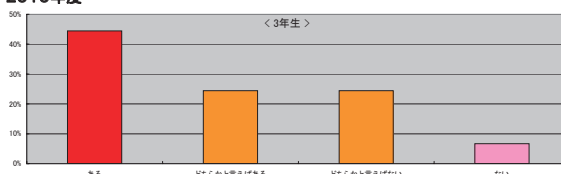
「教職履修に関する現在の思いを教えてください」について、3年生の全回答者において、2009年度において「充実している」と「どちらかと言えばしている」と答えた人の合計割合が、文学部で58%、人間生活学部で88%であった。2010年度におけるその割合は、文学部で85%、人間生活学部で90%であった。
2010年度における「充実している」と「どちらかと言えばしている」と答えた人の合計の回答率は、2009年度に比べて、人間生活学部では差がないが、文学部で27%増加した。

質問8 教職履修に関して不安や悩みがありますか。

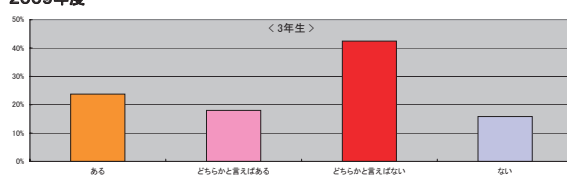
文学部
2009年度



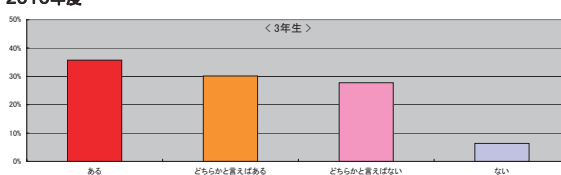
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度

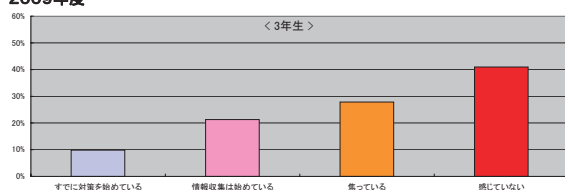


分析

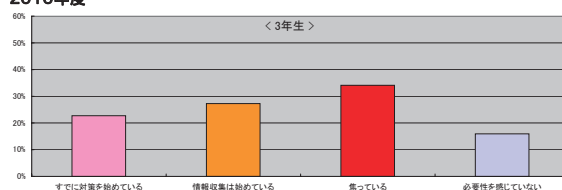
「教職履修に関して不安や悩みがありますか」について、3年生の全回答者において、2009年度において「ある」と「どちらかと言えばある」と答えた人の合計割合が、文学部で68%、人間生活学部で42%であった。2010年度におけるその割合は、文学部で69%、人間生活学部で66%であった。
2010年度における「ある」と「どちらかと言えばある」と答えた人の合計の回答率は、2009年度に比べて、文学部では差がないが、人間生活学部で24%増加した。

質問9 あなたは教員採用試験に関して、何か準備をしていますか。

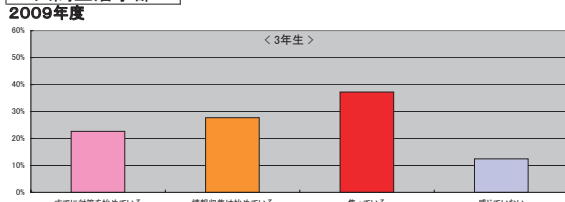
文学部
2009年度



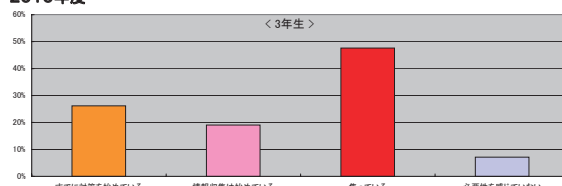
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度



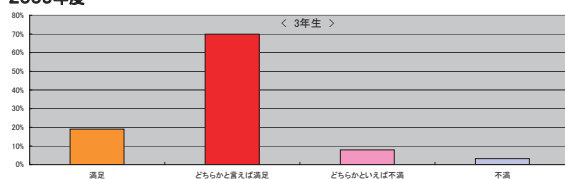
分析

「あなたは教員採用試験に関して、何か準備をしていますか」について、3年生の回答率は、文学部で「すでに対策を始めている」10%、「情報収集は始めている」21%、「焦っている」28%、「感じていない」41%、人間生活学部で「すでに対策を始めている」23%、「情報収集は始めている」27%、「焦っている」34%、「感じていない」16%、人間生活学部で「すでに対策を始めている」26%、「情報収集は始めている」19%、「焦っている」48%、「感じていない」7%であった。

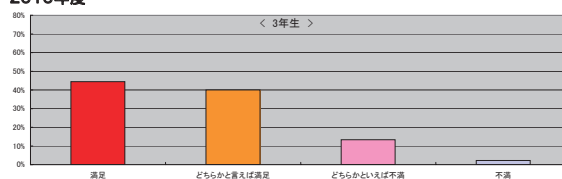
特に、回答率は、2010年度において2009年度よりも、文学部で「すでに対策を始めている」が13%、「情報収集は始めている」が7%増加し、「感じていない」が25%減少し、人間生活学部で「すでに対策を始めている」が3%増加し、「情報収集は始めている」が9%減少し、「焦っている」が11%増加した。2009年度よりも2010年度では、文学部では採用試験準備が早まり、人間生活学部ではその準備が遅れている。

質問10 あなたは本学の教職への支援についてどのように思っていますか。

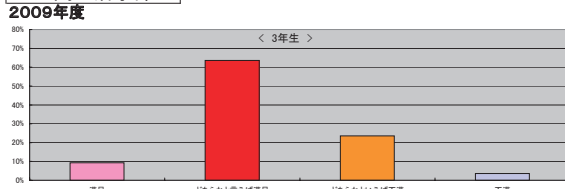
文学部
2009年度



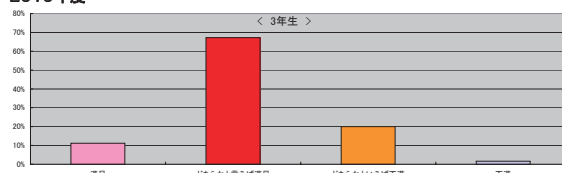
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度



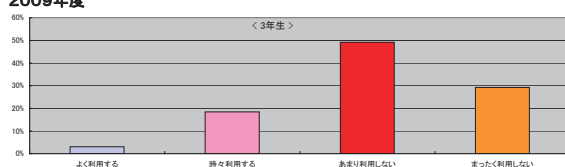
分析

「あなたは本学の教職への支援についてどのように思っていますか」について、3年生の回答率は、2009年度において、「満足」と「どちらかと言えば満足」と答えた人の合計割合は、文学部で89%、人間生活学部で73%、2010年度においては、文学部で84%、人間生活学部で78%であった。「満足」と「どちらかと言えば満足」の合計の回答率は、両年度ともに、文学部で人間生活学部よりも高かった。

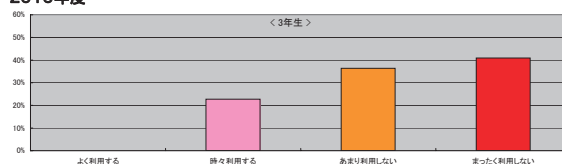
特に、2010年度においては、「満足」と「どちらかと言えば満足」と答えた人の合計割合が、2009年度に比べて、文学部では5%減少し、逆に人間生活学部では5%増加した。

質問11 あなたは諸課程の資料を利用したことがありますか。

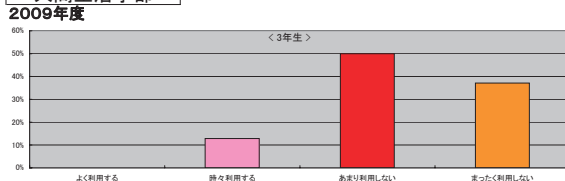
文学部
2009年度



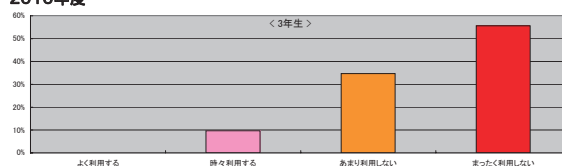
2010年度



人間生活学部
2009年度



2010年度



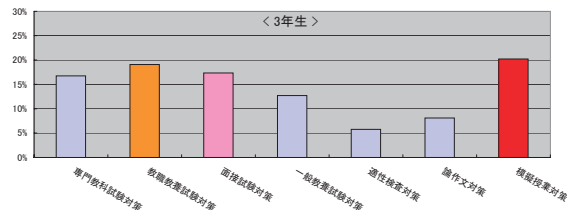
分析

「あなたは諸課程の資料を利用したことがありますか」について、3年生の回答率は、2009年度において、「あまり利用しない」と「まったく利用しない」と答えた人の合計割合は、文学部で78%、人間生活学部で87%、2010年度においては、文学部で77%、人間生活学部で90%であった。「あまり利用しない」と「まったく利用しない」と答えた人の合計割合は、両年度ともに、人間生活学部で文学部よりも高かった。

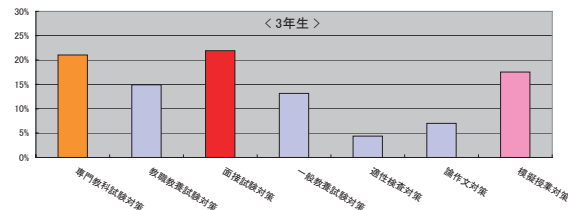
質問12 あなたは教職課程で、どのような支援又は情報を望みますか。(複数回答可)

文学部

2009年度

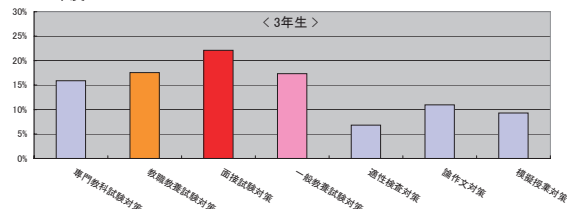


2010年度

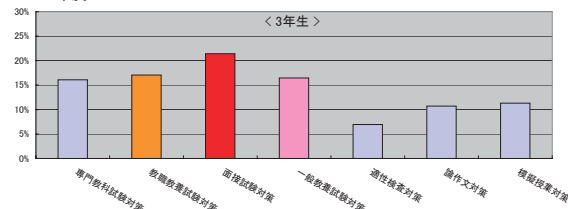


人間生活学部

2009年度



2010年度



分析

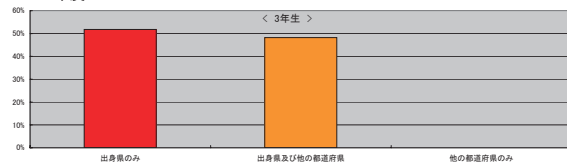
「あなたは教職課程で、どのような支援又は情報を望みますか」(複数回答可)について、3年生において、最も回答割合が高かった項目は、2009年度で、文学部は「模擬授業対策」20%、人間生活学部は「面接試験対策」22%であった。また、次に高かった項目は、「教職教養試験対策」で文学部が19%、人間生活学部が18%であった。2010年度において、最も回答割合が高かった項目は、両学部ともに「面接試験対策」で文学部が22%、人間生活学部が21%であった。また、次に高かった項目は、文学部で「専門教養試験対策」21%、人間生活学部で「教職教養試験対策」17%であった。

両学部ともに、「面接試験対策」や「教職教養試験対策」の支援を特に望んでいる。

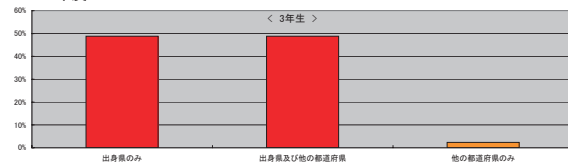
質問13 あなたは教員採用試験をどこで受けようと考えていますか。

文学部

2009年度

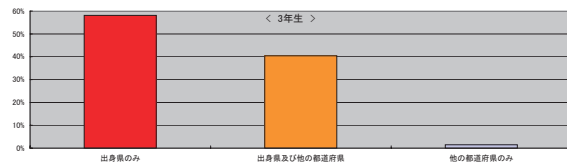


2010年度

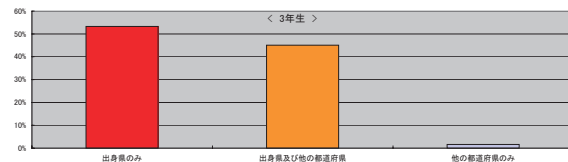


人間生活学部

2009年度



2010年度



分析

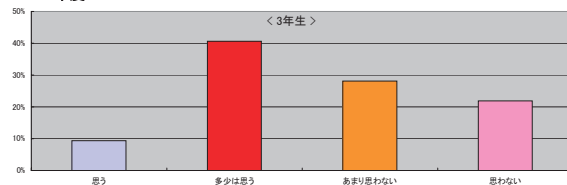
「あなたは教員採用試験をどこで受けようと考えていますか」について、3年生において、最も回答割合が高かった項目は、2009年度と2010年度ともに、「出身県のみ」が高く、2009年度で文学部が52%、人間生活学部が58%、2010年度で文学部が49%、人間生活学部が53%であった。

しかし、2010年度においては、文学部では「出身県のみ」と「出身県及び他の都道府県」の回答割合が等しくなり49%であった。人間生活学部においてのこの割合が5%増加した。

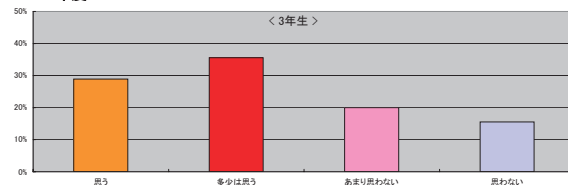
質問14 あなたは県外の採用試験の説明会に参加したいと思いますか。

文学部

2009年度

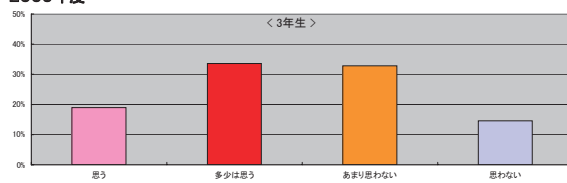


2010年度

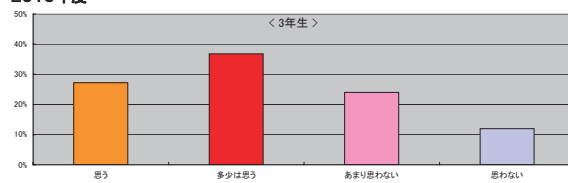


人間生活学部

2009年度



2010年度



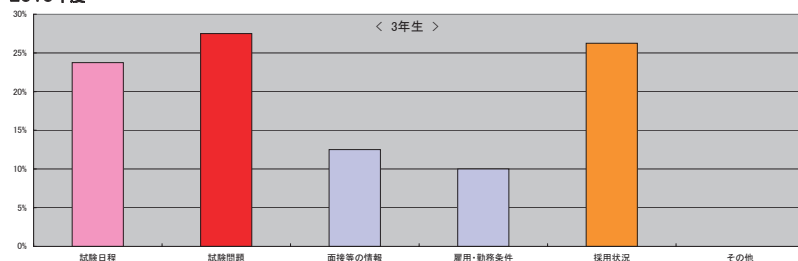
分析

「あなたは県外の採用試験の説明会に参加したいと思いますか」について、3年生において、「思う」と「多少は思う」と答えた人の合計割合は、2009年度において、文学部が50%、人間生活学部で52%であった。また、2010年度でのその割合は、文学部が65%、人間生活学部で64%であった。

2010年度においては、「思う」と「多少は思う」と答えた人の合計割合は、文学部で15%、人間生活学部で12%高くなった。

質問15 県外の教員採用試験について、どのような情報が必要だと考えていますか。

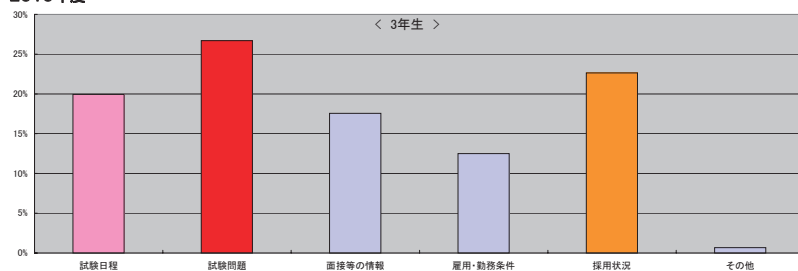
文学部
2010年度



分析

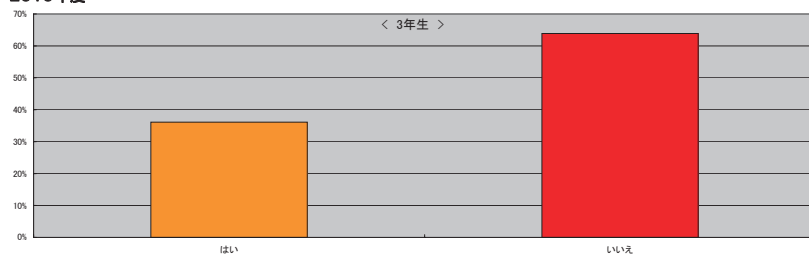
2010年度に新設した質問項目である。「県外の教員採用試験について、どのような情報が必要だと考えていますか」について、3年生の回答割合は、両学部ともに項目の順位は同じで、「試験問題」が文学部で28%、人間生活学部で27%、「採用状況」が文学部で26%、人間生活学部で23%、「試験日程」が文学部で24%、人間生活学部で20%であった。

人間生活学部
2010年度



質問16 県外の教員採用試験を受ける予定ですか。

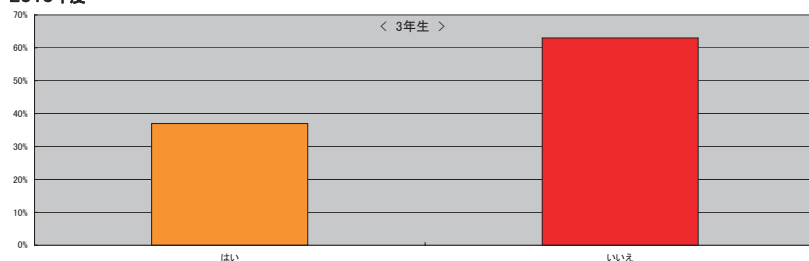
文学部
2010年度



分析

2010年度に新設した質問項目である。「県外の教員採用試験を受ける予定ですか」について、3年生の回答割合は、「いいえ」が文学部で64%、人間生活学部で63%であった。

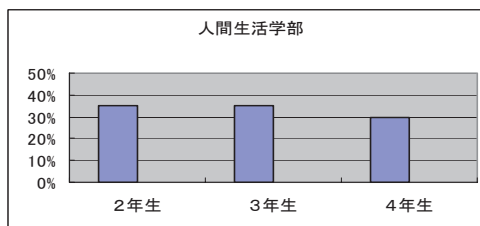
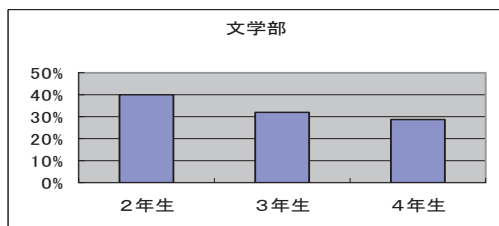
人間生活学部
2010年度



2011年度 キャリア支援に対するアンケート ーキャリアサポートセンターについてー 全学

※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問. 1 学年を教えてください。

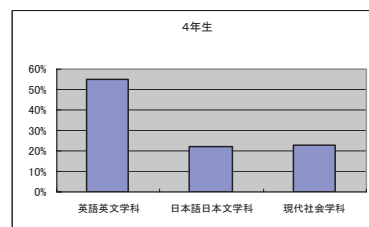
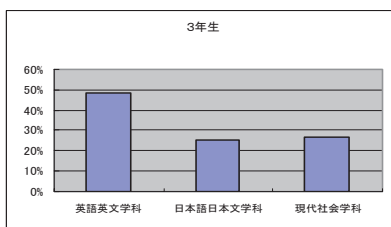
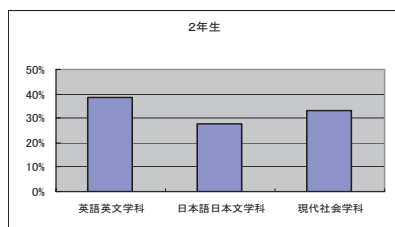


分析

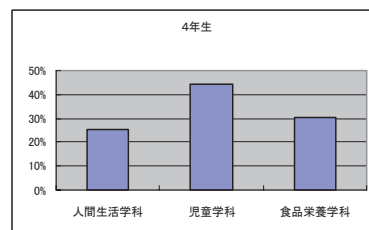
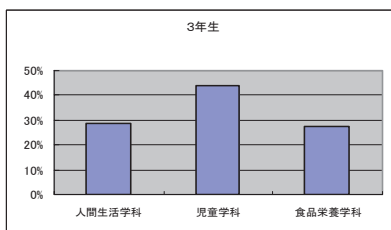
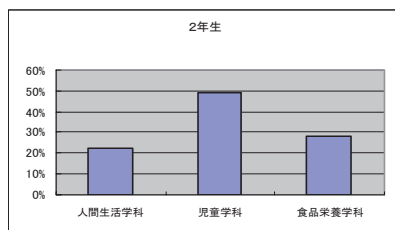
質問 1～10 はキャリアサポートに関するものである。アンケートに応じた 2011 年度の両学部の 2 有効回答率は、文学部で 72%、人間生活学部で 86%であった。2009、2010、2011 年度のその割合 (%) の推移は、文学部で 70、80、72、人間生活学部で 80、86、86 と、人間生活学部で高かった。2011 年度の 2～4 年生のその割合 (%) は、文学部で 89、64、64、人間生活学部で 87、87 と、低学年ほど高かった。また、009、2010、2011 年度の各学年のその割合 (%) の推移は、両学部ともに、2 年生は年度が進むにつれて高くなったが、3、4 年生は逆に低くなる傾向を示した。

質問. 2 所属学科を教えてください。

文学部



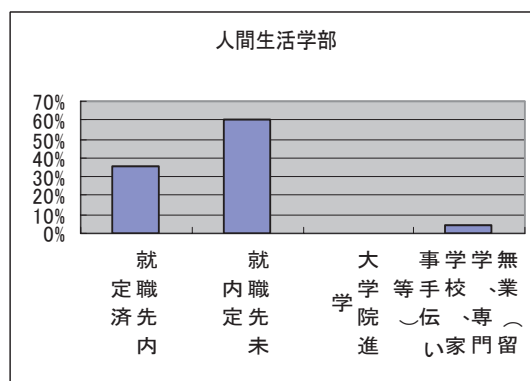
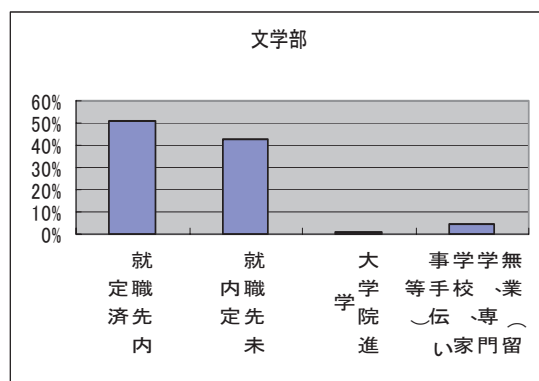
人間生活学部



分析

2011 年度の各学科の有効回答率 (%) は、2 年生が文学部の英文 90、日文 88、現社 89、人間生活学部の人生 82、児童 89、食品 90、3 年生が文学部の英文 72、日文 56、現社 61、人間生活学部の人生 93、児童 80、食品 92、4 年生が文学部の英文 83、日文 47、現社 54、人間生活学部の人生 86、児童 78、食品 89 と、2 年生は両学部には差はないが、3、4 年生は人間生活学部で高かった。2009～2011 年度のその推移 (%) は、両学部の 2 年生と人間生活学部の 3、4 年生は各年度ともに 80～90 と高かったが、文学部では、年度が進むにつれて低くなっていた。

質問. 3 「4年生」は、次のいずれかを選択してください。

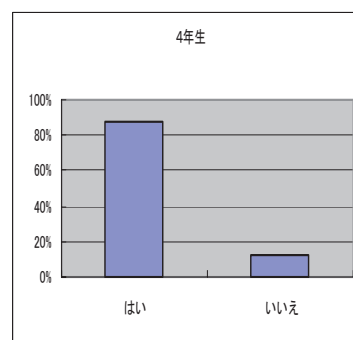
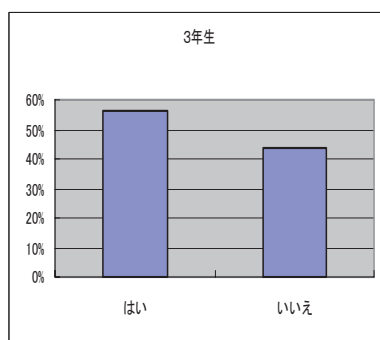
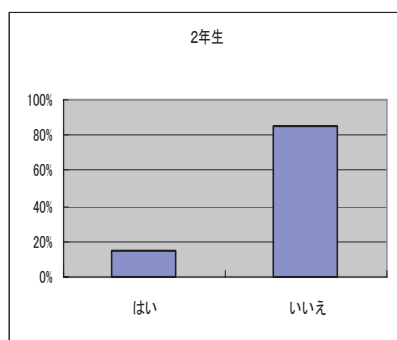


分析

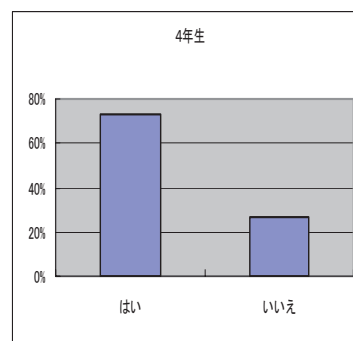
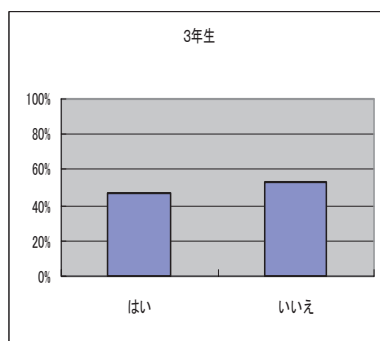
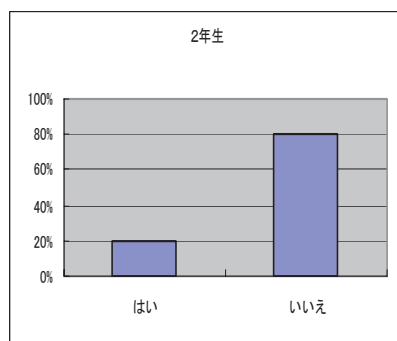
就職先の内定済みは、2011 年度では、文学部 51%、人間生活学部 35%であった。2009～2011 年度のその推移 (%) は、文学部で 62、53、51、人間生活学部で 51、48、35 と年度が進むにつれて低下していた。人間生活学部の内定率が、文学部よりも低くなる要因の 1 つとして、児童学科の講師希望者の就職先未定がある。

質問. 4 学務部キャリアサポートセンターが学生向けに支援している内容を知っていますか。

文学部



人間生活学部

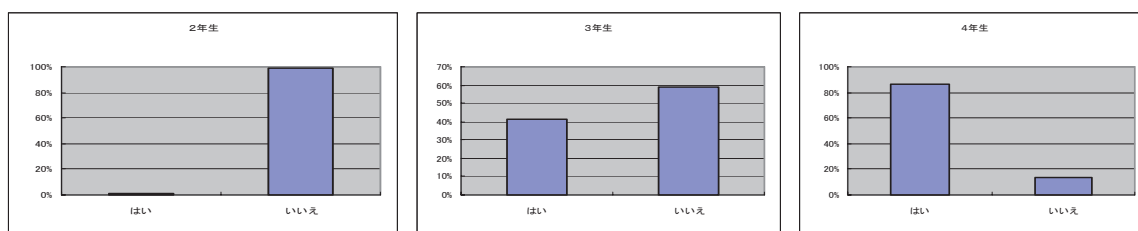


分析

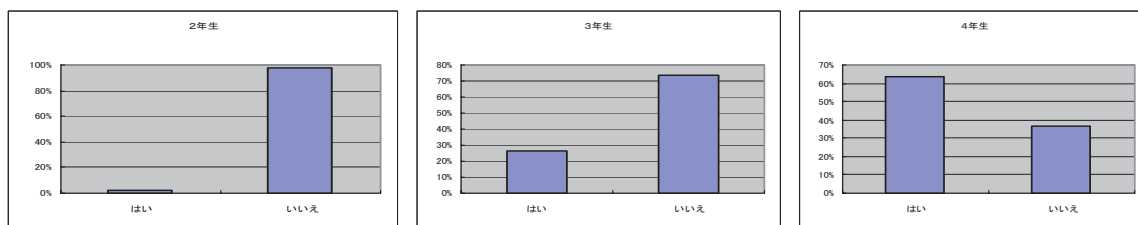
「キャリアサポートセンターが学生向けに支援している内容を知っていますか」について「はい」の回答率 (%) は、2011 年度の 2～4 年生では、文学部で 15、56、88、人間生活学部で 20、46、73 と、両学部ともに学年が上がるにつれて、高くなっていた。この傾向は、2009～2011 年度についても同じであった。また、2009～2011 年度の 4 年生におけるその推移 (%) は、文学部では 80%後半で推移していたが、人間生活学部では年度が進むにつれて低下し、2011 年度は 2009 年度に比べて 10%低くなっていた。この低下が、就職先内定率が文学部より低い要因の 1 つとなっている可能性がある。

質問. 5 学務部キャリアサポートセンターを利用したことがありますか。

文学部



人間生活学部



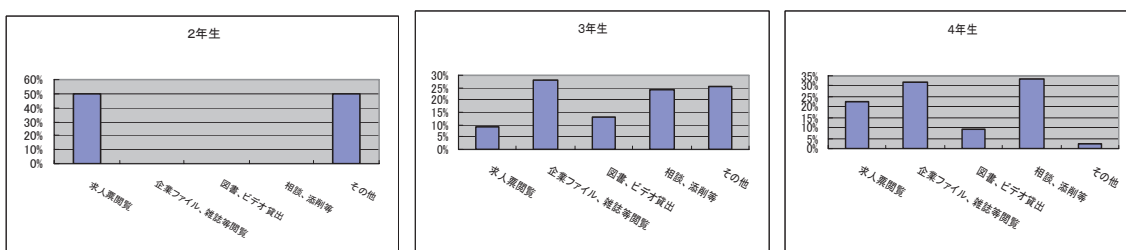
分析

「キャリアサポートセンターを利用したことがありますか」について「はい」の回答率(%)は、2011年度の2～4年生では、文学部で1、42、87、人間生活学部で3、26、63と、両学部ともに学年が上がるにつれて、高くなっており、文学部では学年が上がるほど人間生活学部よりも高くなっていった。また、また、2009～2011年度の4年生におけるその推移(%)は、文学部では約85%で推移していたが、人間生活学部では年度が進むにつれて低下し、2011年度は2009年度に比べて20%低くなっていた。この低下が、就職先内定率が文学部より低い要因の1つとなっている可能性がある。

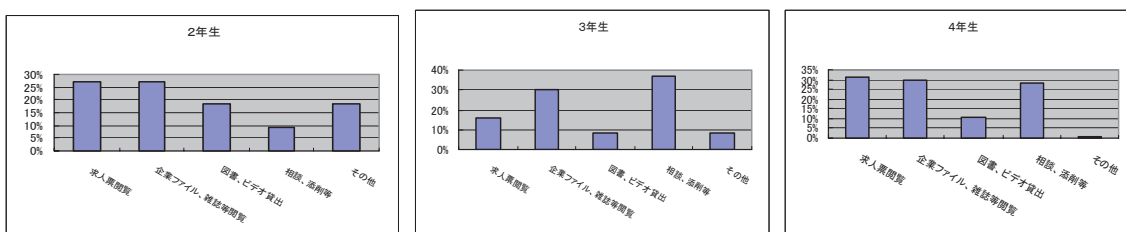
*「質問. 5」で「1. はい」と答えた方へ

質問. 6 利用した目的は次のどれですか。(複数回答可)

文学部



人間生活学部

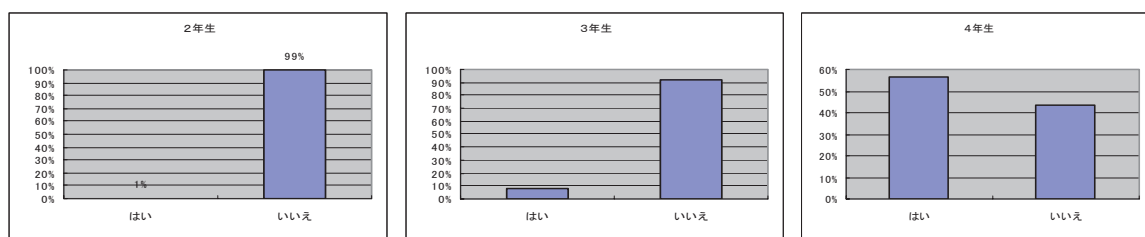


分析

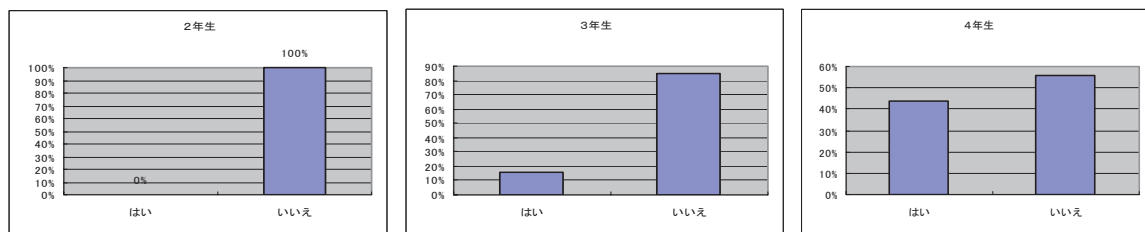
「キャリアサポートセンターを利用したことがありますか」について「はい」と答えた人の「利用した目的」(複数回答可)は、「相談、添削等」、「求人票閲覧」、「企業ファイル、雑誌等閲覧」が2～4年生ともに高かった。2009～2011年度の各年度ともに、4年生では、文学部において「企業ファイル、雑誌等閲覧」、人間生活学部において「求人票閲覧」が最も高く、就職活動に直結した情報を求めていることが分かった。この回答率に、経年的な特徴は認められなかった。

質問. 7 学務部キャリアサポートセンターでキャリアカウンセリングの相談を受けましたか。

文学部



人間生活学部



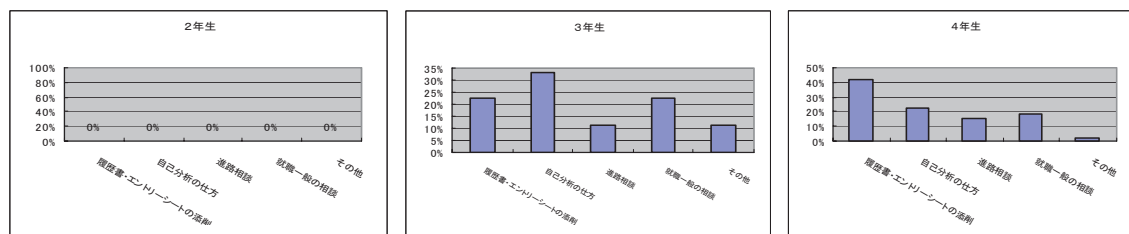
分析

「キャリアサポートセンターでキャリアカウンセリングの相談を受けましたか」についての質問は、キャリアカウンセラーを採用した 2010 と 2011 年度に設けたものである。2011 年度の 2～4 年生の回答率 (%) は、文学部で 4、36、61、人間生活学部で 0、37、44 と、学年が高くなるにつれて利用率が高くなっていた。4 年生を両年度で比較すると、文学部は 61% から 57% へ僅かに減少し、人間生活学部では 37% から 44% へ僅かに増加していた。

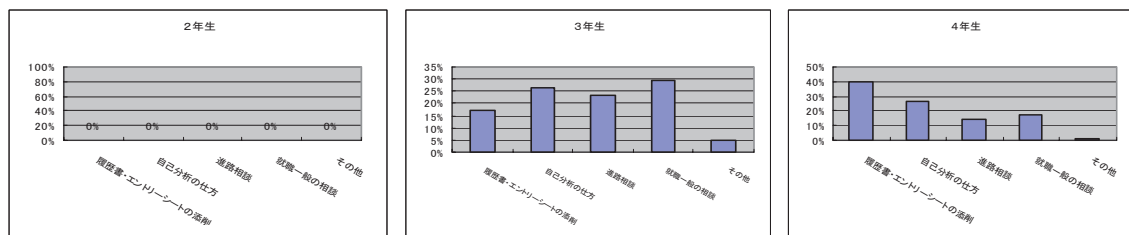
*「質問. 7」で「1. はい」と答えた方へ

質問. 8 相談内容は次のどれですか。(複数回答可)

文学部



人間生活学部

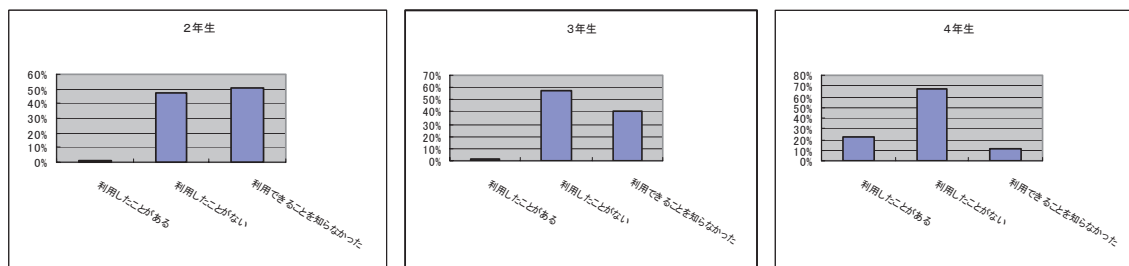


分析

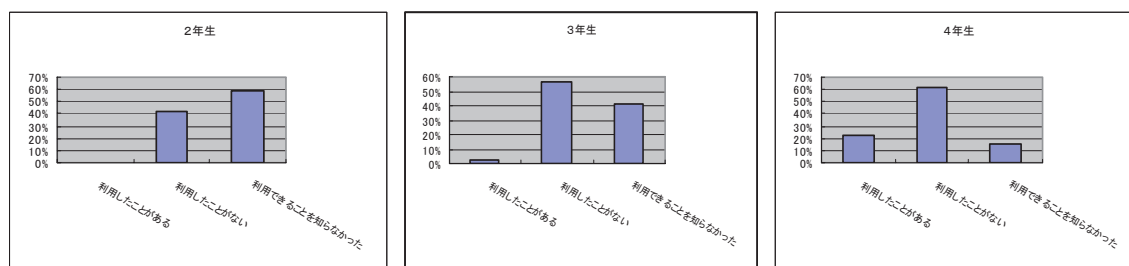
キャリアカウンセリングの「相談内容は次のどれですか」(複数回答可)についても 2010、2011 年度に設けた質問項目である。2011 年度の 4 年生は、両学部ともに「履歴書・エントリーシートの添削」、「自己分析の仕方」、「就職一般の相談」の順に回答率が高かった。3 年生では、文学部はこの 3 項目で回答率が高かったが、人間生活学部では「履歴書・エントリーシートの添削」に代わって、「進路相談」であった。2010 年度の調査においても、「履歴書・エントリーシートの添削」、「自己分析の仕方」、「就職一般の相談」、「進路相談」の回答率が高かった。

質問. 9 求人票(申込書)は、学務部キャリアサポートセンター以外にOPIT教室のパソコンを用いても閲覧することができます。OPIT教室で求人票の閲覧を利用したことがあるか回答してください。

文学部



人間生活学部

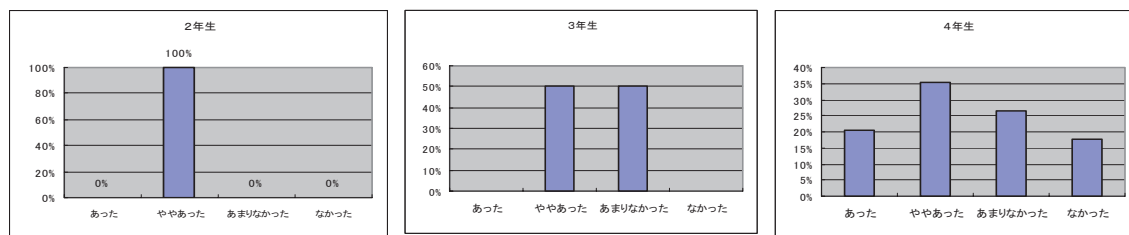


分析

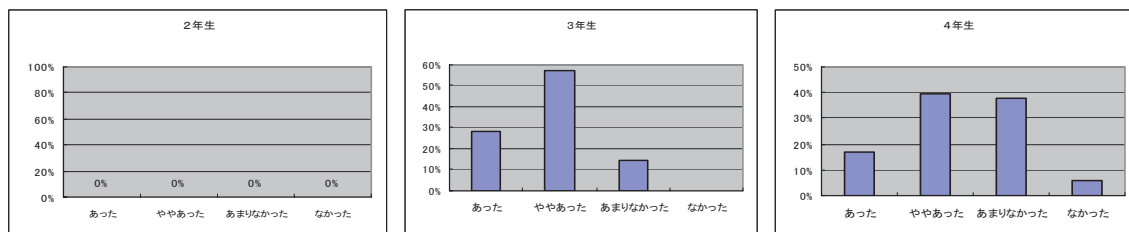
「OPIT教室で求人票の閲覧を利用したことがあるか」については、2～4年生の「ある」の回答率(%)は、2011年度の文学部で1、3、22、人間生活学部で0、3、22であった。2011年度の文学部で25、24、25、人間生活学部で22、20、23と、両年度に「ある」の回答率に4年生では変化がないが、2、3年生では低下していた。OPIT教室で求人票の閲覧が可能であることを知っていても「利用しなかった」の回答割合が、両年度、両学部ともに3、4年生でほぼ6割に達していた。

質問. 10 求人票をOPIT教室のパソコンで閲覧して、メリットがありましたか。

文学部



人間生活学部



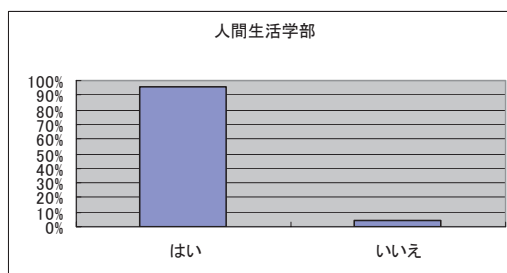
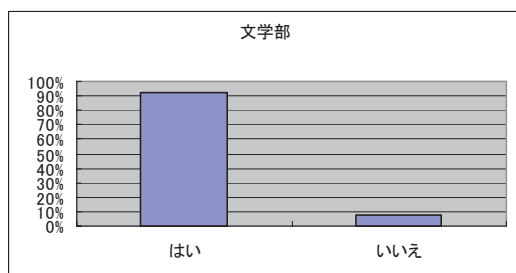
分析

「求人票をOPIT教室のパソコンで閲覧して、メリットがありましたか」については、2011年度に新たに設けた質問項目である。「あった」と「ややあった」の合計割合(%)は、2～4年生で、文学部は100、50、56、人間生活学部で0、86、57と、求人票をOPIT教室のパソコンで閲覧した人の半数以上がそのメリットを認めていた。

2011年度 キャリア支援に対するアンケート —学生相談室について— 全学

※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

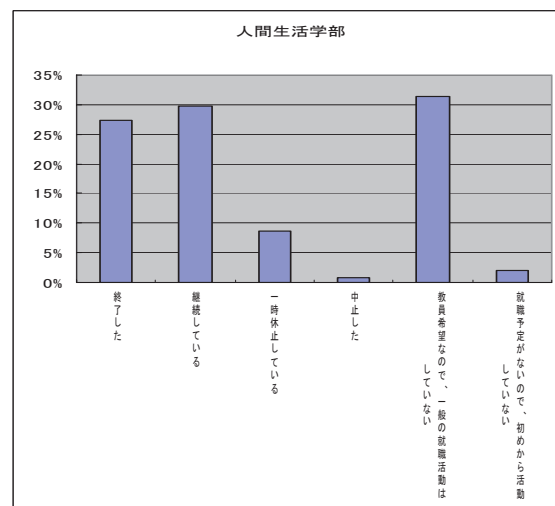
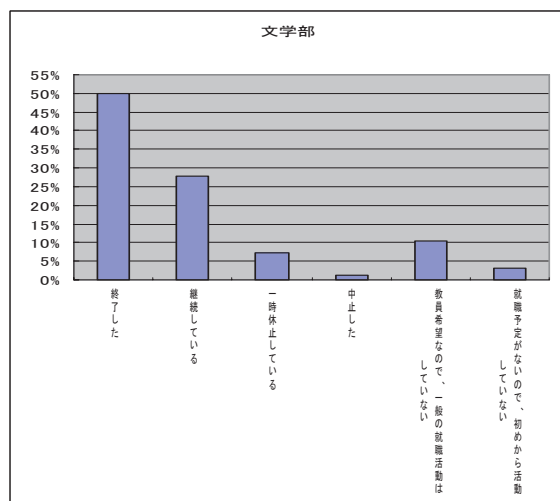
質問. 1 1 あなたは就職を希望していますか。



分析

質問 11～16 は、4 年生についての学生相談に関するものである。「あなたは就職を希望していますか」については、2011 年度は、文学部で 93%、人間生活学部で 95%であった。2009 年度と 2010 年度は、大学全体の 4 年生にアンケートを実施しており、その結果は両年度ともに 95%であった。このことから、2009～2011 年度において、大差は無く、4 年生のほぼ 95%が就職を希望していることを示している。

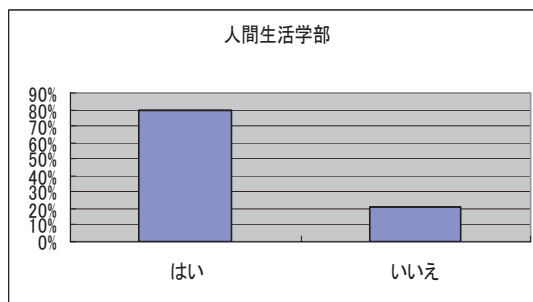
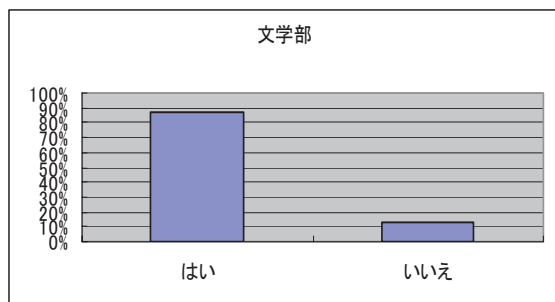
質問. 1 2 今、あなたの就職活動はどのような様子ですか。



分析

「今、あなたの就職活動はどのような様子ですか」について、2011 年度において、「終了した」は、文学部で 50%、人間生活学部で 27%であった。教職希望者を除くと、文学部で 56%、人間生活学部で 40%となり、文学部で高くなっている。また、「継続している」が文学部で 28%、人間生活学部で 30%となっている。2009 と 2010 年度は、学部に分けておらず、「終了した」がそれぞれ 50%と 44%であった。人間生活学部の「終了した」の回答率は、この 3 年間で最も低くなっている。一方、「一時中止した」と「中止した」の合計割合は、2011 年度の文学部で 8%、人間生活学部で 10%、2010 年度が 13%、2009 年度が 12%と、この割合は 2011 年度で最も低くなっていた。

質問. 13 あなたは今までの就職活動中に困ったことや悩んだことはありますか。

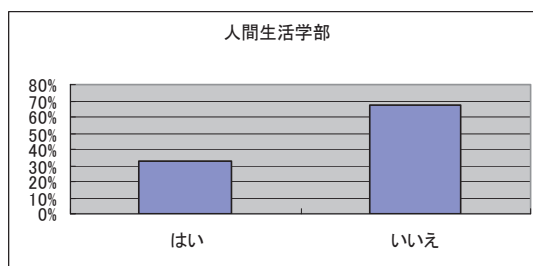
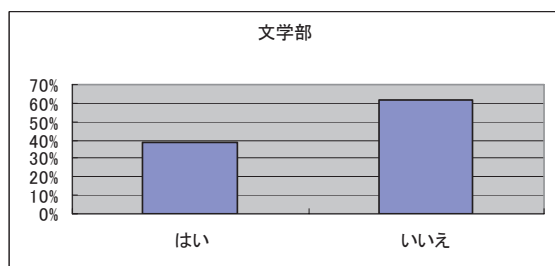


分析

「あなたは今までの就職活動中に困ったことや悩んだことはありますか」について、「はい」の割合は、2011年度の文学部で87%、人間生活学部で79%、2010と2009年度は、両学部に分けていないが、それぞれ92%と95%であった。2011年度において、この割合は最も低くなっており、「就職の内定」や就職活動を「終了した」の回答率を逆の結果となっている。このことから、学生相談室とキャリアカウンセリングの充実が効果的であったと推測される。

＊「質問. 13」で「1. はい」と答えた方へ

質問. 14 あなたは就職活動中に困ったことや就職についての悩みなどを学生相談室で相談したことがありますか。

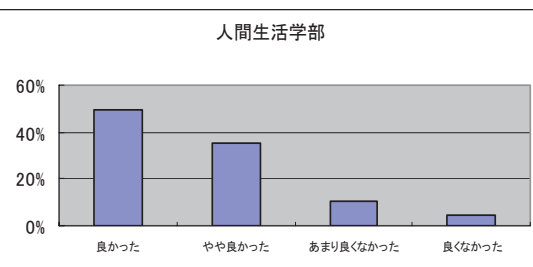
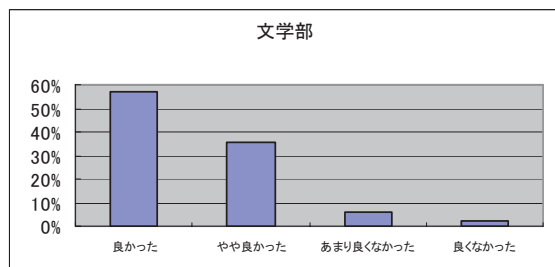


分析

「就職活動中に困ったことや就職についての悩みなどを学生相談室で相談したことがありますか」の質問は2011年度に新設したものである。これに「はい」と回答した割合は、文学部で38%、人間生活学部で33%であった。困ったことや悩みがあるにも関わらず、両学部の6割を超える人が相談していないことを示している。

＊「質問. 14」で「1. はい」と答えた方へ

質問. 15 学生相談室での相談について、どのように感じましたか。

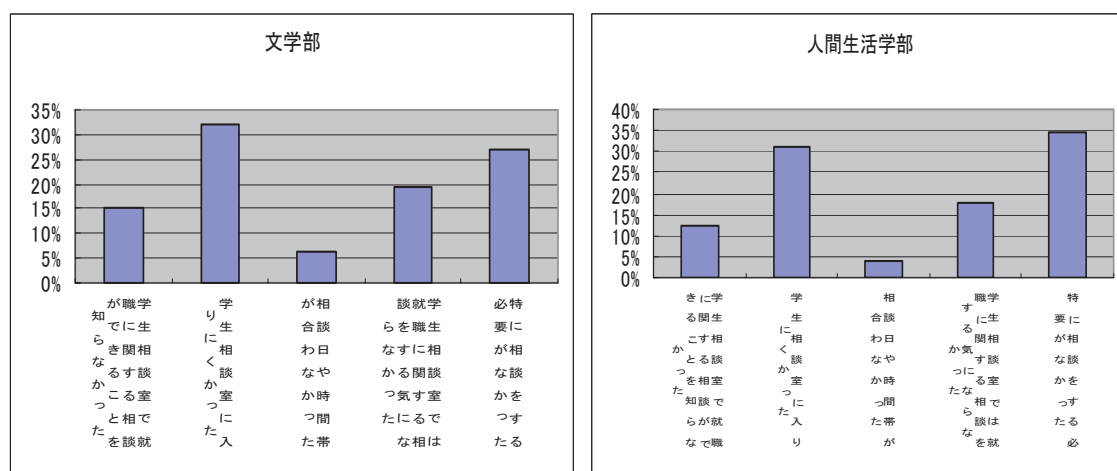


分析

この質問は2011年度に新設したものである。学生相談を受けた人において「学生相談室での相談について、どのように感じましたか」について、「良かった」と「やや良かった」の合計割合は、文学部で92%、人間生活学部で84%と、学生相談が効果的であったことを示している。

＊「質問. 14」で「1. いいえ」と答えた方へ

質問. 16 学生相談室を利用しなかった理由は何ですか。(複数回答可)



分析

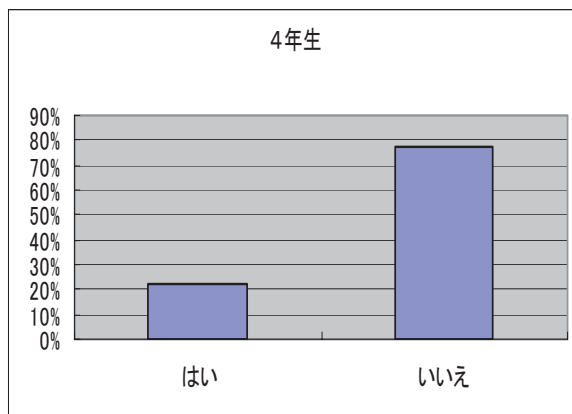
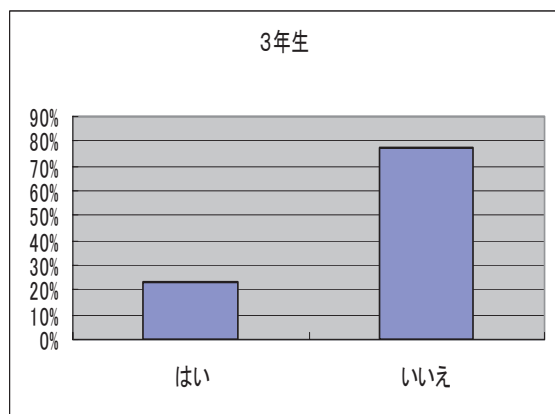
この質問は2011年度に新設したものである。就職活動中に困ったことや悩みがあるにも関わらず「学生相談室を利用しなかった理由は何ですか」(複数回答可)について、最も高かった回答項目は文学部で「学生相談室へ入りにくかった」32%、人間生活学部で「特に相談する必要がなかった」35%であった。次いで高かった項目は文学部で「特に相談する必要がなかった」27%、人間生活学部で「学生相談室へ入りにくかった」31%であった。3番目に高かった項目は、両学部ともに「学生相談室では就職に関する相談をする気にならなかった」で文学部19%、人間生活学部18%であった。学生相談室へ入りやすい工夫が必要である。

2011年度 キャリア支援に対するアンケート －教職課程について－ 全学

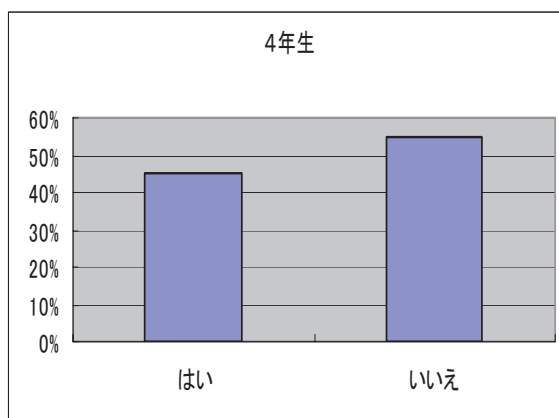
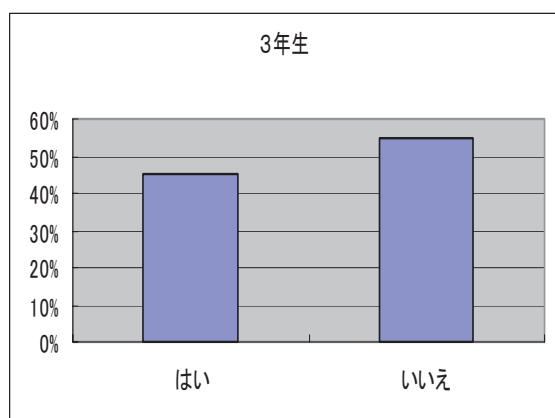
※アンケート結果は、全回答者に対する回答者数の百分率を表している。その分析欄の説明には、必要に応じて、実数を基にした回答率の数値を示している。

質問. 17 あなたは教職課程を履修していますか。

文学部



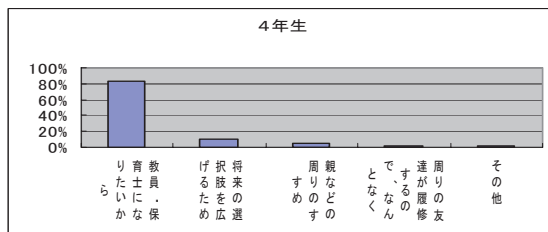
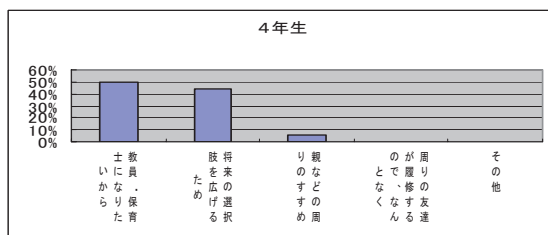
人間生活学部



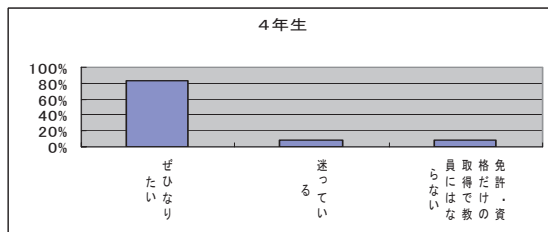
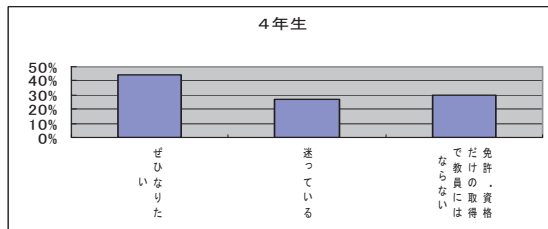
分析

質問 17～25 は教職課程に関するものである。「あなたは教職課程を履修していますか」について、「はい」の回答割合は、2011 年度において、文学部の 3 年生で 23%、4 年生で 22%、人間生活学部の 3 年生、4 年生ともに 45%であった。2009 年度と 2010 年度は 2 年生と 3 年生で調査した。2010 年度において、文学部の 2 年生で 25%、3 年生で 21%、人間生活学部の 2 年生で 53%、3 年生で 50%であった。また、2009 年度において、文学部の 2 年生で 24%、3 年生で 26%、人間生活学部の 2 年生、3 年生ともに 52%であった。両学部ともに、学年が進行するにつれて、履修者が僅かに減少していた。

文学部



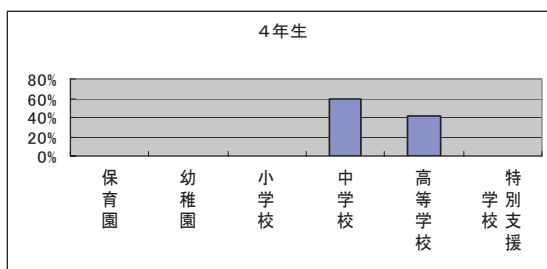
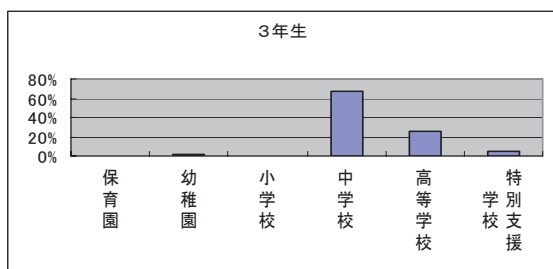
文学部



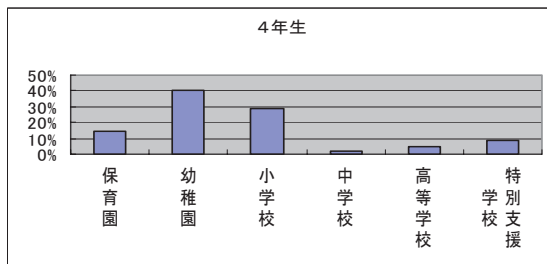
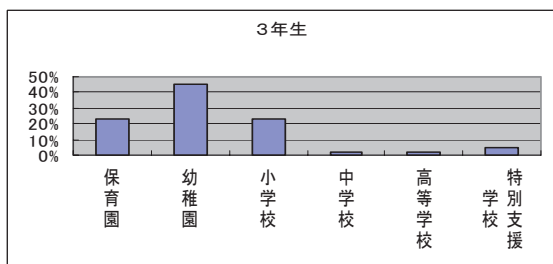
– 113 –

質問. 20 教職への希望がある場合、それはどのような学校園ですか（複数回答可）

文学部



人間生活学部

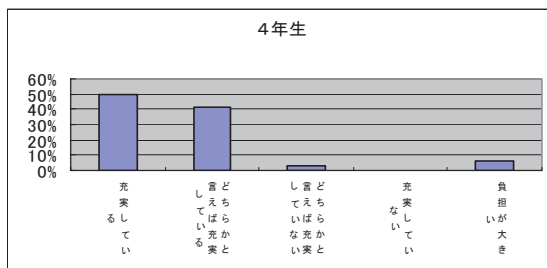
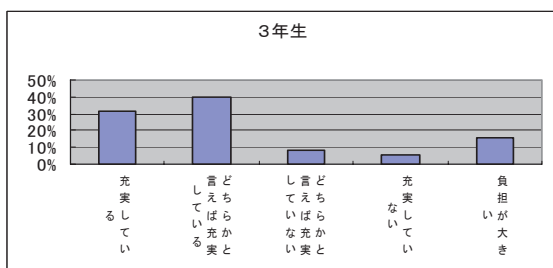


分析

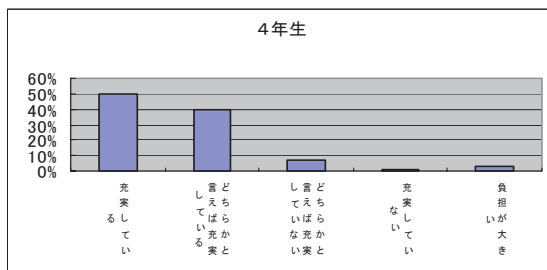
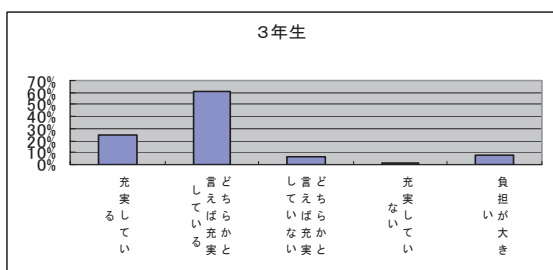
「教職への希望がある場合、それはどのような学校園ですか（複数回答可）」について、2011 年度において文学部は「中学校」、「高校」、人間生活学部は「幼稚園」、「小学校」、「保育園」の順であった。この傾向は、2010 年度、2009 年度においても同じであった。両学部の違いは、人間生活学部の児童学科の影響によるものである。

質問. 21 教職履修に関する現在の思いを教えてください。

文学部



人間生活学部

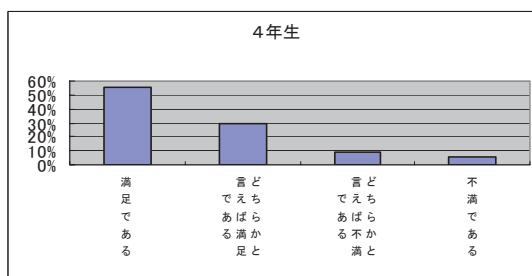
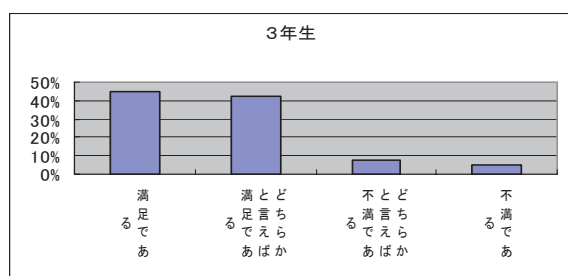


分析

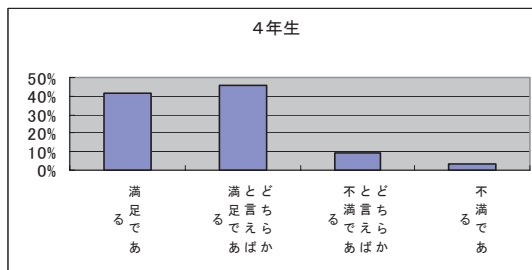
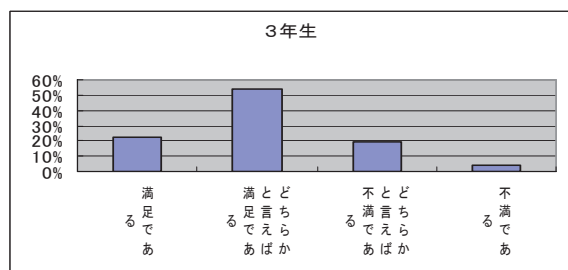
「教職履修に関する現在の思い」について、「充実している」と「どちらかといえば充実している」の合計割合は、2011 年度において、文学部の 3 年生 71%、4 年生 91%、人間生活学部の 3 年生 86%、4 年生 90%と、学年が上がるほど充実度が高くなっていた。2010 年度と 2009 年度においても、2011 年度と同様の傾向であったが、2010 年度は 2009 年度よりも充実度が高くなっていた。

質問. 2 2 あなたは本学の教職への支援について、どのように思っていますか。

文学部



人間生活学部

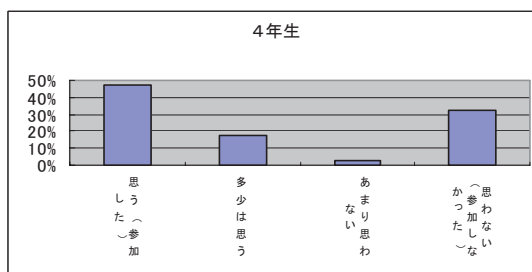
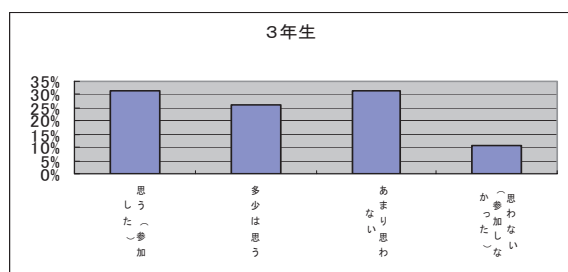


分析

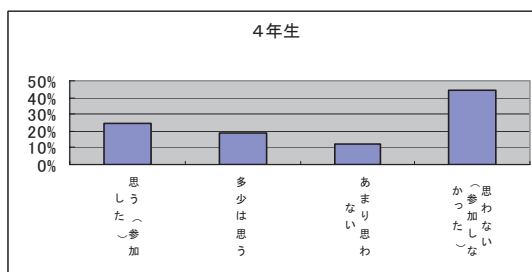
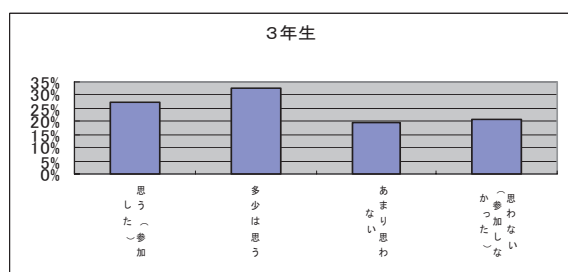
「本学の教職への支援について、どのように思っていますか」について、「満足である」と「どちらかと言えば満足である」の合計割合は、2011年度において文学部の3年生87%、4年生85%、人間生活学部の3年生76%、4年生87%と高い値であった。2010年度と2009年度においても、70～80%台と高い割合であった。また、年度が進むにつれて、支援に対する満足度は高くなっていた。

質問. 2 3 あなたは県外の採用試験の説明会に参加したいと思いますか（参加しましたか）。

文学部



人間生活学部

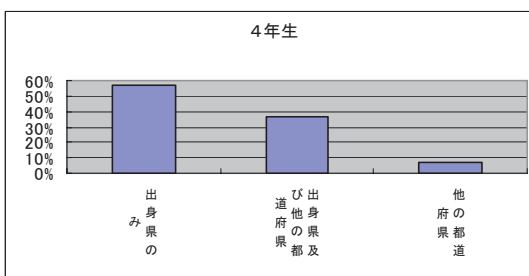
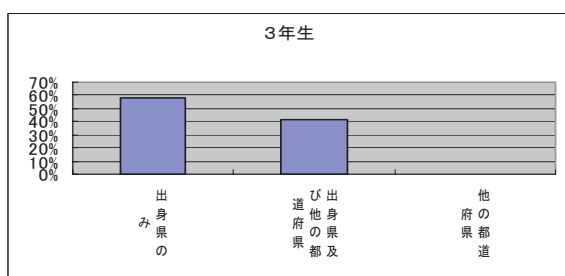


分析

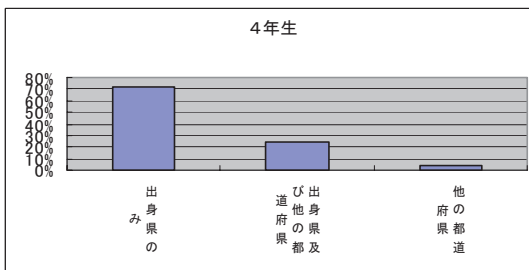
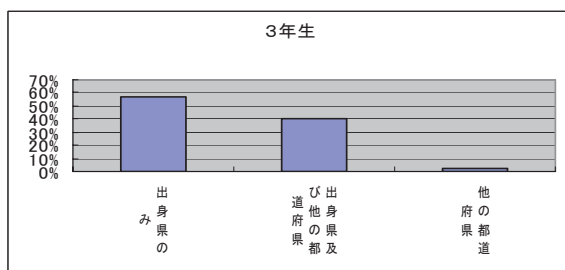
「県外の採用試験の説明会に参加したいと思いますか（参加しましたか）」について、「思う（参加した）」と「多少は思う」の合計割合は、2011年度において文学部の3年生58%、4年生65%、人間生活学部の3年生59%、4年生44%であった。2010年度と2009年度はともに、学年が上がるとその割合が低下していた。

質問. 24 あなたは教員採用試験をどこで受けようと考えていますか (受けましたか)。

文学部



人間生活学部

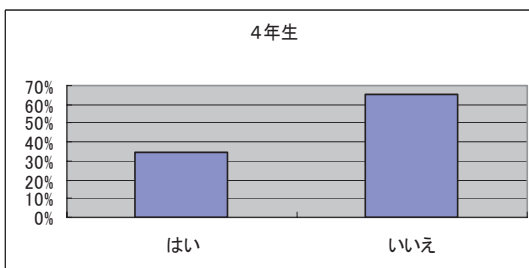
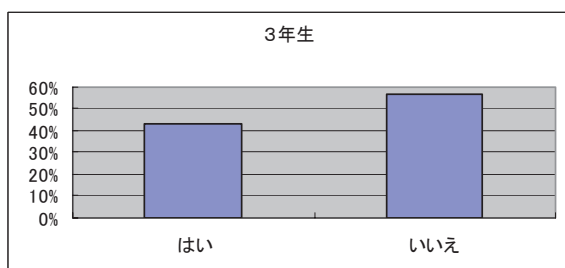


分析

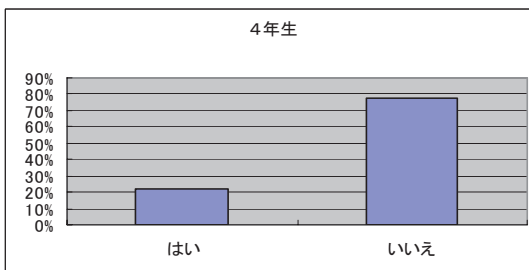
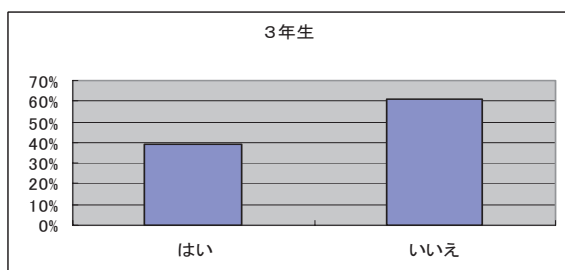
「教員採用試験をどこで受けようと考えていますか (受けましたか)」について、2011 年度において、「出身県のみ」が文学部の 3 年生で 58%、4 年生で 57%、人間生活学部の 3 年生で 57%、4 年生で 72%であった。「出身県のみ」の回答が、文学部では 3 年生と 4 年生で差はないが、人間生活学部では 4 年生で約 20%高くなった。2010 年度、2009 年度ともに、2011 年度と同じ傾向を示した。

質問. 25 県外の教員採用試験を受ける予定ですか (受けましたか)。

文学部



人間生活学部



分析

この質問項目は、2010 年度と 2011 年度に設けた。「県外の教員採用試験を受ける予定ですか (受けましたか)」について、「はい」の回答割合が、2011 年度において文学部の 3 年生で 43%、4 年生で 35%、人間生活学部の 3 年生で 39%、4 年生で 22%と、学年が上がると低くなった。特に人間生活学部の 4 年生では 3 年生よりも 17%低下していた。この傾向は、2010 年度においても同じ傾向を示していた。

Ⅲ 先進事例調査関連事業

1 取組の目的

先進事例調査の目的は、G Pや高等教育改革にかかわるフォーラム等に参加したり他大学等を訪問調査して、文部科学省を含め国の基本的な考え方や企業を含めた社会全般の認識等を確認しつつ、他大学の優れた先進事例を参考にして、本学のプログラム実施に当たってのヒントや検証を行うことにある。

2 具体的事例の紹介

各種フォーラムや他大学等の学生支援状況を調査する中で本学のプログラム実施やシステム導入等の具体的なヒントを得るため、基本的なプログラムの進め方の確認、同様な取組を行う大学での事例研究を参考にしながら、課題の克服策などの調査を行った。また、G P全体の状況も把握しつつ、今日的な大学教育改革の認識の共有化や本学での事業実施の方向性を確認する調査も併せて行った。さらに、出張による現地での調査の他、インターネットや送付された資料等多岐に渡って調査を実施した。

具体的には、(1) G P全体を見通したさまざまな活動の状況が把握できる、毎年開催されるG P合同フォーラムへの参加、(2) 学生支援を目的に取組む各大学の情報や文部科学省による説明などでの現状把握の確認等を行う、ブロック別に開催される学生支援事業意見交換会への参加、(3) 本学の参考となるさまざまな活動をしている先進事例大学の調査の3つに分類して調査研究を実施した。

(1) G P合同フォーラム調査

平成21年は1月7日(木)～8日(金)の間東京ビッグサイトで開催された。このときは、関係者が基調講演や分科会で数多くの有益な話を聞くことができた。また、資料提供のために展示会場に持参したが、初日の午前中には無くなる状況で多くの関心を集めた。この年の特徴として、大学行政管理学会から事務職員向けの講演があり、教職協働の機運が高まった。

平成22年度は1月24日(月)～25日(火)の間秋葉原コンベンションホールで開催され、本学のプログラムもポスターセッションに選ばれ、数多くの来訪者を得て、本学のプログラムの優秀さを証明することができた。同時に他大学の同様な取組担当者と具体的な意見交換が出来て有意義な時間を過ごすことができた。今年度は、事業仕分けでG P関係予算へのクレーム等が出て、G P予算そのものに対する社会の目が厳しくなる中でのフォーラムであったが、む



しる各大学は例年以上のこの事業に対する熱意が溢れたものとなり、本学も大いに勇気づけられた結果となった。

(2) 学生支援事業意見交換会への参加

平成 21 年度は、大阪会場と福岡会場に参加した。文部科学省の担当官から、その時点での最新の状況を直接聞く貴重な時間でもあった。この年は「キャリア教育義務化に向けた」大学設置基準改正前の状況説明があった。また、中四国九州及び近畿地区での各大学の取組紹介を見た。

特に、学生のモチベーションを保ちつつ、プログラム参加を促す工夫とか、学習ポートフォリオの活用方策等についての情報交換もなされた。

平成 21 年度は、大阪会場に参加したが、この年は、文部科学省だけでなく、経済産業省、民間の企業経営者も加わり、学生の就業状況等について、パネルディスカッションも交えたものとなった。ここでも事業仕分けの話題が出て、何とか予算確保が出来たという報告で、各大学が胸をなでおろす場面もあった。

事例発表では、さまざまな情報機器を駆使した取組紹介もあり、本学の状況と照らし合わせ今後の参考となるものが見られた。

平成 23 年度は、大阪会場と東京会場に参加した。本学と同じ教育理念を持つ大学の状況や同じ支援システムを導入している大学の状況を確認することができ、補助金が切れた後での支援の実施について大きなヒントを得ることを期待して参加する予定である。

(3) 他大学の先進事例調査

平成 21 年度は、事業開始前調査システム構築を中心とした調査を行った。訪問調査を行った大学は比治山大学、追手門学院大学、武庫川女子大学、南山大学の 4 大学でいずれの大学も早くから組織的な取組を実施しており、本学のプログラムをスタートさせるための知恵を多くいただいた。

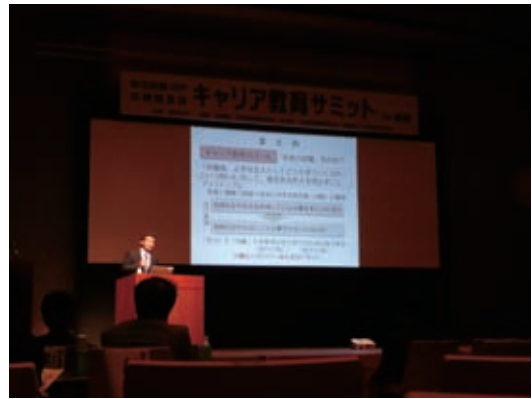
平成 22 年度は、プログラムをどう具体的に運用する中で、どのような発展性を掴めるかまた、こういった応用的なものを生み出すことが



できるのかを中心の視点にして調査を行った。訪問した大学は、白百合女子大学鎌倉女子大学、聖泉大学の3大学で、白百合女子、鎌倉女子の2大学では、システムの活用状況やハード面での整備状況を含め実施上の様々な状況を調査した。また、聖泉大学で行われたキャリア教育サミットに参加して、地域における実践的なキャリア教育の状況を具に調査することが出来、地域との具体的な連携方策等多くのヒントを獲得できた。

最終年の平成23年度は、このプログラムの補助金が無くなった後、こういった状況を創り出すかという視点を中心に調査を行う。

現時点では園田学園女子大学のみであるが、今後そうした視点での調査を継続的に実施する予定である。



3 事業実施による効果

各種のフォーラムへの参加や先進的な大学を訪問しての調査を行った結果、数多くのヒントを得ることができた。とりわけ、平成22年度合同フォーラムでポスターセッションに参加することによって、それまでのプログラム実施の総括を行い、また他大学関係者等との質疑を通して本学のプログラムの特質等を改めて認識できたことは非常に大きなことであった。

また、個別の課題を持って他大学等を訪問調査したが、各大学とも本学からの訪問を快く引き受けていただいただけでなく、貴重な資料を提供していただき、多くの示唆に富んだ話をお聞かせいただいたことは、本学にとって非常にありがたいことであった。改めて、各大学の担当者各位にお礼を述べたいと思います。

先進事例調査等の検証に関しては、今後の本学の「学生支援」を行う上での有益な事例調査だけでなく、人的なネットワーク構築を成し遂げることが出来た点を加えれば大きな効果を生み出したと自己評価することができる。

4 総括及び今後の展望

3年間の調査で、他大学関係者を含め、さまざまな関係者とのネットワークを構築することができた。この人の繋がりを駆使して、情報交換やテーマによっては具体的な連携を実現することも可能になると思える。ただし、大震災の影響もあり、平成22年度末に計画した調査が出来なかったことが残念であった。一方で、今後の課題として、従来の学生支援に加え、「震災復興と学生支援」という新たなテーマについて、本学の建学の精神を踏まえ、どう具体化するかなどの新たな課題に取り組む必要性が生じたと感じている。

現在の状況を踏まえれば、情報の獲得や情報交換の必要性はむしろ高まっていると思える。大学や地域の特性に合わせ、さらには社会環境の質的变化に対応した現実的な「学生支援」の

展開を目指すうえで、社会全般の考えの確認や他大学での実践例を参考にする必要性は、増えることはあっても減ることはない。その意味で、この活動を通じて多くの知己を得て多くの方々との交流を深めたことは、今後の学生支援を着実に発展させるための大きな財産を得たことになるかと確信している。

今後とも、得られた情報網を駆使しつつ、より良い「学生支援」を追求することが肝要である。

第 3 章

フォーラム・シンポジウム

外部評価委員会の開催

フォーラム・シンポジウム・外部評価委員会の開催（本学主催G Pフォーラム関連事業）

1 学生支援G Pフォーラムと第1回外部評価委員会の開催

平成21年3月6日（土）13:00～15:00に、本学学生支援G Pのフォーラム「ノートルダム清心女子大学 学生支援に関するフォーラム」が開催された。このフォーラムは、本G Pプログラムを本格的にスタートさせた直後に本学の取組の社会に開示し、外部評価委員を交えて取組全体と各事業内容を検証し、今後の方向性を確認することを目的とした。

フォーラム参加者は、県外を含む他大学関係者6名、外部評価委員4名、一般2名、本学教職員35名、本学学生19名の計66名であった。

フォーラムでは学長挨拶の後、外部評価委員でもある岡山大学の坂入准教授（当時）の基調講演「キャリア選択における大学の役割」と各事業の活動報告を行った。岡山大学の事例を中心にした基調講演は、大学がキャリア教育にいかにかかわるかを示して今後の方向性を見通すものであった。本学の活動報告は、本学の取組内容を具体的に開示してアドバイスを受けようとした点で有意義であった。

その後、15:30～16:30にかけて、学生4名が加わる形で外部評価委員会が開催された。委員会では、外部評価委員から学生や担当者への質疑があり、事業の進捗状況が確認され、今後の方向づけについて具体的な指摘があった。第1回外部評価委員会における外部評価委員の報告書は、その全文を第4章に掲載しているので参照されたい。

本学ではフォーラムの状況や外部評価委員の評価報告書を『2009年度活動報告書（外部評価書）』と題した冊子に取りまとめ、各大学や機関等に送付した。また、冊子の内容は本学HP上にも公開した。



フォーラムポスター



『2009年度活動報告書』



写真1 フォーラムの様子



写真2 第1回外部評価委員会

2 学生支援G Pシンポジウムと第2回外部評価委員会の開催

平成23年12月17日（土）13:00～14:00に本学学生支援G Pのシンポジウム「ノートルダム清心女子大学 学生支援に関するシンポジウム」が開催された。今回のシンポジウムは、平成21年度に採択された学生支援G P事業が最終年度をむかえたことから、これまでの事業成

果をまとめて今後の展望を得ることを目的とするものであった。シンポジウムには本G Pの外部評価委員4名の他に、県外を含む他大学関係者6名、一般1名、本学教職員32名、学生70名の計113名が参加した。

シンポジウムでは、本G P実行委員会委員長の学長挨拶、概要説明につづき、本取組の3つの柱「就職支援関連事業」「教員就職支援関連事業」「学生相談室との連携事業」の3事業について報告が行われ、つづいて報告者3名に学生2名を加えたパネラーによるパネルディスカッション、フロアとの質疑応答が行われた。

学長挨拶にもあったように、本学はマザー・ジュリーの教えにもとづき、教員養成に力を入れてきた。本G Pの中に教員就職支援の事業を加えたのは、本学のこの伝統をよりよく活かそうとするためであった。この成果は大きいように思われたが、他の事業報告とあわせて、本G Pによる一定の成果が明らかとなった。

また、パネルディスカッションでは、参加学生（英語英文学科4年、日本語日本文学科4年）の就職活動体験が語られ、また本G Pに対する要望が寄せられた。フロアからの質疑では他大学キャリアサポートセンター職員から、本G Pの成果、特に教員就職に関する成果にみるべきものがあるとの指摘を得た。

シンポジウムに引き続き、16:30～17:30の時間で外部評価委員会が開かれた。委員会には本G P担当者の他にパネルディスカッションに参加した学生2名の他、8根名程の学生も加わった。評価委員からの学生や担当者への質疑が行われ、本G Pに対する見解が提示された。なお、外部評価委員による評価報告書は第4章に全文を掲載している。また、本シンポジウムと外部評価委員会の様子は本学H Pにもさっそく掲載した。

なお、以下にこのシンポジウムで報告された3つの事業の資料を掲載する。



シンポジウムポスター



写真3 シンポジウムの様子



写真4 第2回外部評価委員会

活動報告資料

1. 就職支援



1) 活動報告「就職支援」

学務部キャリアサポートセンター長 岩田 昇

取り組みの目的

- 本学に届く求人数は減少傾向にある中、また、Uターン就職希望学生との厳しい競合にある。
- 本学学生の就職希望者割合は、毎年90%以上と高く就業意識は高く、就職率も95%以上と高い数字を維持している。
- 本GPIに採択されたことを機に、新たに求人情報の就職情報をフルタイムで提供するシステム構築を行う。企業情報・求人情報のデータベース化を既存の教学システムをベースに構築する。
- 従来から実施してきたキャリアガイダンス等に加え、自己分析対策講座等を実施、キャリアカウンセリングとの連携を図る。
- 学生満足度の更なる向上を図り、高い就職率を維持しながら、無業者割合の減少を目指すことを目的とする。
- 学務部キャリアサポートセンターでは、本学の教育理念を通じて「人を思いやる心」を身につけた本学学生が希望に沿った道路を開いていくための支援を行ってきた。

1

岡山県内への就職割合推移

年度	卒業生数	就職希望者数	就職者数	内、岡山県出身者の就職者数	内、岡山県内への就職者数	岡山県内への就職割合(%)
平成19	514	455	455	350	320	91.4%
平成20	536	477	469	397	352	88.7%
平成21	568	488	477	388	360	92.8%
平成22	584	525	517	423	398	94.1%
合計	2,202	1,945	1,918	1,558	1,430	91.8%

※就職希望者割合(%)＝就職希望者数÷(卒業生数－大学院進学者数)
 ※就職決定率(%)＝就職者数÷就職希望者数
 ※%はいずれも、小数点第二位を四捨五入

3

岡山県内への就職割合推移

年度	卒業生数	就職希望者数	就職者数	内、岡山県出身者の就職者数	内、岡山県内への就職者数	岡山県内への就職割合(%)
平成19	514	455	455	350	320	91.4%
平成20	536	477	469	397	352	88.7%
平成21	568	488	477	388	360	92.8%
平成22	584	525	517	423	398	94.1%
合計	2,202	1,945	1,918	1,558	1,430	91.8%

※就職希望者割合(%)＝就職希望者数÷(卒業生数－大学院進学者数)
 ※就職決定率(%)＝就職者数÷就職希望者数
 ※%はいずれも、小数点第二位を四捨五入

3

相談体制

	専任職員	相談員(兼コーディネーター)	非常勤相談員
平成20年度	2	0	0
平成21年度	2	1 (12月から採用)	0
平成22年度	3	1	1 (11月のみ)
平成23年度	3	1	1

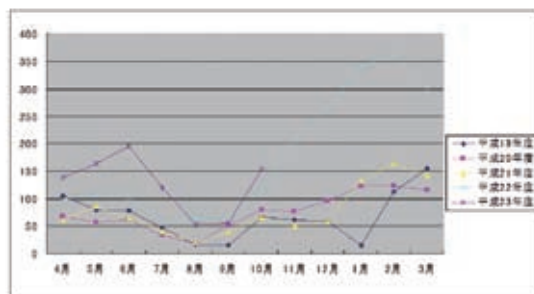
4

平成19年度-23年度延べ相談件数推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成19年度	106	80	78	48	18	15	66	61	59	15	113	155	810
平成20年度	87	57	61	33	18	51	80	77	96	124	123	116	903
平成21年度	61	85	65	40	21	39	66	49	58	133	164	143	924
平成22年度	99	108	104	55	64	66	113	208	263	343	363	298	2,082
平成23年度	138	184	196	121	52	55	154						880

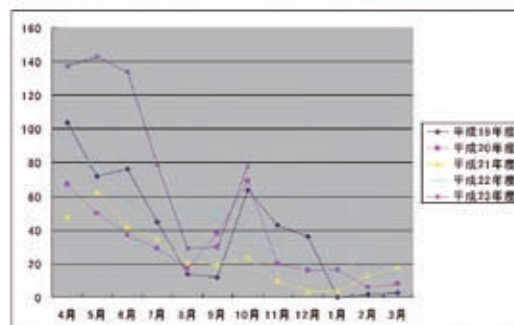
5

平成19年度-23年度延べ相談件数推移



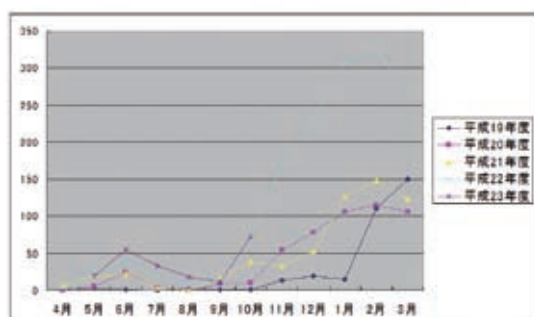
6

平成19-23年度4年生相談数推移



7

平成19-23年度3年生相談数推移



8

個別カウンセリング



9

Nサポ(NDSU学生支援システム)画面①



10

Nサポ(NDSU学生支援システム)画面②



11

Nサポ(NDSU学生支援システム)③



12

Nサポ求人アクセス数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成22年度	608	2,461	3,414	3,067	2,741	2,660	2,900	2,100	2,537	2,063	1,930	1,239
平成23年度	1,508	1,397	809	724	466	2,508	2,005	1,429				

13

Nサポ求人アクセス数



14

Nサポ利用風景



15

キャリアサポートスケジュール(前期)

学年	4月	5月	6月	7月	8月	9月
1年生	■キャリアセンターオープン		■第1回キャリアガイダンス			
2年生			■第2回キャリアガイダンス			
3年生	■インターンシップ説明会	■インターンシップ説明会	■インターンシップ説明会	■インターンシップ説明会	■インターンシップ説明会	■インターンシップ説明会
4年生	■第3回キャリアガイダンス					

16

キャリアサポートスケジュール(後期)

学年	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生	■第1回キャリアガイダンス	■第2回キャリアガイダンス				
2年生	■第3回キャリアガイダンス	■第4回キャリアガイダンス	■第5回キャリアガイダンス	■第6回キャリアガイダンス	■第7回キャリアガイダンス	■第8回キャリアガイダンス
3年生	■第9回キャリアガイダンス	■第10回キャリアガイダンス	■第11回キャリアガイダンス	■第12回キャリアガイダンス	■第13回キャリアガイダンス	■第14回キャリアガイダンス
4年生	■第15回キャリアガイダンス	■第16回キャリアガイダンス	■第17回キャリアガイダンス	■第18回キャリアガイダンス	■第19回キャリアガイダンス	■第20回キャリアガイダンス

17

インターンシップ説明会



キャリアガイダンス



面接対策講座



自己分析対策講座



21

グループディスカッション講座



22

卒業生による業界・企業説明会



23

人事担当者による企業説明会



24

事業実施による相乗効果



25

総括及び今後の展望①

- Nサポ(就職支援システム)の構築
 - 各種就職対策講座の実施
- 結果として学生満足度の向上と高い就職率の維持

外部評価に対して

- 個別キャリアカウンセリング
 - 自己分析対策講座や個別の自己分析実施
 - 職業適性検査の実施による学生の視野拡大
 - 地元就職割合の維持
 - 他大学視察による職員の意識向上

26

総括及び今後の展望②

- 本取組の中で、終始「カトリックの大学」であることを念頭に、「人を思いやる心」を持った女性の力を生かすための就職活動支援強化を実施
- 今年度からは「キャリア教育」を開講
- 学長をリーダーとした教職員全員の関与を目指し、時代に沿った「就職支援」を保持していく
 - 教員対象としたキャリアガイダンスを年1回継続実施していることが、昨年度の「大学評価(認証評価)結果」において高い評価

今回のGPにおいて、ハード面、ソフト面で就職支援の強化、内容の充実を図ることができた。
来年度以降、学生との絆を一層深められるよう、職員のキャリアに対する努力、研鑽を図っていく。

27

先進事例実地調査

- 2009年9月7日(月) 6名視察
 - 比治山大学(ユニバーサルパスポート就職支援導入大学)
- 造手門学院大学(ユニバーサルパスポート就職支援導入大学)
 - 2009年11月17日(火) 4名視察
- 武蔵川女子大学(就職支援システム導入大学)
 - 2009年11月26日(木) 4名視察
- 園田学園女子大学(就職支援システム導入大学)
 - 2011年7月4日(月) 2名視察

28

その他参加行事

- 日程 2010年1月7日(木)～8日(金) 場所 東京ビッグサイト会議棟 4名出席
- 平成21年度大学教育プログラム ポスターセッション
 - 日時 2011年1月24日(月)～25日(火) 場所 秋葉原UDXビル 7名出席
- 大学教育改革に関する講演
- 平成21年度大学教育プログラム 合同フォーラム
 - 教職関係、学生相談、就業力育成に関する質問
 - パンフレット300部 外部評価書150部の内、半数以上配布

29

活動報告資料

2. 教員就職支援

2011 年度 ノートルダム清心女子大学：学生支援に関するシンポジウム 活動報告（テーマ2：教員就職支援）

教職支援センター長 伊藤 豊美

1 取り組みの目標

- (1) 教職を履修する学生を全学にわたって支援する。
- (2) 具体的な取り組みを通して、教職履修学生の教職意識を高める。
- (3) 教職履修学生の教員としての就職を支援する。

2 具体的事例の紹介

学生にとっての、三つの「リアル」の具現化を目指した。

(1) 知りたい！リアル ボイス

《教員採用試験対策講座（①3年生向け講座 ②4年生向け講座）》
卒業生の教育力を活かす取り組み

(2) 見たい！リアル スクール

《カトリック学校1日体験事業》
学校の1日をそのまま体験できる取り組み

(3) 聞きたい！リアル インフォメーション

《大都市圏教員採用試験現地説明会》
採用する側の心理を理解する取り組み

3 事業実施による効果—数字は語る（教員採用試験結果）

	H21	① H22	② H23	③ H24
幼稚園（幼・保を含む）	23	41	42	*
小学校	29	21	51	45
中学校	11	5	18	19
高等学校	1	6	4	5

表に示された年度は、採用年度を示しており、実際の年度の翌年度を示している。すなわち、「① H22」の H22 は、平成 21 年度に実施された採用試験であることを示し、①は本事業 1 年目であることを示している。

* 幼稚園は採用試験が他の学校種より遅くに実施されるため現時点では未確定

4 総括及び今後の展望

- (1) 教職支援が大学全体としての取り組みとなった。
- (2) 学生の教職への意識が飛躍的に高まった。
- (3) 本学の教職課程の認知度が高まった。

活動報告資料

3. 学生相談室との連携

学生相談室

こころをつなぐ学生支援



取組の目的

昨今の困難な経済情勢の中で
進路や就職活動に関わる悩みに対応し
心理面からの学生支援を行う

- ・職業意識
- ・進路選択
- ・就職活動
- ・就職困難 など

取組の概要 平成21～22年度

学生相談室活動(心理相談)

カウンセリングなどの相談業務

+

キャリア意識の醸成

- ・キャリアカウンセリング秋-冬編(1-2年生)
- ・キャリアカウンセリング春-夏編 (3年生)

取組の概要 平成23年度

H21年度活動報告に対する外部評価
学生相談室主任の定年退職
キャリア教育科目『人材育成論』の開講

取組変更

学生相談室活動の充実

その中で広く職業意識や
就職活動の悩みに対応する

具体的事例の紹介 平成21～22年度

通常の心理相談
支援企画

- ・キャリアカウンセリング秋-冬編(1-2年生)
- ・キャリアカウンセリング春-夏編(3年生)

実施責任者

- ・学生相談室主任(准教授/臨床心理士)

実施担当者

- ・非常勤相談員(臨床心理士)

キャリアカウンセリング(**編)

平成21年度

学生相談室活動

秋冬

11～1月
1-2年生

平成22年度

春夏

学生相談室活動

秋冬

5～7月
3年生

11～1月
1-2年生

キャリアカウンセリング秋-冬編

1-2年生を中心とした支援企画

『そろそろ自分の進路を考えてみませんか?』
をコンセプトとする

「職業興味検査(VPI)」 「自分ふり返しシート」
を用いて

進路、就職、職業選択について考える
自分の特性、興味をみつめ直す
→キャリア意識の形成へ導く

キャリアカウンセリング春-夏編

3年生を中心とした支援企画

『就職の心の準備はO.K.ですか?』
をコンセプトとする

「職業興味検査(VPI)」 「自分ふり返しシート」
を用いて

これから始まる就職活動に対する心の準備
を支援する

キャリアカウンセリング



1回目に面談と職業興味検査(VPI)を行う

自分ふり返しシート

自分ふり返しシート

氏名 _____ 学号 _____

1. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

2. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

3. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

4. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

5. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

6. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

7. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

8. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

9. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

10. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

11. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

12. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

13. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

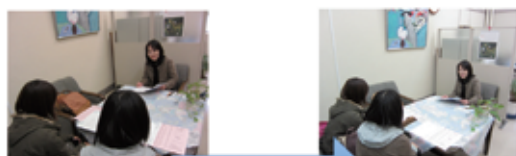
14. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

15. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

16. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

17. 得意な科目、得意な科目、苦手な科目

キャリアカウンセリングの流れ



1回目 自分ふり返しシート 2回目

職業興味検査や自分ふり返しシートにもとづき
相談やカウンセリングを行う
→進路や職業についての意識を刺激
自分自身の興味や性格傾向に気づく
将来のライフデザインを描く支援をする

キャリアカウンセリング相談者数

	期間	利用回数	利用者数
第1回 秋-冬編 1-2年生	平成21年11月 ～平成22年1月	36回	22人
第2回 春-夏編 3年生	平成22年5月 ～平成22年7月	50回	29人
第3回 秋-冬編 1-2年生	平成22年11月 ～平成23年1月	27回	19人

『一人ひとりを大切に!』

学生の反応

1-2年生

- ・自分のことをいろいろ話せてよかった
- ・自分の興味や関心のあることに気づいた
- ・私の長所は責任感のあるところだと思う
頑固な性格もこだわりをもっていることだと分かった

3年生

- ・しっかり自分と向き合う時間になった
- ・自分の長所を引っ張り出してもらった
- ・思ったよりよく話せた

キャリアカウンセリングの効果 秋-冬編(1-2年生)

学生の傾向

- ・素直で真面目な学生が多い
- ・経験の幅が少ない
- ・自分で自由に発想する経験が少ない など

・不足している経験の幅を広げ、自由度の高い
環境で自分で考えて行動する力をつける
→リベラル・アーツ教育の成果に期待

・個別の丁寧なカウンセリングは
自己分析や職業意識の醸成に向けて機能

キャリアカウンセリングの効果 春-夏編(3年生)

学生の進路への心の準備状態は様々

- ・進路選択の心の準備ができていない
- ・何事にも受け身
- ・進路や方向性について明確な意思をもっている

- ・2回のカウンセリングで何らかの方向性を見出す
- ・自己の特性や傾向に気づく
- ・自分について話題を展開することができる

→就職活動前のカウンセリングはそれぞれに有効

具体的事例の紹介 平成23年度

H21年度活動報告に対する外部評価

学生相談室主任の定年退職

キャリア教育科目の開講 に伴い取組を変更

- (1)学生相談室のカウンセリング体制整備
- (2)学生相談室の利用促進
- (3)心理相談の利用実績→学生相談室との連携

学生相談室の充実とそこでの就職支援

(1)学生相談室の体制整備

人事異動

- ・学生相談室主任(臨床心理士)の定年退職(H23年3月末)
- ・非常勤相談員(臨床心理士)2名の着任(H23年4月)

実施責任者

- ・学務部保健センター長兼学生相談室コーディネーター(准教授/医師)

実施担当者

- ・非常勤相談員(臨床心理士)2名が定期の心理相談
- ・保健センター職員(臨床心理士/養護教諭) がその他の対応
→臨床心理士によるカウンセリングの継続

学生相談室定例会議→情報の共有

平成23年度 心理相談

学生相談室の定期心理相談

- ・毎週火曜日と木曜日午後:週に8時間
- ・非常勤相談員(臨床心理士)がカウンセリング
- ・対面相談(面談)予約制1回50分(記録等10分)
- ・予約外対応O.K.

保健センター(その他の対応)

- ・保健センター職員(臨床心理士/養護教員)
カウンセリング導入、緊急相談
カウンセラーとの連携 など

平成21～22年度心理相談時間

月		臨時
火		定期
水		臨時
木		臨時
金		臨時

H23年度心理相談時間

月		臨時
火		定期
水		臨時
木		定期
金		臨時

カウンセリング風景



カウンセリング風景



保健センター相談スペース



保健センター相談スペース



休養スペース
相談スペース
として利用

学生相談室定例会議 学生相談室スタッフ会議

メンバー

- ・学務部保健センタースタッフ(医師と臨床心理士)
- ・非常勤相談員(臨床心理士)
- ・学務部部長補佐(臨床心理士)
- ・学務部学生係職員

内容

- ・心理相談概要の報告
- ・情報共有→必要に応じて学科への連携
- ・学生相談室運営上の問題と改善策の検討

(2)学生相談室の利用促進

◆学内行事や配布物を利用した広報

- 学内行事を利用した学生相談室の広報
入学式、教育懇談会でアドバイザー制度、学生相談室を紹介
- 入学資料
- NDSUライフ

◆保健センターからの広報

- 保健センターホームページ開設
こころの健康、学生相談室の紹介(カウンセラー紹介、コメント)
- 学生相談室案内
4年生の健康診断返却時に4年生バージョンパンフレットを配付
各所にポスターやパンフレットを配置
- 学生相談室レイアウト変更

◆夏休みの支援企画(キャリアカウンセリング夏休み編)

学内行事における紹介 入学式



保健センターホームページ



こころの健康
学生相談室

ホームページの案内



学生相談室の紹介

4年生紹介

平成23年度より週二日、相談室は開いています。
 生活や学習、友人関係、自分の将来などいろいろな考え、悩みなどを持ち、学生相談室で話してあげてください。心が軽くなることもあります。専門的なカウンセラー（臨床心理士）が相談室に来て相談に応じています。個人やグループでも利用できます。



平成23年度 学生相談室カウンセラー紹介

相談担当 佐野 裕子先生（臨床心理士）

こんにちは。はじめまして。新しいカウンセラーは、とてもワクワクしますね。ですが、未知の世界、戸惑ったり、慣れることもあるかもしれません。「あーっさきがないな...」とか、何かと迷いがちになった...。そんな時には、相談室の学生相談室をご利用ください。皆さんの悩みをお聞かせください。

相談担当 内藤 弘美先生（臨床心理士）

皆さん、こんにちは。一人ひとりの学生生活が充実したものになりますように、学生相談室でお手伝いさせていただきます。心から悩みを話そうとします。どんな困難なことでも話かたしおっしゃってしまっても構いません。皆さんの悩みをお聞かせください。

100 頁

学生相談室のポスター



ポスター掲示

パンフレット配置

学生相談室案内(4年生)

学生相談室へどう?

ふと悩んだり、たのしみたり、「うーん、どうしよう」と思ったりした時、どうせ気軽に聞いて下さい。
 大学生活で出会うさまざまなことについて、相談員と一緒に考え、解決の糸口を探るお手伝いをするところです。

- ☆ 人間関係がうまくいかない
- ☆ 恋愛のことや恋愛について
- ☆ 自分の将来について考えてみたい
- ☆ 将来の目標や進路について迷っている
- ☆ なんだか大学生活に満足できない
- ☆ 経済的に困窮している、親元から、生活費がない、費や過ぎてしまう
- ☆ 教習などのように勉強が苦手な人(のわがまま)
- ☆ この後、何をするのがいいか
- ☆ ちゃんとしたことが出来たかな、不安になる
- ☆ ちゃんと相談員の人と話をしたい、学生相談室のせいではない

4年生の人へ、就職はすすんでいきますか?

就職に関する相談に応じています

- ☆ どのような仕事に就きたいのか、どうやって就職活動をするか
- ☆ 就職活動の進捗状況が気になっている
- ☆ 内定はもらっていないけれど、うまくいっているか不安
- ☆ 卒業後のことについて悩んでいる

今度より、学生相談室がリニューアルします。

大曜日 10:00 ~ 17:00 佐野カウンセラー
 本曜日 10:00 ~ 17:00 内藤カウンセラー

申し込みは、申し込み用紙に記入し、ボックスに入れておくか、開扉時に置いておくか、予約を入れていただくか、いずれでも構いません。また、保健センターへの申し込みもできます。相談は無料です。安心してご利用ください。

学生相談室入り口(before)



学生相談室は入りにくい?

学生相談室入り口(after)



学生相談室に入りやすい工夫

キャリアカウンセリング夏休み編

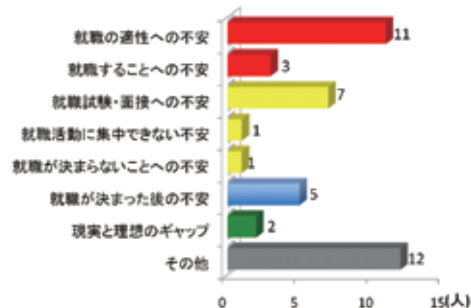
学生相談室の利用促進を兼ねた支援企画

『就活の心の準備は大丈夫ですか?』をコンセプトとする

- ・3年生を中心とした就職活動に対する心の準備
 自分の興味、特性、傾向への気づき
 →適性や職業感の見直し
- ・学生相談室の広報
 心理相談をしていること
 就職の悩みも相談できること
- ・夏休み中の利用促進



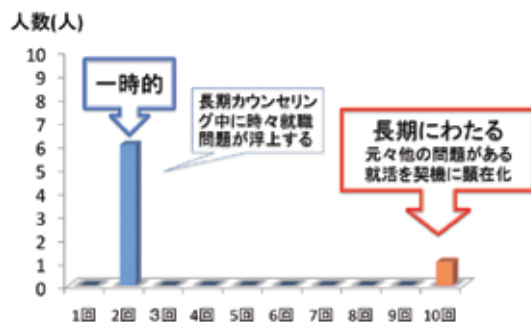
心理相談にみられる就職相談 (平成23年度4～10月:複数回答)



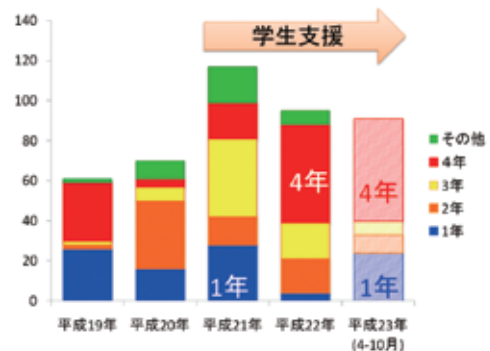
実際の相談内容

- ・実習で実体験して向いていないのではないかなと思う
- ・先輩の話から、どんな仕事に就きたいかわからなくなった
- ・なりたい職のイメージがわからない
- ・自分の性格で就職することへの不安がある
- ・就職条件の変更に伴い、切り替えがうまくいかない
- ・就活に気持ちがのらない。面接で自己表現ができない
- ・内定をもらったが、今の自分で大丈夫だろうか
- ・内定をもらったが、健康上のことを伝えていない
- ・将来の夢と大学生活にギャップを感じる
- ・自分の適性と親の希望にギャップがある

進路関係の心理相談の経過



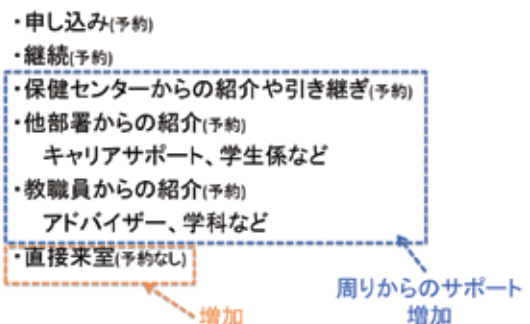
学年別相談者数(回数)



心理相談の傾向

- ・学年別には、1年生と4年生が比較的多い
- ・1年生は学生生活への適応、修学問題が目立つ
授業についていけない、内容が難しい
授業の取り方がわからない
単位を取りすぎて対応できない
友達ができない
集団行動がしんどい
- ・4年生は多様な問題を抱える傾向
修学、進路、性格、対人関係、人生観、心身の健康
就職を入り口とした相談は比較的多い

心理相談のルート



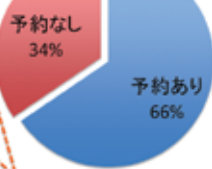
心理相談の経緯

予約なしの相談が約1/3

相談に入った理由

- ・ちょっと寄ってみた
- ・カウンセラーを見て入った
- ・お母さんに行ってみたらといわれていた

↑
定期の心理相談時間の増設
学生相談室の広報効果



新しい傾向

定期の心理相談時間外の対応

H23年度(4-10月)

定期の心理相談時間外・・・17人(45回)

※定期の心理相談時間内・・・29人(91回)

時間外対応から長期継続中・・・6人

(学生相談室につながり並行して継続対応中)

定期の相談時間外の対応は重要な役割

各部署・教職員の連携推進

- 学生相談室の広報への協力
- 学科におけるアドバイザー制度の推進
保健センターとの相互連携
- 講演会の開催
H23年6月25日(学務部主催)
「日常場面にひそむ青年期危機の問題とサポート」
講師：岡山精神科医療センター 塚本千秋 医師
→教職員のメンタルサポートへの意識向上を図る

メンタルサポート講演会



事業実施による効果

平成21～22年度

- ・学生相談室の本来の活動に加えて
キャリア意識に醸成に関する活動を行った
- ・個別の丁寧なサポートやカウンセリングなど
学生支援機会を提供することができた
- ・学生相談室の周知/利用促進にもつながった

事業実施による効果

平成23年度

- 学生相談室の体制整備
カウンセラーの増員
フォローアップ体制
- 学生相談室の利用促進
全学をあげての広報
保健センターの広報・企画
- 心理相談の利用実績

- ・心理相談者数(全体)の増加
- ・就職に関連する相談も増加
- ・複数の相談員→選択肢増加
- ・予約外相談の増加
- ・学生相談室の認知率の向上
- ・支援企画の反復

- ・1年生、4年生、保護者への
広報が有用
- ・それぞれに多い相談内容への
対応と支援が必要

学生相談室との連携の意義

- 社会的な就職環境の悪化により
就職問題が絡む「心の問題」の複雑化
→心理相談も就職支援に寄与することができる
-  相互作用
- 就職支援を1つのきっかけとして
自分自身をみつめ直し
自分の興味、特性、性格傾向に気づく(自己再発見)
→「心のケア」につながる可能性がある

総 括

- 学生相談室は専門的な「心のケア」を行う
 - ・修学、進路、性格、心身の健康、学生生活など
 - ・就職に関連する悩みも多い
 - 職業意識、進路選択、就職活動、就職困難
- 学生相談室活動の中で広く就職の悩みにも対応
→学生支援の拡大につながる
- 「心のケア」への支援体制の強化が望まれる

今後の展望と課題

(1)学生相談室の体制整備と利用促進

学生や社会のニーズに添った学生相談の体制整備

- ・利用しやすい環境の整備
- ・心理相談時間およびフォローアップ体制
- ・継続的な広報

(2)全学的なメンタルサポート体制

- ・他部署、教職員との連携
- ・アドバイザー制度の活用
- ・教職員全体の学生支援への意識の向上

(3)心の問題の早期ケア、一次予防

早期ケア

- ・不安な状況なのにどうしてよいかわからない学生
- ・支援が必要なのに自ら求めてこない学生

教育サイドの認識と対応

- ・成績不振、怠学、不登校と考えられている中に
支援を要する問題が含まれている場合がある

一次予防

- ・自己管理能力の育成
- ・コミュニケーション能力の育成

第 4 章

外部 部 評 価

第4章 外部評価

1 外部評価委員と評価項目

本取組では、取組の外部評価を行うために、平成21年から次の4名の方々に外部評価委員を依頼した。

坂入 信也 国立大学法人 岡山大学キャリア開発センター准教授（現同センター教授）

副田 隆重 南山大学法学部教授・キャリアサポート室室長（現南山大学法学部長）

青山 順子 岡山市総合教育センター所長（現岡山市立政田小学校校長）

秋山 弥生 株式会社天満屋販売促進チーム 広報担当課長

なお、青山委員と秋山委員は本学の卒業生である。本取組ではこの4名の評価委員を迎えて、次のように2回の外部評価委員会を行った。

第1回外部評価委員会 平成21年3月6日

第2回外部評価委員会 平成23年12月17日

2回の委員会はいずれも、本取組にかかわるフォーラムおよびシンポジウムの終了後に行われたものである。各外部評価委員には、外部評価にあたって次のような視点からの評価を求めた。第1回目の外部評価に関しては、(1) 総合的な評価について、(2) これまでの活動に対する評価について、(3) 今後の展望等についての評価について、(5) 改善すべき事項について、(6) 助言・意見等について、(7) 優れた点等について。

第2回目の外部評価に関しては、(1) 3年度分の総合的な評価について、(2) 個別の取組（就職支援、教員就職支援、学生相談室との連携等）に対する評価について、(3) 組織的取組に関する評価について、(4) 優れた点等について、(5) 改善すべき事項について、(6) 今後の展望について。

以下には第1回目と第2回目の、各委員の評価報告書の全文を掲載する。

第1回目の 外部評価報告書

外部評価委員 氏 名 坂入 信也

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 総合的な評価について

教職就職支援においては、画期的な取組みが実施されており、その効果についてもこれまでの就職実績が顕著に示している。また、就職支援においては、個人カウンセリングの充実等、今、まさに組織的取組みが開始され、学生への情報開示システム等、更なる充実が計画されている。しかし学生支援は本来の目的から考えると就職指導との住み分けが求められると感じた。

(2) これまでの活動に対する評価について

特に教員採用対策講座においては、特別な経験をした教員の生の声の迫力が学生の心に響き、同時に卒業生の現場からの情報は、自分のこととして最もイメージできる絶好の機会となっている。

また、都市圏就職への組織的アプローチは、学生の選択肢を広げることと、外部からの清心女子大生に対するイメージアップ戦略にも繋がる素晴らしい試みである。

(3) 今後の展望等についての評価について

就職支援における、求人情報のデータベース化による情報提供は、特に地元就職を希望する学生の多い本学にとって大変価値のあることである。このデータベースをより学生のニーズに即した情報にするためのリサーチ、検討が急務であると感じた。

(4) 組織的取組に関する評価について

学長、研究科長を中心として、キャリアサポート、教員就職支援、学生相談の3本柱と事務が一体となり構築する新たな学生支援体制は機能的かつ全学的な体制となっている。

(5) 改善すべき事項について

今回、最も気になった事は、人員構成的問題ではあるが、学生相談業務の位置づけである。今回の発表の自己分析や職業興味検査等は本来キャリア支援の範疇である。就職支援領域での学生相談とは、キャリアアドバイザーでは対応できない「心のケア」を心理カウンセラーのプロとして行うことである。特に就職環境が著しく悪化している昨今では、学生相談室によるカウンセリング体制の強化が急務である。

(6) 助言・意見等について

外部評価委員である2名からは、清心女子大学の卒業生としての誇りが感じられ、最も危機感をもった人材が卒業生であることも再認識させられた。やはり、新たな支援体制を作るための基本は、在学生、卒業生の真の声がどれだけ集められるかという事に尽きる。

(7) 優れた点等について

清心女子大が設立当初から一貫して掲げてきた「人を思いやる心」をもった女性の教育を実践していることと、その力を社会に生かすための支援体制を具体的に構築する強い意志が感じられること。

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 総合的な評価について

教員養成における顕著な実績を活かした教職への支援を柱の一つとしつつ、学生一般のニーズに沿った就職情報提供システムの構築とともに、カトリック精神を掲げ人の心に寄り添うという理念を生かして学生相談室と連携したキャリアカウンセリングの実施という、実績・ニーズ・特色を背景にしたバランスのとれた事業である。

(2) これまでの活動に対する評価について

約半年間という短い期間に、三つの柱のそれぞれにつき、有意義な事業を成功裡に実施されている。

(3) 今後の展望等についての評価について

「好スタート」に満足することなく、教職支援のほか、就職情報提供システムのよりいっそうの利便性の追求(コンテンツの充実、自宅等からのアクセス等)、および、より広範囲の学生に対するキャリアカウンセリングの充実を期待する。

(4) 組織的取組に関する評価について

学長をはじめとして大学を挙げての取組であることは高く評価できる。必ずしも組織の問題だけではないが、学生相談室での相談とキャリアサポートセンターでの相談との関係(連携・分担)のあり方を示す必要がある。

(5) 改善すべき事項について

要改善点ではないが、本 GP 事業を含めたさまざまな支援の内容を学生向けに適宜に効果的に広報することの重要性を指摘したい。学生が大量の情報に埋没することなく、かつ、学生の中にまみえられる「受け身」マインドを払拭するような指導が肝要である。

(6) 助言・意見等について

「キャリアカウンセリングの3ヶ月」という形で一定の時期に集中的に学生の関心を喚起するのは一つの工夫であるが、同時に、時期を問わず学生が利用できる対応も必要である。また学生からの申出ベースだけでは、真にカウンセリングが必要な学生は反応しない懸念もあることから、全学生に行き渡るような何らかの工夫が必要ではないか。

(7) 優れた点等について

「教員採用対策講座」の充実ぶり(内容・参加人数・OGの参画等)が印象的である。ノートルダム清心の底力を感じさせる。

(8) その他

とくになし。

外部評価委員 氏 名 青山 順子

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 総合的な評価について

- ・これまで培ってきた大学の教育理念と歴史と伝統を大事にしつつ、時代の変化や学生の変化、学生や社会のニーズに対応しようとする今回の学生支援に関する新たな取組は、必要不可欠であり、大変良い変革だと思います。なかでも、一人一人の学生の心理面のケアを重視している点は、大変重要であり、すばらしい取組だと思います。

(2) これまでの活動に対する評価について

- ・「就職情報データベースの構築による学生への情報提供」、「教職への就職支援」、「学生相談室と連携したキャリア・カウンセリング」の3つの事業は、どれも新たな切り口で確実な成果を上げています。一人一人の学生を大切にし、しっかりとした支援をしていきたいという担当者の熱意が、困難な事業に道を切り開き、また学生にも大変良い影響を与えていると思います。学生とのつながりがしっかりとできており、きめ細かい配慮や手だてが日常的になされている大学の個性が生かされていると思います。

(3) 今後の展望等についての評価について

- ・1年次ということから、3つの事業のそれぞれについて、これからの取組が計画されており、今後のさらなる取組がおおいに期待されます。
- ・今後の視点として、学生の側から「利用しやすい」、「支援を受けたい」という形態を模索することにも取り組まれると、より一層の成果につながると思います。

(4) 組織的取組に関する評価について

- ・学内だけでなく、学外のつながりを活用してはどうでしょうか。たとえば、卒業生が多数、様々な分野で活躍していると思うので、社会体験活動の受け皿や就職の受け皿、講師として等、力を借りてはどうでしょうか。後輩のために、大学のために役に立てることがあれば喜んでという人は多数おられると思います。また、それほど地域に受け入れられている大学だと思います。
- ・学生同士の横のつながりをしっかりと作っていくことで、この学生支援の取組は、さらに根をはり、生きたものとなるのではないかと思います。

(5) 改善すべき事項について

- ・大学の内側から学生を見るだけでなく、外から見取ることも必要だと思います。たとえば、他の大学との比較や、送り出した学生の追跡調査、就職先への聞き取り調査など、多面的に調査・分析をすることで新たな視点が明確になってくると思います。

(6) 助言・意見等について

- ・女性に対して、社会が期待する姿が変わってきていると思います。また、働く女性として身につけておかなければならないものもあります。それらを大学のカリキュラムに取り入れていくことで、「人を思いやる心」をこれまで以上にしっかりと発揮できるような女性として育てていくことができるのではないかと思います。逆風の時にも、乗り越えていく気力や思考力、発想の豊かさや柔軟性を身につけて社会に出てほしいと思いますし、同年代の人だけではなく年齢層が幅広い職場においても誰とでもうまくコミュニケーションができる力も必要です。そのためには、社会体験活動や企業体験実習などの新たなカリキュラムの検討が必要ではないでしょうか。
- ・大規模大学ではできない個別支援や一人一人への心のケアには特に力を尽くしていただいて、全員が大学を心の故郷として巣立っていけることを願います。

(7) 優れた点等について

- ・教員採用対策講座に、卒業生の教員を講師としたことは大変良い取組だと思います。身近な先輩教員であり、また年齢も近いと、そこへ自分の心中を吐き出すこともできますし、受けた刺激を素直に吸収して心を揺さぶられることで、教職への意欲もわいてくるからです。今後は、さらに回数を増やしたり、教科指導や学級経営等の指導力の面からの講師としても活用したりすると良いと思います。

(8) その他

- ・長い歴史の中で培ってきた大学のイメージと地域からの信頼は素晴らしいものがあります。しかし、それだけでは国の政策や社会情勢も激変する今の時代に生き残れなくなるのではないかと思います。これまでのノートルダム清心女子大学の良さと個性を残し、なおかつそれに合う新たな発想や取組を加えていかれることを期待したいと思います。
- ・地元の私立大学に我が子を入学させる親の願いとしては、地元への就職を願う気持ちが強いのではないかと思います。それだけ地元での信頼が高い大学でもあります。そのため、せっかく育てた学生には、できれば岡山を愛し、岡山に根をはって、岡山のために力を尽くして欲しいと願います。大学には、そのことが実現できるよう、地元への就職の促進や受け皿の開拓を推進して欲しいと願います。

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 総合的な評価について

大学の危機感がひしひしと伝わる内容で、また自らが在籍した頃とは時代が変わったとはっきりと認識しました。

大学の役割を向上させるため、人間の成長を高める取り組みは変わらず大切にしていきながら、社会とのつながりの中での大学の位置づけや就職支援の取り組みに注目され、時代の変化に柔軟に合わせて大学を変えていこう、という取り組みは素晴らしいと思います。

OGの中で、私のような民間人の話も真摯に聞いてくださり、ますます母校への愛情が深まりました。

(2) これまでの活動に対する評価について

人間対人間の取り組みは何より代えがたいですが、時代の速度に合わせたデジタル化の構築を進められ、それが新年度から実際に稼動していけば、予想以上の反応、影響があるのではないかと期待できる内容でした。

(3) 今後の展望等についての評価について

具体的に実践できるのか、具体的な行動が可能なのか、という点が気になりました。

(4) 組織的取組に関する評価について

大学が共通認識を持って取り組まれていると理解しましたが、学生のサポートをするためには、これまで以上に各部署との情報共有が必要だと感じました。

(5) 改善すべき事項について

①スピード感覚

②実践的であるかどうか

③大学の手厚い支援が学生の積極性や社会性を損なうことのないよう学生主体のシステムであるかどうか

④具体的な達成数値の設定

(6) 助言・意見等について

実際に民間企業に勤めていて、日々感じるのが世の中はすさまじいスピードで動いているということです。近いうちに車を街の電気屋で買う、という時代が来るかもしれません。

その変化のスピードに即することができる女性、五里霧中でも方向性が出せる女性、大学で学んだことを活かすことができる女性が求められていると日々感じています。

自分自身も大学で学んだ一般課程にどれだけ助けられたか分からないほどで、母校への誇りは人一倍持っていますが、これからは「学ぶ」「可能性を高める」ということに加えて時代のスピード感覚も必要ではないかと思います。

また、達成目標には具体的な達成数値が必須です。

いつまでに何をどれくらい達成するか、という数字での共通認識がなければ、目標を達成することは難しく、長い取り組みの中でさらに高い目標を立てることも難しいので、1年後、2年後、3年後の具体的な数値目標を立てて、その目標に向かって組織的に取り組んでいたきたいと願います。

(7) 優れた点等について

人間を成長させる、人間力を高めようとする取り組みを推進されていること。

私自身も教わった「変えていくことと変えないことの分別」をまさに大学が体現していること。

学生がスムーズに取り組めるように、あらゆる点から検証が行われていること。

(8) その他

天満屋では採用活動を始める少し前に、無料の面接テクニックやリクルートスーツの着こなし方などのセミナーを行っています。あくまでも地域貢献として取り組んでいますので、地元の企業として対象学生だけではなく、もっと広くお役に立てればと考えております。その取り組みは当社だけではなく、さまざまな業界の地元企業とタイアップし、学生にとって有利な企画を提案する、ということも可能かと思いますので、地元企業で貢献できることがあれば積極的に関わらせていただきたいと思います。

以上

第 2 回目の 外部評価報告書

外部評価委員 氏 名 坂入 信也

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 3年度分の総合的な評価について

キリスト教精神に基づく人間教育を実践し「人を思いやる心」を持った学生を育ててきた歴史と伝統を生かしつつ、教職員のみならず、学生や卒業生そして外部協力者の力を結集し「ここをつなぐ」をキーワードとした支援体制の構築は、大学の個性が十分に発揮された取り組みであったといえる。特に、学生ニーズに即した就職支援体制が本格始動し個別学生指導と情報発信の方向性が示せたこと、教職支援の更なる強化のための新たな3つの取り組みが軌道に乗ったことは、次年度以降の継続的な発展が期待できる。そして学生の精神的な支えとなる学生相談室が、専門的な「心のケア」を実現できる支援体制の強化を掲げ、体制整備を始めた事も大きな一歩である。

(2) 個別の取り組み（就職支援・教員就職支援・学生相談室との連携等）に対する評価について

就職支援については、個人カウンセリングの体制強化が進み、個別指導の量的質的な充実が、高い就職実績や学生満足度に繋がっている。しかし就職情報については、24時間の提供体制の構築や先輩の受験情報の整備等、継続して取り組むべき課題として明確に検討する必要がある。

教員就職支援については、3つの事業それぞれが、学生のキャリア構築にあらたな視点を与えると共に、具体的な行動計画に繋がる内容となっており、年々事業内容の改善が図られていることが高く評価できる。

学生相談室との連携についての取り組み変更は、結果的に英断であったと考えている。学生相談室が、キャリア意識の醸成という狭義の目的から、3年目にして、専門的な心のケアを行うことのできる支援体制の強化を打ち出したことで、今後更に就職支援をきっかけとした学生の利用促進を図ることが可能となる。学生相談室の体制整備が急務である。

(3) 組織的取り組みに関する評価について

学長を中心とした大学全体の取り組みとして教職員が意識している点が重要である。更に各学部や部署との協力体制の整備や情報共有の方法についての検討が望まれる。

また、教育委員会や学校連合会、多くの卒業生等、外部との協力によって支援体制を構築することで、学生が多様な価値観を共有することが出来、選択肢の幅が確実に広がっている。そして、この事業が大学や学生の認知度やイメージの向上に大きく貢献していることも高く評価できる。

(4) 優れた点等について

教員就職支援において、学生の最も身近な存在であり、憧れとしてのロールモデルでも

ある卒業生が中心となる支援体制を、全学的な取組みとして確立した点が、大学の個性を強く顕している。こうした体験を、学生が大学の大きな魅力として実感することが、更に後輩へと引き継がれ、素晴らしい伝統が創られていく重要な要素となっている。

(5) 改善すべき事項について

これまでの卒業生の一般企業への就職は、教員就職と比較しても全く遜色のない実績があり、多くの OG が企業の第一線で活躍している。教員就職支援と同様に、この宝とも言うべき卒業生の協力を得られるような支援体制作りを期待したい。また、「こころをつなぐ学生支援」としては、教職員や社会人からの支援だけでなく、先輩から後輩へ、または同級生のリーダーとして学生同士がサポート体制を構築することも、大学全体の就職に対する意識が高まる効果的な方法のひとつである。

(6) 今後の展望等について

事業の継続が最も大きな課題である。特に就職支援、学生相談においては、個別カウンセリングが支援の核となっているため、人的資源と予算の確保が最重要課題であり、そのためには今回の取組みの成果の検証を長期的な視点で行う必要がある。

また、この3年間の取組みは、学生のアンケート調査によるニーズも参考にして大学としての支援体制を構築してきたが、これらの事業の継承においては、これまでの支援内容に対する学生の評価を今一度明確にして、更なる支援の充実を図るために、学生や卒業生の意見が反映される「GP 継承委員会」の仕組み作りに期待したい。

外部評価委員 氏 名 副田 隆重

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 3年度分の総合的な評価について

学生の一般企業・教職等への就職活動に向けてのより積極的な支援として取り組まれた本事業は、これを構成する三つの個別取組みにおける成果ならびに全体からみて成功裡に実施されたものと評価できる。とくに本事業の柱の一つであり特色ともいえる教職支援の分野にあっては、すでに貴学が伝統的に保持してきた実績を前提とするものであるにせよ、事業実施による効果（教員採用試験結果）は、特筆に値する。

(2) 個別の取組み（就職支援・教員就職支援・学生相談室との連携等）に対する評価について

第一の一般企業に向けた就職の支援として、求人票等の就職情報へのパソコンからのアクセス・システムの構築、各種の就職試験対策講座の実施、個別のキャリアカウンセリングの充実が企画され、それらの効果として、学生の満足度の向上と高い就職率が維持できた。第二の教職支援としては、採用試験対策講座、カトリック学校一日体験、大都市圏での教員採用現地説明会への参加などが企画され、効果を上げた。第三の学生相談室との連携については、当初はキャリアカウンセリング（職業・就職意識の醸成に向けたもの）と一般の心理カウンセリングの分担・連携につき一部に不透明な部分も見られたが、学生相談室の充実やキャリア科目「人材育成論」の開講もあり、23年度の段階では、一般の相談の中で広く職業・就職活動の悩みに対応する相談窓口として運用されるすぐれた体制となった。

(3) 組織的取組みに関する評価について

学長を中心に、全学的に取り組みがなされ、本事業を構成するキャリアサポート、教職指導、学生相談の各分野を担当する部局間との連絡、調整が円滑に行われている。

(4) 優れた点等について

教職支援が大学全体としての取組みとなり、学生の教職に対する意識が飛躍的に高まり、大学の認知度も高まった、との総括がなされているが、教職に限らず、就職支援のためのインフラ作り（求人票の閲覧という出口に近い部分はもとより、就職への意識、職業観、人生設計、学びに対する悩みなどに関する相談体制のように学年不問のものもある）が、本事業により、いっそう強化され、相応の成果を産み出したものといえる。構想の場面において、貴学の建学の理念としての教員養成の重要性を掲げ、他方で、この場面での実績を背景に、教職支援を主要な柱とした点が、成功の秘訣といえようか。

(5) 改善すべき事項について

一般企業への就職の支援に関連して、自宅からの求人票の閲覧等就職情報へのアクセス

(Q&A による相談の実施を含む) は、現状では検討中のようなのであるが、将来的には不可欠といえるのではないか。今日、利用者の利便と情報システムのセキュリティとの相克は、大学の中でもよく見られる構図であり、これまた全学的な判断が要請されよう。

(6) 今後の展望等について

シンポジウムでの報告の中にもあったように、教職希望学生に向けては教職科目の中でいわばキャリア教育が行われるのに対して、そうでない一般の学生の職業、就職に関する意識はまったく千差万別、多様である。また、貴学にあっては、教職に就く卒業生の割合が多い（本事業によりいっそう増大した）とはいえ、大多数は一般企業や教職以外の公務員であろう。したがって、教職支援分野における実績・好成績に満足されるだけでなく、それを活かしつつ、就職情報システムのいっそうの充実、学生相談体制の充実等の一般の就職支援にも注力をお願いしたい。

外部評価委員 氏 名 青山 順子

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 3年度分の総合的な評価について

平成21年度末と比較すると、今回はその後の2年間で格段の成果を上げていると思います。しっかりと方向性を定めた1年次のうえに、3つの方向性のなかでの個別の取組が積み上げられて結果につながっています。今後さらに発展していくためには、時代の変化を読んだうえでの目指す方向性の整理と、大学の教職員も学生もともに、それぞれの縦糸と横糸のつながりを厚く構築していくことが求められると思います。

(2) 個別の取り組み（就職支援・教員就職支援・学生相談室との連携等）に対する評価について

・就職支援について

延べ相談件数の向上は著しく、支援の内容と学生のニーズがうまくかみ合った結果だと思われます。直接面談によるカウンセリングは地道な取組であり、大学側の物理的環境整備も不可欠ですが、実施した分だけ確実に学生への助けになっていくことです。今後も継続していくことを期待します。また、就職データシステムの改善により、アクセスが以前より楽にできるようになったことは、時代や学生の気質に合い、パソコンや携帯を駆使する世代の学生の関心の高まりにつながったと考えられます。今後のさらなるシステム改善を期待します。

・教員就職支援について

目標や結果が具体的であるため、様々な取組も行いやすい面があります。教員採用試験の合格者数の飛躍的な伸びは、結果に結びつく具体的な取組をしっかりと推進してきたことを裏付けしています。卒業生を活用し、現実の学校現場の状況に即した教員採用対策講座は、大変内容の良いものです。3年生と4年生向けの講座を区別して企画したことも、それぞれの段階の学生のニーズに合っています。模擬授業は、教員採用試験の対策にもなりますが、実際に教壇に立つ際にも自信となって本人を支えることにつながるはずです。

・学生相談室について

キャリアカウンセリングと心理相談のどちらも重要ですが、昨今の学生の実態や就職後のメンタル面でのつまずきを考えると、特に心理相談は重要であると考えます。学生への周知や利用促進のための様々な取組は、これまで大学という組織の中ではそれほど重視されてこなかった部分であるかと思われますが、この取組により利用者数が拡大し、ニーズを掘り起こすことにつながっています。

(3) 組織的取組に関する評価について

キャリアサポートセンターや学生相談室があり、どちらでもカウンセリングが行われているということは外部から見るとわかりにくい印象があります。学生や教職員は十分に違いを整理していると思いますが、わかりやすい組織の体制づくりを推進しなければ、利用

の促進にはつながらないと考えます。そのためには、それぞれの部署が個別に動くのではなく、常に情報を共有しながら、ひとつの部署のような動きができることが効果的ではないかと考えます。

あらゆる可能性をすべて選択して取り組もうとしている大学の姿勢自体が、平成 21 年度と比較して最も大きく変化してきたことではないかと感じます。

(4) 優れた点等について

平成 21 年度末の外部評価委員会の時点から、大きく前進していることです。評価内容を真摯に受け止められて、PDCA サイクルに組み込まれて、3つの事業テーマごとに、分析と改善、新たな企画や実践を積み重ねてこられたことが、2年間での大きな前進につながっています。

教員採用試験に向けた取組は、大変具体的であり、様々な人材を活用していくことで、教職という共通の専門性のなかで、卒業生と在校生をつなぎ、また学生同士の横のつながりも強くしていくという二次的な成果を生んでいます。

(5) 改善すべき事項について

教員採用試験の合格者について、採用後の5月と8月にアフターケアを実施し、追跡調査だけではなく、メンタル面をしっかりと支える取組を行って欲しいと思います。特に、実家から通う新採用者以上に、一人暮らしの卒業生は逆風に弱くなる傾向があるので、そのサポートも考えて欲しいと思います。

県内の市教委・県教委との連携をこれまで以上に強化したり、他の大学の取組を情報収集したりして大学自体の足下をしっかりと固めていくことが必要だと思います。

岡山市教委が行っている学校支援ボランティアの制度は、教育実習以上に現場の教員や子どものことが学習できる教職ならではの体験研修の場です。教職をめざす3年生や4年生は、学校に行く日は週一日でも、通年という長いスパンで取り組んでみてはどうでしょうか。

学生アンケートから、学生自身がキャリアサポートセンターの支援内容をよく知らないとも言える面が見えています。学生相談室とキャリアサポートセンターの役割を整理し、名称等も誰にでもわかりやすく改善することで、敷居を低くし、親しみやすさを前面に出してはどうでしょうか。無駄を省き、それぞれの部署の目的の明確化にもつながると考えます。

Nサポの就職情報等のデータベース化は、単年度に終わらず、蓄積して二次活用につなげていくことでさらに効果が高まると考えます。また今後は、携帯電話からの閲覧が可能になったり、大学から各学生の携帯電話へトピック的な情報の発信が可能になったりすると、一層利便性が増し、ニーズに合い、機能性が高まるのではないかと思います。

本当に精神的に弱っている学生が、自ら相談室のドアを叩くことは難しいのではないかと考えます。そして、その状況は待たないではないかと思われれます。そこで、学生が訪ねてくるのを待つのではなく、定期的に、全学生を対象に、ケアのための追跡・把握等はいできないものか検討をして欲しいと思います。

大学全体の学生支援の全容がつかみにくいことから、学内の教職員はもちろんのこと、学生にも外部の者にもわかりやすく整理することで、十分な活用が促進されます。また、そうすることで学内の部署同士の連携が図りやすくなります。

(6) 今後の展望等について

就職に向けて学生が前向きに取り組むようになることをバックアップするために、大学は、足を運んで、岡山市内、岡山県内等に本学出身学生の就職の受入枠を獲得できるように新規開拓に力を入れるべきです。

国の政治や社会の変化がめまぐるしく、それに伴う学生の就職受入についても状況の変化のスピードがこれまでには考えられなかったぐらい早くなっています。そのスピードに合わせていけるようなシステムの構築をしていく必要があります。

社会や学生、その保護者の思いやニーズと、大学やその担当者の意識とがずれることのないよう、引き続き、教職員の意識改革とともに、研修等の継続を進められることを期待しています。そうすることで、学内の横の連携も強化されることにつながっていくと思います。

外部評価委員 氏 名 秋山 弥生

次のとおり評価結果を報告します。

(1) 3年度分の総合的な評価について

学内各部署での改革に加え、学外メンバーによる委員会の提案を柔軟に取り入れられ、かつ検証し、次の行動に活かされており、その3年間の取り組みの結果が高い就職率の維持と向上に表れていると思います。

(2) 個別の取り組み（就職支援・教員就職支援・学生相談室との連携等）に対する評価について

就職支援：不況などの外部環境に左右されることなく、就職率を高めていることは高く評価されることだと思います。新設の自己分析講座やグループディスカッション対策講座のほか、就職適性診断テスト、面接対策など、具体的で実践的な取り組みがあり、就職活動へ意識が高まっている学生に適切な機会がタイミング良くスケジュール化されていると感じました。

教員就職支援：関係部署を含めた大学側の意識改革が進められ、学内全体に波及したことが好成績につながったと思います。

学生相談室との連携：キャリアサポートセンターと学生相談室の立ち位置が現況では明確ではなく、試行錯誤をされながら、より良い形を見つける過渡期にあると思いました。棲み分けが進めば、学生の利用頻度も高まるのではと思います。

(3) 組織的取り組みに関する評価について

3年間の取り組みは一定の数値が出ており、就職支援、教員就職支援ともに高く評価されると思います。

今後は、この取り組みを継続、拡大展開していけるかが課題だと思います。

キャリアサポートセンターと学生相談室の棲み分けを明確にすれば、各機能が一層高まると思います。

(4) 優れた点等について

- ①この度の取り組みを通じて、学内の意識改革が進んだこと
- ②新しい取り組みによって学生の行動が変わり、結果として就職率が向上したこと
- ③学生アンケートの実施など、取り組みの点検、評価、改善を進められたこと
- ④学内外から広く意見を取り入れ、柔軟に取り組まれたこと
- ⑤新たな課題が創出できたこと

(5) 改善すべき事項について

一般企業を希望している学生向けに、キャリアサポートは民間企業経験者を入れてはどうかと思います。学内の視点とは異なると思うので、例えば一般企業向けに就職経験のあ

る主婦など OG による民間企業経験者のサポート体制を作り、専門知識が必要ではないキャリアアドバイスで手助けができれば、人手不足を補うという点でも有効ではないかと思います。

また、社会のニーズは日々変わるので、県内企業にアンケート形式でヒアリングをし、課題を常に捉えていくのもひとつの手段ではないかと思います。

参考までに、当社の 5 年目までの卒業生のヒアリング結果は以下の通りです。

<良いところ>

- ・規律性（社会のルールや人との約束を守る力）
- ・情報把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）
- ・傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）

<課題>

- ・主体性（物事に進んで取り組む力）

※あまりリスクを取ろうとしない

- ・課題発見力（現状を分析し、目的や課題を明らかにする力）

※論理的な思考能力に欠ける

世では草食男子と言われ、女性に求められているものも変わってきていると感じています。今後は世の中を先導する女性を育てるため、リーダーシップや論理思考の育成も本格的に導入してはどうでしょうか。

また、メール相談受付を設けて、相談の内容を整理することで、よくある悩みを項目別で分けて、データベースを作ってもよいのではないかと思います。

(6) 今後の展望等について

社会の要請に応える人材とは、充実した大学生活を送った学生だと思います。大学 4 年間でどう過ごすか、人間力をどう育てていくか、今までに培ってきたリベラル・アーツ教育のもと、大学が就職の予備校にならないキャリアサポートを推進して頂きたいと切実に願います。

地元で働き、生活をする卒業生が多い中、大学の取り組みが地域と密接に関わることは卒業生にとって学び舎で育った恩返しになりますし、より良い社会人となって、地域に貢献できることはこの上ない喜びです。

今後も県内外の大学との比較検討、先進事例のベンチマーキングなど、さまざまな手法を柔軟に取り入れ、継続的に取り組んで頂きたいと思います。

以上

第5章

取組の成果と事業の継承

第5章 取組の成果と事業の継承

1 取組の成果：自己点検と評価

平成23年3月の東日本大震災をはじめとする多くの災害や、EUに端を発する世界的な経済危機などがわれわれを取り囲み、世界の抱える不安定要因は増加しているようにみえる。この間のわが国の社会経済状況は困難をきわめ、大学生の就職状況をみても、本GPの採択以降もその厳しさは変わらない。

このような中で、本GPの策定と採択は時宜を得た企画であり、このような政策的支援は、大学生の就職状況の改善のみならず、結果として震災後の新しい社会の建設のための人材提供という、重要な役割を果たすことも期待される。本学のカトリックの教育理念のもとに学士力をつちかい、奉仕の精神をもって人を思いやる心豊かな人材は、新しい社会の建設のための重要な担い手となろう。本取組の成果が期待される場所である。

本章では、第2章「テーマ別取組内容及び実施報告」を受けて、本取組の全体を点検・評価し、その成果を検討することにする。

①就職支援関連事業：達成目標 十分な情報提供と丁寧なカウンセリングによる就職活動の活発化

キャリアサポートセンターが主掌する就職支援関連事業では、個別キャリアカウンセリングの充実が顕著である。平成21年度に、前年度の3倍近くの2千件を超える相談件数をみたことは、本事業によるキャリアカウンセラーの配置の直接の成果とみることができる。このことは、キャリアカウンセラー配置に関する文部科学省からの追加的財政措置の効果も大きい。ただし、スポット的な人材募集は地方都市ではむずかしい点があることも事実である。

増加したカウンセリング相談件数の内訳をみると、平成22年の3年生の相談件数が後期から急増し、これが全体の相談件数を上昇させている。この傾向は彼女らが4年生になった平成23年前期にも継続している。これは、3年後期から実際に就職活動を開始してみて、困難な就職状況の中で相談の必要を実感したということなのであろう。本GPによるキャリアカウンセラー増員の効果は、ここに顕著に現れている。なお、平成21年の3年生にはこのような顕著な増加はみられないから、GP開始年度には直接的な効果は十分ではなかったことになる。それは、GPの準備と試行に時間がかかったことも一因であるが、この点は反省する必要がある。

このような相談件数の増加が、学生の就職活動の活発化に寄与したことは疑うべくもない。本事業の達成目標の一つは実現したと評価することができる。そして、このような就職活動の活発化が学生の実際の就職率に反映されるならば、本取組の成果は顕著なものとなろう。しかしながら、この点については、この学生たちの就職活動の結果がでる平成23年度末、ないし24年度始めの集計結果をまたなければならない。また、学生の就職をとりまく社会・経済状況は厳しさを増しつつつねに変動しており、結果の数値には数多くの変数が関与することになる。数値評価は慎重に行う必要があり、かつ、数値に一喜一憂するべきではないことは言を俟たない。

なお、プレジデント社が発行する雑誌『プレジデント』2011年10月17日号に、全国の大学の就職率に関するランキング記事がある。その中で本学は「就職決定者500人以上」の大学のうち、全国第9位となっている（第1位は福井大学で就職率94.7%、本学は90.9%。就職率の計算は大学院進学者を除いた卒業生数で就職者数を除いたもの）。

この雑誌が利用した数値は昨年度のものであり、すでに述べたように、本G Pの就職支援事業の直接の成果は、昨年度の卒業生には顕著には及んでいない。したがって、この順位は必ずしも本G Pの直接の成果というわけではない。

記事本文を読むと、慶応義塾や立命館といった大学の就職率は70%代であり、それはそれらの大学では卒業生の把握がむずかしいからであるとのことである。本学では、毎年3～5月にかけて卒業生と直接の連絡をとり、就職状況の確認を行っている。本学のこの数値の背景には、このような作業が存在する。本学が卒業生の就職状況の把握に努めていることは、卒業生支援、とくに就職がきまらないまま卒業した学生に対する就職支援活動の一環でもある。それは本G Pの達成目標の一つであり、評価することができる。

就職データベースの管理運営に関して、本学で導入したソフト上で求人情報データベースの構築が進んだことは評価される。一方、データベースの学外からの閲覧については、本学の情報セキュリティポリシーへの抵触という問題が生じている。これを乗り越えるためには技術的改善策をとる必要がある。この点は、昨年度より導入した新たなシステムを利用することによって、24時間の情報提供が可能になるようである。現在、その具体的な検討と試行が試みられているので、その成果に俟つことにしたい。この点で、達成目標のもう一つは課題を残していると評価しなければならない。データベース整備とその学内での利用は、就職情報に対する学生の関心を深め、キャリアカウンセリング相談数の増加・就職活動の活発化に結び付いているものと考えられる。のこされた課題達成のためにより一層の努力が必要である。

②教職支援関連事業：達成目標 大都市圏への教職就職活動の活発化および教職に対する強い使命感の形成

教職支援関連事業をみると、3年生、4年生向けの教員採用試験対策講座は、単なる対策講座の域を超えて、教職に関する具体的な情報提供の機会ともなっている。このことは、学生に対して、ただ単に教員になるのではなく、よりよい教員になることを目指す動機付けとして機能しているようにみられる。さらに、カトリック学校1日体験を通じて、学校の現場での体験を得たことは、教員という存在をリアルに認識する契機となっていると評価される。この点で、教職に対する強い使命感の形成という達成目標の一つは実現されているといえることができる。

大都市圏の教育委員会への学生の直接派遣による教職情報の提供も、本学の学生の目を大都市圏に向ける効果があったことが示されており、効果的な事業であったと評価することができる。

このような事業の直接の成果として、堺市などこれまで実績のなかった地域への教職就職がわずかであれ実現したことは大いに評価される。また、関西のカトリック高校への教職就職が実現したが、これを「カトリック学校1日体験」の直接の成果とみるのはあるいは短絡的に過ぎるかもしれない。しかしながら、それは教職就職支援事業のもう一つの達成目標が実現しつつあることを示すものである。

③学生相談室との連携事業：達成目標 丁寧なカウンセリングによる就職活動の実質化 学生相談室との連携事業は、平成21～22年度は1・2年生向けの秋のキャンペーンと就職活動直前の3年生向けの春・夏キャンペーンという形で行われた。いずれも1組1～2名の学生に対して、1回1時間のカウンセリングを2セット行うという丁寧な指導を行っている。その結果、1・2年生については、自己分析や職業意識の醸成に向けて有効に機能したことがうかがえる。3年

生についても、就職活動開始前に職業について自己分析を行うことの有効性は明確である。ただ、一人ひとりに時間をかけるために全体のカウンセリング件数が少ないことは、カウンセリングの丁寧さとのトレードである。

平成 23 年度からは学生相談室の開室時間を拡大して、学生相談そのものの充実を図ることになった。キャリアに関する相談・カウンセリングは、その中で対応することとなったが、メンタルヘルスサポートを含めた相談は 1 年生と 4 年生に多いという結果になっている。キャリアに関する相談は 4 年生に多く、それは就職活動に関する技術指導の域を超えたものもあるようにみうけられるので、学生相談室の役割が有効に機能したのではないかと評価される。困難な就職状況の下、就職活動の中でメンタル面での弱さを露呈させた学生に対して、学生相談室の果たす役割は大きいといわなければならない。

丁寧なカウンセリングによる心理面でのサポートが学生を元気づけ、再び就職活動に向かわせていることが看取される。その数は少ないかもしれないが、本事業の達成目標は実現されつつあると評価することができる。

④ホームページ関連事業：達成目標 すみやかな情報公開

ホームページ関連事業は、本学の取組を積極的に公表する上で極めて重要である。ホームページのレイアウト・情報の迅速な提供などには努力を払ってきたつもりであるが、まだ十分でない点も多いと思われる。他大学等の取組やさまざまな意見を参考に、今後とも改良していきたい事柄である。本事業については、達成目標は実現しつつあるが、さらに努力を必要とするとして評価することができよう。

⑤学生アンケート関連事業：達成目標 学生ニーズの把握と事業内容の改善

アンケート関連事業は、本取組の P D C A サイクルを確立するためにも重要なものである。平成 21 年度のアンケート結果は本取組の中に組み入れられている。今後は平成 23 年度のアンケート結果をどのように取組の継続過程の中に組み入れていくかが課題となろう。

⑥本学主催 G P フォーラム関連事業：達成目標 取組に対する点検と評価

本学主催 G P フォーラム関連事業では、採択年度にフォーラムを開催し、終了年度にシンポジウムを開催した。さらに、フォーラムとシンポジウムの終了後に、それぞれ第 1 回外部評価委員会、第 2 回外部評価委員会を開催した。

採択年度のフォーラムでは本学の取組内容の公開と質疑、外部評価委員によるアドバイスを得て、次年度以降の取組の具体的な方向性を確立することができた。終了年度のシンポジウムでは、各事業の総括的な報告と質疑、外部評価委員によるアドバイスを得た。シンポジウムと第 2 回外部評価委員会の総括と課題の検討および継承については、今後さらに継続的に議論していかなければならないが、本事業の達成目標は実現しつつあると評価することができる。

⑦先進事例調査関連事業：達成目標 本取組の質的向上

先進事例調査関連事業では、G P 合同フォーラム、意見交換会、先進校の調査等の活動は、G P 合同フォーラム・ポスターセッションへの本学の参加を促すなど、有効に機能した。さまざまな工夫を行っている大学との情報交換は有意義であり、本学の取組を大きく育てることになったと評価することができる。

以上にみたように、各事業はその多くで、達成目標を実現しているか実現しつつあると評価することができる。このことは、各事業の運営に努力してきた教員、職員、そして当事者とし

ての学生の協力の賜物である。同時に、各事業を総括して全体の運営に当たる学生支援G P運営委員会が、よくその任を果たしたことを示している。委員会では、毎月の会合で常に意識の共有を図り、各事業ごとに企画案を検討して、実行後の検証と改善を加えてきた。学長のリーダーシップに基づく委員会のこのような働きが、本G Pプログラムの順調な遂行を可能にしたと考えている。

もちろん、改善努力が必要な事項が存在する。一つは就職支援関連事業で、学生の就職活動の活発化の成果を継続して検証する必要があることである。また、就職情報のフルタイム提供が滞っていることは大きな課題としてのこされている。この点は技術的努力によって乗り越えることができるようであり、この実現に努力しなければならない。ホームページ関連事業では、ホームページでの情報提供・公開のあり方にさらに検討・努力を費やすことが必要である。学生アンケート関連事業では、平成23年度のアンケート結果を今後の継承事業の中で活かしていくことが課題である。今後とも、本G Pで得られた学生支援の輪を継承・発展させ、のこされた課題のよりよい達成に努めなければならない。

2 外部評価

本G Pでは、4名の外部評価委員を委嘱し、2回にわたって外部評価を求めた。それぞれの外部評価は、本G P採択初年度の平成21年度末と、G P最終年度の平成23年の12月に行われた。

1回目の外部評価は、本取組の中で開始された各事業の方向性を確認するとともに、各事業推進のための具体的方策や今後の展望について、アドバイスをを得ることを目的とした。それは、本G PのPDCAサイクルの端緒をなすものであり、この外部評価の結果、本取組の特質と方向性が確認され、各事業の着実な推進とPDCAサイクルの循環に結びついていった。この点については、すでに第1章で述べた通りである。

G P最終年度に行われた第2回目の外部評価では、3年間の各取組についての総合的な評価および個別の評価を得ること、取組全体の組織性についての評価を得ること、優れた点・改善すべき点についてアドバイスを受け、今後の展望を図ることを意図していた。

その評価結果については、学生支援G P運営委員会や各取組の担当者をはじめ、本学の教職員・学生によって検討され、今後継承される取組の中に活かしていかなければならない。ただし、本報告書の刊行時点までに十分な検討を加えることには時間的制約がある。ここでは、今後の検討のために評価報告書の基本的な整理を試みることにする。

3年度分の総合的な評価および個別の取組の評価に関して、各委員から概ね一定の成果が得られたという評価を得たものと思われる。個別の取組に関しても、学生への支援体制がある程度整ったこと、教職就職支援の成果が大きかったこと、学生相談室との連携の推進が図られつつあることが指摘されている。

一方、今後努力を必要とする点として各委員が指摘するのは、就職情報の提供体制にさらなる改善の余地があることである。また、学生相談室の活動とキャリアサポートセンターのキャリアカウンセリングとの棲み分けについての指摘がある一方、専門的な心のケアを行う体制の整備によって、メンタルな面での学生支援がすすむことへの期待も表明されている。これは、青山委員の報告にもあるように、今後の学生相談室の重要性に関する指摘として受け止めたい。

組織的な体制の整備については、各委員から順調に進んでいるとの評価を得ているが、この

体制を継続、拡大していくことが課題であるとの指摘もいただいた（秋山委員）。優れた点について、教職就職支援関連事業において本学卒業生の現職教員による学生指導の機会が評価されている。「学生の最も身近な存在であり、憧れとしてのロールモデルでもある卒業生」（坂入委員の報告書）による支援体制の効果が指摘されたのである。坂入委員はこの点をさらに伸長させ、「教職員や社会人からの支援だけでなく、先輩から後輩へ、または同級生のリーダーとして学生同士がサポート体制を構築すること」の重要性も指摘している。

政府の「新しい公共」の理念を俟つまでもなく、学生同士によるピアサポート活動の重要性は疑い得ない。この点に関して、「平成 23 年度大学教育・学生支援推進事業意見交換会（東海・北陸・近畿地区）」で提示された「甲子園大学」の事例は興味深い。同大学では「未来カフェ」という企画を試み、毎週時間を定めて学生同士が集まり、お茶をのみながら先輩後輩同士で就職活動を含むさまざまな相談会を行っている。

本学でも学務部や入試広報部を中心として、学生同士のピアサポート活動支援を進めており、学生支援 G P 運営委員会で甲子園大学の事例を紹介する機会を得たのは幸いであった。本学は、奉仕の精神にもとづき人を思いやる心をもつ学生を育てることを教育理念の一つとしており、学生のピアサポート支援体制は今後とも充実させていく方針である。他大学の G P の成果を本学に取り入れいかすことは、本取組の中の先進事例調査関連事業の直接の効果でもある。

改善を要する点として、就職情報提供システムの一層の整備、教職支援体制として学校ボランティア制度を利用すること、キャリアサポートセンター、学生相談室などを利用しやすくすること、リーダーシップをもった女性の育成などの課題があげられている。

このうち、就職情報提供システム整備についてはある程度の見通しがあり、今後、実現に向けて課題を一つひとつ詰めていくことになる。学校ボランティア制度の利用については、本学が取り組んでいるもう一つの G P（就業力 G P）の課題となっており、その成果を俟つことにしたい。キャリアサポートセンター、学生相談室の利用環境整備は少しずつ進められている。リーダーシップをもった女性の育成は、リベラルアーツカレッジとしての本学の教育理念の一つである。本学としては、人々への奉仕を通じて人々と協働するとともに、自ら考え、判断し、行動してその責任をとる自立した女性の育成を通じて、この課題の達成に努めることになる。

今後の展望に向けて、青山委員から社会のめまぐるしい変化に対応して、本学にかかわるステークホルダーの思いやニーズに、つねに対応する体制をとることの重要性が指摘されている。そのこととあわせて、副田委員からの指摘にあるように、教職支援分野の実績に満足するのみでなく、就職情報システムの一層の充実、学生相談体制の充実に努め、就職支援の一層の強化を図ることが必要となろう。

今回の取組で秋山委員は、「新たな課題が創出できたこと」を優れた点であるとする。確かに、従来からの課題に加えて、学生同士のピアサポート活動など新たな課題が明らかになったことは、本 G P に取り組んだことの大きな成果である。「大学の取り組みが地域と密接に関わること」（秋山委員）を含めて、各委員からの評価報告は事業継承後の多くの課題を明示し、今後の取組の方向性を示しているものとして受け止めたい。

3 事業の継承

緊迫する経済情勢の中、学生の就職活動も困難の度合を増している。本学の取組が有効に機

能することによって、学生の就職活動へのよりよい支援となってきたことは明らかである。キャリア相談件数の顕著な増加、学生相談室でのメンタルヘルスサポートを含めた相談の充実、就職支援事業を通じてリアルな教員や教職の実像をみることの効果は計りしれない。

しかしながら、本G Pが意図する就職状況改善にかかわる直接の成果は、もう少し時間をおいてから検証する必要がある。そして本G Pのその成果をより確実なものにするために、本G Pの終了後も主な取組を継承し、さらにその達成度合いの検証と改善を積み重ねていかなければならない。

また、現状では、困難な就職状況が急速に改善する見通しはたちにくい。本G Pの各事業を今後も継承し学生支援の実をあげていくことが、この面からも求められる。本学では、本G Pの主要3事業を次の機関がそれぞれ継承する予定である。

就職支援関連事業…学務部キャリアサポートセンター

教職支援関連事業…教職支援センター

学生相談室との連携事業…学生相談室および保健センター

それぞれの事業で行われた各取組は、今後はそれぞれの継承機関の通常業務の中に組み入れ、それぞれの機関で企画を立案し、予算建てして運営していくことになる。同時に、継承事業の全体的な企画・点検・評価作業を行うとともに、取組の成果の検証を行い、それを公表していく機関が必要となる。この点に関しては、現在の学生支援G P運営委員会をベースにした「G P継承委員会」を設けることで対応したい。

平成23年度からのキャリア教育の義務化を受けて、本学でも全学共通科目に「人材育成論」が開講され、学生に対してキャリアや職業に対する意識や態度の形成にかかわる基礎的教育が行われる。学生の就職支援活動は、このキャリア教育と連携しながら、本学の特色をいかしつつより具体的にかつ实际的に推進する必要がある。本G Pによって培った手法や他の先進事例から学んださまざまな取組方法を活かして、本G P終了後の学生支援活動を充実させていくことにしたい。

あ と が き

平成 21 年に採択された本 G P も、またたく間に 3 年が過ぎ、事業終了の時を迎えることとなった。平成 21 年には新規大卒者の内定取り消しが大きな社会問題となり、平成 23 年には東日本大震災が生じて、多くの方々が犠牲となり、また多くの方々が被災して、その損失ははかり知れないものとなった。現在、復興への取り組みが進みつつあることが私たちの希望である。

この間、大学生を取り巻く就職状況は一貫して厳しく、平成 24 年 2 月 1 日の山陽新聞朝刊には、平成 23 年 12 月末の岡山県内大学生の就職内定率が 61.6% と、過去 6 番目の低水準であるとの記事が掲載されている。このような状況の中で、本 G P が学生の就職活動支援に多少なりとも役立ったとするならば、十分ではないまでも、取組の使命の一端は果たすことができたものといえよう。それは、本 G P に一丸となって取り組んだ教職員と、積極的に就職活動を展開した学生諸君の協働の賜物である。

本学はこの G P に参加する中で、大学教育改革合同フォーラムや意見交換会に出席して、多くの大学の先進的な取組に触れ、参考にすることができた。興味深かった事例の一つは滋賀の聖泉大学のもので、「N P O ・地元企業と連携した地域力循環型キャリア教育プログラム」というその取組は、N P O の地域活動や地元企業とのインターンシップに積極的に関与することによって、学生に実践活動を通じてキャリア意識を養成して就職活動を支援しようとするものであった。N P O の活動は活発で学生を積極的に受け入れてくれるので、地域に密着した学生支援に有効に機能しているという。N P O との協働への着目は優れており、本学でも参考にしたい事例である。

また、兵庫の甲子園大学の取組「キャンパス・キャリア・ファイルによる段階的就職支援の構築」では、就職支援活動の中に学生同士のピアサポート活動を組み入れていることが印象深かった。同大学の取組の中の「未来カフェ」は、学生生活に対するさまざまな不安、疑問などを学生同士で話し合う場所として設定されたもので、先輩の経験を後輩に伝える役割をよく果たしている。学生によるピアサポート活動は本学でも長く取り組んでおり、同大学の取組は本学の取組の方向性を考える指針の一つとなるものである。

各大学の取組は、困難な社会・経済情勢のもとでの大学の学生支援に対する姿勢を示すものであり、本学もそれに伍して一層の努力を続けたいと考えている。本書の刊行は、私たちのその努力の一端を示すものであり、諸賢のご高批を願う次第である。

文部科学省 平成21年度採択「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】学生支援推進プログラム
“**こころをつなぐ学生支援**” — 社会の要請に応える就職支援を中心に —
事業報告書（外部評価書） 平成 24 年 3 月

2012年3月 印刷・発行

ノートルダム清心女子大学 学生支援GP運営委員会
〒700-8516 岡山市北区伊福町2丁目16番9号
TEL (086) 252-5279
FAX (086) 255-5583



Notre Dame Seishin University